

太宰府・佐野地区遺跡群Ⅳ

— 宮ノ本遺跡第7-1次調査 —

1993

古都太宰府を守る会

太宰府・佐野地区遺跡群Ⅳ

太宰府都市計画事業佐野土地区画整理
に伴う埋蔵文化財調査報告書（4）

1 9 9 3

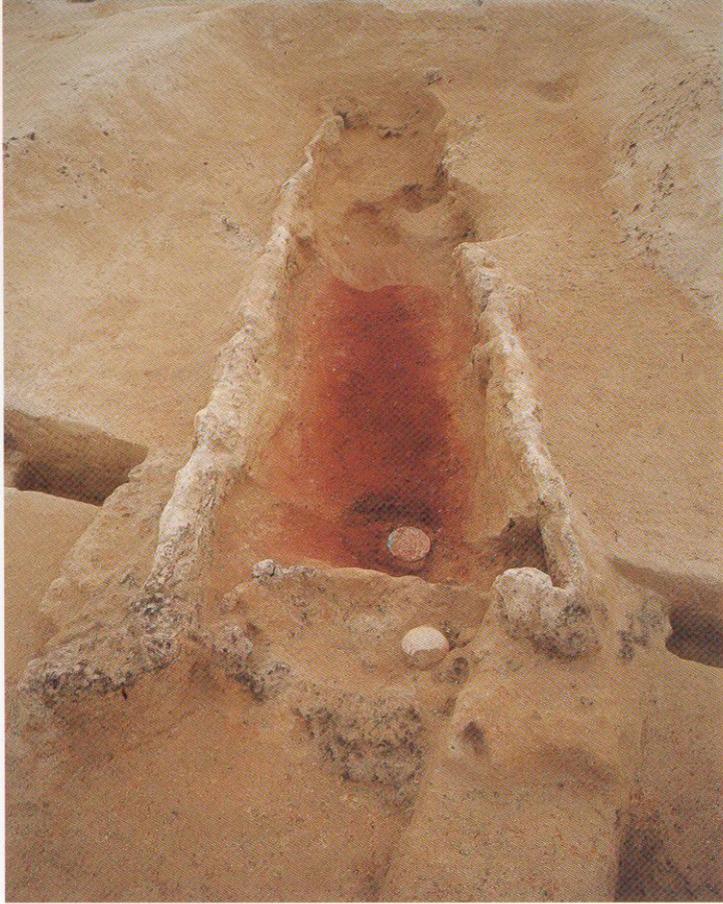
古都太宰府を守る会



12号墳出土獣帯鏡



7ST015出土八稜鏡



12号墳主体部（東から）



7ST002出土土器



7ST003出土土器



宮ノ本遺跡遠景
(写真中央やや右寄りに第7次調査地点、右
半やや上寄りに見える帯状の森は水城跡)



第7次調査地航空写真

太宰府・佐野地区遺跡群Ⅳ

太宰府都市計画事業佐野土地区画整理
に伴う埋蔵文化財調査報告書（4）

1993

古都大宰府を守る会

序

本書は、太宰府市が進めております都市計画事業のひとつ佐野土地区画整理事業に伴います発掘調査の第4冊目の報告書であります。

ここで報告しております宮ノ本遺跡は、昭和54年度に太宰府市立太宰府西小学校建設に伴いまして発見された遺跡で、平安時代の墳墓からわが国で初めて出土した買地券が発見され、話題を呼びました。今回の調査はそれから数えて第7次目の調査にあたります。

調査の結果、12号墳の埋葬施設から中国製の流雲文縁一仙五獣帯鏡が発見され、さらに隣接する平安時代の墳墓からは、奈良正倉院に伝世する鏡と同じ文様を配した四仙騎獣八稜鏡が出土いたしました。

こうした出土遺物は、この丘陵一帯が古墳時代から奈良・平安時代の有力な人物の奥津城であったことを物語るだけでなく、奈良の都や中国大陸といった遠隔地とのつながりを彷彿とさせるものであります。

ささやかな書物ではありますが、専門的研究はもとより文化財の保護・啓発等にお役立ていただければ幸いです。

調査は、秋から冬に差し掛かろうとする時期に行われ、寒さも増してきている頃でありましたが、日々調査に参加されました作業員の皆様の御努力により無事調査を終えることができました。

この場をお借りして、感謝申し上げます次第であります。

太宰府市教育委員会

教育長 長野 治己

例 言

- 1, 本書は、平成3年度に太宰府市教育委員会が、太宰府都市計画事業佐野土地区画整理に伴って、一部国（建設省）及び県の補助を受け調査した、宮ノ本遺跡第7次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2, 宮ノ本遺跡第7次調査は、開発事業の関係から当初予定の約半分の区域を平成4年度以降に持ち越しており、今回報告分については第7-1次として扱うこととした。
- 3, 現地での発掘調査は、平成3年10月18日から12月19日まで実施し、整理については平成4年度を主たる事業期間として行った。
- 4, 開発対象面積は、約20,000m²（平成4年度分を含む）、発掘調査面積は6,260m²である。
- 5, 調査及び整理に伴う関係者は、第I章に記した。
- 6, 調査地の全体図作成は、アジア航測株式会社福岡支店に委託し、個別の遺構実測図は調査担当者の狭川真一、塩地潤一のほか、城戸康利、中島恒次郎、山村信榮、田中克子、古賀里恵子が行った。また、出土遺物の実測は、重松麻里子、井上信正、藤尾薫、中島、狭川、塩地が行い、清絵は河田聡、境一美、西村晴香、井上、狭川が行った。
- 7, 遺構の写真撮影は、空中写真を（有）空中写真企画、航空写真はアジア航測株式会社福岡支店、個別の遺構写真は狭川、塩地が行い、遺物の写真撮影はフォトハウスおか（代表岡紀久夫）が行った。
- 8, 本書で用いる方位は、座標北（G.N.）であり、測量及び実測基準点の座標値は国土調査法第II座標系によっている（第三章）。
- 9, 出土遺物のうち鏡等の金属器については、九州歴史資料館横田義章氏の指導のもと、山中幸子が行った。
- 10, 出土した八稜鏡の蛍光X線分析は、宮内庁正倉院事務所をお願いした。
- 11, 本書の執筆は、分析部分を宮内庁正倉院事務所の成瀬正和氏をお願いした他、保存処理について山中が、他を狭川、塩地が行い、分担を目次に記した。なお、目次において連名になっている部分については本文中の文末に文責を（ ）で示した。
- 12, 編集は、狭川が行った。なお、体裁や文章等を統一するために一部編者が手を加えた部分がある。その点は編者が責を負う。

目 次

I. はじめに	(狭川真一)	1
II. 歴史的環境	(狭川)	4
III. 調査及び整理の方法	(狭川)	6
IV. 調査の概要		
(1) 遺構の分布状況	(狭川)	9
(2) 古墳	(狭川)	12
(3) 墳丘下層土壌	(塩地潤一)	23
(4) 土器棺墓	(塩地)	26
(5) 石蓋土壌墓	(塩地)	34
(6) 窯跡	(狭川)	35
(7) 火葬墓	(塩地)	39
(8) 木棺墓・土壌墓	(塩地)	40
(9) 近世墓	(塩地)	57
(10) その他の遺構と遺物	(狭川)	58
V. 金属製品の保存処理	(山中幸子)	65
VI. 蛍光X線分析	(成瀬正和)	67
VII. 小結		
①古墳	(狭川)	72
②古墳下層の土壌	(塩地)	74
③土器棺	(塩地)	76
④窯跡	(狭川)	77
⑤墳墓	(塩地・狭川)	78
⑥その他の遺構について	(狭川)	83

I. はじめに

昭和62（1987）年度から実施した太宰府都市計画事業佐野土地区画整理に伴う発掘調査は、現在（平成4年度）までに12遺跡34次におよぶ調査が実施されている。これらの内訳は、大字向佐野では原口遺跡（1次）、久郎利遺跡（1次）、前田遺跡（1～10次）、宮ノ本遺跡（3～7次）、大字大佐野では尾崎遺跡（1～5次）、フケ遺跡（1～3次）、雛川遺跡（1～2次）、上川久保遺跡（1次）、殿城戸遺跡（1～2次）、古野添遺跡（1次）、脇道遺跡（1～2次）、篠原遺跡（1次）となっている。

こうした遺跡の調査によって、今までほとんど知られていなかった太宰府市西郊の様相がかなり明らかになりつつある。しかしながら、大規模開発に先行する調査であるため、遺跡のほとんどは調査終了と同時に削平あるいは埋没という状況であり、報告書が唯一の資料となってしまっている。

さて、今回の調査地点は区画整理予定地内を南北に縦断する県道31号線（通称5号線）の拡幅工事に先行するもので、現状の2車線を4車線に拡幅するものである。県道31号線は久留米市内と福岡市内を結ぶ主要幹線道路で、深夜に至っても交通量が多い。この道路は久留米側で太宰府市と筑紫野市の境付近まで、福岡側で大野城市と太宰府市の境付近までがすでに4車線道路となっており、区間距離は短いながら太宰府市内部分の大半が未だ2車線のままで、連日交通渋滞が起こっているのが現状である。今回の拡幅は当初からの計画とはいえ、社会的には急務の事業であると考えられていた。

調査は、当初丘陵全体を実施する予定であったが、区画整理事業との関係でこの拡幅分を中心に実施することとした。しかしながら、丘陵端部を貫通する形で道路が通っており、その法面カットの部分も含めて調査対象範囲とせざるを得ないために、かなり広域を調査する結果となった。また丘陵の残地については近い将来区画整理によって失われるものの、平成3年度における工事区域ではないため当初の予定を変更して平成4年度以降に持ち越した。したがって平成3年度事業分を第7-1次、平成4年度事業分を第7-2次として扱い、今回の報告分は第7-1次についてのみ行うこととした。

調査行程は土取りの実施計画に従って南尾根から開始したが、尾根南斜面裾部で当初はカットされていると思われていた地点から墳墓と灰原が検出されたことや、12号墳に関連する遺構群が予想以上に多く、また貴重であると判断されたことから土取りの行程を変更すべく区画整理課及び関係業者と打ち合わせを重ね、途中で北尾根の調査を先行する行程に変更した。しかしながら次に予定している尾崎遺跡第5次調査の開始日程が近づいていることもあり全体としての期間の延長はそれほど望めず、一時期の間、両調査現場を並行して行うという強攻策を取らざるを得なかった。したがって決して満足のゆく発掘調査とはいえないが、このような行程の

中で南尾根については11月中旬に記者発表を行い、新聞やテレビで報道されるとともに、11月16日には現地説明会を実施し100名以上の参加者を見るに至った(Fig. 1)。関係者及び調査参加者の協力によるところ大である。感謝申し上げる次第である。



Fig. 1 現地説明会風景

調査地は、太宰府市大字向佐野字前田388-1、397-1、432-1、432-3ほかで、現地での発掘調査は平成3年10月

18日から12月16日まで実施した。整理作業は平成4年度を中心に行った。作業費用の一部は国・県の補助による。

調査及び整理関係者は以下のとおり。

調査主体 太宰府市教育委員会

総括 教育長 長野治己

庶務 教育部長 西山義則 (平成3年度)

中川シゲ子 (平成4年度～)

文化課長 佐藤恭宏

埋蔵文化財係長 富田 譲 (平成3年度)

高田克二 (平成4年度～)

文化振興係長 大田重信

主任主事 岡部大治

川谷 豊

主任技師 山本信夫

狭川真一 (調査担当)

城戸康利

緒方俊輔

山村信榮 (平成4年度～)

技 師 山村信榮 (平成3年度)

中島恒次郎

塩地潤一 (調査担当)

嘱 託 田中克子

調査及び整理参加者

田中平助	萩尾泰祐	田部澄博	斉藤徳美	藤原重登	三上智久	城戸邦典
柴田義男	鬼木寅雄	松田正樹	鬼木正俊	音藤丹宮蔵	市川大助	市川義弘
川添正年	本田 稔	豊田隆生	林 勳	岩男澄子	早田ミツル	川原田美千代
中嶋幸子	中嶋さなみ	宮田恵子	岸 邦子	村山龍子	川原久美	高原改良子
大迫フミ子	江島スミエ	近藤秋枝	大田敬子	古川トミ子	古川民子	古川ヨシ子
宮原ハナエ	宮原圭子	高鍋キミヨ	山本洋子	柴田ツキエ	境美佐子	中溝洋子
大田八重子	高木宗代	古賀里恵子	和田京子	木村末子	木村静子	主税松子
福島保子	永川満香	田中幸子	陶山小春	山内アサノ	梅津登美子	和田ハマ子
陶山よしえ	渡辺ひとみ	花園美千子	山下澤子	吉田正子	渡辺律子	斉藤サヨ子
栗山ヒロ子	梶山サツキ					
藤尾薫 (福岡大学学生)						(以上発掘調査作業員)
山中幸子	重松麻里子	井上信正				(以上補助員)
境 一美	河田 聡	柴田 剛	小西晴代	林美知子	中村房子	野田美子
堀尾はるみ	武堂年子	安岐朋江	西村晴香			(以上遺物整理作業員)

発掘調査にご協力いただいた地権者の方は次のとおりである。記して感謝の意を表したい。

(五十音順、敬称略)

井筒幸代	鎌田和子	亀井味楽	川辺笑美子	中嶋逸子	中嶋 要	中嶋範児
中嶋秀雄	中嶋幸男	中嶋リツコ	花田守也			

調査及び整理にあたって次の方々から有意義な御教示・御指導を賜った。文末になったが記して感謝の意を表したい。

(五十音順、敬称略)

伊野近富 (京都府埋文セ)	岡村秀典 (九州大学)	小田和利 (九州歴史資料館)
小田富士雄 (福岡大学)	小田桐淳 (長岡京市埋文セ)	賀川光夫 (別府大学)
白石太一郎 (歴史民俗博物館)	白川成明 (長岡京市埋文セ)	杉山 洋 (奈文研)
田崎博之 (愛媛大学)	常松幹夫 (福岡市教委)	戸原和人 (京都府埋文セ)
中尾秀正 (長岡京市教委)	成瀬正和 (正倉院事務所)	西健一郎 (九州大学)
西村強三 (粕屋町歴民)	西山要一 (奈良大学)	橋口達也 (九州歴史資料館)
平田定幸 (春日市教委)	本田光子 (福岡市教委)	松井忠春 (京都府埋文セ)
森 隆 (滋賀県野洲町教委)	横田義章 (九州歴史資料館)	吉留秀敏 (福岡市教委)

Ⅱ. 歴史的環境

太宰府市は市域中央北辺に律令体制の象徴である大宰府跡があり、その背後の大城山には大野城跡、大宰府から博多につづく福岡平野の最も狭まった位置に水城跡がある。これらの遺跡は天智朝から持統朝頃に建設が開始され、中世に政権が移行するまでの長きにわたって九州と周辺諸島の統括を行ってきた。近年の調査では大宰府跡の全面に「天下の一都会」と大宰府自身が贅美した古代都市がおぼろげながら姿を現し、また筑紫館（鴻臚館）から筑後方面に通ずる古代官道も検出され、具体的な古代大宰府の景観が復原されつつある。

大宰府の時代は、こうした中心部での活動だけでなく、周辺地域ではそこで活躍したであろう官人たちの奥津城が営まれている。太宰府市では、篠振遺跡、君畑遺跡、前田遺跡、筑紫野市では剣塚遺跡、道場山遺跡など丘陵部からその裾部分にかけて顕著な遺跡が発見されている。ここに報告する宮ノ本遺跡はその中でも最も高位の人物達が埋葬されていたとみられ、副葬あるいは供献された遺物の内容は、都を除けば西日本随一と言っても過言ではなからう。

また、同じ奈良時代では日本三大古窯の一つとされる牛頸窯跡群が大宰府西郊の丘陵地帯に分布し、宮ノ本遺跡は其中で最も東南に位置しており、大宰府の繁栄とともに活発な活動の痕跡を見出すことができる。

東部の山岳地帯では、宝満山で古代祭祀遺構が踏査、調査されており、大宰府の鬼門としての位置に横たわる霊山の実態が解明されつつある。

大宰府成立以前は、この佐野地区が歴史の中心舞台であったといえ、弥生時代前期の集落が前田遺跡で、後期の集落が尾崎遺跡、脇道遺跡、前田遺跡等で相次いで発見された。古墳時代では、前期の集落が尾崎遺跡で発見されている。同じ頃の墳墓は宮ノ本遺跡にあり、過去の調査で11基の古墳が調査されている。佐野地区以外では国分寺、国分尼寺のある台地付近に弥生時代中期の集落、後期頃の墳墓群、古墳時代では中期の集落、後期の古墳（陣ノ尾遺跡）が知られ、市東部では弥生時代の甕棺群が発見された吉ヶ浦遺跡、副葬品を多量にもつ前期の古墳（菖蒲浦古墳）や後期の古墳（今王古墳ほか）も知られている。（Fig. 2）

太宰府市はその名前から古代律令体制期の研究、調査が早くから活発に行われており、当時の遺跡の主要なものは、先人の努力のおかげで特別史跡などの保存策が成されている。しかしながら、太宰府市内には様々な時代に生きた人々の証が今も地下に眠り続けている。これらを明らかにし、後世に永く伝えてゆく役割は現代に生きる我々に課せられた一つの課題であろう。

遺跡の保存、整備の進んだ大宰府という封建体制の象徴は今、周辺住民の憩いの場へと変わろうとしている。

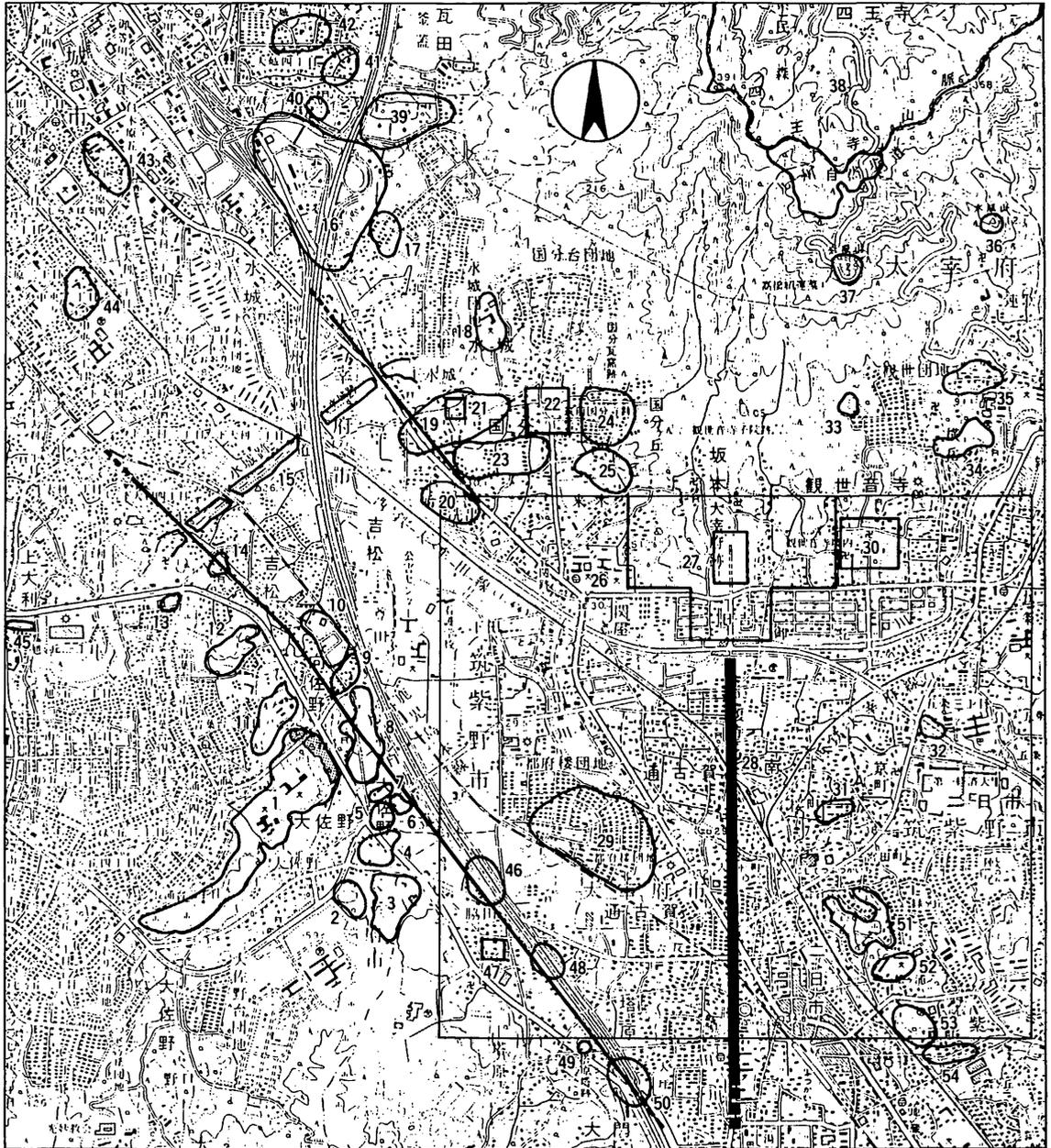


Fig. 2 太宰府市周辺の遺跡分布図 (1 : 30,000)

- | | | | | | |
|-----------------------|----------------------------|------------------------|----------------------|----------------------|------------------------|
| 1. 宮ノ本遺跡
(網が第7次調査) | 11. 長浦遺跡
(1-11が佐野地区遺跡群) | 21. 筑前国分尼寺跡 | 31. 般若寺跡 | 41. 曲り目遺跡 | 51. 峯遺跡 |
| 2. 殿城戸遺跡 | 12. 篠振遺跡 | 22. 筑前国分寺跡 | 32. 君畑遺跡 | 42. 原田遺跡 | 52. 二日市中学校遺跡 |
| 3. 脇道遺跡 | 13. 神ノ前遺跡 | 23. 千足遺跡 | 33. 推定金光寺跡 | 43. 原ノ畑遺跡 | 53. 通り浦遺跡 |
| 4. 尾崎遺跡 | 14. 鳥本遺跡 | 24. 辻遺跡 | 34. 横岳遺跡 | 44. ハサゴ遺跡 | 54. 五穀神社遺跡
(以上筑紫野市) |
| 5. フケ遺跡 | 15. 水城跡 | 25. 御笠軍団推定地 | 35. 醍醐遺跡 | 45. 小水城跡
(以上大野城市) | |
| 6. 難川遺跡 | 16. 成屋形遺跡 | 26. 遠賀軍団推定地 | 36. 水瓶山経塚 | 46. 創塚遺跡 | |
| 7. 上川久保遺跡 | 17. 浦ノ田遺跡 | 27. 太宰府跡 | 37. 岩屋城跡 | 47. 杉塚廃寺 | |
| 8. 前田遺跡 | 18. 陣ノ尾遺跡 | 28. 太宰府条防跡
(細線は推定域) | 38. 大野城跡
(以上太宰府市) | 48. 唐人塚遺跡 | |
| 9. 久郎利遺跡 | 19. 松本遺跡 | 29. 市ノ上遺跡 | 39. 釜蓋原遺跡 | 49. 塔原廃寺 | |
| 10. 原口遺跡 | 20. 正尻遺跡 | 30. 観世音寺 | 40. 笹原古墳 | 50. 桶田山遺跡 | |

Ⅲ. 調査及び整理の方法

太宰府市及び佐野土地区画整理事業に伴う発掘調査及び整理作業の概要は、『太宰府・佐野地区遺跡群Ⅰ』（以下『佐野Ⅰ』とする）において記載しているが、それらは概ね平地に於ける調査を中心としており、今回のような丘陵部分における調査では異なった調査方法を実施することが多い。ここでは『佐野Ⅰ』に記載した内容と重複する部分も一部にあるが、簡単に紹介し、この報告書活用に際しての参考にしていただきたいと考える。

伐採 佐野土地区画整理事業に関する丘陵部分の調査は、伐採業務から文化財サイドで実施している。近年の伐採は経費節減の上から、伐木の集積は丘陵の上下を問わず機械力で行われ、管理が不十分であると文化財の主要な部分をこの折りに破壊される危険性が高い。さらに太宰府市の火入れに関する条例では伐木の焼却は数カ所以上に分散、集積した後消却を行うことが義務づけられており、集積を行わずに山全体を裾部分から一気に焼却することはできない。また、場所によっては防火帯をブルドーザーで設置することもあり、防火帯自体が丘陵頂部や尾根筋にそって設定されることからこの段階で文化財が破壊の危機に曝されることになる。これらの点から太宰府市の丘陵部分に於ける発掘調査は、伐採を文化財サイドで行い、徹底した指導、管理のもとで実施することから始まる。

地形測量 伐採後、本来の地形が明瞭になった丘陵を航空写真測量図化を前提に撮影し、その後実際の発掘調査に取り掛かる。測定用の写真は1/200図面が作成可能な縮尺（図化縮尺の6～8倍程度）で撮影するが、古墳と見られる部分が存在するときはその部分に限って1/50図面が作成可能な縮尺で撮影を行う（この部分が古墳であった場合は図面まで作成する）。

表土除去 表土は古墳と見なされる部分については人力によって行うが、他の部分については担当職員の管理のもと機械力に頼っている。したがって、発掘現場運営の段取り上、古墳の調査がある程度進行し排出される土量が減少した段階で機械力を投入し、古墳から排出された土砂を含めた除去作業を行い、少しでも省力化をはかることにしている。

略図作成 遺構は確認された時点で平板による略図作成（1/200）を行い、遺構を速やかに番号化し実際のものとの混乱を避けている。丘陵部でも平坦部分が広く、且つ遺構の密度が高い場合は、地区杭設置を行いそこから略図を作成する（『佐野Ⅰ』参照）。なお、何れの場合も測量の基準点は、国土調査法第Ⅱ座標系にしたがっている。

古墳 表土除去作業前に、墳丘推定中心から十字形の畦畔を設定し、本来の墳丘面まで掘り下げる。畦畔は主体部プラン確認、周溝掘り下げの段階まで残し写真、図面等の記録を作成した後に除去する。主体部は原則として同じ位置に畦畔を設定するが、主軸がずれる場合は主軸に併せて設定し直す。古墳の調査がすべて終了した段階で、墳丘の写真測量を実施し、その後一般的には墳丘断ち割り作業となるが、ここでは逆に当初の畦畔位置にあらたな畦畔を設定し

て、墳丘そのものを除去する形をとった（遺構保存が困難であると結論付けられたことによる）。地山検出によって記録の後畦畔を除去し、精査、遺構検出へと進む。今回は結果として重要な遺構検出に結び付いた。

墳墓や古墳の付帯施設 個々で畦畔を主軸に併せて設定し、掘り下げる。遺物は覆土中に混入したものを除いてすべて原位置にとどめ写真、実測へと進む。

遺構実測 任意（原則として主軸に合わせる）で基準となるポイントを設定し（ポイント間の距離を完数にする）、そのポイントすべてに国土座標を与える。方位はこの座標から計算によってもとめ、併せてポイント間の実測距離と座標値から計算された距離を比較してその精度を再確認する。

方位 上記したことから方位の精度は高いものと判断し、古墳及び墳墓については座標北からの主軸の振れ、古墳付帯遺構では座標北及び古墳主軸との振れを報告書の図面上に表記しておいた。各地で導入されることを期待する。

分析用サンプルの採取 墳墓あるいはそれと考えられる遺構から、残存脂肪分析用のサンプルを採取している。熱湯処理された採取用具（スパチュラーなど）で、遺構に畦畔が残存している間に必要量を採取する。採取された土はアルミ箔にとるが、これまでの過程で人の手が一切触れることのないよう充分注意を払いながら行う必要がある。採取された土はアルミ箔ごと冷凍庫に保管される。採取に伴う記録はカードに克明に記載し、分析委託時にサンプルに添える。これは分析データからノイズを除去する目的が含まれる。

調査が完全に終了した段階で、地形の写真測量を行い、全ての作業が終了する。

整理 一般的な流れは『佐野Ⅰ』に記載したとおりである。ここでもその記録方法に変更はない。

報告 今回報告書を作成するにあたって、いくつかのことを協議し実行したので記載しておく。

遺物の報告にあたっては、その遺物が本来作られた目的の方向で掲載するという点である。したがって遺構への使用段階の方向と必ずしも同一にはなっていない。例えば合口式の甕棺であっても上甕が当初から上甕として作られていないことが明らかな場合、作成段階はあくまでも甕あるいは甕棺であり、口縁部を上にした図を掲載すべきとの立場を採ることにした。ここでの報告には無いが、蔵骨器の蓋に使用（転用）される坏や椀、須恵器蓋を転用した硯などもこの類である。当初の目的が明確でないものはこの限りではない。

次に遺物が遺構に埋置される段階で、2次的に人為的な手が加わっている場合の図面への表現方法である。甕や壺の胴部の一部が小規模に改変されている場合や口縁部等の部分がほぼ水平な形状で改変されている場合などは、現在用いられている土器の実測方法によってもある程度は表現が可能である。しかしながら、胴部の左右どちらか半分程度を残すものや部位によ

て改変の形状が大きく異なっているものについては、展開図（太宰府市では主として三角法によっている）を用いてようやく表現が可能である。しかし、破片化した土器の場合多くは復原的に図化し、その土器の特色を最大限に表現しようと試みられるのが一般的であり、展開図ではこの目的が十分に達成されるとは考えにくい。個々の遺物実測図は遺物報告の項において詳細が紹介されるものであり、遺構の一部としての遺物ではなく、個体としての遺物を紹介するという立場を採ることとした。よってここでは、前者についてはできる限り図上へ表現することに努めたが、後者については写真を用いて破砕行為を表現し、実測図は土器としての本来の形状を復原的に報告することに努めることとした。したがって前者、後者が合体した図も登場する結果となったが、一つの試みとして了解されたい。

なお、こうした遺物に関する補足的な写真資料だけでなく、現場で撮影した多くの写真資料をできる限り掲載することに努めた。現場の写真はそのすべてが記録として残されることは言うまでもないが、写真撮影枚数の割には報告書に掲載される枚数は少ないのが現状である。ここでは、予算の許す範囲で本文中に写真資料を随時掲載することとし、本文の補足とした。

報告後 報告書作成が終了したあとは、資料の状況に応じて倉庫に収納されるが、報告書作成段階では解明できなかった資料（例えば土器の産地や年代）や今後の調査、研究の基準となるような遺物（主に一括遺物と称されるもの）は見学者も多いことから別に保管している。また、遺跡・遺物に優劣の差はないが、特に歴史上貴重と判断されたものは、市指定文化財とし、保存、保護の措置を強化することは言うまでもないことである。

倉庫に収納される遺物は、調査段階での遺構仮番号を見出しに記載しているが、太宰府市の整理方法では、報告された遺構番号とこの仮番号は遺構の性格による仮番号の統廃合を実施しない限り、同じ番号を採用しているため混乱はほとんどない（『佐野Ⅰ』及び『大町遺跡』太宰府市の文化財第18集）。

以上、ごく簡単に調査、整理の流れにしたがって今回報告にあたって注意した点等を列記した。発掘調査に関わる様々な行為には、各行政体や個人でいくつもの異なる方法がある。特に発掘調査過程の多くは担当者個人の力量に任されることがほとんどであり、報告書として同じ体裁を保つものの中にも精度の差は当然の事ながら見えてくる。すべてを統一的にすることは発掘調査という見えない世界を扱うには決して好ましいわけではないし、また不可能でもある。そのような実態であればこそ、どのような作業過程を経て報告に至ったのかを明確にすることは、そこに報告される遺構・遺物をより正当な形で評価するひとつの材料を提示するものではないかと考える。

今後の調査、整理においてさらに多くの事象を明らかにできる方法が確立されることを目指しており、大方の御教示、御批判を願うところである。

IV. 調査の概要

(1) 遺構の分布状況

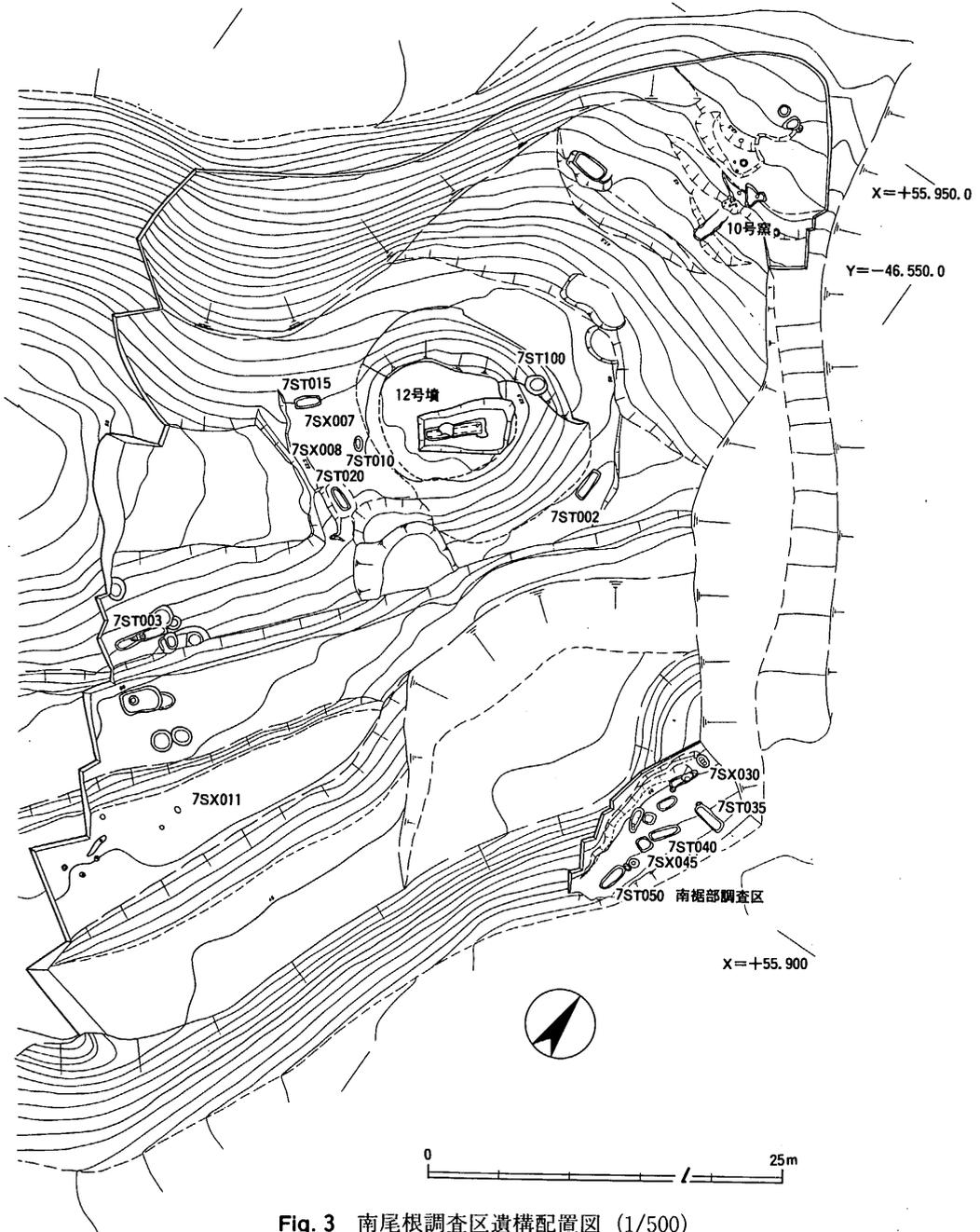


Fig. 3 南尾根調査区遺構配置図 (1/500)

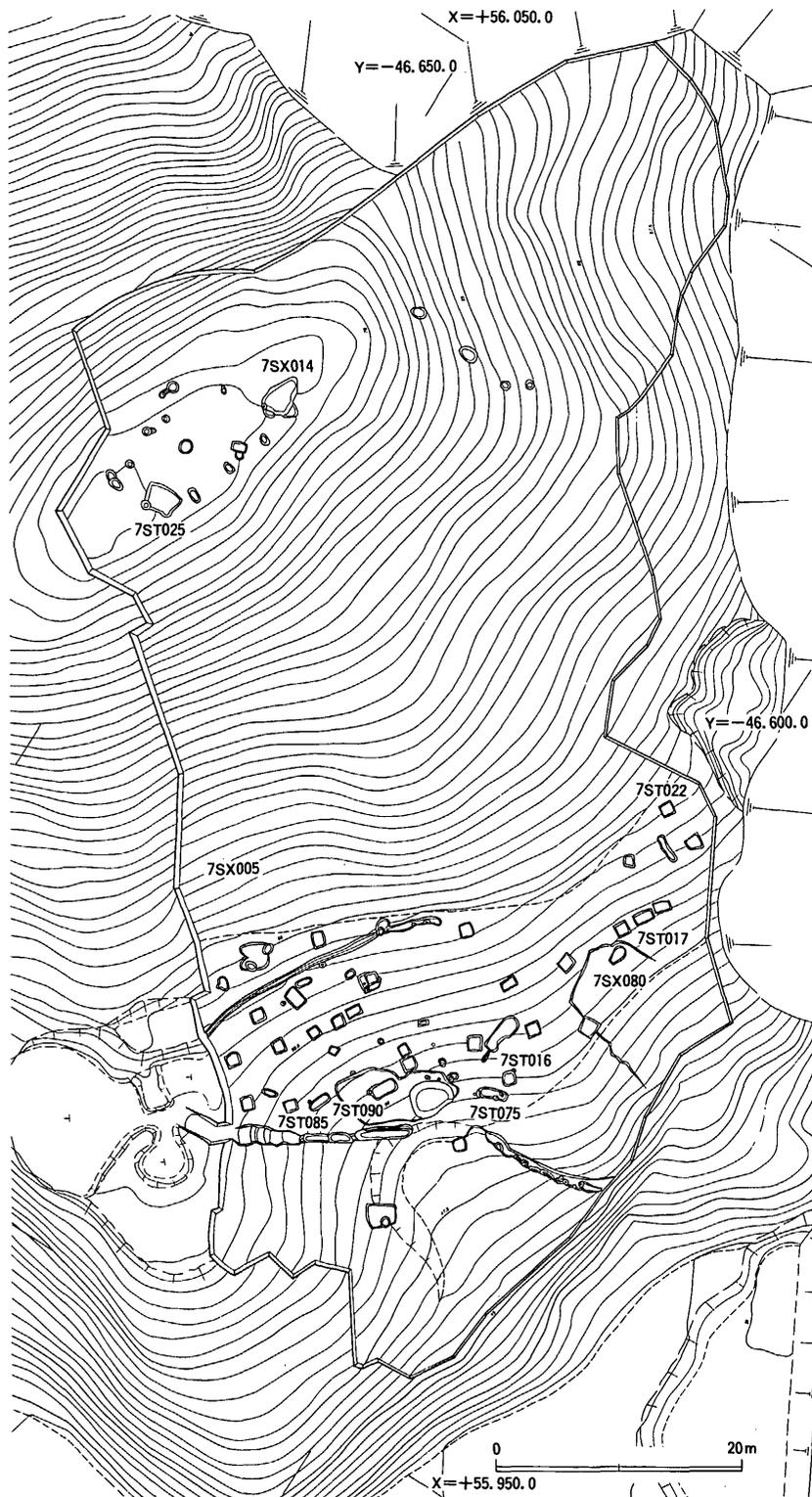


Fig. 4 北尾根調査区遺構配置図 (1/500)

調査区は地形的制約から北尾根と南尾根の大きく2区に分けられる。各遺構の報告に先だって、尾根毎にその概要を記載する。

南尾根 (Fig. 3)

先端部を県道に切られているが、西から東へ舌状に派生する低丘陵の中程から先端部分に該当する。丘陵頂部の先端近くには12号墳と命名した円墳がある。この古墳の付帯施設とみられる遺構は、墳丘北斜面中位に墳丘を切って構築された土器棺墓1基 (7ST100) と西側裾部分に土器棺墓1基 (7ST010)、これからやや南西に離れて石蓋土墳墓1基 (7ST020)

が検出された。さらに丘陵頂部では、この古墳の東裾部分に周溝を切る形で平安時代の墳墓1基(7ST002)、西裾部分のやや離れた地点に同じく1基(7ST015)が検出された。

丘陵斜面では、北側先端部斜面下位に須恵器窯跡1基(10号窯跡)、南側斜面では中位に平安時代の墳墓1基(7ST003)、中位以下に3段に構築された段造成の平坦部(7SX011)がある。また古墳南裾部で大きく土取りされた部分の直下から灰原1基(7SX030)、その灰原を切る形で土壙等の遺構が検出され、その中に平安時代の墳墓3基(7ST035・040・050)、焼土壙1基(7SX045)が確認された。

北尾根 (Fig. 4)

標高71mの頂上付近に火葬墓1基(7ST025)、集石遺構1基(7SX014)があり、斜面中位のやや傾斜が緩やかになった地点付近に平安時代の墳墓3基(7ST075・085・090)、その上位に龍泉窯系青磁碗をもつ遺構(7SX005)、土師器杯を埋置した遺構(7SX080)、平安時代の墳墓と重複するように近世墓30基以上などを検出した。

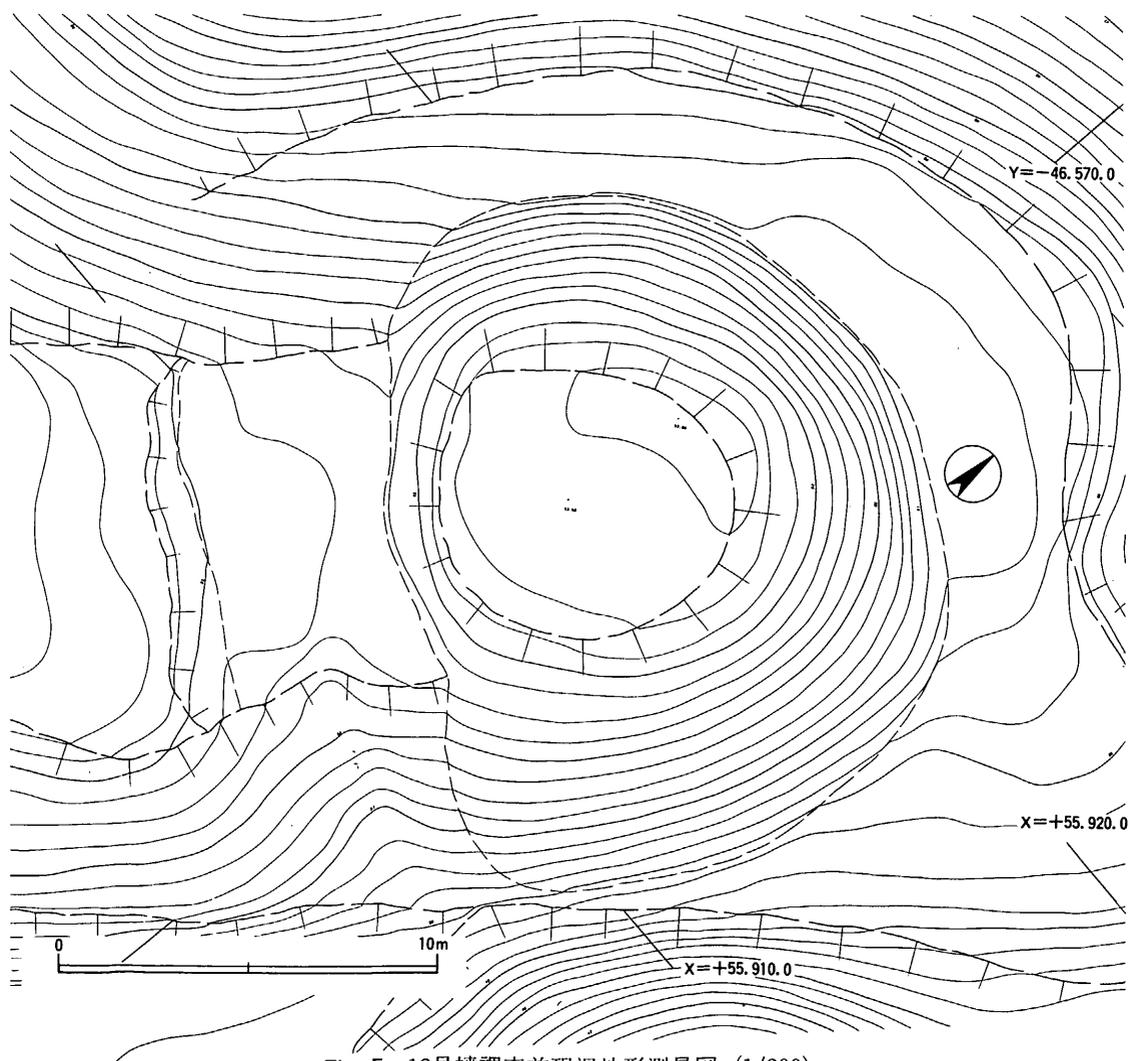


Fig. 5 12号墳調査前現況地形測量図 (1/200)

(2) 古墳

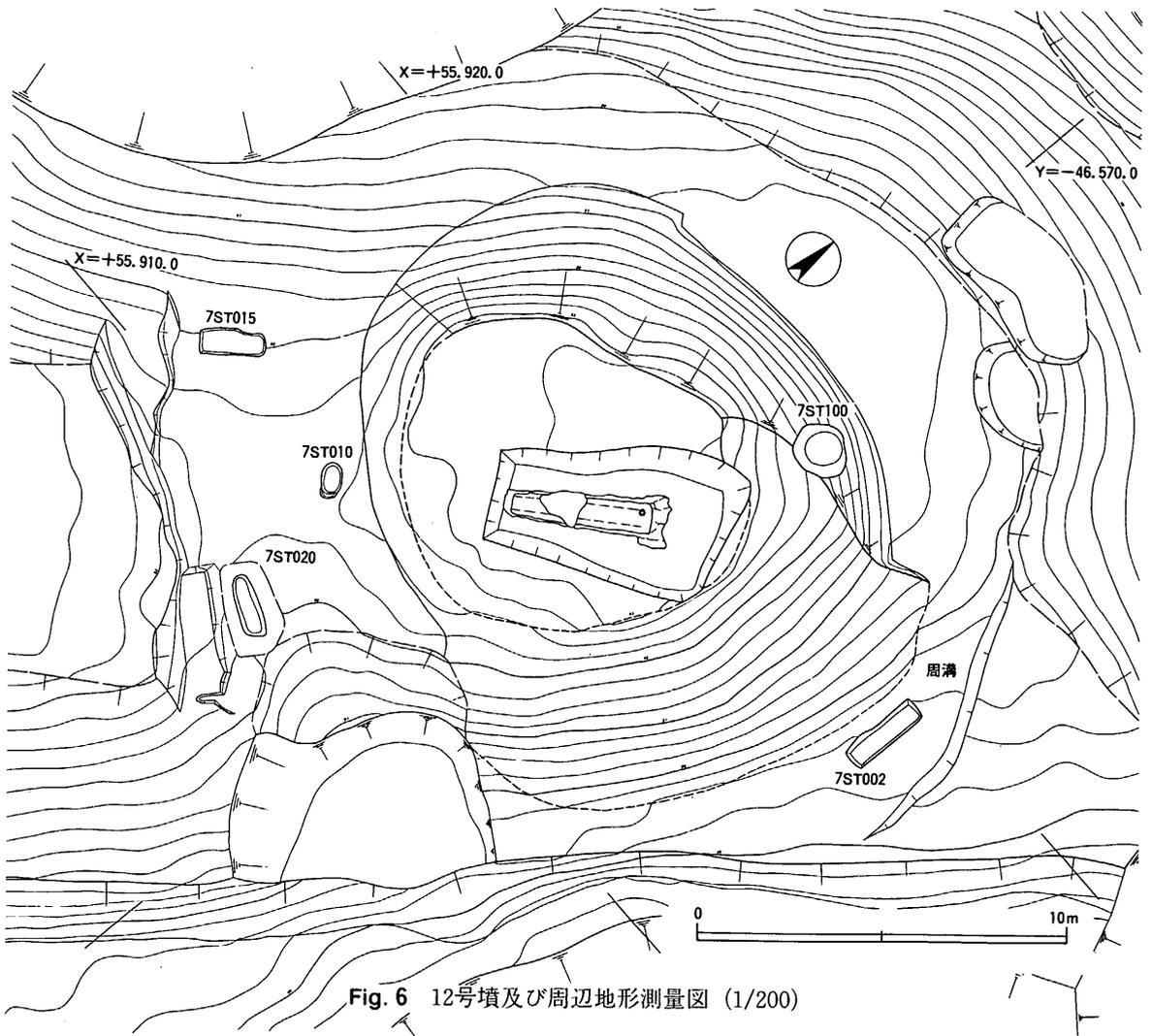
12号墳

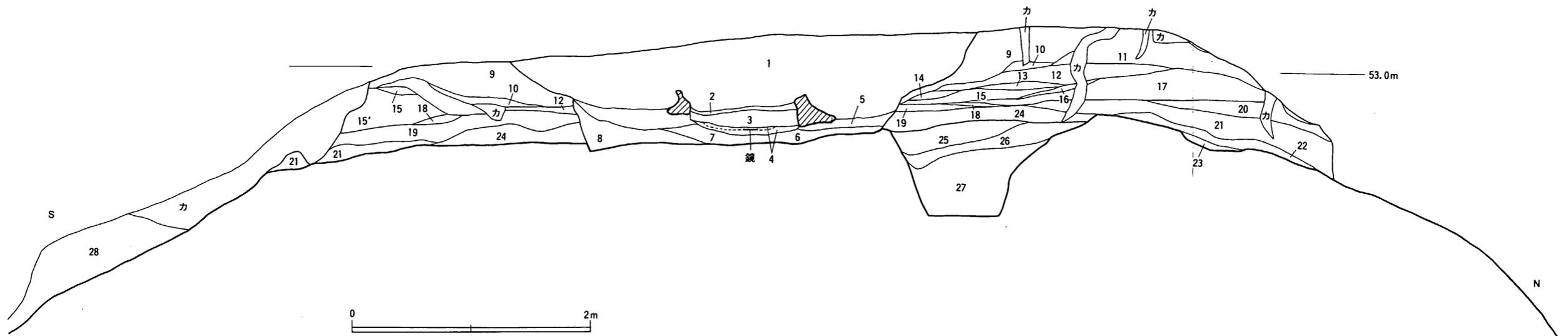
①遺構 (Fig. 5～11・16、Pla. 2～10)

墳丘・周溝など (Fig. 5～7、Pla. 2～10)

標高約50mに位置する円墳と考えられる。墳丘裾部は後世のカットで部分的に失われており、当初の正確な規模は明らかにしがたいが、東西長約16m、南北長約17.4mを測り、高さ（比高差）は東側（丘陵先端側）で3.8m（周溝底からの高さ）、西側で0.75mである。

墳丘は、丘陵尾根筋を部分的にカットし、一部に平坦面を造りだした後、盛土を行ったとみられる。盛土の範囲はカット部分よりも広く、平坦面を完全に覆い尽くす形で盛られている。盛土は多くを客土によって盛っており、その積み方は墳丘中央付近で水平堆積であり、土質を異にしているところから版築的な工法のようにみえる。しかしながら、堆積土の厚さは0.05～0.15mと厚く、所謂版築とは言えない。また後期古墳によくみられるような小単位が把握され





土層一覧

- | | | | |
|---|------------|-----------|-----------------|
| 1. 明茶白色土 (粘土ブロック若干混入) …墓壇埋土 | 9. 白黄色土 | 17. 淡黄灰色土 | 25. 暗黄灰色土 |
| 2. 白色砂土 (上面の約0.5cmが黄茶色でよくしまっている) } 棺内崩落土 | 10. 黄白色土 | 18. 淡茶色土 | 26. 淡黄灰色土 |
| 3. 暗白赤土 (赤色顔料の浸み込みによる変色) | 11. 淡黄色土 | 19. 灰茶色土 | 27. 淡灰茶色土 |
| 4. 赤色粘土…棺が腐食により粘土化したもの?…分層は難しい | 12. 淡茶灰色土 | 20. 灰黄色土 | ※25~27は7SK105埋土 |
| 5. 黄白色粘質土 (上面の約0.5cmが黄茶色でよくしまっている) } 作業面か | 13. 淡灰色土 | 21. 暗灰黄色土 | 28. 茶灰色土…表土 |
| 6. 暗茶灰色土 (" ") | 14. 淡灰色砂土 | 22. 淡灰黄色土 | |
| 7. 暗茶灰色土 (ブロック土が混入するとともに赤色顔料が浸透している) | 15. 黄灰色土 | 23. 白灰色土 | |
| 8. 白色砂土…地山の花崗岩風化土が埋めもどされたものか | 15'. 暗茶灰色土 | 24. 黄茶灰色土 | ※9~24は墳丘盛土 |
| ※1~8は主体部に関連する埋土 | 16. 黄茶色土 | | |

Fig. 7 12号墳々丘及び主体部土層観察図 (1/40)

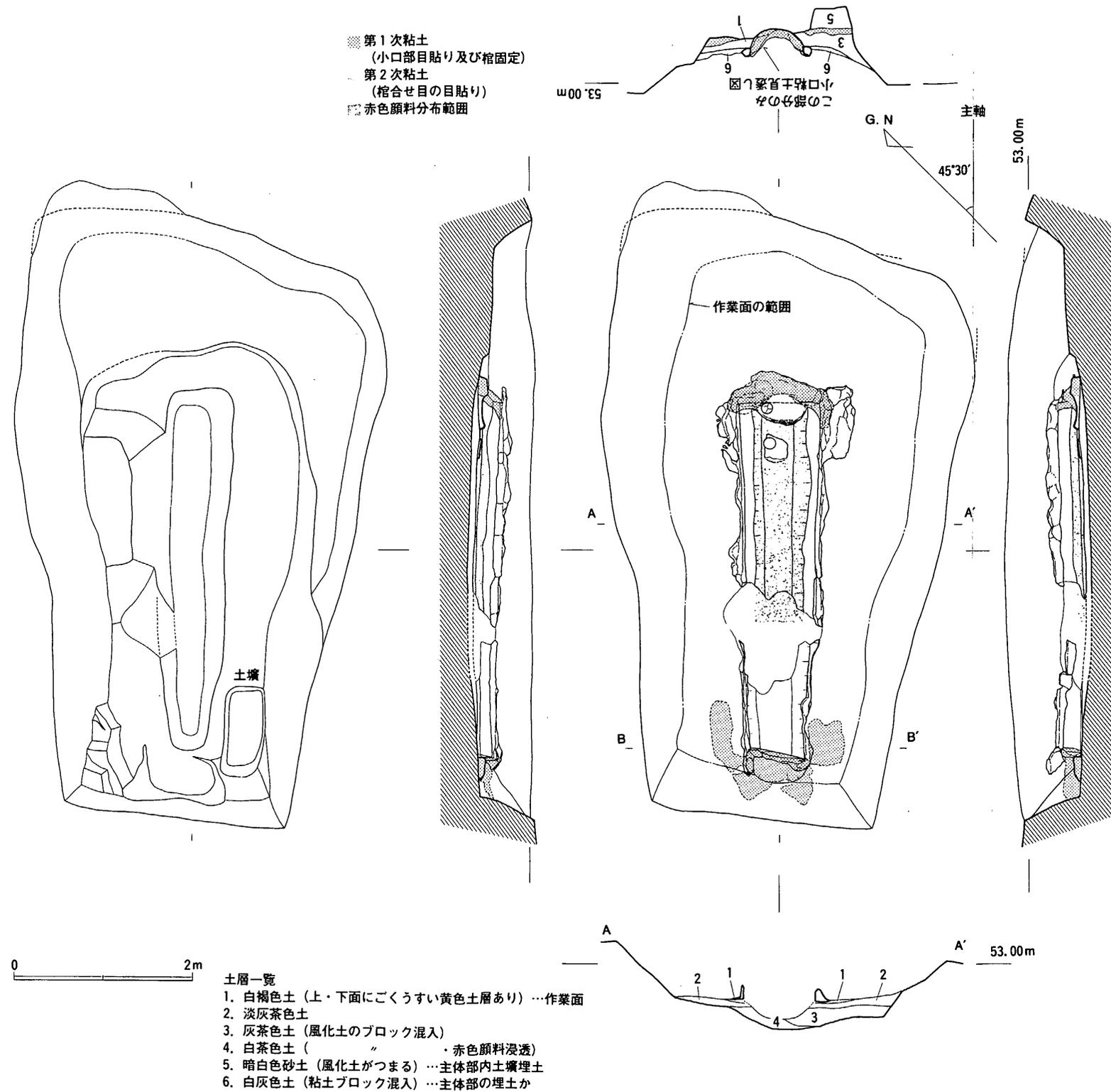


Fig. 8 12号墳主体部実測図 (1/60)

るような堆積でもない (Fig. 7、Pla. 9)。

主体部の墓壙は墳丘盛土上面から掘り込まれており、墳丘北東部の甕棺は墳丘斜面の盛土上方から穿たれている。

盛土をすべて除去すると花崗岩風化土の地山が露出する。そのカットされた平坦面上に土壙6基が検出された。土壙は土層観察でも明らかなように墳丘構築前に掘削され、埋め戻されていること、同様の土壙は丘陵の他の部分には全く無く、かつ古墳構築に伴う平坦面部分の範囲内に納まっていることなどから、古墳構築に伴う何等かの施設であると考えられる (Fig.16)。

周溝は古墳の東側に一部分と西隅でそれと考えられる一部分が検出された程度である。最もよく遺存している東側で幅約2.0m、深さ約0.2mを測る。古墳南側では土取りのために不明瞭になっているが、当初から西に回り込むにつれ徐々に浅くなっていたことが考えられる。北側は墳丘部分から削平されており、明らかにできなかった。丘陵の基部側である西側は周溝として確実に把握できる部分はないが、墳裾から西へ約5mのところでは地山が大きく立ち上がり、これが古墳と丘陵地形とを区分する造成遺構であると見なされる。この地点までの埋土は浅く、幅もかなり広いところから周溝としての意識は低かったものと考えられる (この地点は7SX007として捉え後述する)。この部分には、土器棺や石蓋土壙が地山から穿たれている。周溝埋土中から土師器甕、小型丸底壺等が出土したが、すべて周溝埋没過程に転落、遊離して埋まったものとみられる。

東側周溝の埋没は埋土上面から白磁椀Ⅳ類 (Fig.12-7) が出土しているところから、平安時代後期から中世と考えられる。しかしながら、7ST002造営段階では未だ完全に埋没しておらず、7ST002の墓壙掘り方は周溝埋土中位から穿たれていた。

内部主体 (Fig. 8～11、Pla. 4～8、巻頭図版2)

墳丘上部の盛土が流出しているため本来の深さや形状は知り難い部分もあるが、墓壙は長さ6.72m、幅は東端で4.10m、西端で2.48m、深さは現状で最大0.95mを測る。墓壙上面の南辺はほぼ直線的であるのに対して北側のそれは中位で大きく屈折し、外方に開くようにして北端に取り付く。墓壙の法面は東側では二段掘りになり顕著な平坦部が造られ、北側にも小さな平坦部が観察される。しかし他の部分では中位過半に変換点がある程度で、二段掘りの形状を意識していたであろうと考えられるものの平坦部は造り出されていない。墓壙底面は、木棺を据えられるよう中央部を東西方向に若干U字形に窪ませている。また、墓壙の北西隅には地山を削り残した階段状の遺構が付設されている (Pl. 8)。幅0.3～0.5mで3段分検出されたが、棺安置後作業面形成段階ではほとんどが埋められていたようである。さらに西小口付近で南側平坦部に、長さ1.00m、幅0.45m、深さ0.25mの小土壙があり、埋土は地山の花崗岩風化土で中から鉄刀子片が出土した。埋土の上面は厚さ約0.08mの粘土で土壙全体を覆いつくしていた。

棺は割竹形木棺で、小口部分と棺の合わせ目に粘土を用いて目張りする木棺直葬の範疇で理

解したい。棺は墓壇の主軸中央部にあるが、極端に西側に寄せて安置されており、このため東側に大きな空間が造られることになる。これに対して西側では棺を安置することを意識して、墓壇法面の傾斜が他の部分に比べて急である。東側の空間利用を意識したものであろう。棺の規模は長さ3.97m、幅は東端で0.93m、西端で0.61mを測り、まさに大木を切りだして棺に利用したかのような形状を呈している。粘土は棺の合わせ目と見られる部分全体にわたって幅約10~20cm、厚さ約5~20cmで貼り付けられており、小口部分に多くの粘土が用いられている。いずれの小口部分にも余剰となった粘土をすべて置いたかのように、棺の側縁部から30~40cmもの幅で広がっており、西側小口部では棺の側縁部にまで回り込んでいる。側縁部の粘土はすべて標高52.6m付近から上に観察され、粘土の下面は概ね水平である。これは棺安置後この付近まで一旦埋め戻された後、粘土を貼る作業を行ったために生じた痕跡と考えられる。これに対応するように黄色の土がごく薄くではあるが粘土外縁の下端と同一レベルに認められ、作業空間を確保したことが窺える。しかし、小口部分では黄色の土の下面にも粘土が認められ、棺小口部分から5cm程度奥まで入れ込まれていた。このことから、作業空間を造る以前に棺を固定する目的で若干の粘土を小口部分に限って用いたことが知られる。東側小口部では棺端部付近の下面に0.3m×0.3mで深さが0.06m程の穴が南北2ヶ所に認められ(Fig.11)、この中にも粘土が充満していた。この穴は棺を据えるにあたって2人の作業員が手

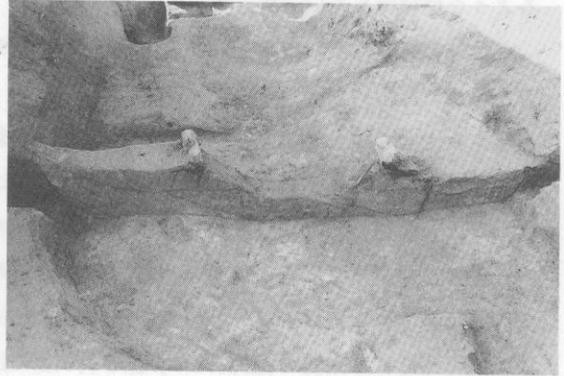


Fig. 9 棺頭部付近断割状況



Fig. 10 西小口部粘土の状況

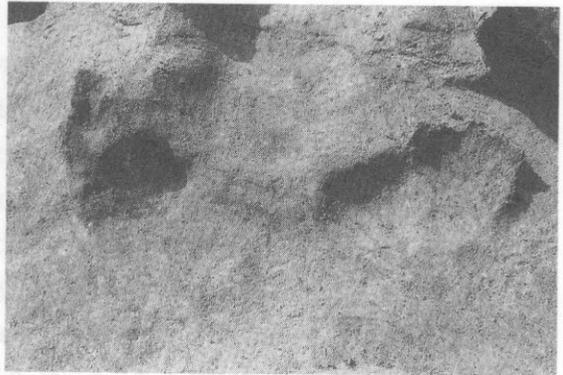


Fig. 11 東小口部下面の穴

を入れるのにちょうど都合がよい位置にあり、棺安置作業に伴う施設の可能性が考えられる。

棺底部は、西小口部ではほぼ正円形に復原されそのまま立ち上がった所に側縁の粘土が貼りつけられていたが、攪乱よりも東の部分では正円形を呈さず僅かな曲線を描く程度であり、また立ち上がりのカーブもそのままの円弧では側縁の粘土の位置には届かず、棺の底部を若干加工・成形した可能性が強い。また、側縁の粘土は棺側が全面にわたって平坦であり、棺の側面も平坦に近い形状に加工されていたものと考えられる。

墓床面と棺底部の間には棺安置段階で隙間が開いていたと考えられるところがあり、棺の両サイドから土を挿入した形跡が認められた (Fig. 9)。小口部下位の粘土もこれと平行して施されたと考えている。

東側小口部分棺外で小口部分を覆った粘土が内側に転倒しており (Pla. 7)、その上面に土師器坏1点 (Fig.12-1) が転倒した (伏せた) 状態で検出された。ある程度棺を埋め戻した段階で供献された土器とみられるが、埋め戻しに伴う埋土は分層できず、ほぼ一気に埋められたようでありどの段階で供献されたかは明瞭さを欠くが、おそらく棺埋置後粘土で目張りを行った直後ではないかと考えている。

棺内はベンガラが塗布されており、その範囲は棺の中央付近ではなく、やや東に寄った位置に認められた。ベンガラの東側の端は棺小口部より0.2m西に入った位置から始まり、西側は株による攪乱で明確ではないが、棺内側縁部に若干残っていたベンガラの痕跡からおおよそ2.50m程度の長さで塗布されていたものとみられる。ベンガラ西端から西小口部までの間にはベンガラが塗布された形跡はないが、部分的に赤くなっている部分が観察されており、棺に塗布する際に飛散したのと考えられる。

棺内のベンガラが観察された範囲の東寄りに0.30m×0.25mで厚さが0.02m程度の粘土塊が認められ、その位置から枕と判断された。この部分には朱が認められた。この枕の北東部分から獣帯鏡が出土した。鏡は鏡面を上にして一部が粘土の枕にもたれるように置かれており、調査時点の所見では鏡面上にも粘質土 (棺痕跡か?) が観察されたため、棺内に副葬されほぼ原位置を保つものと考えられる (Pla. 5)。

主体部内の出土遺物は、先述した鏡1面、土師器坏1点、附属の土壌から出土した鉄器2点のみであった。

②出土遺物 (Fig.12~15、Pla.39、巻頭図版1)

土師器

坏 (1) 口径12.0cm、器高3.3cmで、器壁は極端に薄く底部で0.3cm、口縁部付近では0.1cm程度しかない。外面は風化しており調整は不明瞭であるが、内面は丁寧なヘラミガキが施される。主体部棺外東小口部分の倒壊した粘土上位から出土した。棺外の供献遺物とみられる。

小型丸底壺 (2) 口径13.2cm、器高8.5cm程度で、胴部最大径よりも口径の方がはるかに

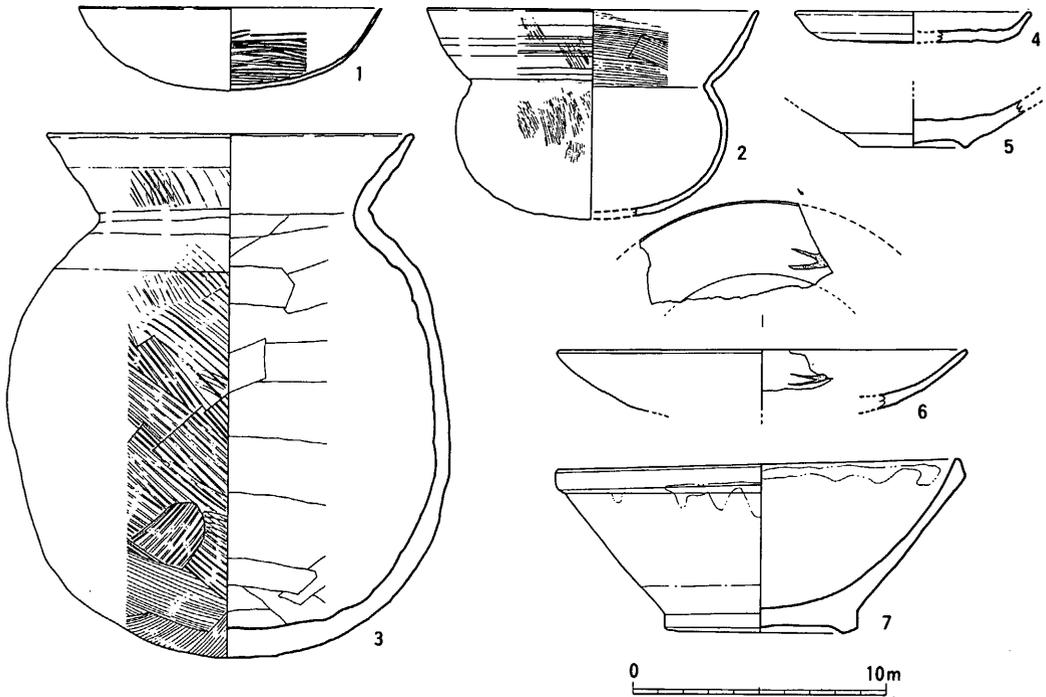


Fig. 12 12号墳及び周辺出土土器実測図 (1/3)

大きい。底部は丸底を呈している。口縁部内面は横方向のハケ目、外面は横ナデのちヘラミガキが認められる。体部内面はナデ、外面は細かなハケ目で口縁部まで及んでいる。墳丘西北隅の周溝と考えられる埋土中から出土した。

甕 (3) 口径14.6cm、器高21.0cmを測る。口縁部は外方へ直線的に立ち上がる。口縁部付近は横ナデ、胴部内面はヘラケズリ、外面はハケ目で口縁部下半にまで及んでいる。斜面裾部から出土した。

小皿 a (4) 口径9.4cmで底部は糸切りである。墳丘の表土中から出土した。

白磁

椀 (7) IV-1-a 類である。口径15.2cm、器高5.8cm、高台径7.6cmを測る。口縁部付近に釉が垂れた痕跡がある。体部外面下半は露胎である。周溝埋土上位で7ST002の直上から出土した。当初7ST002に関係する可能性も考えられたが、時期的に符合せず周溝埋没過程で混入したものと考えられる。

陶器

皿 (5・6) いずれも唐津焼きとみられる。5は内外面に目跡が確認され、6は内面の一部に文様がある。両者とも墳丘の表土中から出土した。なお、図示しな

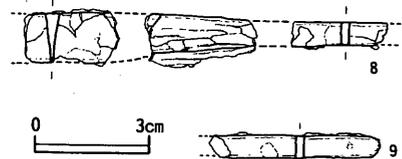
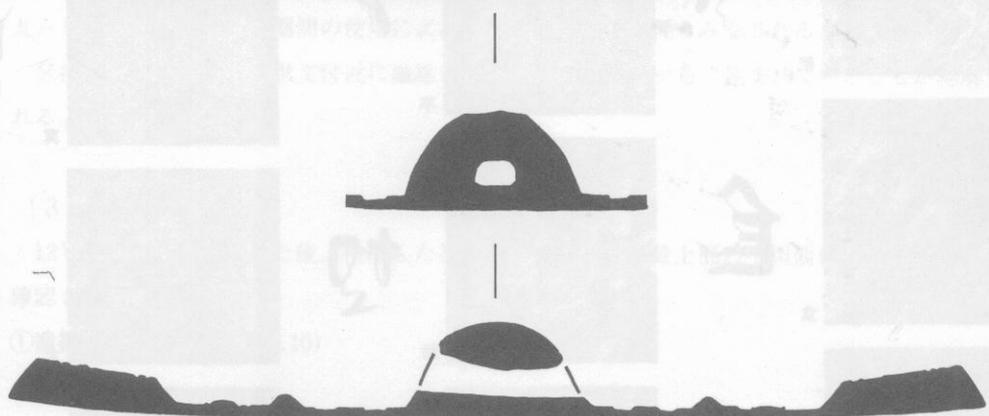


Fig. 13 12号墳主体内土壙出土鉄製品実測図



10

Fig. 14 獸帯鏡実測図及び写真 (1/1)



Fig. 15 獸帯鏡の銘文と写真

ったが同様の唐津焼きとみられる破片資料がこの他にも若干出土している (Pla.39)。

鉄製品

刀子 (8・9) 8は、接合しないが同一個体と考えられる。刃部の幅は1.3cmで先端が失われている。9は長さ4.5cmで柄の部分の残片である。主体部内西南隅の土壌内から出土した。

青銅器

獣帯鏡 (10) いわゆる獣帯鏡の一種で、流雲文縁一仙五獣帯鏡と呼称できる。直径12.9cm、厚さは縁の部分の最大で0.5cm、内区の最も薄いところで0.1cm、鈕の部分で1.3cmを測る。文様は錆化により不鮮明になる部分が多いが、外区は縁部分にやや型式化された流雲文が巡り、その内側に鋸歯文帯が配される。内区はその最も外縁を櫛歯状の文様帯が飾る。その内側には2本の細い圏線に挟まれる形で幅0.4cm弱の低いかまほこ状の銘帯が巡っている。この銘帯上に一部錆化によって失われるものの、21文字の銘文が陽刻されている。銘文は「太山作鏡真大好 上有仙人不知老 渴飲玉泉飢食棗」とみられる。文字は、錆により全くあるいはほとんど判読困難なものは「真・上・有・棗」の4例、錆崩れとみられる変形のあるものは「玉」の一部分で1例のみである。他は鏡特有の異体字を用いているものもあるが、明瞭に判読可能である (Fig.15)。銘帯の内側は、四葉の花弁を有する珠文6個によって6分割され、各々の空間に細線による輪郭線を施した浮き彫り (半肉彫り) の獣文を配している。観察により鳥と見られるものが朱雀 (口先から玉がこぼれ落ちている)、その対面に玄武、玄武の右隣が白虎、その対面が青龍と考えられ、四神を表すものである。さらに白虎の右隣には形状不明の獣文 (蛙か) が認められ、その対面には靈芝を摘む仙人が型式化されてはいるが確認できる。鈕と獣文帯の間は低い突帯が巡り、その内側に3本を1単位とした櫛歯文が8箇所配される。櫛歯文は均等には割り付けられていない。鈕座は低い段状に作り鈕の中央に直径0.5cmの穿孔が行われる。内部は錆化が進んでおり当初の形状は知られない。

鈕穴の入口付近上面は紐擦れによって大きく変形している。さらに周縁部の角は僅かながら丸みを帯びており、一定期間の使用による手擦れのための摩耗とみなされる。

発掘当初、形状不明の獣文付近に繊維が貼り付いており鏡が布で包まれていたことが理解される。

(3) 墳丘下層土壌

12号墳の墳丘を除去した後、検出した遺構群である。丘陵最上部の平坦面に6基の土壌群が確認された。

①遺構 (Fig.16~19、Pla.10)

7SK095

長軸1.20m、短軸0.92m、深さ0.91m (検出面の最大値) を測り、楕円形を呈す。主体部堀

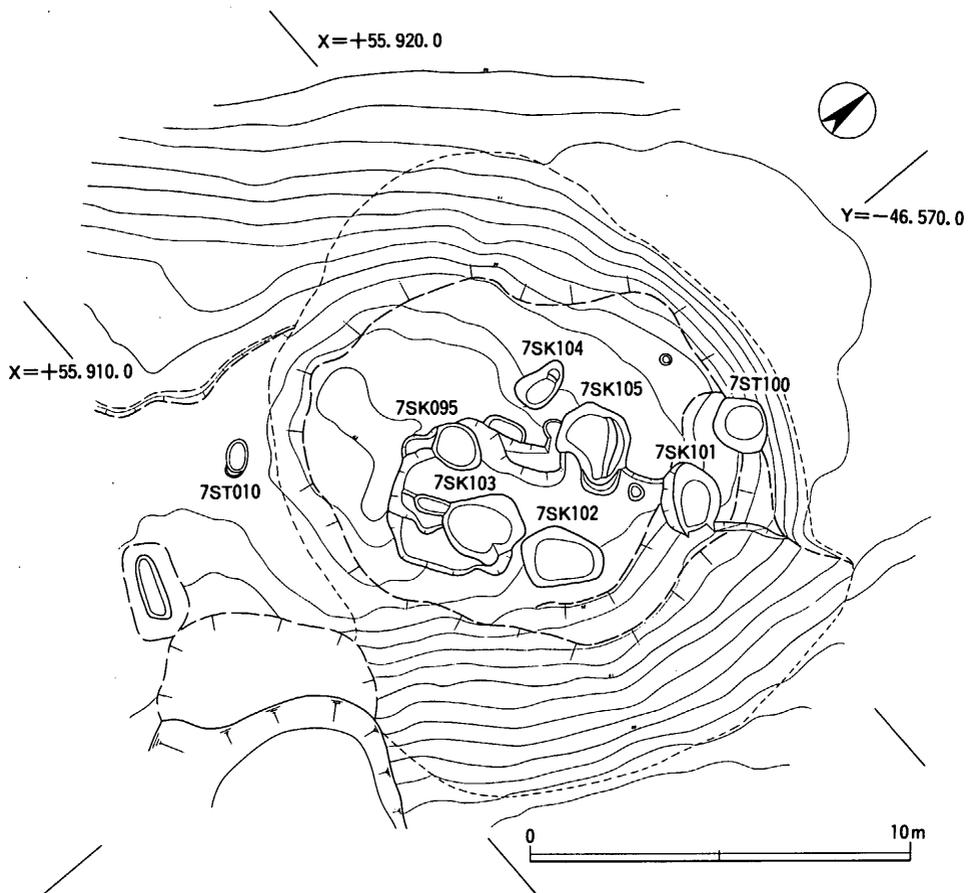


Fig. 16 12号墳々丘下層土壙配置図 (1/200)

り方により削平を受ける。主体部完掘段階でプランの一部が検出されたが、プランの多くは墳丘下に潜っており (Fig.19)、土壙が主体部及び古墳構築に先行することは明らかである。遺物は出土していない。

7SK101

長軸約2.00m、短軸1.56m、深さ0.90m (検出面の最大値) を測り、楕円形を呈す。地山成形時の斜面に掘削しているが、底面は水平である。遺物は出土していない。

7SK102

長軸2.16m、短軸1.62m、深さ0.70m (検出面の最大値) を測り、隅丸長方形を呈す。遺物は出土していない。

7SK103

長軸2.00m、短軸1.94m、深さ0.67m (検出面の最大値) を測り、円形を呈す。主体部掘り

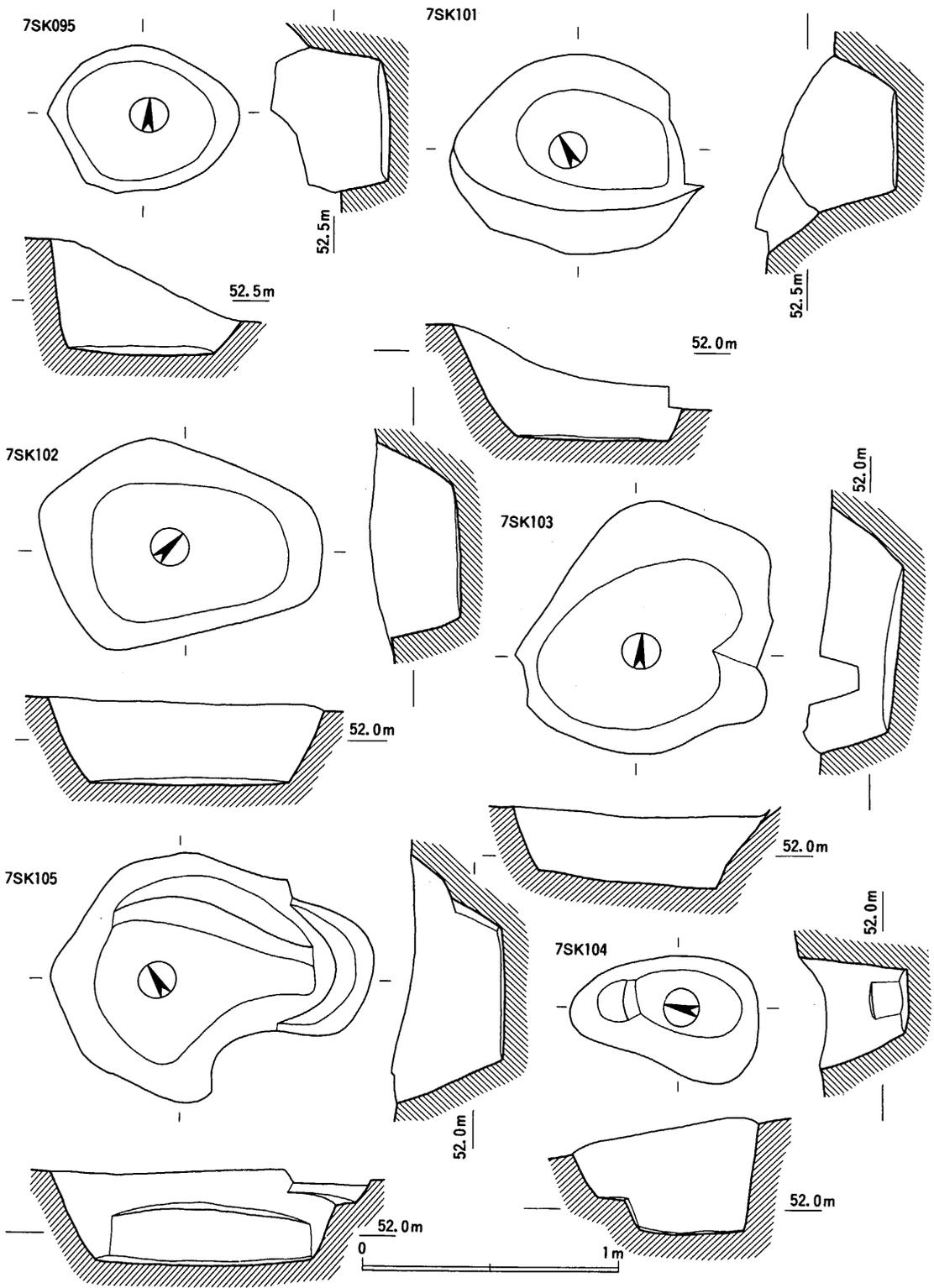


Fig. 17 12号墳々丘下層土壙実測図 (1/50)

方により削平を受ける。遺物は出土していない。

7SK104

長軸1.48m、短軸0.98m、深さ0.90m(検出面の最大値)を測り、楕円形を呈す。北側にはテラスが付く。遺物は出土していない。

7SK105

長軸2.50m、短軸1.98m、深さ0.84m(検出面の最大値)を測り、楕円形を呈す。東側にテラスが付く。墳丘土層観察時に確認され、これらの土層群が地山成形後、墳丘構築前に造られたものであることが判明した(Fig.18)。埋土は大きく3層に分層でき、土層のほとんどに淡灰茶色土層が堆積し、人為的に埋められたものと考えられる。出土遺物は、甕形土器と思われる小片1点が埋土中から出土したにとどまる。

②出土遺物

7SK105出土土器 (Pla.50)

土師器

甕(a) 5cm足らずの小片で赤褐色を呈している。内面はナデ、外面は風化が著しく不明である。

(4) 土器棺墓

7ST010 (Fig.20~24, Pla.11)

①遺構

12号墳の南西側裾部に位置し、主軸をおおよそG.N-138°-Eに、また12号墳の主体部の主軸に対して頭位-272°30'-Eにとる呑み口式の土器棺である。上棺に口縁部を打ち割った甕、下棺に底部穿孔をした複合口縁壺を使用する。上棺は打ち割られた口縁部側を下棺に挿入するかたちで埋置される。埋置角度は、約10°であ

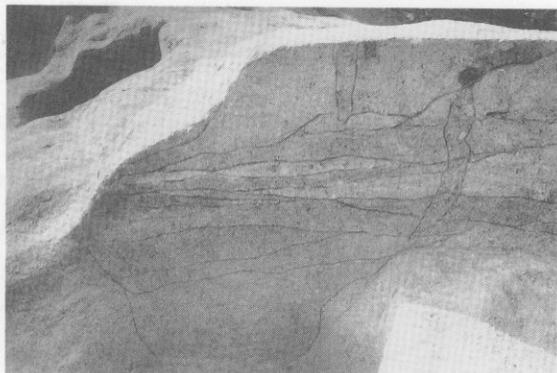


Fig. 18 墳丘土層と7SK105



Fig. 19 主体部北壁と7SK095



Fig. 20 7ST010埋土堆積状況

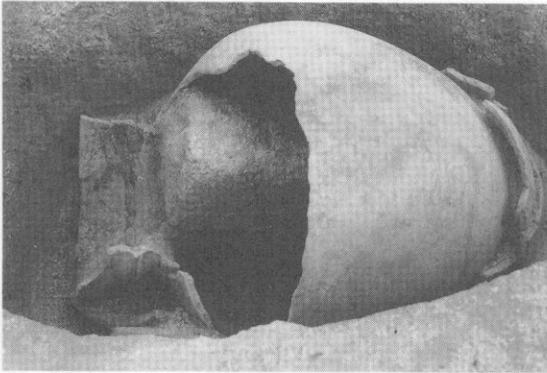


Fig. 21 棺内土堆積状況

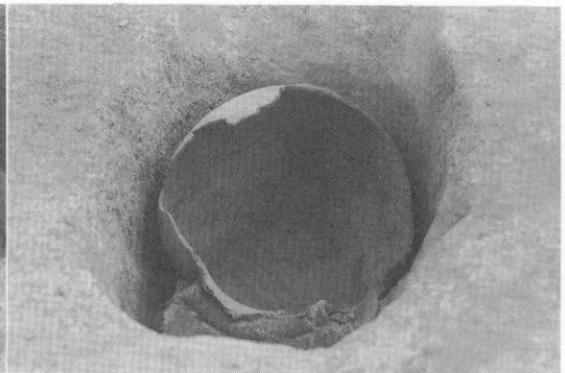


Fig. 22 下棺底部穿孔状況

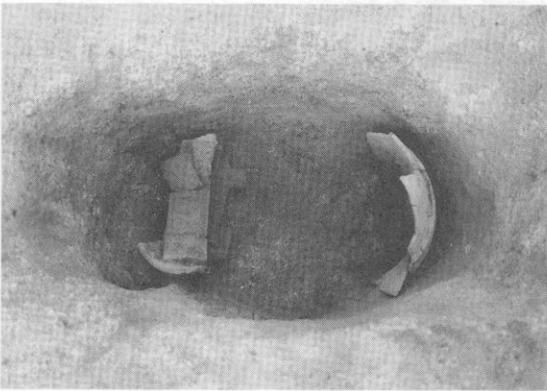


Fig. 23 棺除去後の状況

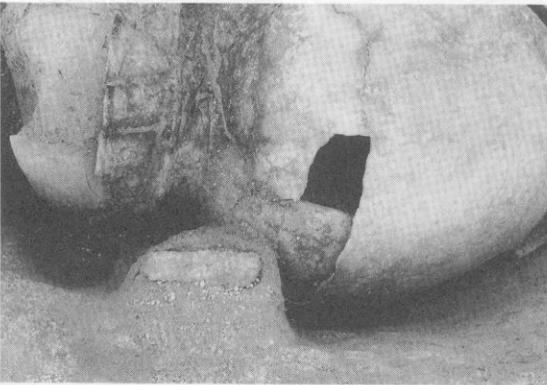


Fig. 25 鉄鎌出土状況

る。下棺の口縁部下に、これらとは別個体である複合口縁壺の口縁部を打ち割ったのち重ね、棺の傾きを整える役目を持たせて

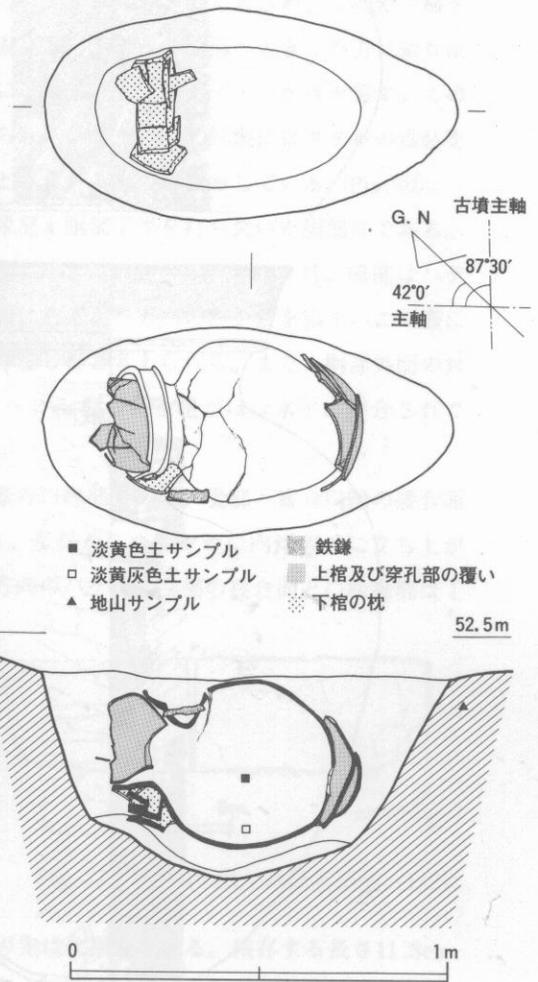


Fig. 24 7ST010 実測図 (1/20)

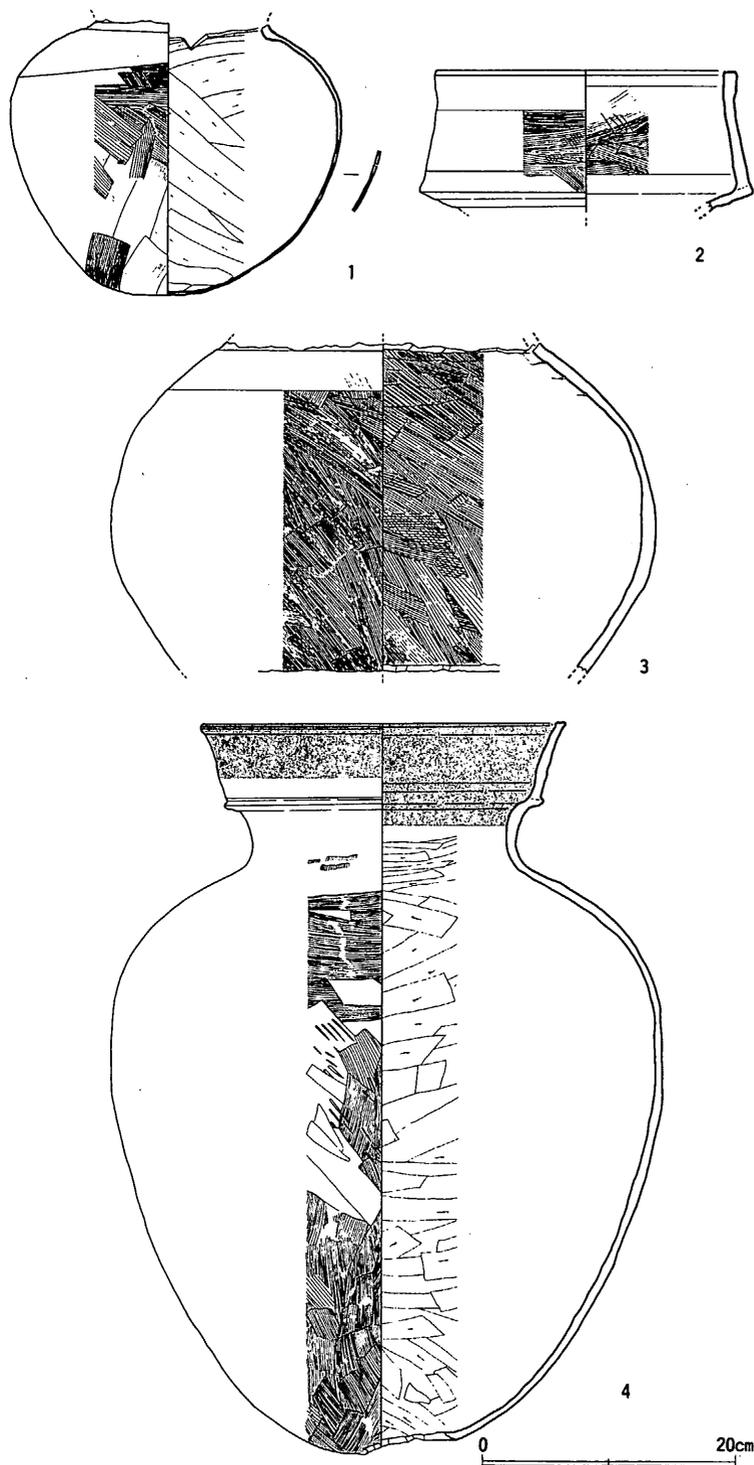


Fig. 26 7ST010 出土土器実測図 (1/6)

いる。下棺の底部穿孔部を覆うためにさらに別個体の壺の胴部片を被せる。墓壙は長さ1.10m、幅0.56mの楕円形プランを呈し、床面は下棺の胴部中央付近が低く、検出面から深さ約0.55mを測る。埋土は、淡茶白色土の単一層である。棺内に堆積する土は大きく上下2層に分層でき、上位に淡黄色土層、下位に淡黄灰色土層が観察された。人骨及び遺物は出土しなかった。

棺外では下棺の肩部上位から鉄鎌1点が出土した (Fig.25)。棺埋置最終段階での供献遺物と思われる。

②出土遺物 (Fig.26・27、Pla.40・41)

出土した遺物は、棺に使用された甕形土器1点と複合口縁壺1点、それと下棺の枕として使用された複合口縁壺片と穿孔部を覆うために使用された壺形土器片、そして鉄鎌1点である。

土師器

甕 (1) 上棺に使用された甕である。口縁部は打ち欠いてあり現存器高21.8cm、打ち欠いた部分での径約14cm、胴部最大径はやや上部にあり25.9cmを測る。底部は丸底を呈す。胴部外面下半は工具ナデののち縦方向のハケ目、上半は横方向のハケ目ののち右下がり方向のハケ目を施し、頸部から肩部にかけては横方向のナデ消しを行う。胴部内面はヘラケズリで器壁を薄く仕上げ、底部のみヘラケズリの後、指圧痕を残す。ヘラケズリによる砂粒の移動は頸部と胴部下半が反時計周りで、胴部上半は時計周りである。また、胴部の最大径を測る部分から下約3cmの所に焼成後外方から穿たれた穿孔が1ヶ所認められる。

壺 (2~4) 4は下棺に使用されていた複合口縁壺である。底部に焼成後外方から打ち欠かれた穿孔が認められる。現存器高58.8cm、口径29.1cm、最大径43.6cmを測る。口縁部は受部からゆるやかに外反しながら立ち上がり、端部は外方につまみ出し、丸くおさめ、1回転の横ナデによってきれいに処理されている。頸部はほぼ直立し、肩部から胴部へ大きく外方に張り出す。肩部外面は横方向のハケ目を施し、胴部外面には縦方向の工具ナデ・ハケ目を施す。この壺に使用されたハケ具は細かい目のもの一種に限られる。また、胴部外面にはタタキの痕跡を残し、口縁部内面と外面の一部に黒色を呈した漆とみられるものを塗布している (Pla.40)。

3は、下棺の底部穿孔部を覆っていた壺で、口縁部と胴部下半を打ち欠いた胴部片である。最大径はほぼ胴部中位にあり43.6cmを測る。胴部外面は右下がり方向のハケ目、肩部はハケ目ののち横方向のナデ消しを行う。胴部内面は全面に右下がり方向のハケ目を施す。この壺に使用したハケ具はハケ目の単位の違いから2種類存在したと考えられる。また、胴部外面の対面上に2ヶ所の黒斑が認められ、肩部内面には1~2cm幅の粘土紐がほぼ水平に接合されている状況が認められる。

2は、下棺の枕として使用されていた複合口縁壺の口縁部である。受部と複合口縁の接合面ではほとんどが剥離している。口径は24.0cmを測る。受部からゆるやかに内傾ぎみに立ち上がり、口縁端部では直立する。口縁部内外面とも横方向のハケ目、受部の接合面と口縁端部は1回転の横ナデによりきれいに処理され、その後口縁部上半には横ナデを施す。また、口唇部外面に1ヶ所黒斑が認められる。3と同一個体の可能性が考えられる。

鉄製品

鎌 (5) 棺外に供献されていた鉄鎌である。長方形の鉄板の一端を刃に対して鈍角に折り返し木柄装着部をつくる。木質は遺存していない。刃先は欠損している。残存する長さ11.3cm、身幅3.1cm、背の厚さ0.2cmを測る。

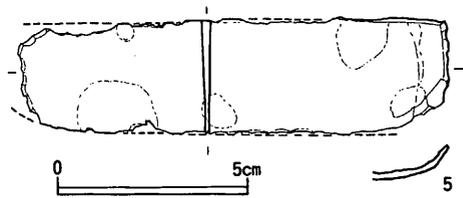


Fig. 27 7ST010 出土鉄鎌実測図 (1/2)

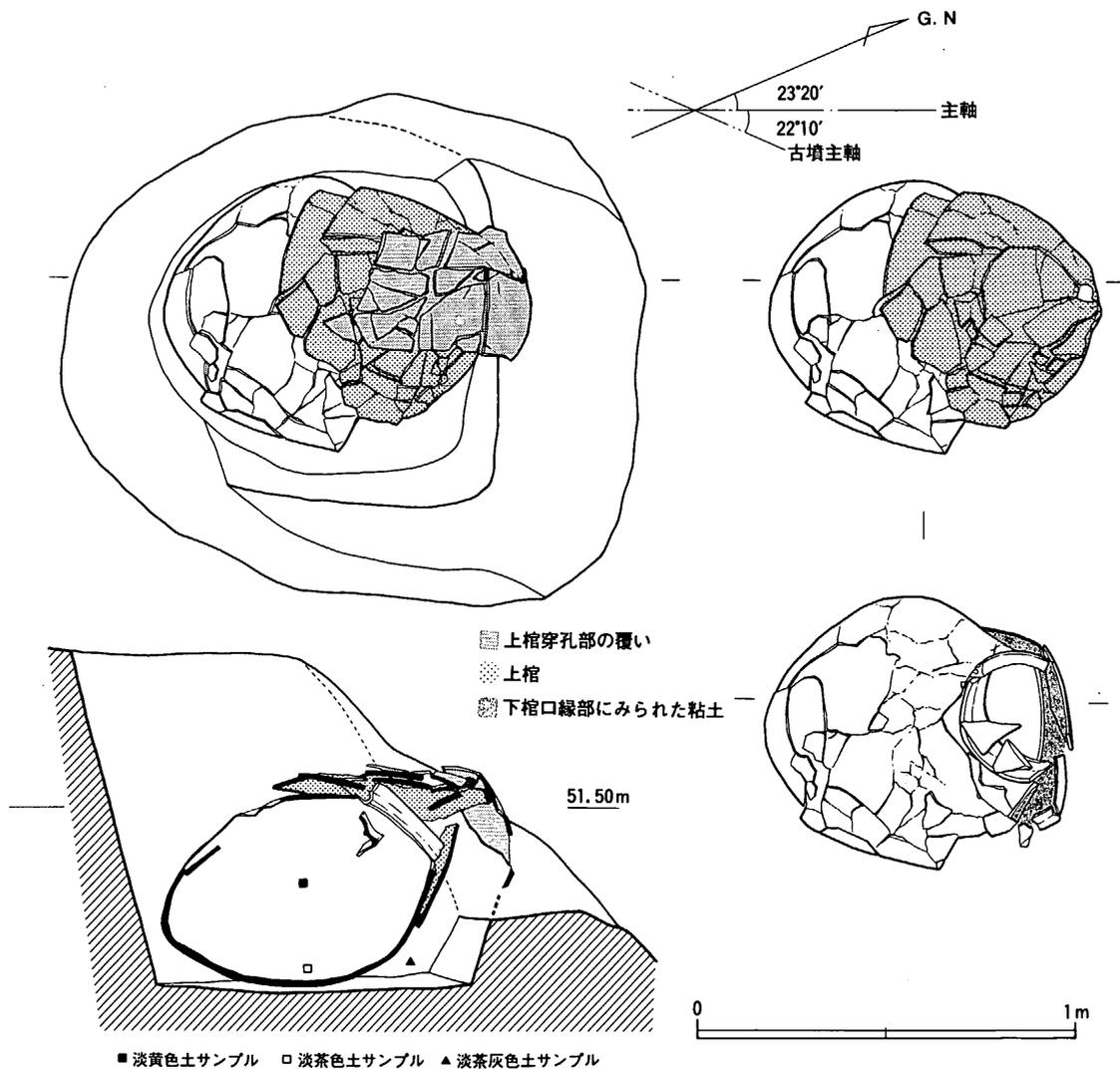


Fig. 28 7ST100 実測図 (1/20)

7ST100

①遺構 (Fig.28~31、Pla.12~14)

12号墳の墳丘東側斜面に埋置され、主軸をG.N-23°20'-Eに、また12号墳の主体部の主軸に対して頭位-337°50'-Eにとるかぶせ蓋式の土器棺である。上棺には胴部上半を打ち割られた底部穿孔をした壺、下棺に複合口縁壺を使用し、上棺の底部穿孔部を覆うために上棺と同一個体で別の部位の胴部片を被せる。下棺を据え合口部内面に粘土を詰めて目張りしたのち上棺をか

ぶせ埋置する。埋置角度は約22°である。墓壙は長さ1.40m、幅約1.25mの円形プランを呈し、検出面からの深さは約0.90mを測る。埋土は、大きく上下2層に分層でき、上位に淡茶黄色土層、下位に淡茶灰色土層が観察された (Fig.29)。棺を固定するために下層の淡茶灰色土層を棺の上面まで埋め、その後墓壙を淡茶黄色土でいっきに埋めたと考えられる。棺内に堆積した土は上位が淡黄色土層、下位が淡茶色土層の上下2層であり、人骨や棺以外の遺物は出土しなかった。

②出土遺物 (Fig.32・33、Pla.42)

出土遺物は、棺に使用された壺形土器2点である。

土師器

壺 (1・2) 1は上棺に使用されていた壺である。胴部上半は打ち欠いてあり、底部穿孔も認められる。これらは焼成後に外方から打ち欠いたものである。現存器高69.9cm、最大径はほぼ胴部中央にあり66.8cmを測る。調整は、底部外面では上向きにヘラケズリを行いその後全面に縦方向のハケ目を施す。内面も全面にハケ目を施し、その方向は反時計周りであるが、底部は下からななめ上へ、胴部から頸部にかけてはほぼ横方向である。その後、胴部最大径に縦方向のミガキを施す。この壺に使用したハケ具は1種類と思われる。また、胴部対面上に大きな黒斑が2ヶ所認められ、径2cm程度のものが底部穿孔部から上約30cmの所に数ヶ所確認できる。さらに胴部外面上半には粘土紐の痕跡が認められる。

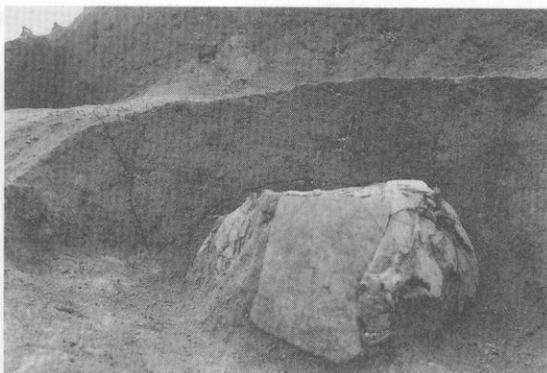


Fig. 29 7ST100墓壙土層観察状況

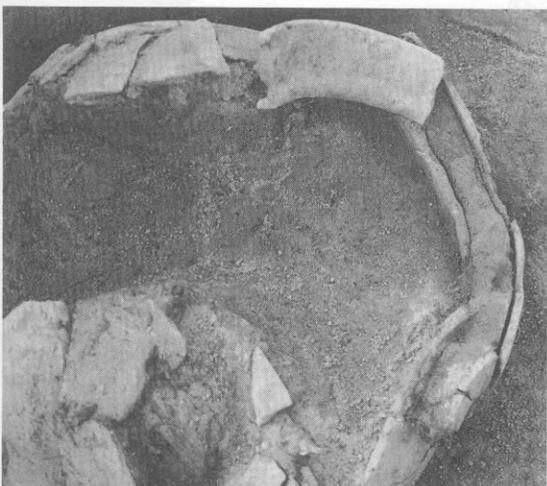


Fig. 30 下棺口縁部付近の粘土

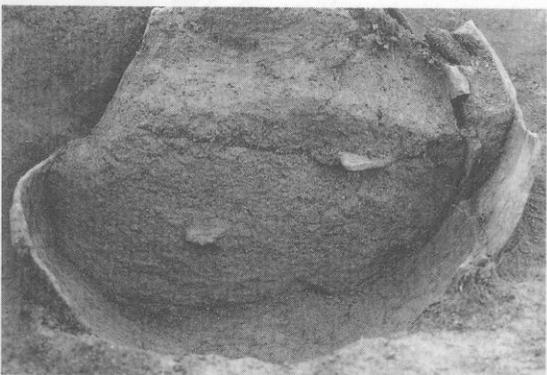


Fig. 31 下棺内埋土の堆積状況

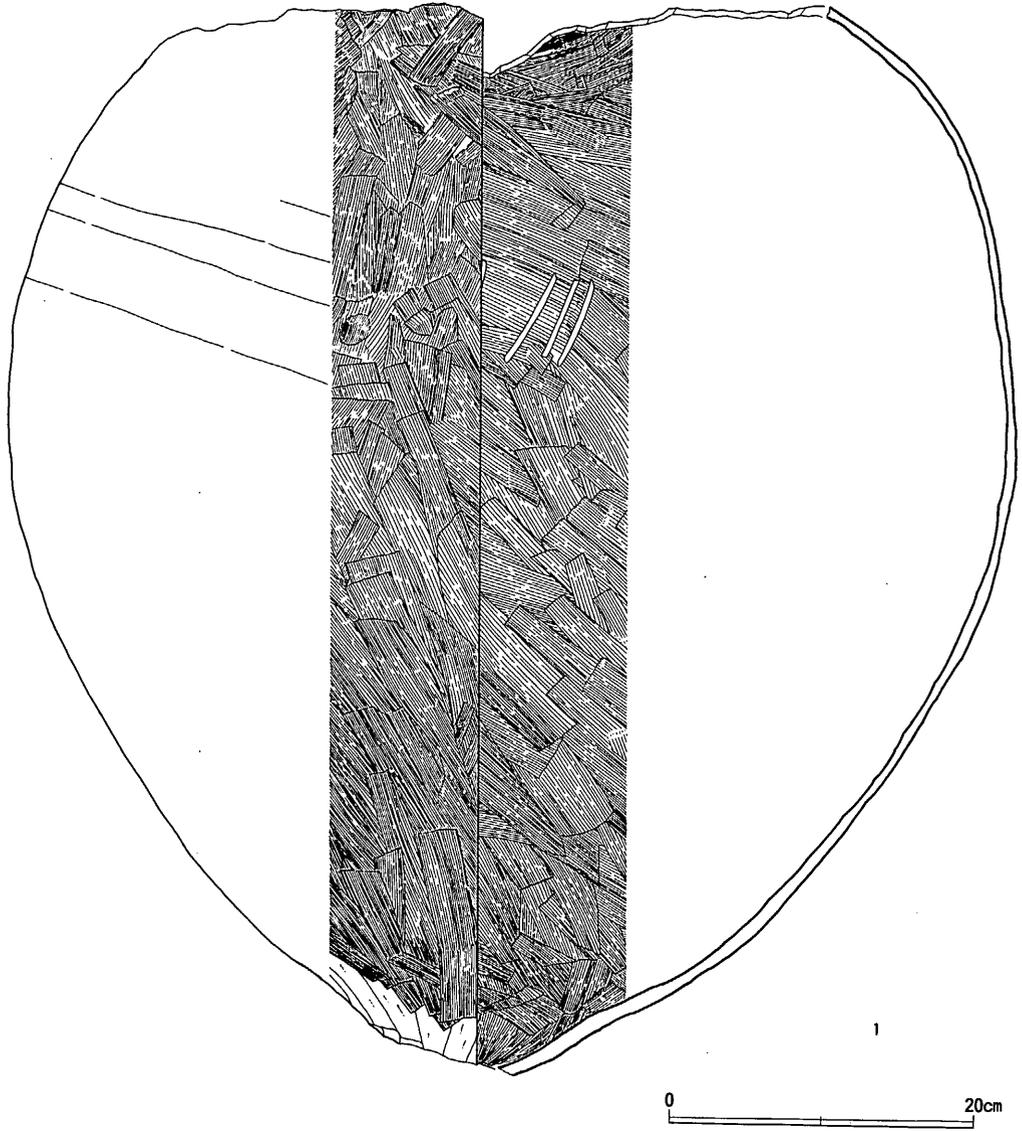


Fig. 32 7ST100上棺実測図 (1/5)

2は下棺に使用された複合口縁壺である。器高73.6cm、口径38.4cm、胴部最大径63.8cmを測る。口縁部は受部に複合口縁を接合しゆるやかに外湾させ、接合部に三角突帯を貼る。胴部最大径はほぼ中央にあり、底部は尖り底を呈す。口縁部は内外面とも横方向のナデを行い、端部、接合部は1回転の横ナデによりきれいに処理されている。頸部外面はハケ目のち横方向にナデ消し、その後横方向のハケ目を施す。この横方向のハケ目は胴部に施される右上がり方向のヘラケズリによって消されている。さらに、胴部においては再度ハケ目を行い、最終的に

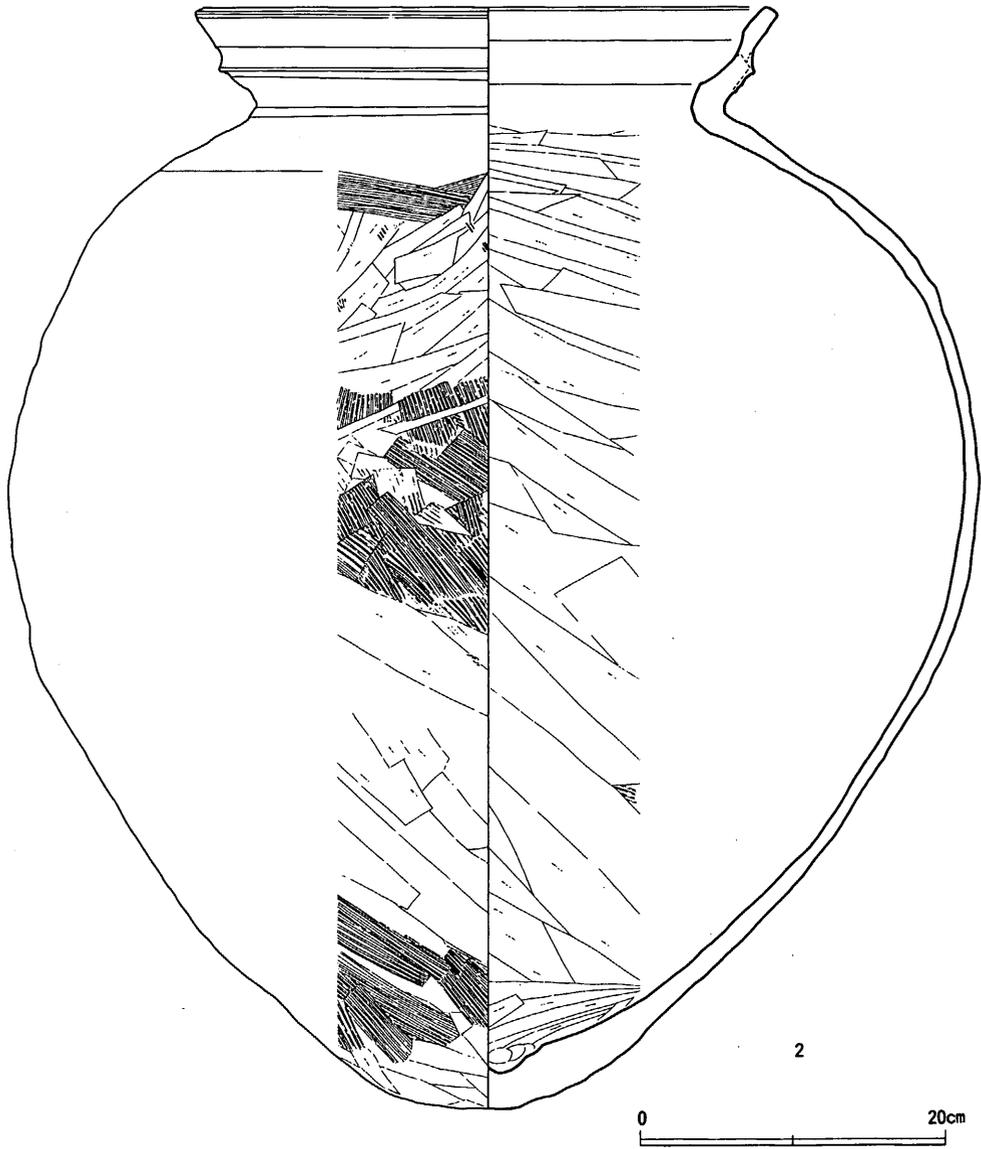


Fig. 33 7ST100 下棺実測図 (1/5)

はヘラケズリを行う。底部外面は上方向のヘラケズリを行ったのちハケ目を施す。このハケ目は、胴部最終調整であるヘラケズリによって消される。胴部内面はハケ目のち下から上に向かって反時計周りにヘラケズリを行い、ハケ目をほとんど消している。底部内面には指圧痕を残す。この壺に使用されたハケ具は、肩部外面の横ハケに使用したハケ具とその他のハケ目に使用したものの2種類とみられる。また、胴部外面の対面上に2ヶ所の黒斑が認められ、胴部

外面と口縁接合部内面には粘土紐の痕跡を確認することができる。

(5) 石蓋土墳墓
7ST020

①遺構 (Fig. 34・35、
Pla. 15)

12号墳の南西側に位置し、主軸をG.N-291°30'-Eに、また12号墳主体部主軸から頭位-216°-Eにとる。墓壙は二段に形成されたとと思われるが、上段は不明瞭である。現状で判明する上段の墓壙は長さ2.50m、幅1.53mで、長方形に近い隅丸長方形を呈し、その中央に上端部で長さ1.53m、幅0.58m、深さ0.44m

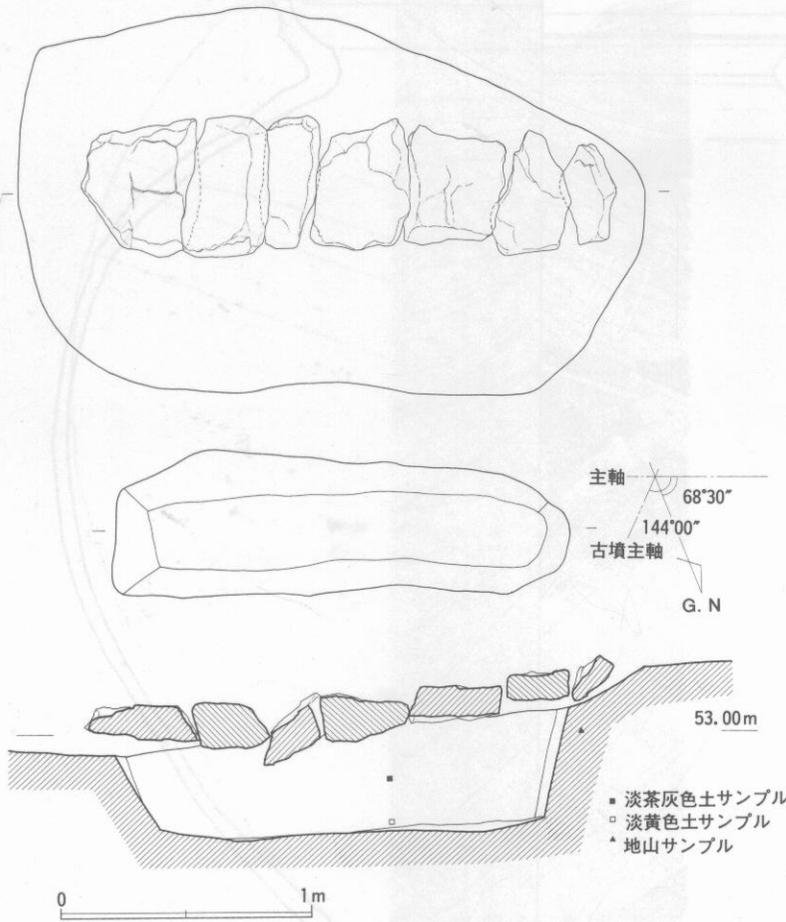


Fig. 34 7ST020 実測図 (1/30)

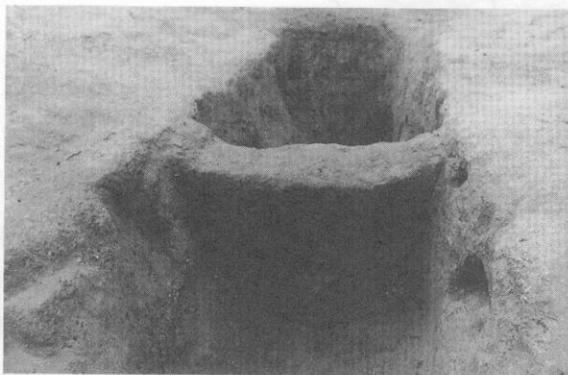


Fig. 35 7ST020土層観察状況

(すべて検出面の最大値)、底部で長さ1.58m、西側小口幅0.24m、東側小口幅0.23mを測る隅丸長方形の下段墓壙をつくる。蓋石は7枚で構成され、東端が最も大きく、西端が最も小さい。このことから頭位は東向きに推定される。また東より3個目の蓋石は墓壙内に陥没し、壙内には土が堆積していた。堆積土は上位が淡茶灰色土層、下位が淡黄色土層の2層に分層できる (Fig. 35)。人骨や遺物

は出土しなかった。

(6) 窯跡

古墳のある尾根の北斜面に1基とその灰原、南斜面に本体は失われているが灰原を検出した。本体の残るものを10号窯とし、灰原のみものを7SX030として報告する。

10号窯

①遺構 (Fig.36・37、Pla.16)

現存する全長は2.95mを測り、主軸をG.N. $-191^{\circ}30'-E$ にとる地下式無階無段登窯である。天井部は遺存していない。また床上げを行った形跡は確認されなかった。

焚き口 灰原に続く付近の平坦部がこれに該当すると考えられる。

燃焼部 焚き口から傾斜変換部まで続く平坦部がこれに該当するとみられるが、遺構の残存状況からは識別しにくい。床面の幅は0.8m。

焼成部 燃焼部との境から煙道まで、長さは約1.9m、幅は中央部でやや広くなり0.9mを測る。幅は煙道の近くまであまり変化せず、直前で急に狭くなり煙道とつながっている。傾斜角は約 17° である。

煙道部 床面の先端が僅かにくぼんでおりその規模から直径約0.2m以上、高さは0.8m以上

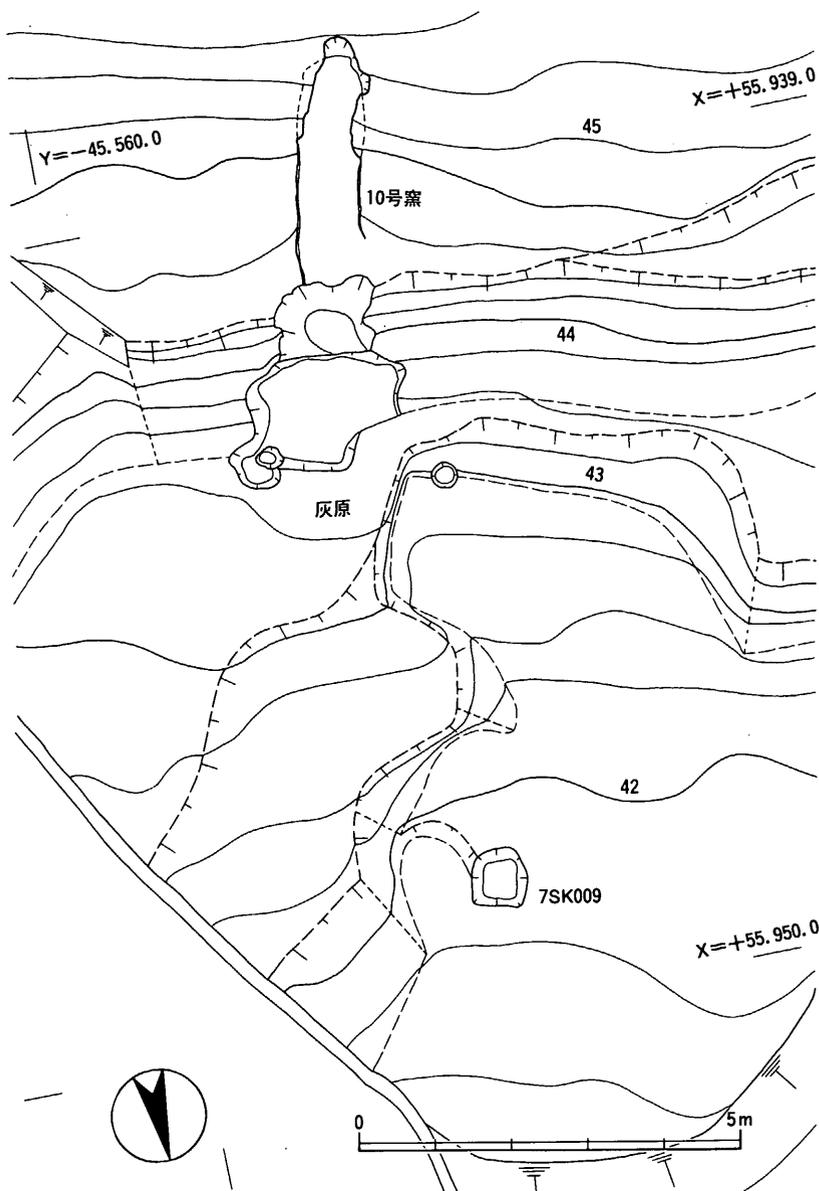


Fig. 36 10号窯周辺地形測量図 (1/100)

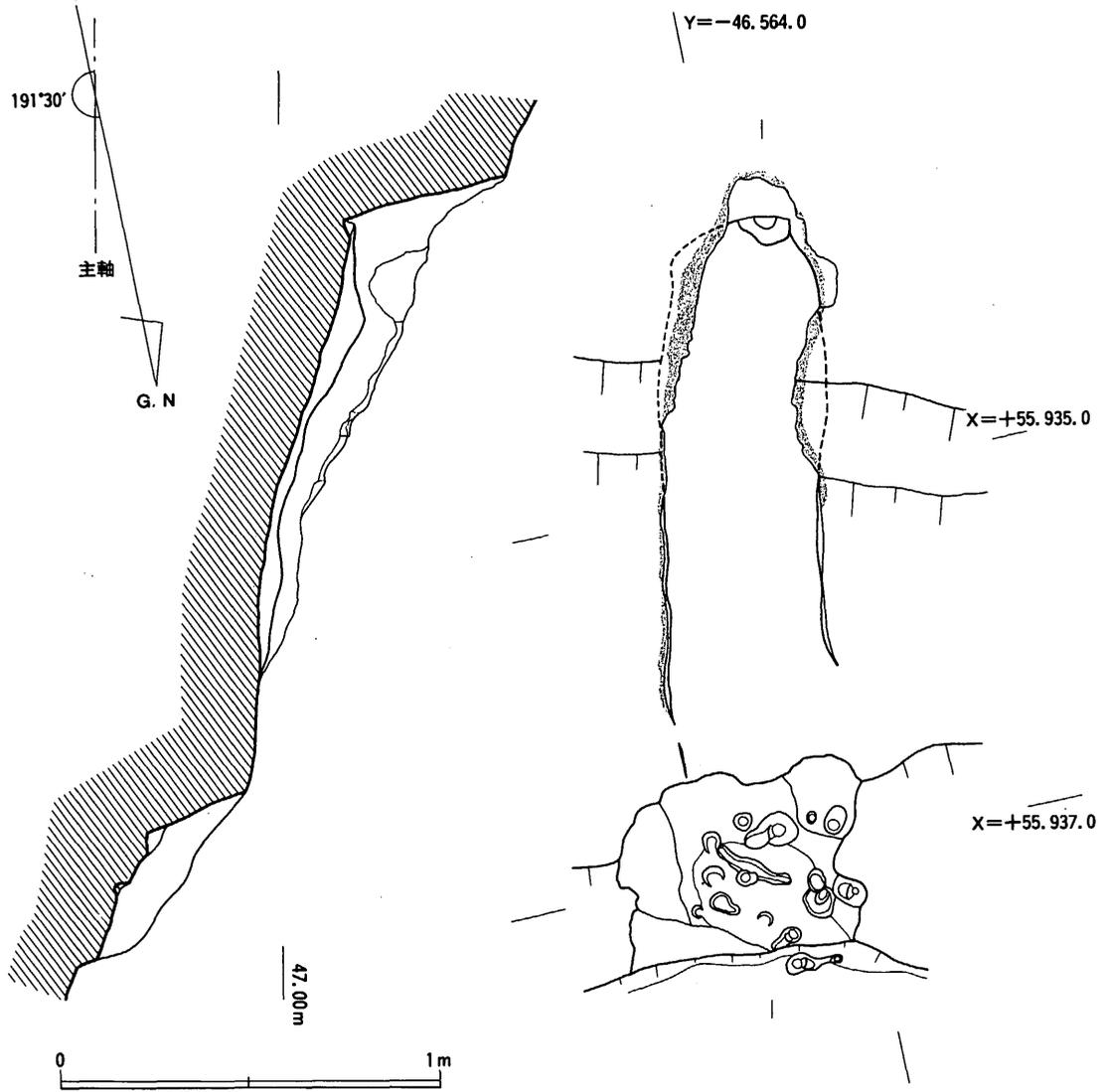


Fig. 37 10号窯実測図 (1/40)

あったものとみられる。

灰原 焼き口からすぐ段落ちになっており、そこから灰原は始まるものとみられる。調査段階では丘陵の裾部分まで灰層が広がっており、その長さ約10m、幅は約7mであったが、流出によるかなりの広がりがあるものと考えられる。窯に近い部分は黒色土を主体となすが、離れるにしたがって暗茶灰色土となる。前後関係は不明瞭である。焼き口近くにある段落ちの底部には小規模なピットが多数認められる。また灰原斜面下位には0.8m×0.75mの土塙

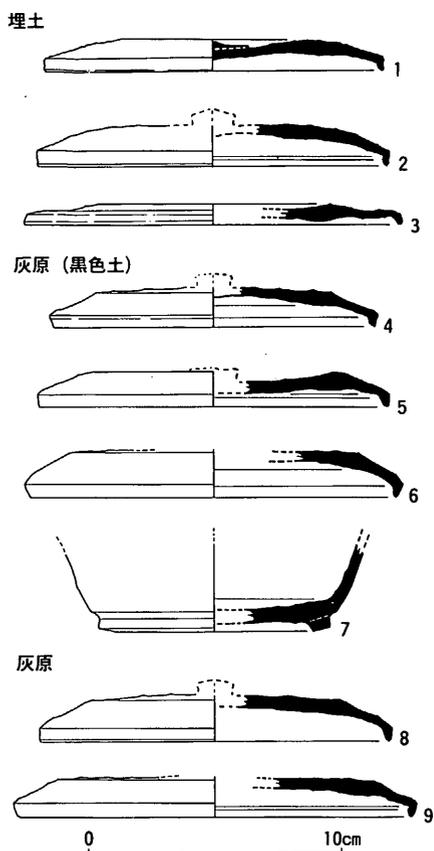


Fig. 38 10号窯及び灰原出土土器
実測図 (1/3)

灰原暗茶灰色土出土土器

須恵器

蓋 3 (8・9) 口径13.8・15.6cmで端部は明瞭な三角形を呈する。天井部の調整は8が回転ヘラケズリ、9がヘラ切りのままである。8は天井部中心近くにヨコナデが認められるところから、摘みがつくものと考えられる。

7SX030灰原

①遺構 (Fig.48)

古墳のある丘陵の南斜面下位に検出された灰原と考えられる遺構である。遺構の三方は過去の土取り行為によって失われており、当初の規模は明らかではない。また、これに伴う窯本体も失われている。灰原形成後その上面から墳墓が切り込んでおり、調査時点で一部遺物が混入してしまったが、その遺物については次の②出土遺物で補足する。

②出土遺物 (Fig.39、Pla.43・44)

(7SK009) がある。

出土遺物は、窯崩落の埋土中と灰原から若干出土しているが量は多くない。

②出土遺物 (Fig.38、Pla.43)

窯埋土中出土土器

須恵器

蓋 3 (1～3) 口径13.5～15.0cmで端部の形状は明瞭な三角形を呈する。天井部の調整は1がヨコナデ、2がヘラ切りのまま、3が回転ヘラケズリである。1には偏平なボタン状の摘みがつく。

灰原黒色土出土土器

須恵器

蓋 3 (4～6) 口径12.8～14.5cmで端部は明瞭な三角形を呈している。天井部の調整は4・5が回転ヘラケズリ、6がヘラ切りのままである。4・5は天井部中心近くにヨコナデが認められるところから、摘みがつくものと考えられる。

坏 c (7) やや外方に張りだす幅の広い高台を有する。底部と体部の境は高台貼り付け時のヨコナデによりやや不明瞭ながらも稜をなす。高台径9.3cm。

須恵器

蓋 1 (1) 口径15.0cmで口縁端部に返りを有する。天井部は回転ヘラケズリされる。

蓋 a 3 (2) 口径10.5cm、器高1.2cmを測る。口縁端部は小さいながら明瞭な三角形を呈する。天井部はヘラ切りのままである。

蓋 c 2 (3) 口径15.6cm、器高3.3cmで、口縁端部はやや長めの三角形を呈している。天井部は回転ヘラケズリされ、中央にやや高目の宝珠形をした摘みがつく。内面にヘラ記号がある。

蓋 c 3 (4~11) 口径13.5~14.5cmとやや小振りで、端部が小さめの三角形を呈するもの(4~7)と口径15.3~16.1cmとやや大きめで端部の形状が明瞭な三角形を呈するもの(8~

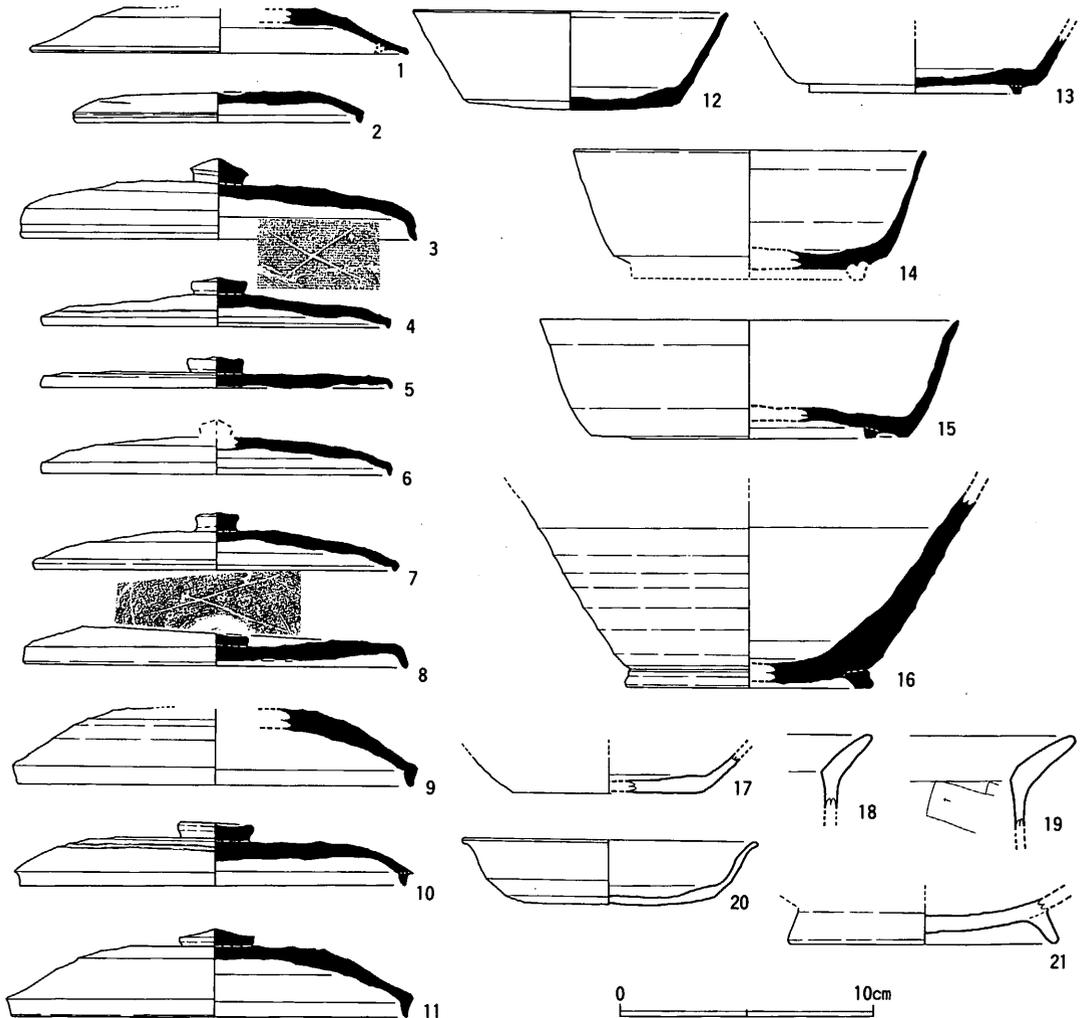


Fig. 39 7SX030 出土土器実測図 (1/3)

11)がある。天井部は前者がすべてヘラ切りのまま、後者がすべて回転ヘラケズリである。摘みは両者ともやや退化した宝珠形を呈するが、8はかなり偏平な形状を呈するとともに、天井部にヘラ記号がある。なお、9は7ST040埋土中からの出土であるが、墳墓への混入品と判断しここで報告した。

坏 a (12) 口径12.4cm、器高4.4cm、底径8.5cmを測る。底部外面はヘラ切り後簡単なナデを施す。

坏 c (13~15) 13は直径9.5cmで小さな逆台形状の断面形を呈した高台がつく。14は口径14.0cm。両者とも底部はヘラ切りのままである。15は口径15.5cmとやや大きめのもので、小さな逆台形状の断面形を呈した高台がつく。底部外面には板状圧痕がみられる。

壺 (16) 長頸壺の下半部の資料と考えられる。体部の多くを回転ヘラケズリにより調整し、やや外方に張り出す高台を有する。底部外面はヘラ切りの後粗いナデである。高台径9.8cm。

土師器

坏 a (20) 口径11.7cm、器高2.6cm、底径8.3cmを測る。口縁部は大きく外反し底部はヘラ切りで板状圧痕が残る。

坏 (17) 外面が風化し調整は不明瞭であるが、底部と体部の境が明瞭で底部が安定した平面状を呈することから、底部がヘラケズリされていたと推定される。回転ヘラミガキは認められないが、形状から坏 d の範疇で捉えられる可能性が高い。

椀 c (21) 外方に張り出す高台の径は10.7cmである。

甕 a (18・19) 口縁部付近はヨコナデ、体部外面はハケ目、内面はヘラケズリである。

土師器のうち17~19は年代的にみて7SX030に関連して考えることが可能であるが、20・21は上面から切り込む墳墓の供献土器が何らかの要因で遊離してしまった資料と考えられる。20は完形資料ながら出土地点直下及び近辺に墳墓は認められなかったため、どの墳墓に帰属していたか不明であるが、カットされた地点に未知の墳墓が存在していた可能性を示唆する資料ともいえよう。また、灰原中から鉄刀子の破片が出土したが、ここから離れた北尾根の7ST075に埋納された刀子片と接合した。遺物は7ST075の項で報告する。

(7) 火葬墓

7ST025

①遺構 (Fig.40、Pla.36)

標高71mの北尾根頂部に位置する。攪乱により原形を保っていないが、長径0.67m以上、短径0.55m、深さ0.03m

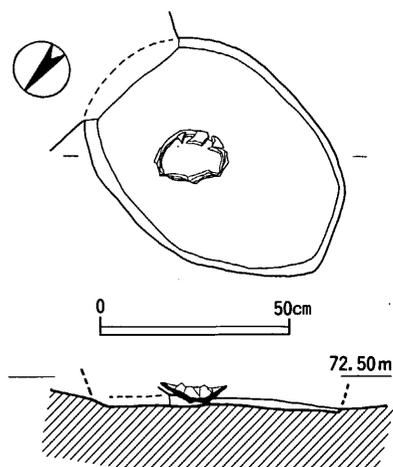


Fig. 40 7ST025 実測図 (1/20)

を測る楕円形プランの埋納穴に、須恵器壺が蔵骨容器とし正位で埋納されていた。壺の内部には、炭化物と骨片が詰まっていた。

②出土遺物 (Fig.41、Pla.46)

須恵器

壺 (1) 現存長17.4cm、底径11.9cmを測る。肩部から上を欠損するが、把手状のものが欠損した形跡があり双耳壺と考えられる。幅広い高台を貼付し、体部外面下半にヘラケズリを行い、体部外面上半と体部内面は横ナデを施す。底部はヘラ切り痕を残す。

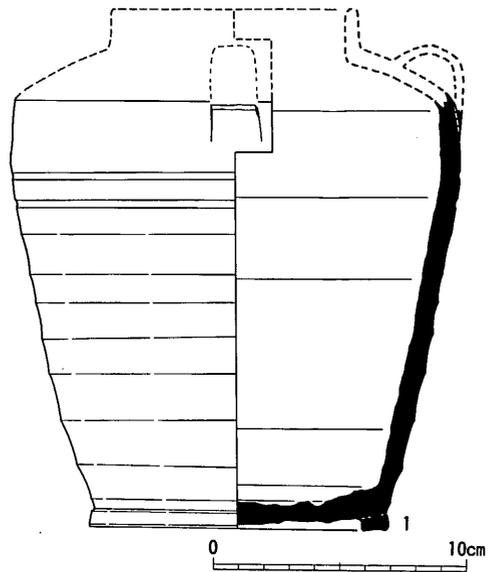


Fig. 41 7ST025 出土土器実測図 (1/3)

(8) 木棺墓・土壙墓

今回の調査では9基の墳墓が確認され、これらは大きく3群に分けられる。以下南尾根丘陵部 (7ST002・003・015)、南尾根南斜面下位 (7ST035・040・050)、北尾根南斜面中位 (7ST075・085・090) の順に報告する。

7ST002

①遺構 (Fig.42、Pla.17・18)

12号墳の東側裾部に位置し、周溝の堆積土を切って造られる。主軸をG.N-358°50'-Eをとり、墓壙の長さ2.35m、幅0.84m、深さ0.85mを測る長方形プランを呈した鉄釘を使用する木棺墓である。鉄釘は29本検出された。墓壙内に棺材は残存していなかったが、鉄釘の出土状況と土層観察 (木棺痕跡または棺のウラゴメの可能性をもつ堆積状況を示す) から推定長約1.75m、推定幅約0.44mの木棺を想定できる。供献遺物は、土壙内の北側に寄って須恵器の長頸壺1点、土師器杯1点、皿1点、中央やや南側に土師器杯1点が出土した。これらはすべて第一次埋没土である暗茶灰色土層から出土した。また、長頸壺の床面には炭が集中して検出された。これらのことから供献遺物はすべて、棺内に置かれていたと考えられる。これらの供献遺物から頭位は北向きと考えられる。

②出土遺物 (Fig.44・45、Pla.45・49、別表1・2)

土師器

杯 a (1・2) 口径12.3cm・12.2cm、器高3.6cmを測る。体部最下位をわずかに屈曲し、口縁部まで直線的に立ち上がる。体部内外面とも横ナデを施し、底部内面のみ不定方向のナデを行う。1は体部外面中位に径0.2cmで焼成前に外方から穿たれた穿孔が1ヶ所確認される。

皿 a (3) 口径12.4cm、器高2.4cmを測る。口縁部に向かって外反気味に立ち上がる体部

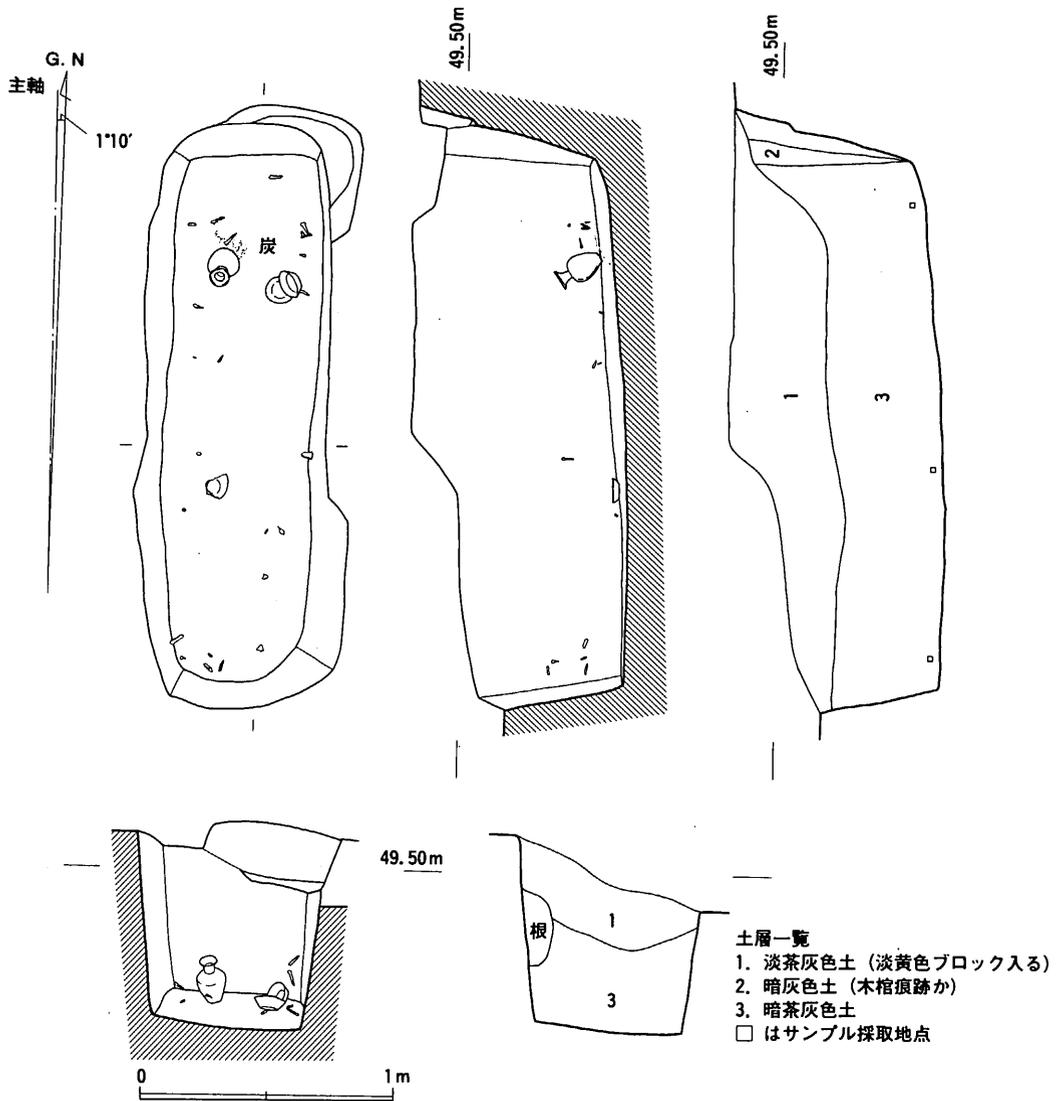


Fig. 42 7ST002 実測図 (1/30)

を有する。調整は内外面とも横ナデを施す。底部内面から口縁部内面にかけて大きな黒斑が1ヶ所確認される。

須恵器

長頸壺(4) 口径9.0cm、器高20.1cm、底径6.7cmを測る。肩部の張った体部に取り付く頸部は外反気味に立ち上がり、口縁部を強く屈曲させる。口縁端部は上下二方向につまみ出され、外面は平坦である。頸部は肩部の上面に接合されている。底部は上げ底を呈し、回転糸切りによって処理されている。体部外面および口縁部内外面とも横ナデを施す。

鉄製品

釘 (12~39) 多くの資料に木質が遺存している。木質を観察すると釘先端からおよそ2~3cmのあたりで木目が直交しており、棺材の厚さが窺える。

7ST003

① 遺構 (Fig.43、Pla.19・20)

12号墳がある南尾根丘陵部の調査区南端に位置し、尾根斜面で等高線に並行した方向で構築されている。主軸をG.N-32°10'-Eにとり、墓壙はやや不整形で長大な長方形プランを呈し、二段に形成されている。最大長3.85m、最大幅0.69m、上段の深さ0.25m、下段の長さ2.98m、深さ0.53mを測る。出土遺物は白磁碗1点、黒色土器碗1点、土師器坏4点、そして鉄釘2点である。

この内、鉄釘1点は

墓壙周辺からの出土である。他はすべて墓壙内に浮いた状態で出土した。これらの遺物は暗茶

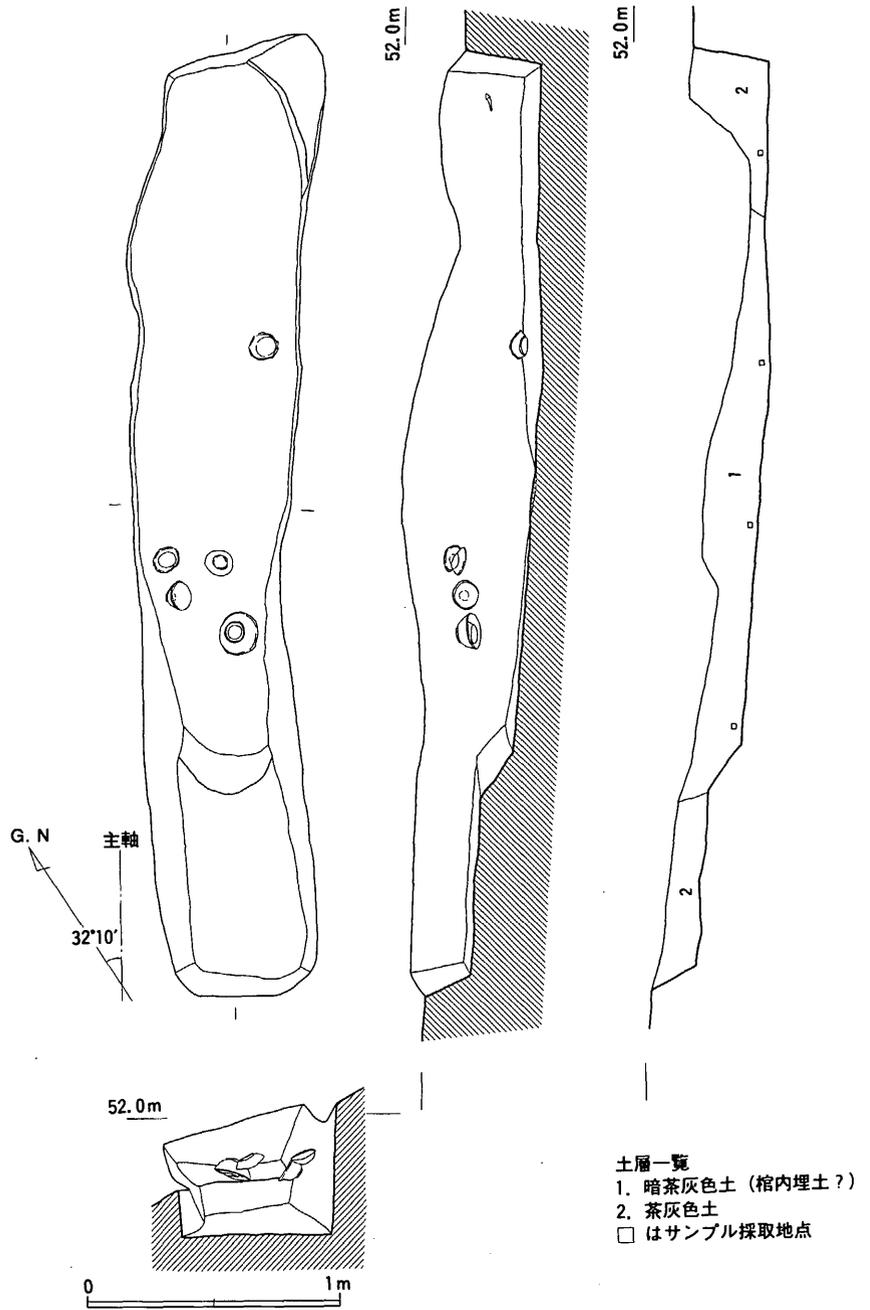


Fig. 43 7ST003 実測図 (1/30)

灰色土層からの出土である。出土土器はすべて棺上の供献土器が棺崩壊に伴い転落したものと考えられる。土層観察と供献土器の出土状況、鉄釘の出土から頭位を西向きにする木棺墓もしくは木囲の土壙墓で、土層図の第2層である茶灰色土層は棺を固定するためのウラゴメと考える。また棺の存在を土層図から推定した場合、長さは約2.40mに復原される。

②出土遺物 (Fig.44・45、Pla.45・49、別表1・2)

土師器

坏 a (5~8) 口径が11.2cm~11.5cm、器高が2.4cm~2.7cmを測るもの(5~7)と口径12.6cm、器高3.4cmを測るやや大きめのもの(8)がある。5~7は体部最下位からゆるやかに屈曲し、そのまま口縁部まで立ち上がる。

黒色土器

碗 c (10) B類。口径15.1cm、器高5.9cm、底径8.5cmを測る。内外面ともに黒化が不十分である。体部は丸みを持ちそのまま口縁部まで立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。体

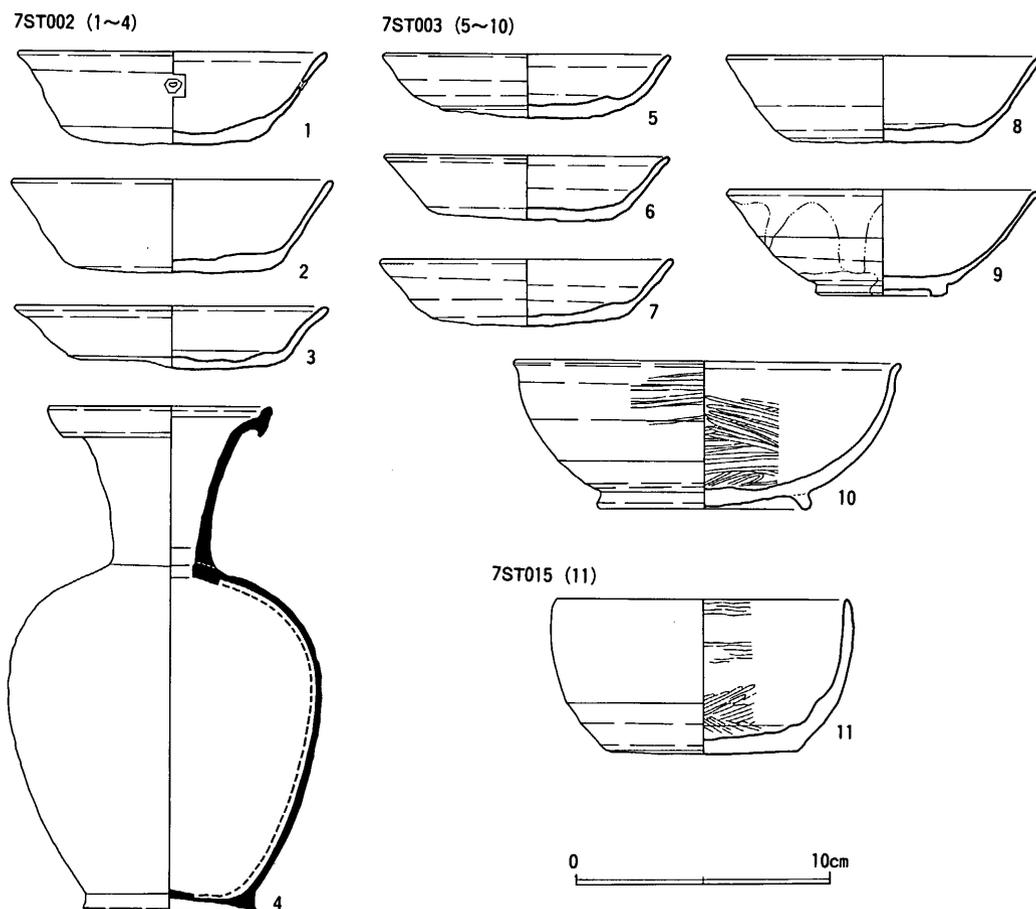


Fig. 44 7ST002・003・015 出土土器実測図 (1/3)

7ST002 (12~39)

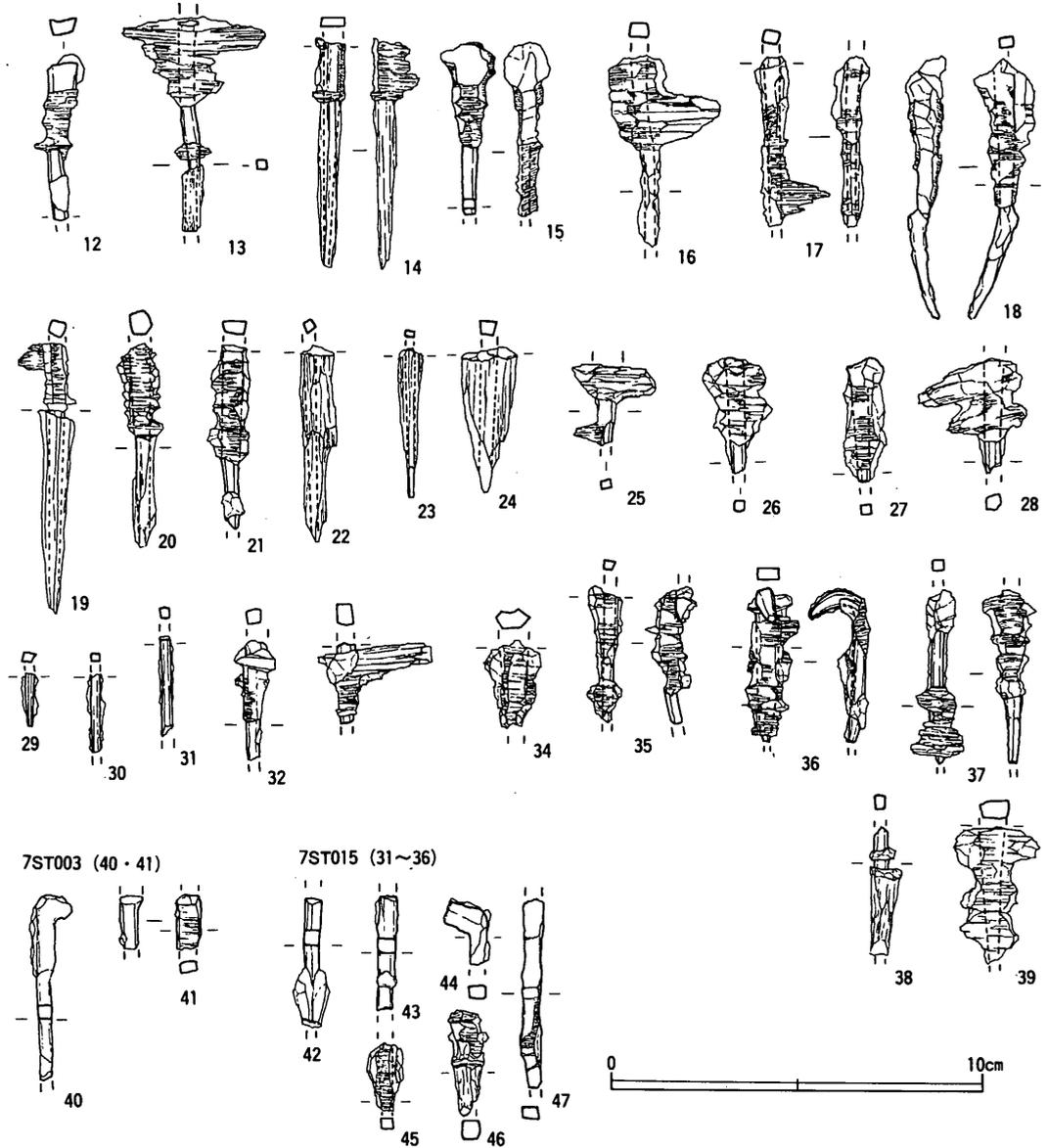


Fig. 45 7ST002・003・015 出土鉄釘実測図 (1/2)

部下半よりやや下に回転ヘラケズリを施し、内外面に丁寧なミガキcを施す。外面は器面が摩耗しているため不明瞭であるが、ヘラミガキは内面は3分割するように施されている。底部はヘラ切り未調整のまま高台を接合する。

白磁

椀 (9) I類。口径12.0cm、器高4.2cm、底径5.2cmを測る。胎土は白色のよく精選され

た素地を使い、白濁色の釉を施すがわずかに気泡が含まれる。底部外面は露胎で、体部外面には釉ムラが、口縁部内面には釉ダレが確認できる。化粧土は確認できない。

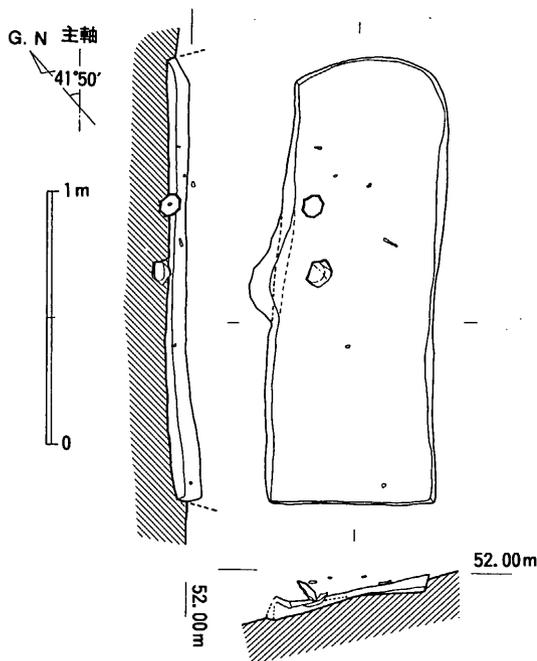


Fig. 46 7ST015 実測図 (1/30)

鉄製品

釘 (40・41) 2本とも頭部を横からたたいて鍵状にしている。木質は残存していない。

7ST015

①遺構 (Fig.46、Pla.21)

12号墳の西側裾部に位置する。主軸をG.N-41°50'-Eにとる墓壇は、長さ1.76m、幅0.67m、深さ0.09mを測り隅丸長方形プランを呈す。墓壇北側の壁は崩壊によりほとんど残っておらず、平面プランの歪みもこれによるものと考えられる。出土遺物は青銅製八稜鏡1面、黒色土器鉢1点と鉄釘6本である。ほとんど原位置を保っていないと思われるが、鉄釘の出土から木棺墓と考えている。八稜鏡は鏡面を表にしてやや傾き、黒色土器鉢は口縁部を北側に傾けて出土した。

②出土遺物 (Fig.44・45・47、Pla.46・49、別表1・2、巻頭図版1)

黒色土器

鉢 (11) A類。口径11.5cm、器高6.2cm、底径7.4cmを測る。底部は平底を呈し、体部と底部の境目は明瞭である。体部は口縁部まで内湾気味に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。内面にはミガキを施し、体部外面中位以下は回転ヘラケズリである。

青銅製品

八稜鏡 (48) 長径11.5cm、短径10.0cm、外縁厚0.5cmを測る。外縁の形態は八稜を呈し、その断面形は低い隆起をもつ。外区と内区の境には、圏線状のかるい段をもつ。内区中央の鈕は直径1.5cm、高さ0.85cmの素縁鈕で、紐穴は長径線に向く。鏡面は僅かに反る。踏み返しのため文様は不明瞭であるが、長岡京左京第53次調査出土の四仙騎獣八稜鏡と同系列（同形式）の鏡と考えられる。以下、この長岡京鏡報告文を参考にして、確認できることを述べる。鏡背の文様は、外区には稜ごとに縁を上方とした双葉の花枝と、同じく縁を上方とした蝶と思われる昆虫が横向きに交互に配されていると思われる。内区には同じく縁を上方とし、鈕をさんで動物が一对、鳥が一对それぞれ神仙を乗せた姿で配されているとみられる。動物は口を開け細い尾をもつもの (Fig.47-A) と、頭部に角状の突起をもち太い尾を高く上げたもの

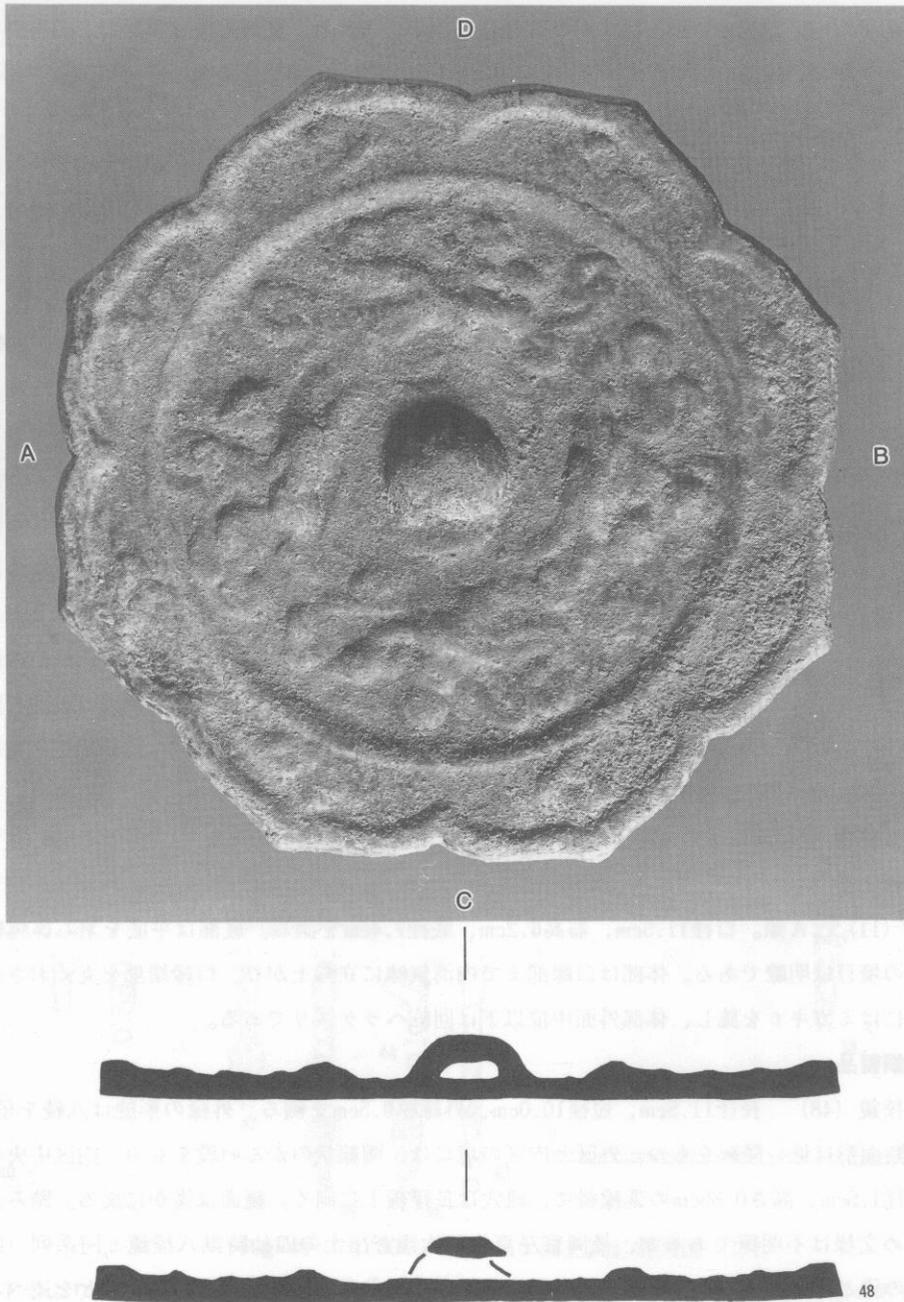


Fig. 47 八稜鏡実測及び写真 (1/1)

(Fig.47-B) とがあると思われる。鳥はどちらも長首であるが、その形態に若干の差異を認めることができる。一方は首が長く嘴の上の部分に飾りをもち、尾は後方に伸びる足の手前で短く終る (Fig.47-C)。これに対してもう一方の鳥は首があまり長くなく、頭上に鶏冠状の

飾りをもつ。尾は両足よりも後方まで伸び、幅も広く渦巻いている (Fig.47-D)。以上の動物はいずれも右横向きに配され、各動物の間には三葉形の飛雲文が右から左へと流れる。以上のことからこれらの動物は写真上から時計周りに鶴、麒麟、鳳凰、獅子と思われる。

鉄製品

釘 (42~47) すべて破損しているが、一部に木質を残すものがある。

7ST035

①遺構 (Fig.49、Pla. 23・24)

主軸をG.N-99° 50'-Eにとり、鉄釘を使用した木棺墓である。墓壇は長さ2.38m、幅0.90m、深さ0.74m (最大値)を測り、長方形プランを呈する。出土遺物は土師器杯6点と、鉄釘26本である。鉄釘

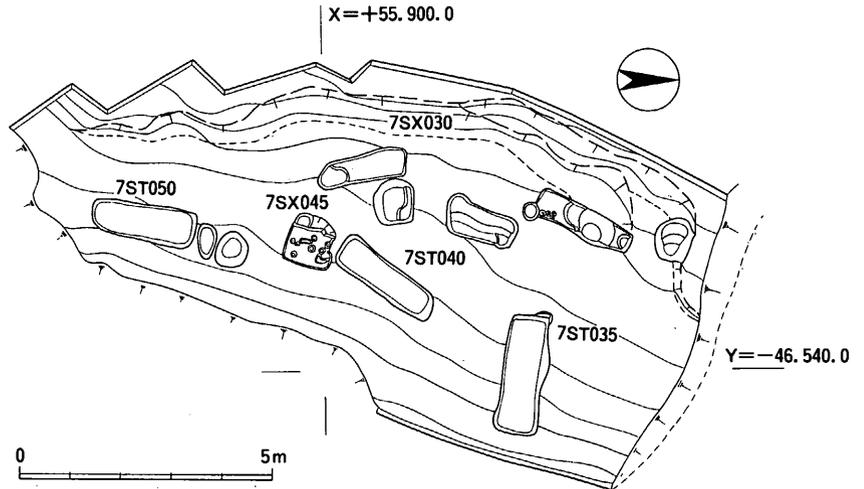


Fig. 48 南尾根南裾部墳墓群及び7SX030遺構配置図 (1/150)

の出土状況から推定長1.69m、幅0.36mの木棺を復原することができる。また、土層観察からも棺のウラゴメと考える土層を確認している。出土した土師器杯はその出土状況から棺上の供献遺物と考えられ、棺が崩落した折りにウラゴメの土と共に大半が棺内に流れ込み、棺内外に転落したと考えられる。また、土層観察により西側から棺崩落が始まったことが分かる。棺内の堆積土は第一次堆積土を除き、白茶色小ブロック (地山ブロック) が混在しており、木棺埋置後、墓壇を埋め戻した土ではないかと考えている。

②出土遺物 (Fig.51・52、Pla.46・49、別表1・2)

土師器

杯a (1~5) 口径10.9cm~11.4cm、器高2.5cm~2.9cmを測る。器表面の剥離がひどいため調整は不明瞭である。体部最下位からゆるやかに屈曲し、そのまま口縁部まで立ち上がる。なお、出土した6点のうち1点は破片で図化していない。

鉄製品

鉄釘 (18~43) 大半が破損しているが一部に木質が残っており、木質の変化位置から棺材の厚さは2cm内外であったことがわかる。

7ST040

①遺構 (Fig.50、Pla.25・26)

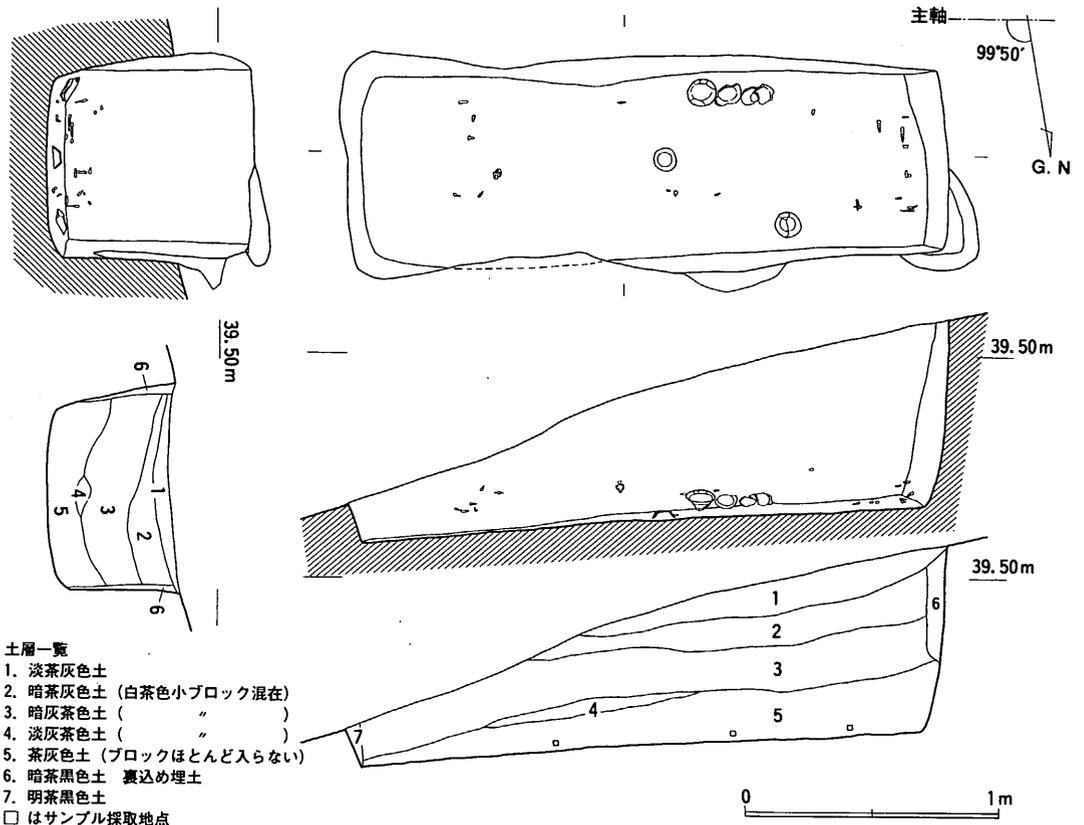


Fig. 49 7ST030 実測図 (1/30)

主軸をG.N-37°40'-Eにとり、鉄釘を使用した木棺墓である。墓壙は長さ2.20m、幅0.65m、深さ0.53mを測り、長方形プランを呈する。平面プラン検出時に木棺痕跡を思わせる長方形プランが確認された (Pla.26) が、土層観察では自然堆積の状況を示しており、最終埋没土層の平面プランと解釈した。出土遺物は土師器環2点、椀2点、須恵器蓋片1点、そして鉄釘28本 (そのうち2本は淡茶色土層出土) である。出土土器はすべて西側から墓壙中央に向かって傾き、口縁部を墓壙内側に向けて出土した。須恵器蓋片は7SX030からの混入品であるが他は棺上の供献土器である。木棺崩壊により棺内に転落したと考えられる。また、土層観察により棺のウラゴメと考えられる土層が確認され、さらに鉄釘の出土状況から推定して木棺は長さ約1.80m、幅約0.50mに復原される。また、釘の出土位置が棺西側小口部で25cm程度の間をあけて二列になっていることから、棺内に間仕切り板を立て、推定長0.25m、推定幅0.50mの別空間を設けていたことが分かった。

②出土遺物 (Fig.51・52、Pla.46・49、別表1・2)

土師器

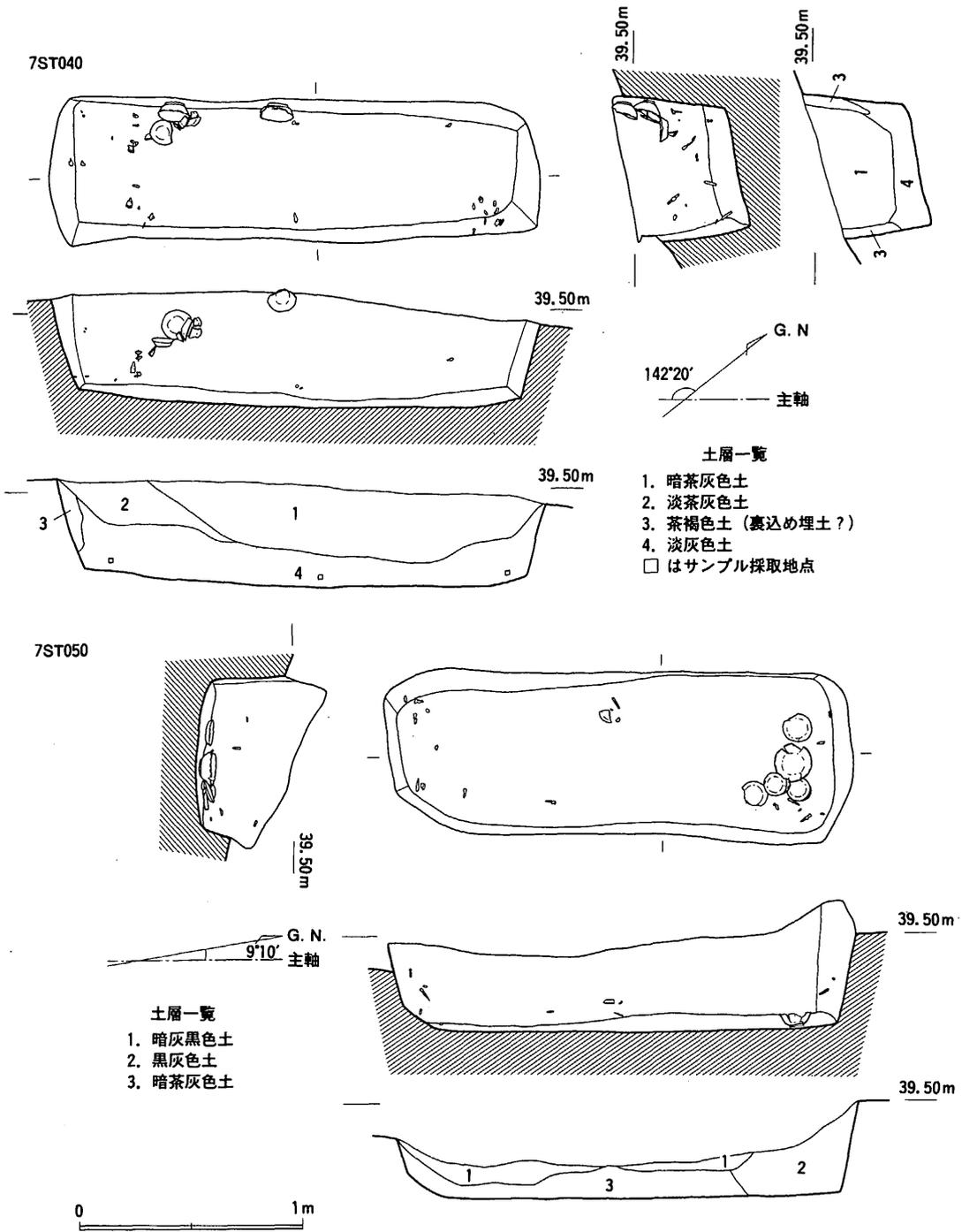


Fig. 50 7ST040・050 実測

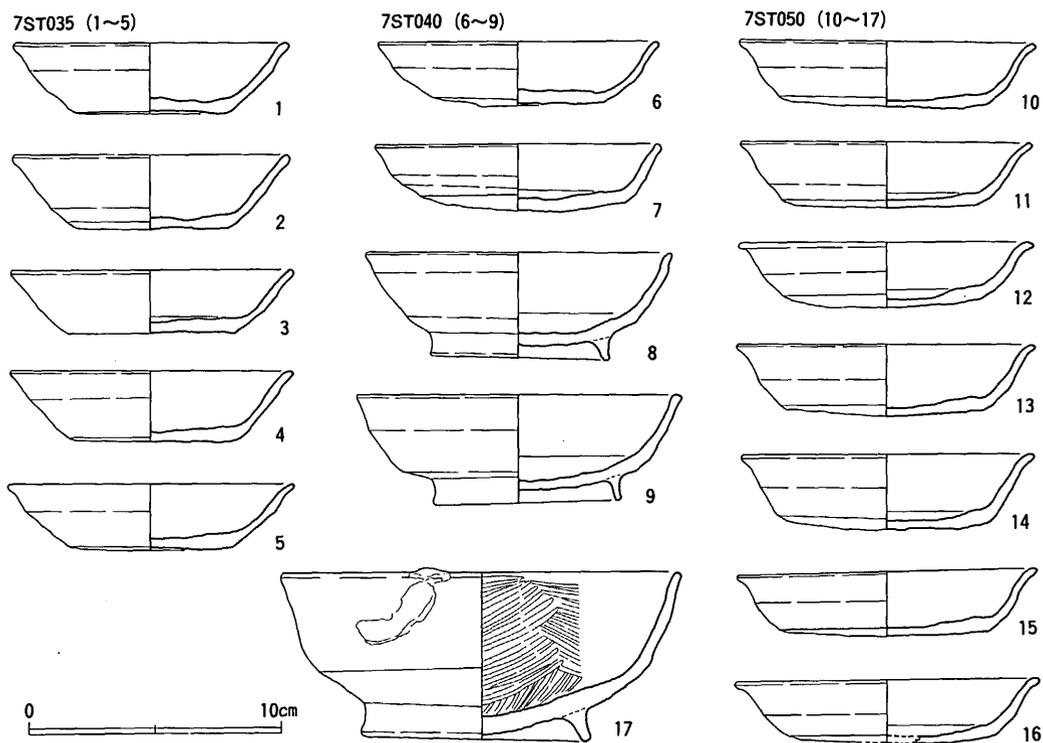


Fig. 51 7ST035・040・050 出土土器実測図 (1/3)

碗 a (6・7) 口径11.1cm・11.3cm、器高2.4cm・2.7cmを測る。体部最下位からゆるやかに屈曲し、そのまま口縁部まで立ち上がる。

碗 c (8・9) 口径12.6cm・12.8cm、器高4.1cm・4.3cm、底径7.0cm・7.4cmを測る。体部は丸みを帯び、直立気味の低い高台を貼り付ける。

鉄製品

鉄釘 (44~71) 破片化した資料が多いが、木質がよく遺存しており棺材の厚さが2.5~3cm程度あったことが知られる。また、頭部を横からたたいて鍵状にしているものがある。

7ST050

①遺構 (Fig.50、Pla.27)

主軸をG.N-9°10'-Eにとる鉄釘を使用した木棺墓である。墓壙は長さ2.08m、幅0.72m、深さ0.40mを測り、平面は長方形を呈す。出土遺物は黒色土器碗1点、土師器碗7点、鉄釘24本(そのうち2本は暗灰色土中出土)である。出土状況及び土層観察によりこれらの土器は棺崩壊に伴い棺上から転落したものとみられる。供献土器の出土位置から、頭位は北向きと考えられる。また鉄釘の出土位置から推定長1.80m、推定幅0.40m程度の木棺を復原することができる。

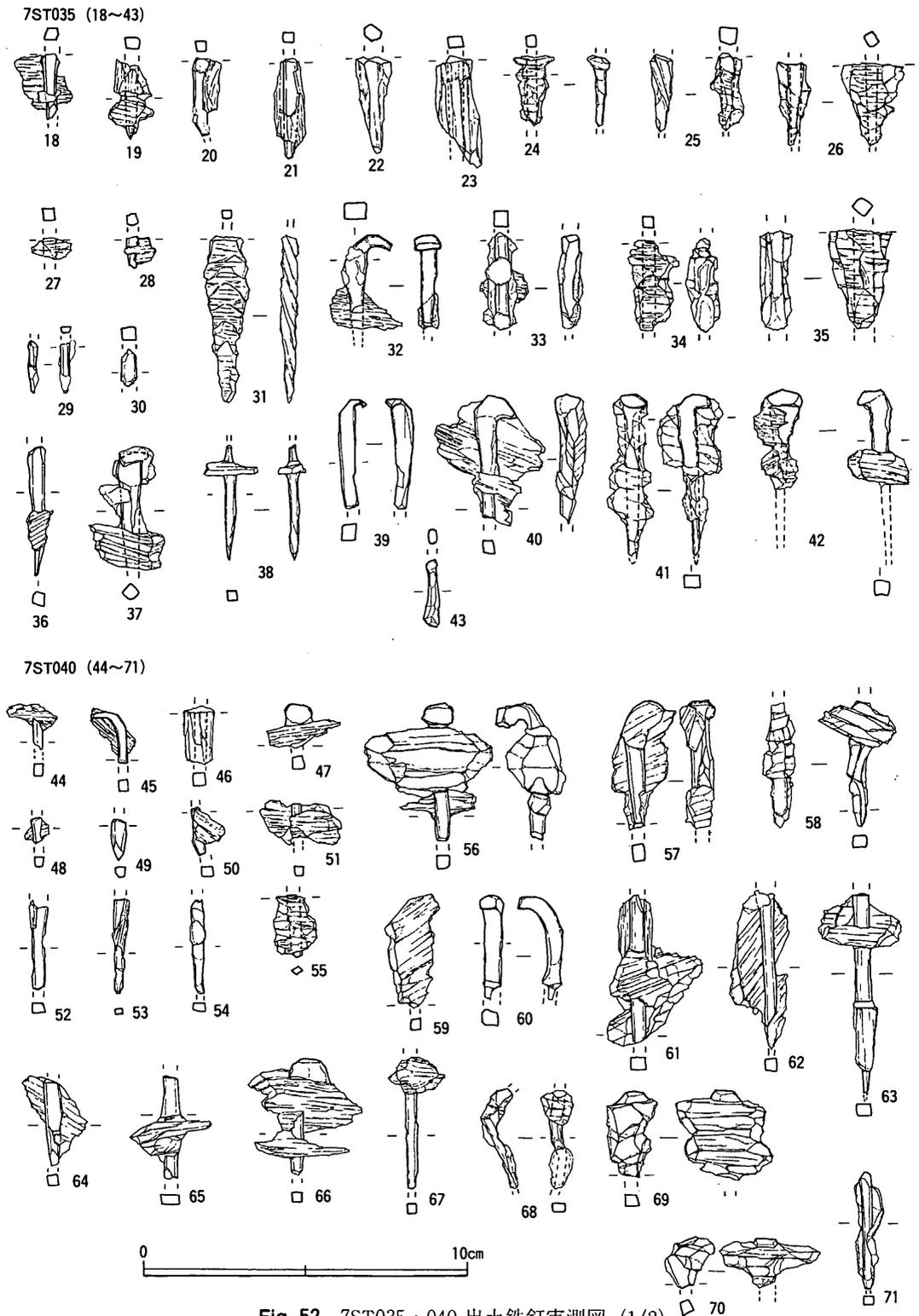


Fig. 52 7ST035・040 出土鉄釘実測図 (1/2)

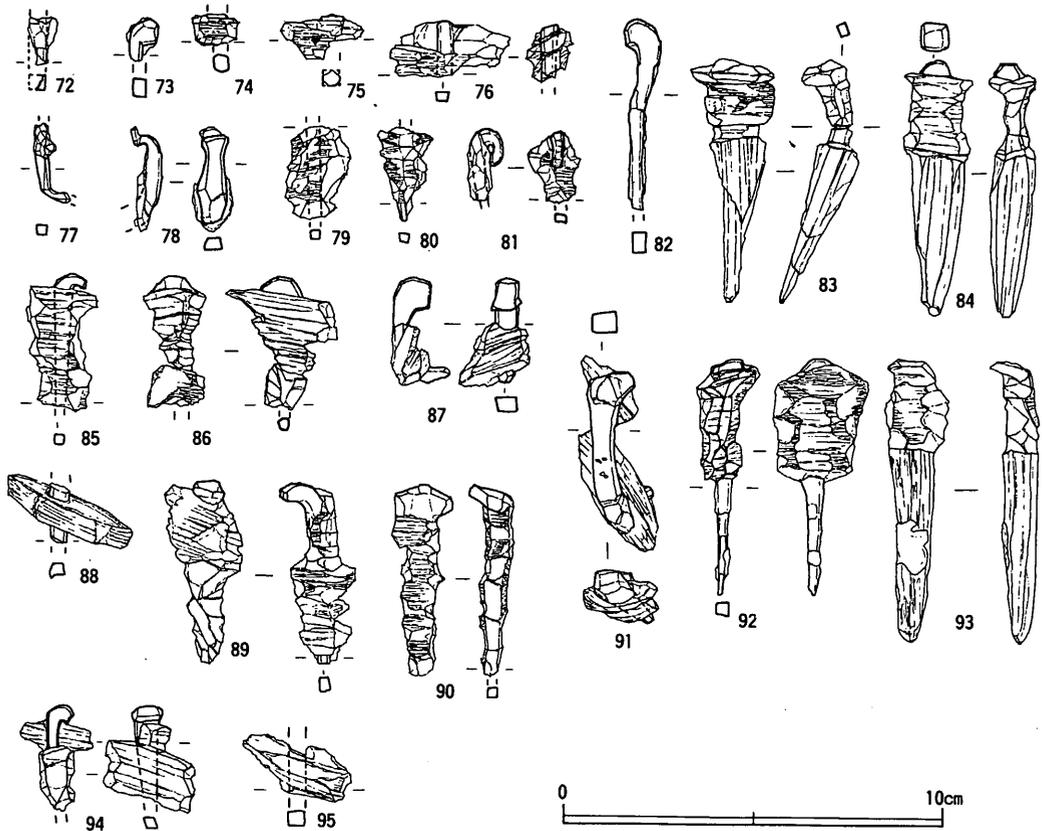


Fig. 53 7ST050 出土鉄釘実測図 (1/2)

②出土遺物 (Fig.51・53、Pla.47・49、別表1・2)

土師器

坏a (10~16) 口径11.4cm~12.0cm、器高2.5cm~2.9cmを測る。体部最下位からゆるやかに屈曲し、そのまま口縁部まで立ち上がる。口縁端部はわずかに外反する。

黒色土器

椀c (17) A類。口径15.7cm、器高6.6cm、底径8.8cmを測る。底部から体部へゆるやかに立ち上がり、体部中央から直線ぎみに立ち上がる。底部は丸く押し出され、やや外方に開く高台を貼り付ける。口縁端部は丁寧に横ナデで処理され、体部外面下半は工具ナデを施す。内面はミガキcが見込み部分で平行に、体部では横方向に施される。また、口縁部に1ヶ所、粘土の付け足し部分が確認される。製作過程でひび割れた所を補修したものと考えられる。

鉄製品

釘 (72~95) 完存する資料は少なく83・84・92・93の4点であるが、大半に木質が残存し

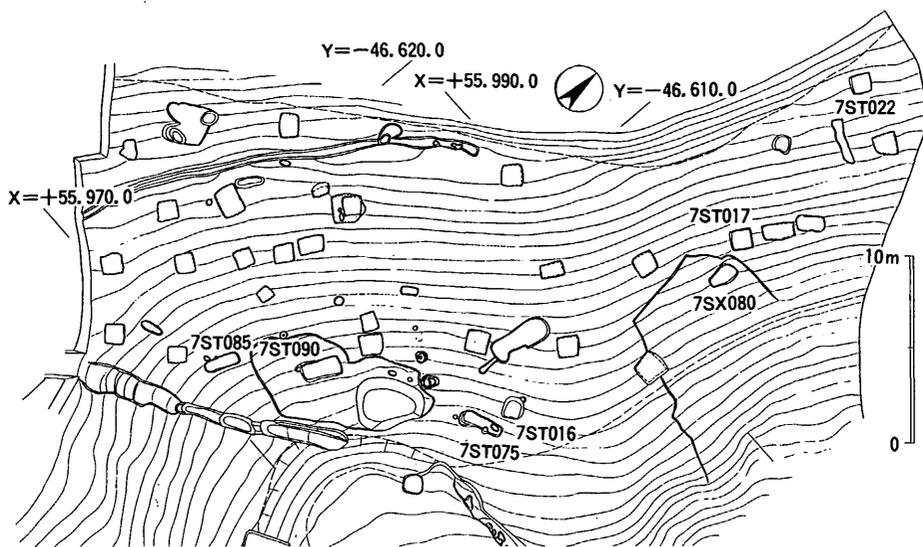


Fig. 54 北尾根墳墓群遺構配置図 (1/400)

ており、木目の観察されるものから棺の厚さが2.2cm前後であったことが知られる。また、頭部を横からたたいて鍵状にしているものもある。

7ST075

①遺構 (Fig.55、Pla.31・32)

主軸をG.N-67°-Eにとる。墓壙は長さ2.38m、幅0.67m、深さ0.55mを測る。長軸西側に浅

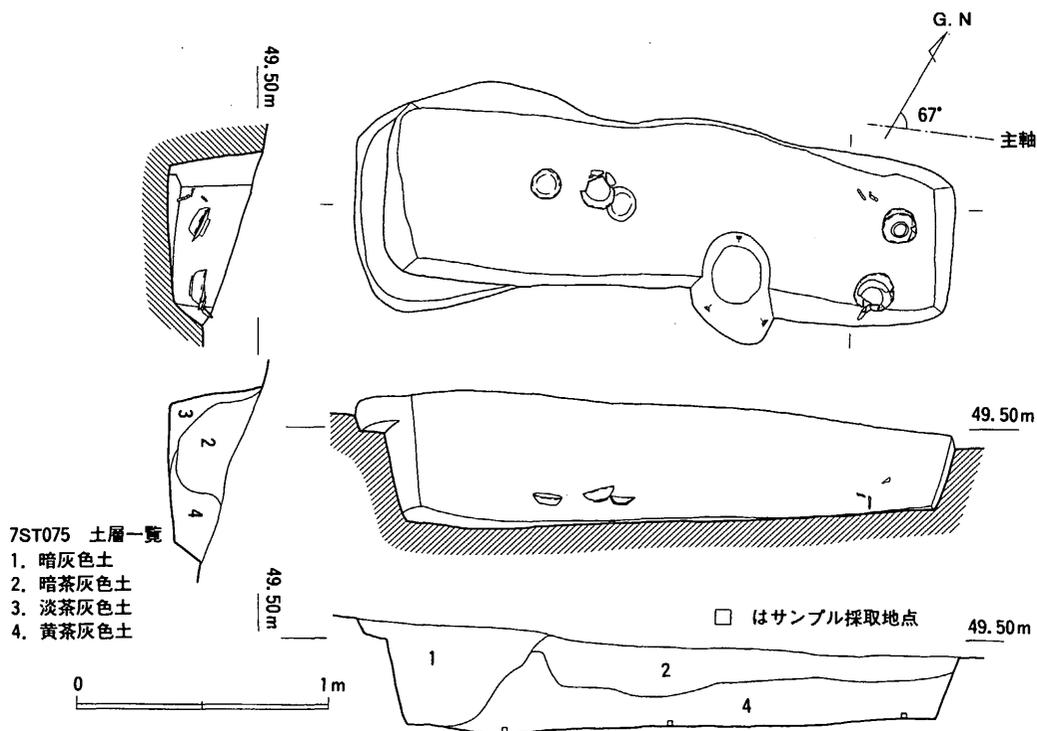


Fig. 55 7ST075 実測図及び土層観察図 (1/30)

いテラスがあり、長さ0.11m、幅0.86m、深さ0.07mを測る。出土遺物は土師器杯4点、小皿1点、椀2点、及び刀子片3点である。これらはすべて浮いた状態で出土し、土層観察から蓋上の供献遺物が転落したものと考えられる。このうち東側の遺物は、出土状態から埋葬当時の棺上では土師器小皿cを逆位にして蓋とし、正位の土師器杯aの上に重ね、いま1点の土師器杯も逆位で蓋とし、正位の土師器椀cに重ねていたと考えられる。刀子片は3点とも長軸北側コーナー付近で出土した。出土した刀子片のうち、1点は北尾根に位置する7SX030出土の刀子片と接合した。この事から刀子は切先のみ破片を供献遺物として使用したと考えられる。なお、この墳墓は遺物出土状況と土層観察から、木蓋土墳墓と考えている。さらに北側隅で墓墳の下層で長軸北側壁沿いにつくるピットを1基確認した。墳墓との関連性はないものと考えている。

②出土遺物 (Fig.56・57, 7ST075 (1~7)

Pla.48、別表1・2)

土師器

杯a (1~4) 口径11.4cm~12.5cm、器高2.4cm~3.5cmを測る。体部最下位からゆるやかに屈曲し、そのまま口縁部まで立ち上がるもの(1・3・4)と、ほぼ直線的に立ち上がるもの(2)がある。また法量のばらつきが認められるが、大きな差異はないと考えられる。4は体部外面に黒斑が1ヶ所確認される。

小皿c (5) 口径12.5cm、器高2.5cm、底径7.4cmを測る。底部に細い高台が直線的につく。底部の切り離しはヘラ切りで、

体部内外面とも横ナデを施し、底部内面はナデであるが一部指圧痕を残す。また体部に1ヶ所、粘土の付け足し部分が確認され、製作過程でひび割れた所を補修したものと考えられる。

椀c (6・7) 口径13.1cm・12.4cm、器高4.6cm、底径7.4cm・7.2cmを測る。体部は丸みを帯び、ゆるやかに立ち上がり、口縁部は丁寧に横ナデで処理され、わずかに外反する。厚

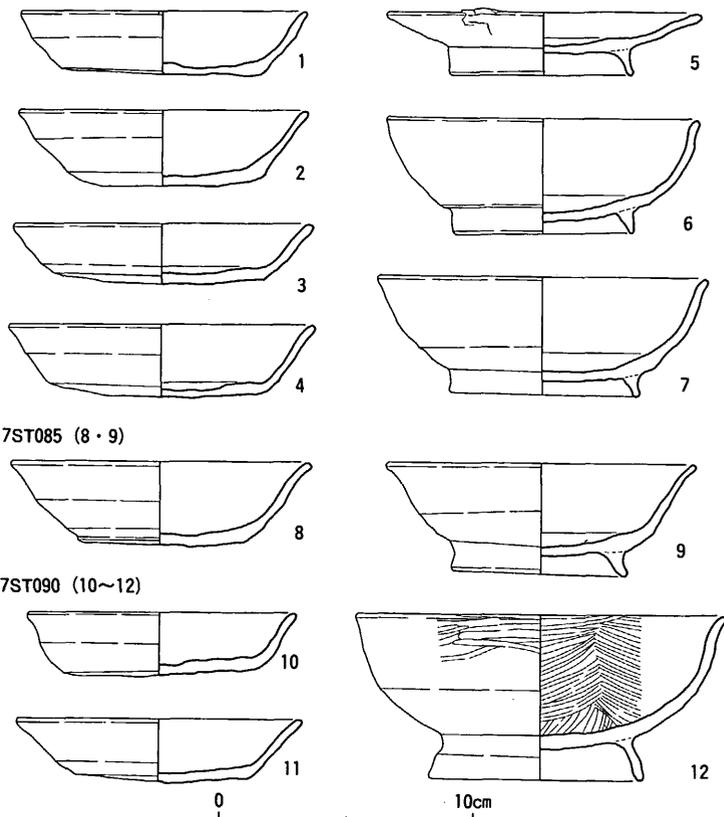


Fig. 56 7ST075・085・090 出土土器実測図 (1/3)

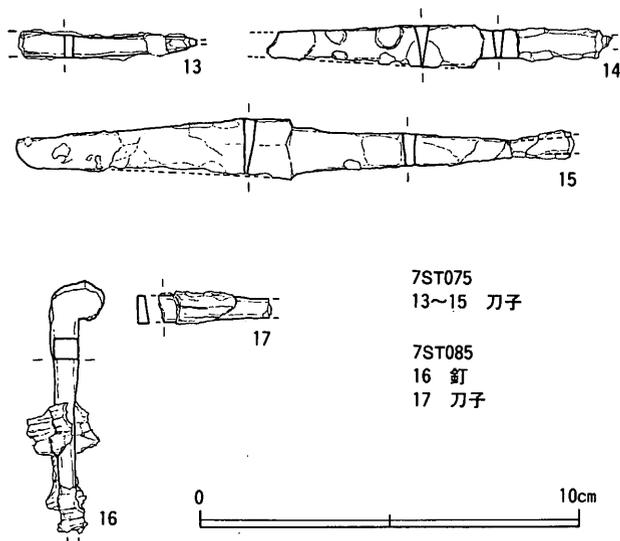


Fig. 57 7ST075・085 出土鉄製品実測図 (1/2)

く低脚の高台が外に開くように貼り付けられる。

鉄製品

刀子 (13~15) 15は全長14.7cm、刀身長7.2cm、刃部長7.1cm、刃部最大幅1.6cm、柄部最大幅1.3cm、最大厚0.4cmを測る。完形品と思われるが柄部がもう少し伸びていた可能性もある。身の先端は丸くおさめる。柄部には木質が残存し、木製の柄が装着されていたとみられる。この刀子は切先がこの墓壙内から出土し、切先部分を除く刃部および柄部が7SX030から出土した。13は柄部のみで、現存長4.7cm、幅

0.7cm、厚さ0.2cmを測る。全体に木質を残す。14は切先部分と柄部の末端部分を欠損する。現存長9.2cm、刃部現存長5.2cm、刃部最大幅1.1cm、柄部最大幅0.8cm、最大幅0.4cmを測る。柄部に木質を残す。

7ST085

①遺構 (Fig.58、Pla.33)

主軸をG.N-22°-Eにとる。墓壙は長さ1.85m、幅0.70m、深さ0.41mを測り、隅丸長方形を呈している。出土遺物は土師器坏1点、椀1点、及び刀子1点、鉄釘2点である。遺物はすべて浮いた状態で出土した。この墳墓は、遺物出土状況と土層観察から木蓋土壙墓と考えられる。鉄釘は木蓋に使用したものと思われ、刀子は柄部だけの出土であり、土器とともに蓋上の供献遺物と考えられる。土層観察から蓋上に逆位で供献されていた土器が、蓋の崩壊によりそのまま垂直に転落したと考える。また、供献土器の位置から頭位は北向きと考えられる。

②出土遺物 (Fig.56・57、Pla.47、別表1・2)

土師器

坏 a (8) 口径11.9cm、器高4.4cmを測り、体部最下位からゆるやかに屈曲し、口縁部まで外反しながら、立ち上がる。体部内外面とも横ナデを施すが、外面の方が強い横ナデを残す。

椀 c (9) 口径12.2cm、器高4.4cm、底径7.0cmを測る。体部最下位からゆるやかに屈曲し、口縁部まで直線的に立ち上がり、口縁端部は外反する。厚く短脚の高台が外に開くように貼り付けられる。

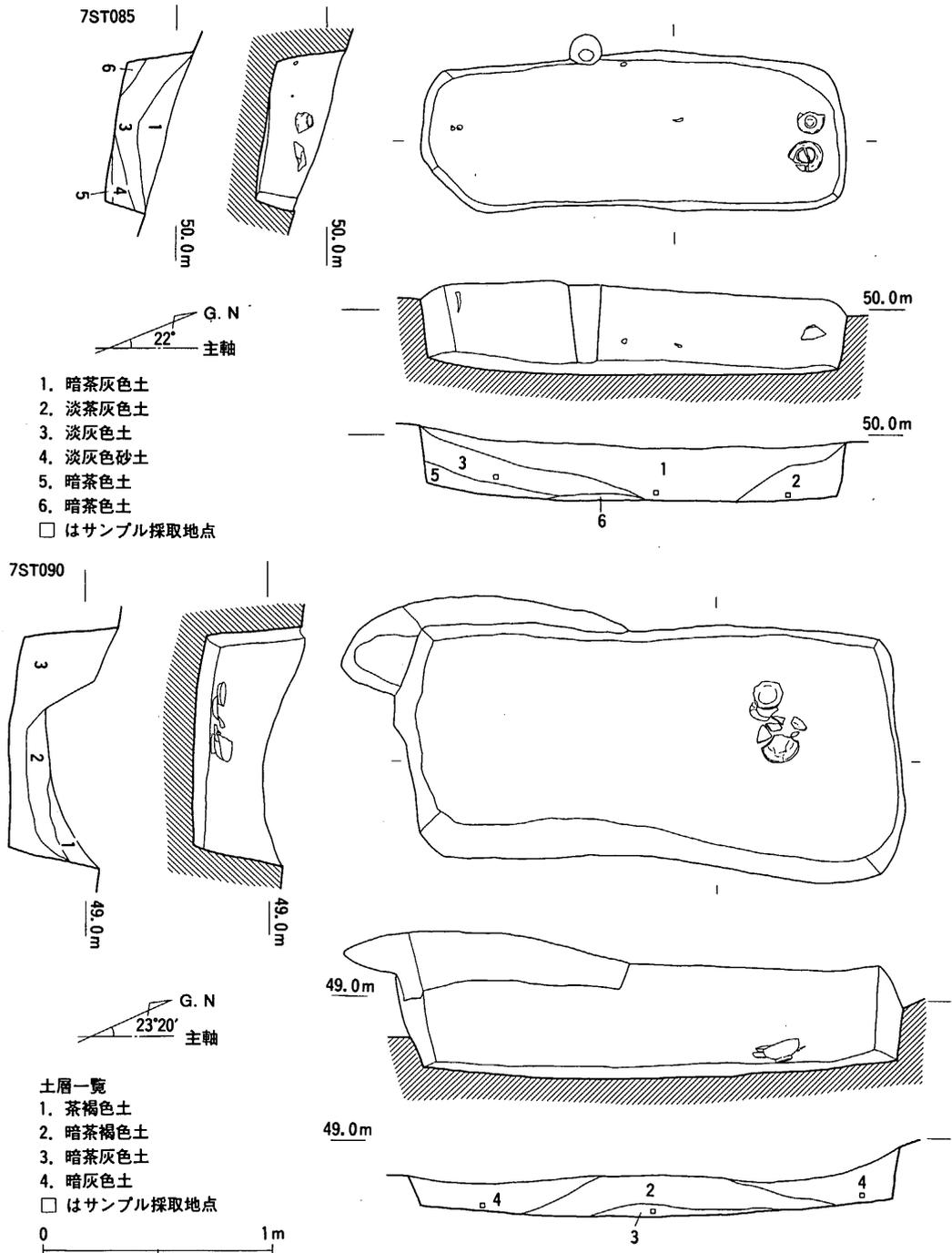


Fig. 58 7ST085・090 実測図 (1/30)

鉄製品

刀子 (17) 柄部で、現存長3.0cm、幅0.75cm、厚さ0.35cmを測る。一部木質が残存する。

釘 (16) 頭部を横からたたき、鍵状にしたもので、現存長6.65cm、幅0.6cm、厚さ0.55cmを測る。一部木質を残す。

7ST090

①遺構 (Fig.58、Pla.34・35)

長さ約13m、幅約7m、深さ約0.2mを測る黒色土の溜りを除去した段階で検出した。埋土の変化に気が付かず、遺物の出土によってプランを再確認した。そのため墓壙西側隅にあるテラス状の遺構は埋土の状況を確認できず、墳墓に伴うものか否か判断できていない。墓壙は主軸をG.N-23°20'-Eにとり、長さ2.14m、幅1.05m、深さ0.50mを測る長方形プランを呈す。出土遺物は黒色土器碗1点、土師器坏2点で、これらはすべて最終埋没土である暗灰色土層からの出土である。この墳墓は遺物の出土状況と土層観察から木蓋土壙墓と考えられ、出土遺物もすべて蓋上の供献遺物と見なされ、蓋の崩壊により転落した状況が窺える。

②出土遺物 (Fig.56、Pla.47、別表1)

土師器

坏 a (10・11) 口径10.7cm・11.4cm、器高2.5cmを測る。体部最下位から緩やかに屈曲し、口縁部が外反するもの (10) と直線的に立ち上がるもの (11) とがある。

黒色土器

碗 c (12) A類。口径14.7cm、器高6.7cm、底径8.9cmを測る。体部は丸みを帯び、体部最下位から鈍いながらも直線的に立ち上がり、体部中位からは緩やかに内湾し、口縁端部は外反する。また外方に開き気味で高脚の高台を貼り付ける。体部外面は丁寧に横ナデを施し、その後口縁部外面のみ横方向のミガキcを行う。体部内面は、見込みでタテ・ヨコ2方向にミガキcを行い、その後体部はななめ方向に口縁部は横方向にミガキcを施す。

(9) 近世墓

北尾根南斜面中位の緩斜面に造られている。出土遺物はないが、墓壙の形状や立地から近世墓と判断した。土壙のプランは正方形および長方形で、今回の調査区では32基確認した。ここでは完掘できた3基について概要を述べる。

7SX016

①遺構 (Pla.38)

7ST075に近接したもので、長さ1.1m、幅1.2mを測り、隅丸方形を呈する。

7SX017

①遺構 (Pla.38)

7SX080の東側にある。長さ1.15m、幅1.1mを測る方形を呈する。

7SX022

①遺構

調査区の東端にある。長さ1.1m、幅1.0mで方形を呈している。

(10) その他の遺構と遺物

7SX005

①遺構 (Fig.59、Pla.37)

北尾根南斜面中位で墳墓群のある緩斜面のやや上位で検出された。土壌等のプランは全く確認できなかったが、鉄釘2点と龍泉窯系青磁碗1点が近接した位置で検出された。この付近に墳墓が存在していた可能性を考えておきたい。

②出土遺物 (Fig.60・63、Pla.別表2)

龍泉窯系青磁

碗(1) I-5-b類である。口径16.6cm、器高6.9cm、高台径5.2cmを測る。補修痕がある。

鉄製品

釘(1・2) 破片資料で、木質は残っていない。

7SX007

①遺構

12号墳西裾で検出された溜り状の遺構で、当初周溝の一部と思われたが、埋土中から染付碗片、瓦質鉢片が出土したことや、埋土除去後に7SX008が検出されたことなどから、堆積自体は新しいものと判断した。この堆積以前に古墳の本来の周溝がカットされた可能性がある。

②出土遺物 (Fig.61)

瓦質土器

鉢(1) 片口部分の資料で、内面に粗目で縦方向の櫛目がある。

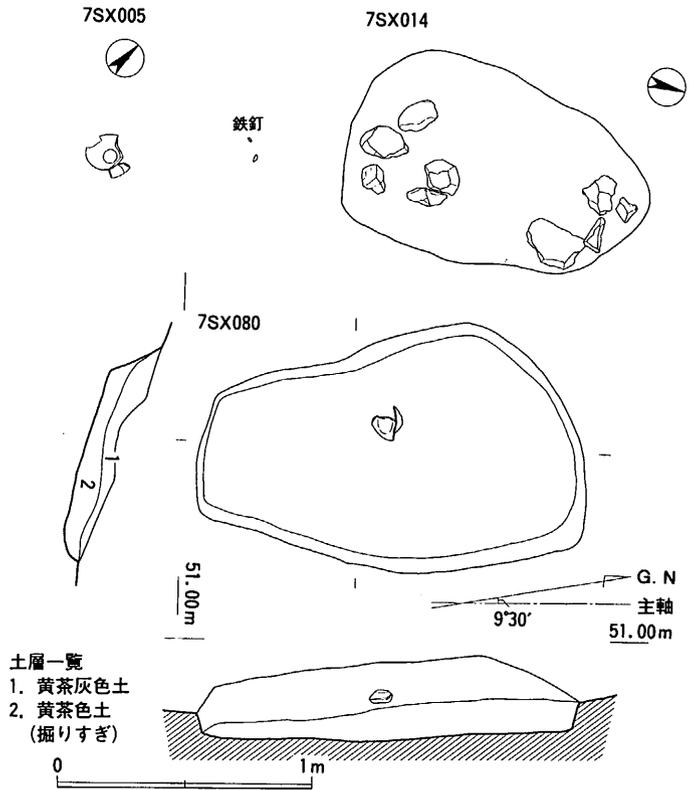


Fig. 59 7SX005・014・080 実測図 (1/30)

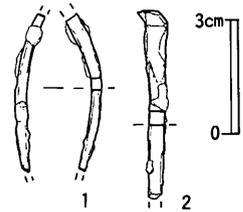


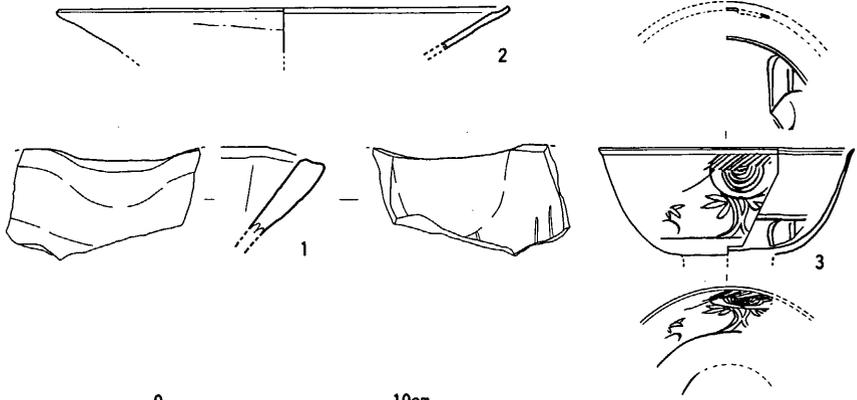
Fig. 60 7SX005出土鉄釘実測図

染付

椀 (3)

口径 10.1cm

に復原され、
内外面に文様
を描く。



陶器

皿 (2)

唐津焼きとみ
られる。外面
下半が露胎で
口縁部内面にか
るい段がある。

0 10cm

Fig. 61 7SX007 出土土器実測図 (1/3)

7SX008

①遺構

12号墳西裾で7SX007の堆積土を除去した後に検出されたピットである。ピット内から土師器丸坏1点、小皿3点が出土した。性格は明らかではない。

②出土遺物 (Fig.63、Pla.48、別表1)

土師器

小皿 a (2~4) 口径10.4~11.0cm、器高0.7~1.3cmを測る。底部はヘラ切りで板状圧痕を残すものもある。

丸坏 a (5) 口径14.6cm、器高3.5cmで、底部はヘラ切りである。

7SX011

①遺構 (Fig. 3)

南尾根南斜面に形成された段造成の遺構である。現状で3段分が確認され、上段で幅約6m、中段、下段が幅約7mで、西側調査区外に延びている。出土遺物には近世まで下るものがある。

②出土遺物 (Fig.63、Pla.50)

土師器

椀 c (6) 高台径8.5cmを測る。

陶器

椀 (7) 唐津焼きとみられ、高台径4.8cm。

坏 (8) 口径14.0cmで唐津焼きとみられる。見込み部分に目跡が確認される。

7SX014

①遺構 (Fig.63)

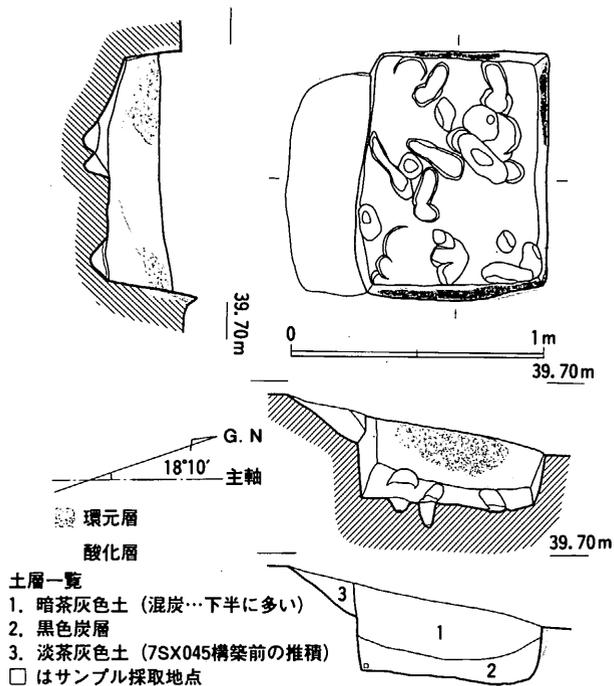


Fig. 62 7SX045 実測図 (1/30)

北尾根頂部に位置し、長さ1.20m、幅0.79m、深さ0.07m弱を測る隅丸長方形のピットに10~22cm大の小礫が確認された集石遺構である。ピット中央部分を根により壊されている。遺物は出土していない。

7SX045

①遺構 (Fig.62、Pla.28)

南尾根裾部分に位置し、長さ1.00m、幅0.75m、深さ0.30mで長方形を呈する焼土壙である。壁は各面ともよく焼けるが、底は焼けていない。土壙底部には小ピットが多く確認され凹凸が著しい。

7SX030 灰原の堆積土を除去した段階で検出された。遺物は出土していない。

7SX080

①遺構 (Fig.59、Pla.37)

北尾根南斜面で墳墓群のある緩斜面の東端で検出された土壙である。長さ1.54m、幅0.98m、深さ0.18mを測る不整楕円形で、埋土中に土師器坏1点が割れて重なっていたが、整理の結果同一個体と判明した。土壙墓の可能性はある。

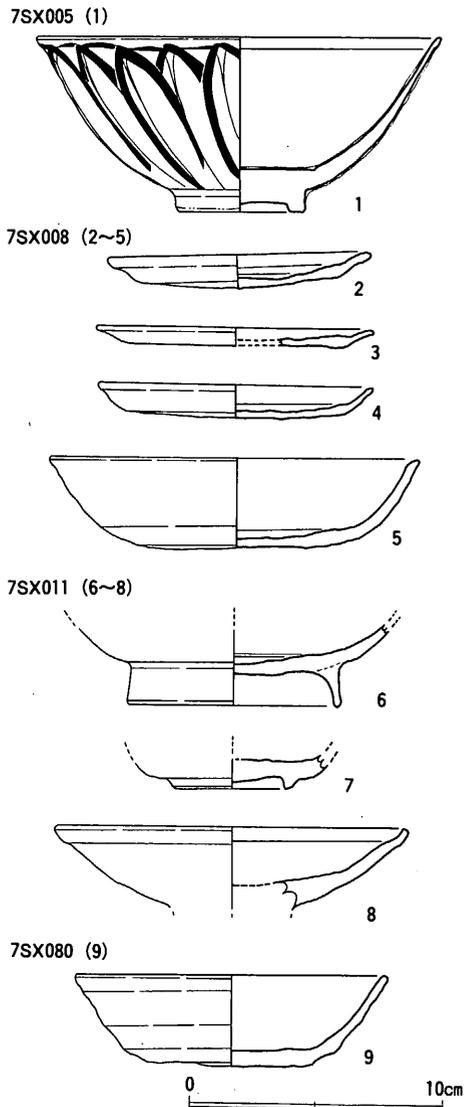


Fig. 63 7SX005・008・011・080
出土土器実測図 (1/3)

②出土遺物 (Fig. 63、Pla. 50、別表 1)

土師器

坏 a (9) 口径12.4cm、器高3.6cm、底径6.6cmを測る。底部はヘラ切りである。

表土ほか

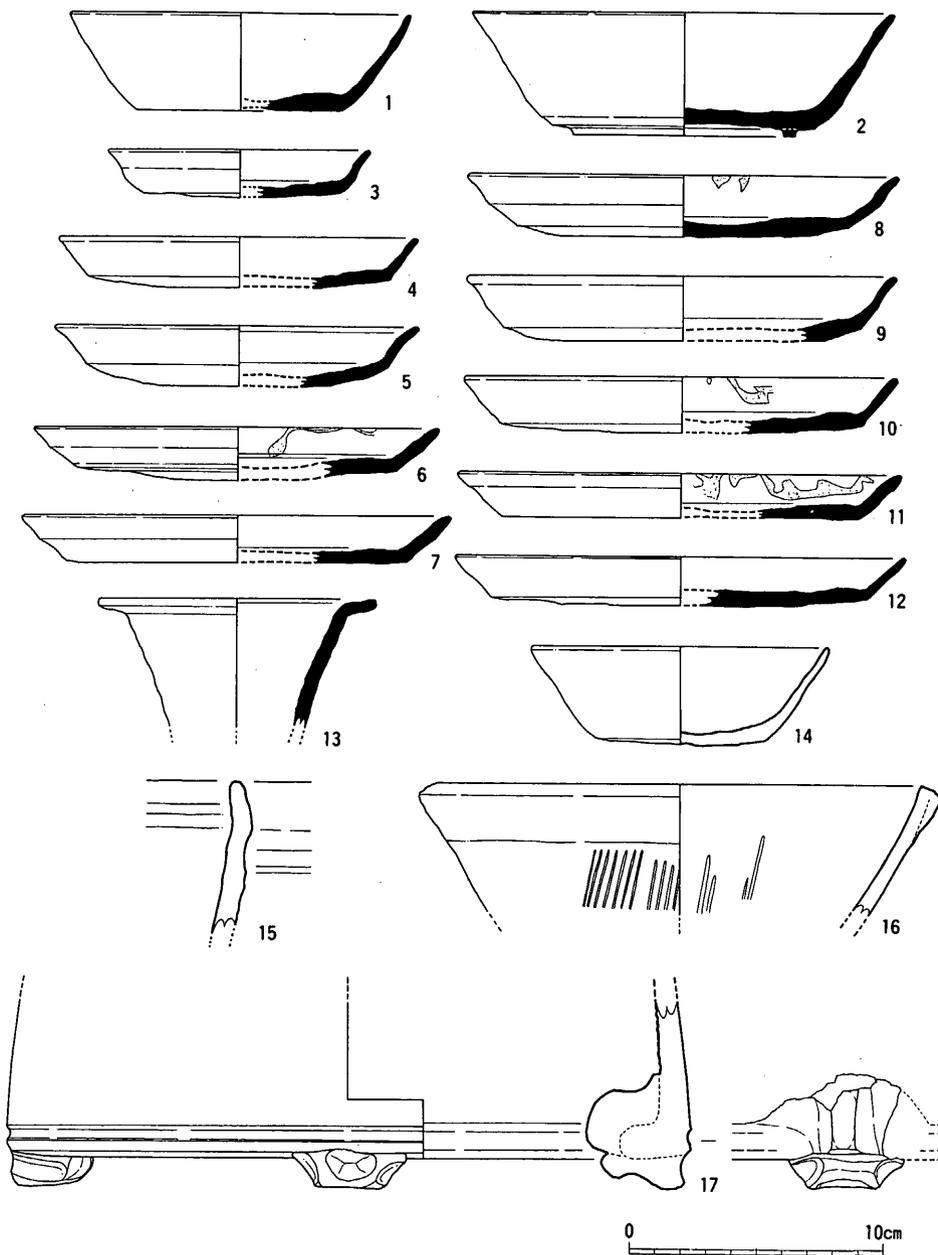


Fig. 64 表土出土土器実測図 (1/3)

①出土遺物 (Fig.64・65、Pla.50・51、別表1)

縄文土器

深鉢 (15) 粗製の深鉢とみられる。内外面ともナデである。北尾根の表土中から出土した。

須恵器

坏 a (1) 口径13.4cm、器高3.9cm、底径8.0cmを測る。底部はヘラ切りのままである。

坏 c (2) 口径16.6cm、器高4.9cm、高台径8.8cmを測る。

皿 a (3~12) 3は口径10.4cmと小さい。4~12は口径14.2~17.8cm、器高1.9~2.5cm程度である。底部はすべてヘラ切りで、5には強いナデが認められる。6・8・10・11の口縁部に煤が付着している。図示していない資料にも同様に煤の付着するものいくつか認められる。北尾根の限られた範囲での出土であり、灯明を必要とする何らかの行為が行われていた可能性が考えられる。

壺 (13) 口径11.0cmで口縁端部を外方に折り曲げる。長頸壺の口縁部と考えられる。

須恵器は、すべて北尾根中位以上の斜面表土中から出土した。

土師器

坏 a (14) 口径11.7cm、器高3.9cm、底径6.7cmを測る。底部はヘラ切りである。南尾根裾部の表土中から出土した。

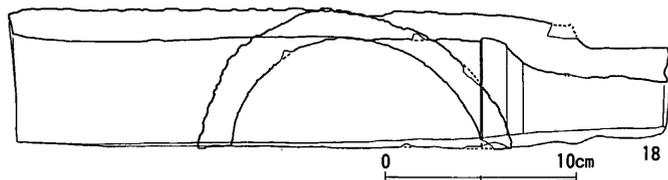
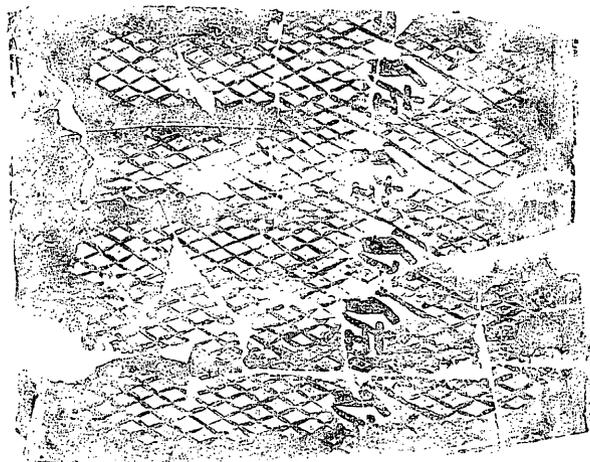


Fig. 65 丸瓦実測図 (1/4)

瓦質土器

鉢 (16) 口径20cm程度に復原される。口縁部は外面に粘土を貼り足して肥圧化している。内外面ともに櫛目がある。南尾根表土中出土。

火舎 (17) 底部の資料で、粘土貼り付けの低い脚が付く。脚は指圧によって貼り付けられる。また、底部に底はなく、内面端部は折り曲げられ、脚と同じ位置に粘土で突起を貼りだし、受け部を作る。体部は横ナデによって仕上げられる。底部径26.6cmに復原される。北尾根表土中から出土した。

瓦

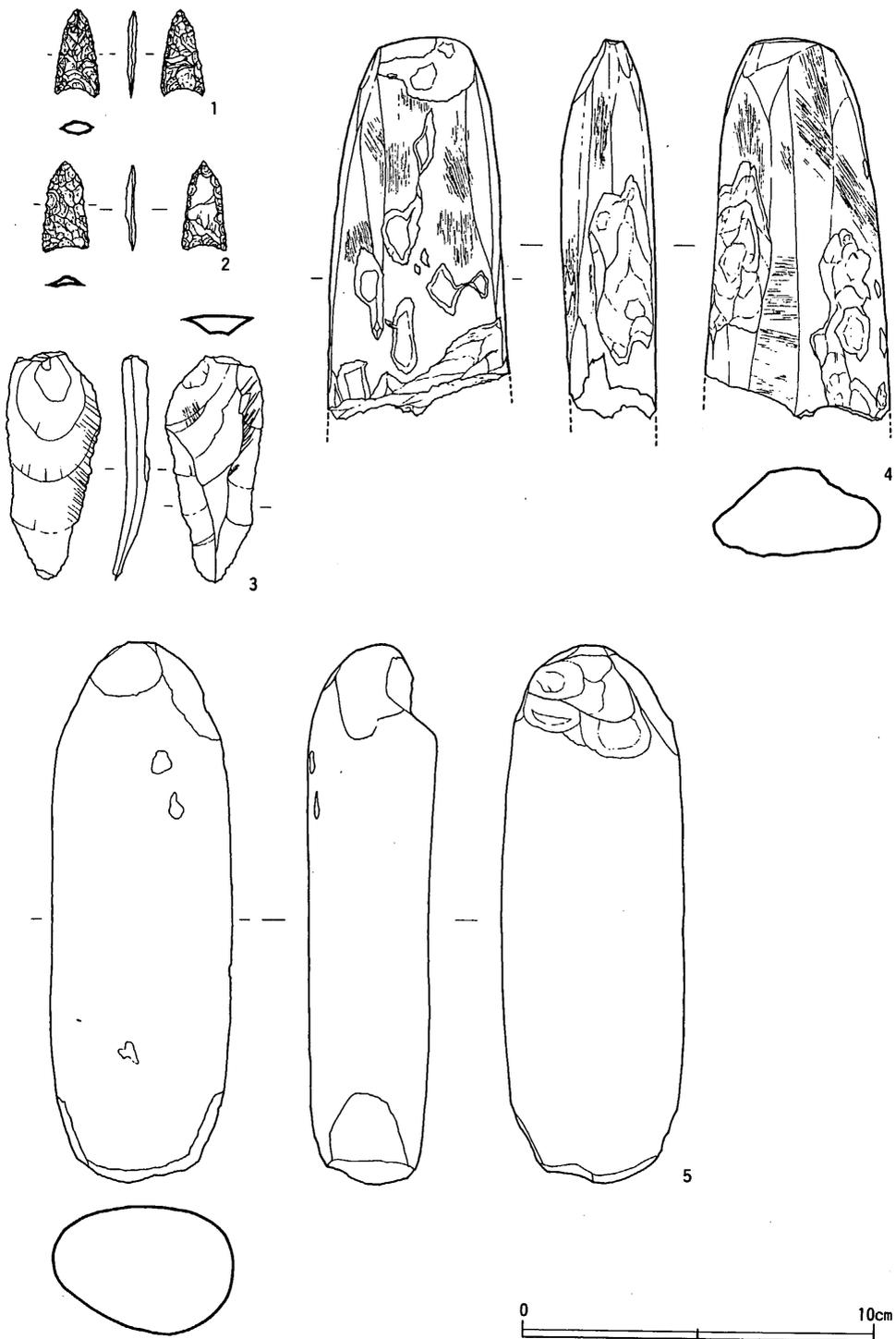


Fig. 66 石器实测图 I (1/2)

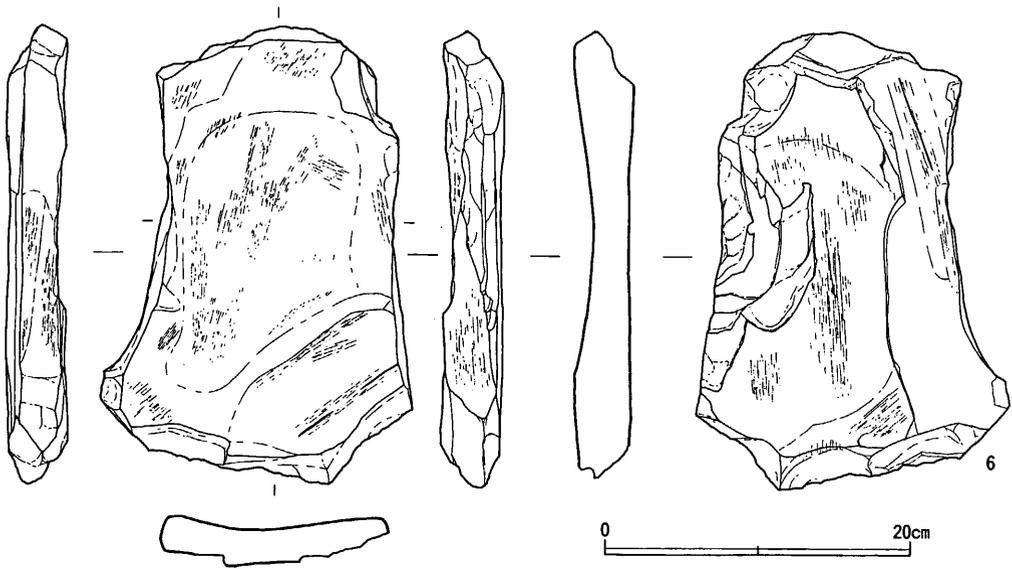


Fig. 67 石器実測図Ⅱ (1/5)

丸瓦 (18) 長さ34.7cmを測る玉縁式の丸瓦でほぼ完形に復原される。凸面の叩きは5段階に実施され、格子目の間に「佐」の文字がある。北尾根斜面表土中から出土した。

石器 (Fig.66・67、Pla.51・52)

石鏃 (1・2) 両者ともえぐりの浅いもので、長さ3.6cm、厚さ0.2cmを測る。安山岩製。両者とも12号墳盛土中から出土した。

石斧 (4) 緑色片岩製の磨製石斧である。刃部を失っているが、現存長11.1cm、厚さ2.8cmを測る。南尾根北斜面表土中から出土した。

砥石 (6) 最大長31.3cm、最大幅20.6cm、厚さ3.9cmで結晶片岩製の砥石である。小口部分以外は全面使用されている。南尾根北斜面上位の表土中から出土した。

3は、かなり風化の進んだ安山岩の剥片である。長さ6.5cm、幅2.8cm、厚さ0.7cmを測る。北尾根の表土中から出土した。5は火成岩製の敲打石器とみられる。長さ15.7cm、幅5.3cm、厚さ3.5cmを測る。北尾根中位の斜面表土中から出土した。

V. 金属製品の保存処理

1. はじめに

今回の調査で出土した青銅鏡2面及び釘を中心とする鉄製品百数十点について、調査研究・保管・展示を目的とする保存処理を実施したので報告する。

2. 青銅鏡の保存処理

処理前状況

獸帯鏡：鏡面は全面にわたり赤色顔料混在の土壤に覆われ、一部布片が付着していた。また、いわゆるブロンズ病に起因するチョーキングがみられ、破損や膨れが認められる箇所も存在した。鏡背は薄く土壤が付着し、一部黒灰色の地金や文様が確認できた。周縁部や外区ではブロンズ病の進行した箇所がみられたものの、内区には大きな腐食は認められなかった。しかし、鈕の先端部分はブロンズ病により表層部の剥離が起きていた (Fig.69)。

八稜鏡：鏡面・鏡背ともに緑青に覆われていた。鏡背の文様は付着土壤のため不明だが、ブロンズ病による腐食は認められず遺存状態は良好であった (Fig.68)。

処理方法

①付着物の除去 獸帯鏡は劣化の進行した箇所に留意しつつ、筆・針先・カッターナイフを用いて慎重に土壤を除去した。鏡背の一部に付着していた布片については文様及び銘文表出を優先させたため、写真撮影後除去した。八稜鏡も同様に筆・針先・カッターナイフを使用し土壤を除去した。

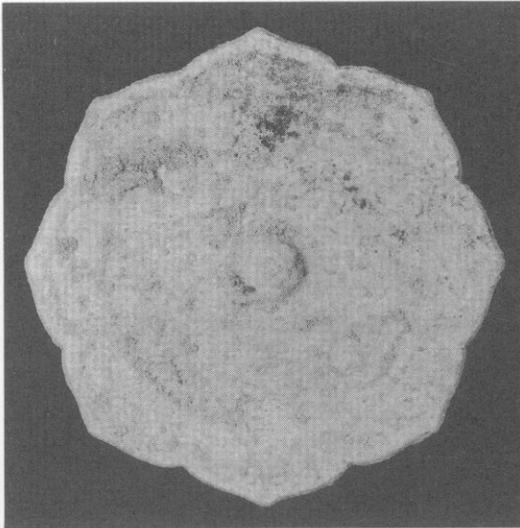


Fig. 68 八稜鏡処理前状況



Fig. 69 獸帯鏡処理前状況

②洗淨 獸帯鏡は洗淨作業中の破損を考慮して行わなかったが、八稜鏡はアセトン液中でブラッシングして洗淨した。

③防錆処置 ブロンズ病発生原因となっている塩化物イオン含有錆を固定化・非活性化させるため、ベンゾトリアゾールによる防錆処置を行った。ここでは、ベンゾトリアゾール1.5%エタノール溶液に一昼夜浸漬し一週間自然乾燥後、再び同溶液に一昼夜浸漬し表面を軽く洗淨した後乾燥させた。乾燥は亀裂発生の危険性を回避するため強制乾燥は行わず、乾燥剤を封入した密封容器に約2ヶ月間保管し、緩やかに乾燥させる方法を採用した。

④強化処置 アクリル系合成樹脂（パラロイドB72）5%アセトン溶液の常圧含浸後一週間風乾する工程を3回繰り返した。獸帯鏡の脆弱化部分にはさらに10%溶液を塗布した。

3. 鉄製品の保存処理

処理前状況

鉄釘の大部分には木質が良好に残存しており、釘本体も大きな錆はさほど認められなかった。他の鉄製品についても著しい錆膨れや亀裂・剝離は認められなかった。

処理方法

①付着物の除去 カッターナイフやニッパー、精密加工用グラインダー等を使用し、木質部を保持しつつ土壌・錆を除去した。脆弱な部分には適宜樹脂塗布し、強化した後に作業を行った。

②洗淨・乾燥 エタノール液中でブラッシング後、強制乾燥した。

③強化処置 青銅鏡の場合と同様に樹脂含浸を3回繰り返し、脆弱な遺物にはさらに10%溶液を塗布した。

④接合 セルロース系接着剤（セメダインC）の他、接合面の少ない箇所や強度の必要な箇所にはエポキシ樹脂系接着剤（セメダインハイスーパー）を使用した。

4. 処理後の保管

処理が終了した遺物は乾燥剤を封入したアクリルケース中に収納しているが、ここで行った処理はあくまでも応急的なものであるため、その後の保管環境には充分配慮する必要がある。すなわち、乾燥状態を保つ・塵埃を防ぐ・直射日光にさらさない・急激な温度変化を避ける・衝撃を与えない等の注意があげられよう。また、再処理が必要となる事態も考慮にいれておかねばならない。そのためにも定期的な観察の継続が不可欠である。

今回の保存処理を実施するにあたり、九州歴史資料館 横田義章氏より御指導・御協力を賜った。文末ながら記して御礼申し上げます。

VI. 蛍光 X 線分析

宮ノ本遺跡第7次調査出土四仙騎獣八稜鏡とその同型鏡について

宮内庁正倉院事務所

成瀬正和

宮ノ本遺跡出土の四仙騎獣八稜鏡について蛍光 X 線分析を実施した（註1）。蛍光 X 線分析は試料に含まれる元素の種類と量を調べるための方法である。

測定にあたっては鏡をそのまま測定試料として用い、サンプリング等を行わなかった。鏡は青銅製で、裏面（文様面）、鏡面とも被覆緑青サビに覆われているが、測定は裏面の比較的被覆緑青サビの析出が少ない箇所を選んだ。サビ化している出土金属器の場合、表面における化学組成比は、オリジナルな部分、すなわち地金におけるそれとは一致しない。しかしサビが著しく進行している場合を除いては、検出される元素の種類は表面も地金部もほぼ同じであると言ってよい。

蛍光 X 線分析の結果、鏡からは銅（Cu）と錫（Sn）のほか、鉛（Pb）、ヒ素（As）、銀（Ag）、鉄（Fe）、ビスマス（Bi）、アンチモン（Sb）などが検出された（Fig.70-1）。標準試料との比較によれば、鉛（Pb）約5%、ヒ素（As）約3%、銀（Ag）約0.2%、鉄（Fe）約0.5%、ビスマス（Bi）約1%、アンチモン（Sb）約0.5%と見積られる。ただしこれは上述したようにあくまでサビ化した表面における化学組成比である。

宮ノ本遺跡鏡と同型の鏡は、わが国では長岡京跡より1面が出土しており、また正倉院に3面が伝わる（うち1面は正倉の北に隣接する杉本神社床下より明治年間出土したもの）。これらの鏡すべてについてすでに蛍光 X 線分析を実施しているの（註2）で、比較のため、その蛍光 X 線分析スペクトルをFig.70-1 b と Fig.70-2 a～c に示した。またこれらの同型鏡の化学組成比を標準試料との比較により導き出し、Tab. 1 にまとめて示した。

筆者はこれまでの蛍光 X 線分析調査に基づき、正倉院鏡を化学組成比の特徴から A、B、C の3群に分けている。A群鏡は銅（Cu）約70%、錫（Sn）約25%、鉛（Pb）約5%を含む鏡。B群鏡は銅（Cu）約80%弱、錫（Sn）約20%、ヒ素（As）1～3%を含む鏡。C群鏡はA群、B群ほど化学組成比のまとまりがないが、銅（Cu）、錫（Sn）を主成分とし、鉛（Pb）とヒ素（As）を少量含む鏡を一括している。

A群鏡は平螺鈿背鏡、金銀平脱背鏡などの特殊装飾鏡や、高内に文様を鑄出す海獣葡萄鏡など、高度な技術に支えられて製作された鏡が相当し、またその化学組成比が前漢から唐に至る中国鏡の標準的組成比（註3）と一致することから、中国で製作されたと考えることので

きる鏡である。B群鏡は文様を持たぬ簡素な造りの鏡が相当し、その化学組成比が天平六年『造仏所作物帳』に見える「白銅鏡」の配合比、「銅一斤白鑄四兩」（白鑄は錫のこと）にほぼ一致することから、官営工房で製作されたと考えることのできる鏡である。C群鏡は中国鏡を数次踏み返した小型の鏡が相当し、その化学組成比が中国鏡のそれと一致しないこと、および鉛を加えない製法（＝わが国の官営工房製鏡の特徴）を採用していないことから、わが国の私営工房で製作した鏡と想定している。

宮ノ本遺跡鏡を正倉院鏡の分類に当てはめればC群鏡に相当しよう。同型の長岡京跡鏡および正倉院南倉第34号鏡、同第35号鏡、同第36号鏡（杉本神社下出土鏡）もC群鏡に属す。しか

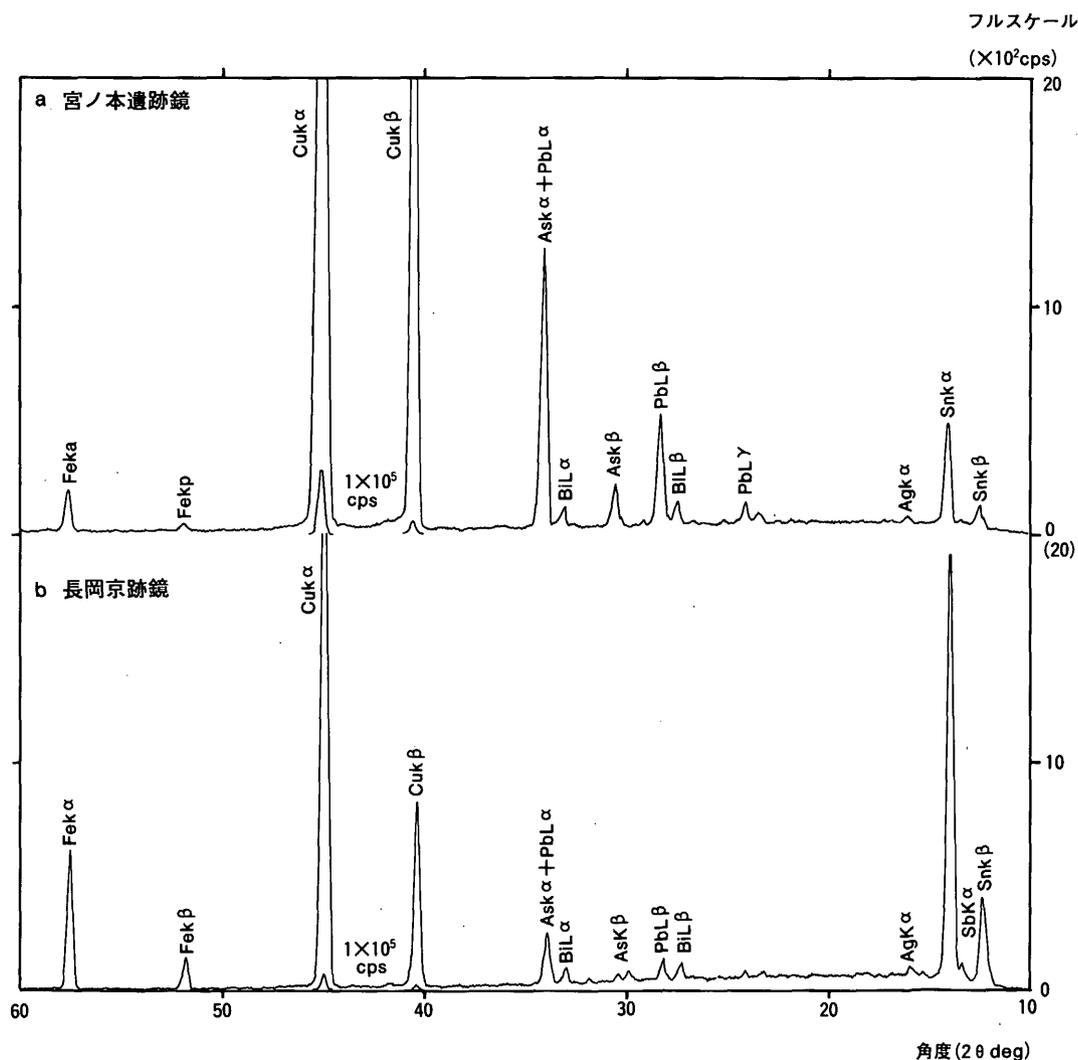


Fig. 70-1 四仙騎獣八稜鏡の蛍光Xスペクトル図(1)

フルスケール
($\times 10^2$ cps)

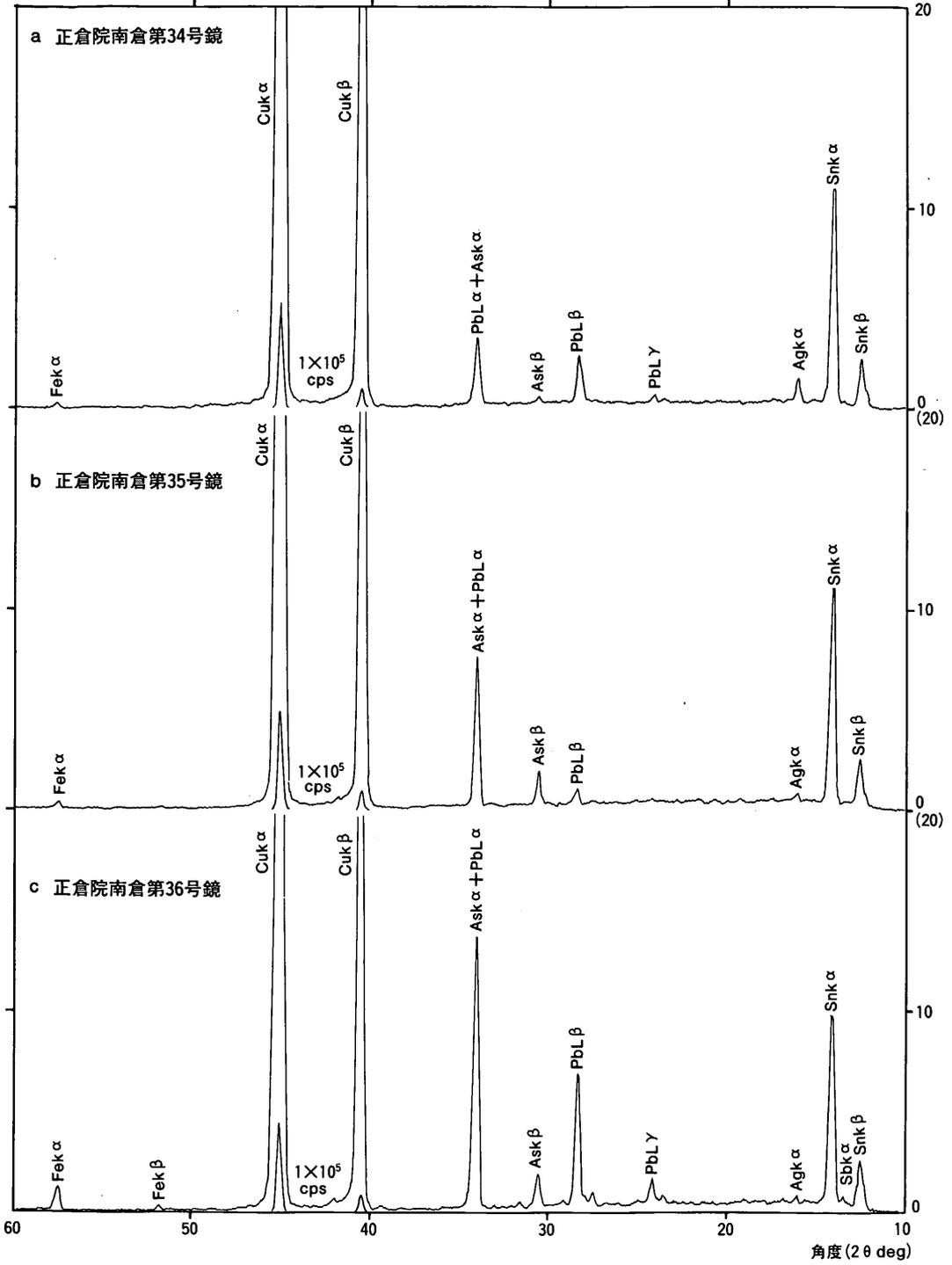


Fig. 70-2 四仙騎獸八稜鏡の蛍光Xスペクトル図(2)

Tab. 1 四仙騎獣八稜鏡の表面における化学組成比 (単位 重量%)

	Cu	Sn	Pb	As	Fe	Ag	Sb	Bi	その他の確認元素
宮ノ本遺跡鏡	—	—	5	3	0.5	0.2	0.5	1	
長岡京跡鏡	—	—	1	0.5	2.5	0.3	1	1	Ni・Zn
正倉院南倉第34号鏡	75強	20強	2.5	0.5	tr	1	0.5	n. d	Ni
正倉院南倉第35号鏡	75強	20強	0.8	3	tr	0.2	tr	tr	
正倉院南倉第36号鏡	70弱	20	9	3	tr	0.2	1	tr	Ni・Zn

*1 tr は痕跡量の存在を、また n. d. は未検出を表す

*2 宮ノ本遺跡鏡および長岡京跡鏡はサビ化が著しいので、Cu・Sn の量は示していない

*3 Fe はその量を一応示したが、出土品で値が大きいのは土壌成分の影響であろう

*4 鏡の分析にあたっては一面について最低数カ所は測定を行っているので、図に示した蛍光 X 線スペクトル中には確認できない元素でも、他の測定点で確認された元素については表中にあらわしている

しこれらの鏡の表面の化学組成比は互いに少なからず異なることが見て取れる。正倉院南倉第34号鏡及び同第35号鏡は伝世品であり、表面の化学組成比はほぼ地金のそれと同一と考えて良い。銅 (Cu) と錫 (Sn) の量は相似るものの、鉛 (Pb) とヒ素 (As) の量にはかなりの差異があることがわかる。宮ノ本遺跡鏡、長岡京跡鏡、正倉院南倉第36号鏡は出土品であり、さきに述べたように地金の化学組成比は表面のそれと違うので、他の鏡との単純な比較は難しいが、鉛 (Pb) とヒ素 (As) の量比やビスマス (Bi) 量からみて、地金の化学組成比もそれぞれ異なっていたものと推定する。

すなわちこれらの鏡は同型鏡とはいえ、互いに同一の溶湯から作られた可能性は少ないと考えている。このことは同一工房の作品であることを全面的に否定する証拠にはならないが、もし同一工房の作であるとするなら、その工房では鏡製作の際、銅、錫、鉛などの地金の配合を大ざっぱに行っていたか、あるいは同質の金属地金の供給が安定して受けられず、製作ごとに不純物の量が異なる地金を用いざるを得なかったため、配合はきっちり行っても結局化学組成比的には同一のものが作れなかったかのどちらかであろう。

戸原和人氏は長岡京跡鏡と正倉院鏡について考古学的見地から詳しい検討を行い、長岡京跡鏡および正倉院南倉第35号鏡、同第36号鏡が同じ范による製品、正倉院南倉第34号鏡はこれとは別の范による製品と考えた (註4)。

今後同型鏡の製造状況を詳しく追求するためには、このような考古学的知見に化学的情報を加味し、より整合性のある解釈を導き出す必要があると考えている。

調査の機会を与えて頂いた狭川真一氏をはじめとする太宰府市教育委員会の皆様には、末筆を借りて御礼申し上げます。

(註)

- 1) 測定は宮内庁正倉院事務所設置の理学電機工業(株)製波長分散型蛍光X線分析装置(大型試料用)を用いて実施した。図に示した蛍光X線分析スペクトルの測定条件は以下のとおりである。X線管球; クロム対陰極、印加電圧; 35kv、印加電流; 15mA、測定雰囲気; 大気、分光結晶; フッ化リチウム、検出器; シンチレーション計数管、ゴニオメーター走査速度; 8°/分、記録紙速度; 8cm/分、ゴニオメーター走査範囲(2θ); 10~65°(図には10~60°を示す)、時定数; 0.5、フルスケール; 2000cps(40~47°の範囲についてはフルスケール100000cps、時定数0.1で再測定)、照射野制限マスク; Ti20 ϕ 。
- 2) 成瀬正和 1985 四仙騎獣八稜鏡の蛍光X線分析 長岡京文化財調査報告書14 長岡京市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所 長岡京跡鏡についてはその後再測定の機会が与えられたので、本報告書中には新しいデータを示した。
木村法光・成瀬正和 1989 X線分析による宝物の材質調査(年次報告) 正倉院年報第11号 宮内庁正倉院事務所
- 3) 小松茂・山内淑人 1937 古鏡の化学的研究 東方学報8 京都大学人文科学研究所
- 4) 戸原和人 1986 長岡京出土の八稜鏡 長岡京古文化論叢 同朋社出版

Ⅶ. 小 結

①古墳

主体部について

主体部で検出された割竹型木棺は、目張りに用いられた粘土の観察からある程度の構造が知られる。本文中と重複する部分もあるがここでその復原を試みてみたい。木棺は長さ3.97mで西側に細くなり、その西小口部の幅は0.61m、東小口部の幅は0.93mである。小口板は粘土の観察から小口端部ぎりぎりにはめ込まれていたようであり、東側では棺痕跡が明瞭なH形にならず、西側では土圧によってか小口部の粘土が北側で僅かに棺内に入り込んでいた。ベンガラ塗布の範囲は小口部から東で0.2m、西で約1.5m離れており、はめ込みの小口板以外に棺の中に2ヶ所の仕切りが施されていたとみられる。こうした構造の割竹型木棺是那珂川町妙法寺古墳群中で出土した木棺に同じものがあり、この場合片方のはめ込み式の小口板は失われているが、棺内の仕切り板は削り出しによって作り出されている。ほぼ同様な内部構造とみて差し支えなからう。ただし、12号墳の例では足部と考えられる棺内に仕切りによって大きな別空間が作り出されることとなり、この空間の利用方法については今回の調査では明らかにできなかった。なお、Fig.71に足部の空間規模を窺える写真を提示したので参照されたい（モデルは当市技師の塩地潤一で、身長は1.74mである）。

棺身の外面は底部の形状が緩やかな円弧を呈するが、側縁の位置から推定して原木のままではなく、何らかの加工が施されていたとみられる。また側縁の粘土は棺側が平面を成している点から棺の合わせ目付近は原木をかなり削り込んで平坦面を造りだしていたものと推定される。底部外面は中央がやや膨らんだ形状を呈していたと考えられるが、これも先的那珂川町例に認められるところである。

蓋となる側の棺の形状はほとんど判明しないが、東側小口部に倒れ込んでいた粘土の形状が僅かながら円形を呈していた点で、棺身とさほど変わらない蒲鉾状を呈していたものと考えられる。

以上の点から復原した木棺をFig.72にしめ

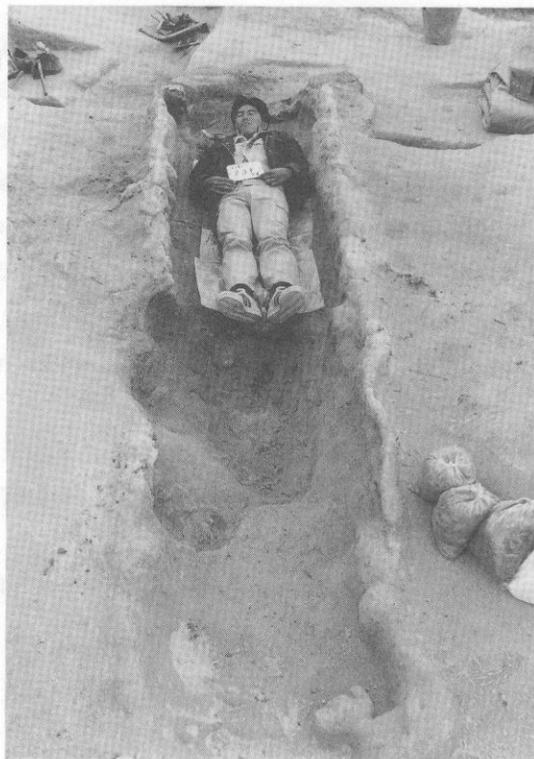


Fig. 71 棺足部の空間状況

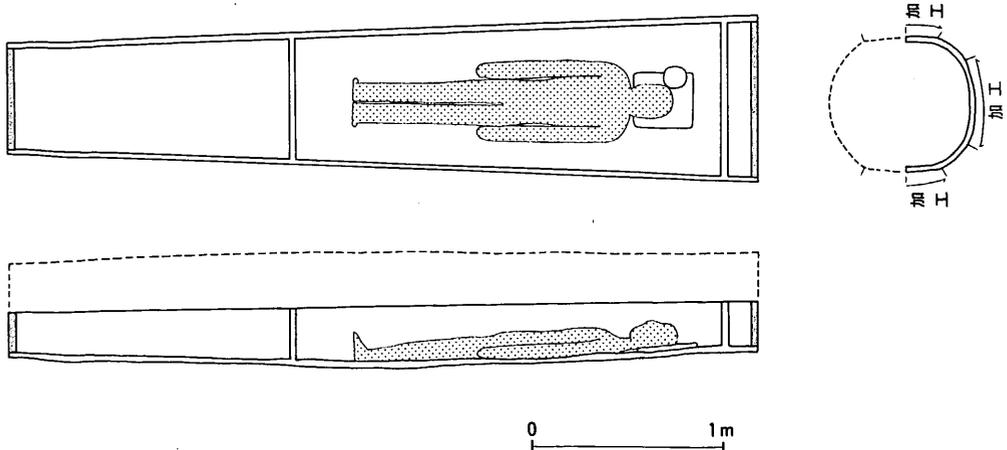


Fig. 72 木棺復原図

した。側縁の加工があるものの典型的な割竹型木棺と称して差し支えない形状と規模である。

周辺部における割竹型木棺の規模を比較してみると、12号墳のものを上回る長さ（4 m以上）を有するものは、太宰府市周辺では大野城市御陵古墳群N 1号第1主体（方墳、4.25 m）、当市菖蒲浦古墳群1号墳第1主体（円墳、4.05 m）、筑紫野市峠山古墳群3号墳（円墳、4.54 m）、小郡市三国ノ鼻1号墳第1主体（前方後円墳、5.45 m）などで、北部九州で80例前後知られる割竹型木棺の中では大きい部類に属している。これを階層差と位置付けるならば、前方後円墳につぐ勢力を保有した地域の首長墓と見なされよう。

造営年代について

古墳出土の遺物の内、原位置をとどめるものは鏡のみで土師器環が僅かの移動、他は遊離した資料である。これらの遺物からでは直接的に年代を決定することは困難と言わざるを得ないが、墳丘斜面中に切り込む甕棺墓7ST100、西裾部の7ST010が、後述するように布留式土器の古相段階併行期とみられ、古墳は切り合関係上「古」に位置することからほぼ同時期とみて問題なからう。主体部内出土の土師器環、周溝出土の土師器小型丸底壺も甕棺とほぼ同時期で捉えられる資料であり、少ない資料ながら古墳造営の時期を布留式古相段階併行期としておきたい。

宮ノ本古墳群は第1・2次調査で11基の古墳が知られるところであるが、1次調査5号墳、2次調査9号墳はいずれも布留式古相段階併行期とみられ、各々の支群はこの時期から次の新相段階にかけての造営とみられる。今回調査した12号墳も近接した時期の所産であり、宮ノ本古墳群の最盛期をこの時期におくことができよう。

鏡について

今回出土した流雲文縁一仙五獣帯鏡は、知見の及ぶ限りでは国内にその同范例は知られていない。産地である中国大陸においても全く同じものは知られていないようである。

獸帯鏡における獸文の形式変化は細線式から半肉彫表現の浮彫式へと移行することが知られているが、浮彫式も文様の周囲に輪郭線を持つものと持たないものとに分けられ、輪郭線を有するものが先行する形式と見られている。細線式獸帯鏡はA.D.64年の紀年銘資料が知られ、輪郭線を有する浮彫式獸帯鏡はA.D.86年の資料が知られている。このことから1世紀後半には浮彫式獸帯鏡が出現してくることが分かる。初期の浮彫式獸帯鏡は四神を含む七像で主文が構成され、のち四神を含まないものも出現してくるようになる。また、輪郭線を有しない浮彫式獸帯鏡は2世紀後半頃から出現するとされる。今回出土した鏡は輪郭線を有し、明確な四神を表現した六像構成であることなどから2世紀前半頃のものと考えられる。また産地は中国大陸南部の浙江省あたりと推定される¹⁾。

さて、宮ノ本遺跡周辺には、これと同時期の原口古墳、御陵古墳からこれより遅れて出現し畿内中央政権の配布によるとされる三角縁神獸鏡が出土している。宮ノ本遺跡は地理的に両者のほぼ中間点にあっており、これらの古墳を造営した集団と宮ノ本古墳群を造営した集団が畿内中央政権あるいは中国大陸とどのような関係を有していたのか大きな問題として提起されよう。ここではその解決の糸口すら見いだす力量は持ち合わせていないが、この理解の一つとして、こうした浮彫式獸帯鏡の研究を行った岡村秀典氏は、山陰地方の「上方作系浮彫式獸帯鏡」を検討し、三角縁神獸鏡に先だって畿内の中央政権を介さずに従前からの流通システムにより大陸・半島から輸入されたものではないかと考える²⁾。この立場からみると宮ノ本古墳群造営集団は12号墳造営以前から大陸と密接なつながりを有しており、鏡自体に長く伝世された形跡のあるところから、弥生時代後期から終末頃に入手し、首長の代替り毎に伝えられ、鏡の保有する機能を失った段階が12号墳造営期であり、畿内とのつながりをあまり保有せず衰退あるいは移動した集団であったのではないと思われる。

しかしながら、北部九州の割竹形木棺を集成、研究した吉留秀敏氏によれば、大宰府を含めたこの地域での割竹形木棺の需用状況は、大和政権によるある政治的背景の上にこの地域の首長層、有力者が中心となって対応した結果を示すものという³⁾。

12号墳造営の背景に相矛盾するような意見のあることを踏まえ、この古墳（群）及び鏡等の出土遺物を検討しなければならないが、12号墳の西側に続く丘陵は平成4年度の調査（第7-2次）で古墳をはじめとする数々の遺構が検出されており、これらの調査・整理の終了によって何らかの回答が得られることに期待し、今回は問題点を提示することで責を果たしたい。

②古墳下層土壌について

IV章（3）で述べたとおり、墳丘除去後に6基の土壌群を確認した。ここではその性格について考え、今後の調査における問題提起としたい。

これらの土壌群は、南尾根丘陵頂部につくられている。出土遺物がほとんどないため時期の

確定はできないが、土層観察から墳丘構築以前につくられたものとする。想定できる土壌群の性格を列挙し、その条件を満たしているかを考えたい。

(1) 「内周溝」的性格の可能性

時期は6世紀前半～後半と下るが、筑前、筑後地方を中心に、周溝と主体部の間に位置し、周溝と同心になる墳丘構築以前に掘削された溝状の遺構が確認されている(内周溝)。この内周溝は今なおその性格を明らかにされていないが、報告者の多くは、墳丘および主体部の築造計画時の規格を示すための溝と考えている⁴⁾。今回確認された土壌群は、前述の通り、丘陵頂部にあるためその立地からここに土壌が集中した可能性は否定できないが、あたかも墳丘に構築された主体部を取り囲むかのようにつくられている。また、この土壌群は土層観察から墳丘構築時には埋まっており、さらに土壌自体はいっきに埋められていると考えられる。これらのことから、今後の資料の増加次第でその可能性は高いものとする。

(2) 祭祀土壌としての可能性

墳丘構築前の祭祀形態として、「もがり」などの祭祀に伴う性格を示す「食物供献形態」⁵⁾と、地山成形後、丘陵平坦面や土壌内において炭化物や焼土が確認されることから、火を焚く行為を示す「火を伴う形態」⁶⁾が知られている。今回確認した土壌群からは前述したように供膳具の出土は無く、また炭化物や焼土も全く確認できなかった。この事から祭祀土壌としての性格は認め難いとする。

(3) 建築物としての可能性

千葉県市原市神門4号墳下層遺構の例⁷⁾から、これらの土壌群を柱穴と考え、喪屋のような性格を示す掘立柱建物を想定することができるが、土壌群のうち土層観察を行った7SK105では柱痕は確認されていない。また、その土壌群の配置からも建物とは認め難いとする。

(4) 埋葬施設としての可能性

掘り方の形状からみて、最も理解しやすいものとする。舌状台地の先端にある丘陵の頂部に位置することから、古墳が築造される以前の遺構がこの位置に集中する可能性は否定できない。この土壌群が12号墳の地山成形後につくられたものであるか、12号墳の築造時期に少し先行するだけであるのかは、旧表土が残存していなかったこともあり断定はできない。しかしながら、今後の調査における様々な問題を提起してくれる資料ではないかと考える。

最近の研究成果によると、古墳時代の壺棺の性格は弥生時代の甕棺墓の伝統上にあるとし、その規模から古墳時代の壺棺の多くを小児棺と考える立場とは別に、成人骨を収めた再葬墓(改葬墓)だと考える説が発表されている⁸⁾。この説を発表した高木正文氏は、熊本県の資料をもとに壺棺の中に成人骨が無規則に収められていたという事実と壺棺の規模から、成人が埋葬されるのは不可能だというこれまでの定説とは異なり、古墳時代の壺棺墓は、箱式石棺墓に伴い骨化した被葬者(成人)を埋葬したものと考えるのである。また、時期は下るものの箱

石棺墓においても同様の事象が確認されている⁹⁾。さらに、古墳時代前半においても改葬が行われていた可能性は十分に考えられるという¹⁰⁾。

今回確認した土壌群からは、棺に使用したと考えられるような土器の出土や、棺の痕跡は確認できなかった。また、土層観察も不十分であったため、採取痕跡の有無も確認できなかった。これにより埋葬施設との断定はできないが、その可能性は十分にあると考える。

以上のように、ここでは今回確認された土壌群の性格を断定することはできなかった。今後、墳丘下層の調査を行う場合、基本ではあるが平面調査を心がけるとともに、採取痕跡の確認、残留脂肪分析等の自然科学分野の検討を併せて行うことが、性格解明への糸口となると考えている。

③土器棺

宮ノ本丘陵における葬法上の問題について

7ST010

これは呑み口式の土器棺墓である。この土器棺は、上棺の口縁部を打ち割り、胴部中央には焼成後の穿孔を施し、下棺には底部穿孔が施されている。これらは、日常容器を甕棺に転用するようになる弥生後期終末期からの甕棺墓の伝統を守るもので、日常容器との区別をするため、甕棺に使用する土器には底部や胴部に焼成後の穿孔を施すものとする。また、下棺の口縁部内面全面と外面の一部に漆の皮膜とみられる黒色の塗料が確認される。これは、弥生時代前期からみられる、甕棺を黒く塗る風習に通じるものとする。

埋置方法においては、宮ノ本丘陵における「ひと」の動きが見受けられる。7ST010では、上棺が下棺に対して小さいため、上棺の下に複合口縁壺の打ち割った口縁部を敷き、枕状のものにして下棺とのバランスを保っていることが確認された¹¹⁾。整理の結果、この枕状の施設となった複合口縁部と地点の異なる12号墳周溝出土の破片が接合したのである (Pla.41)。調査の段階で混入することは皆無と考えられることから、これは橋口達也氏が述べている¹²⁾ように、宮ノ本丘陵に持ってきた複合口縁壺を土器棺埋置段階で打ち割り、使用したことを示している。

7ST100

これは裕口の土器棺墓である。かぶせ蓋（上棺）に使用している壺は口縁部と胴部の半分を打ち割り、7ST010と同様に底部穿孔を施し、壺の胴部片で穿孔部を覆っている。接合の結果、この胴部片は上棺と同一個体であることが確認された (Pla.42)。このことは、7ST100も土器棺埋置段階で宮ノ本丘陵に持ってきた壺を打ち割り、使用したことを示している。

土器棺墓の造営時期について

近年、柳田康雄氏や橋口達也氏による弥生後期以降の甕棺（大形甕）編年がなされ、年代決

定のおおきな寄りどころとなっているが¹³⁾、資料不足のため型式分類を実施するには至っていない。このことから、今回は古墳出現前後の九州における土器群の編年的研究を行った柳田(1991)をもとに土器棺の造営時期について考えてみたい。

7ST010

12号墳西側裾部に構築された土器棺である。上棺に使用された甕は口縁部を欠損しているものの、胴部内面を頸部内面屈曲部からヘラケズリで薄く仕上げ、肩部を張り出す。また、肩部外面に横ハケを施し、その後頸部から肩部までナデ消しを行っている。下棺に使用された複合口縁壺は、胴部外面にタタキ痕を残すが、立野遺跡A地区11号方形周溝墓出土遺物¹⁴⁾、太刀洗町温水遺跡溝15出土遺物¹⁵⁾、西新町遺跡D地区第1号堅穴住居跡出土遺物¹⁶⁾に近似する資料を求めることができる。西新町遺跡D地区第1号堅穴住居跡出土遺物は、胴部以下の器形および調整にかなりの類似性を認めることができ、それは口縁端部の処理でも認められる。また、立野遺跡A地区11号方形周溝墓出土のものは、器形および調整ともかなり近似し、報告者は布留式古相段階併行期と考えている。さらに温水遺跡溝15出土のものも供伴遺物から古相段階併行期と考えている。以上のことから、7ST010土器棺墓はⅡa～Ⅱb期に該当すると考える。この時期は布留式古相段階～典型段階併行期にあたり、絶対年代は3世紀末から4世紀前半と考えられている。

7ST100

12号墳の墳丘を切り込んでつくられた土器棺である。上棺、下棺ともに底部は尖り底を呈し、底部外面にヘラケズリの痕跡を残す。上棺は口縁部を欠損するため不明であるが、下棺の口縁部は受け部の上面に複合口縁を接合し、その接合部に三角突帯を貼付している。肩部外面には横方向の細かいハケ目を施し、その後、頸部から肩部までナデ消しを行っている。また、胴部最大径が胴部上半に位置する。上棺は底部外面にヘラケズリを残し、その後、内外面に縦方向のハケ目を施す。以上のことから、複合口縁大形壺を使用する土器棺がⅡa期に出現する事を踏まえて、7ST100土器棺墓はⅡa期に該当すると考える。この時期は布留式古相段階併行期にあたり、絶対年代は3世紀末と考えられている。

④窯跡

10号窯

南尾根北斜面で確認された10号窯跡は、まとまった遺物は検出されていないもののすべての地点で出土している若干の遺物に、年代的開きは少ないものと考えられる。近似する資料は本遺跡第4次調査で検出した9号窯跡の資料があり、それらは大宰府史跡SD2340(天平6年銘木簡供伴)出土資料との比較から、8世紀前半のある時期と考えられている。10号窯の資料もこれと同じ遺跡ということも含めて、大差無い時期に捉えることができよう。

7SX030

7SX030灰原出土資料は、墳墓からの混入分を除いても若干の混在が認められる。これまでの研究ではそれぞれの年代観は、蓋1（かえりを有する資料）が7世紀後半、蓋a3が8世紀前半、蓋c2が7世紀末から8世紀初頭と考えられている。蓋c3のうち口径が大きく端部の断面形状が明瞭な三角形を示すものは8世紀前半の範囲で捉えられるが、やや口径の小さいものは8世紀後半まで下らせて考えられる資料である。坏cでは高台が小さくなる傾向を示しているが、同様な資料が大宰府史跡SD2340に見られることから8世紀前半に捉えて差し支えなかるう。これに対し坏aは8世紀後半まで下らせて考えておきたい。同時に検出した土師器坏の時期も8世紀後半と考えられ、これらが同時に存在していても問題はない。

さて、これらの資料を生活遺跡での出土傾向と照らし合わせてみると蓋1、c2はしばしば混在して出土し、蓋a3、c3の口径の大きい一群にc2が時に混在して検出される傾向がある。c3で口径の小さい一群はやはり一定の時間差を考慮すべき資料と思われる。少ないながら出土量の点を含めてみると、蓋c3の口径の小さい一群の時期とそれ以外の一群の時期とに大きくまとめることが可能と思われる、前者は広義の8世紀後半の範疇で捉えられ、後者は8世紀前半の早い時期と考えられる。このように土器群に若干の時間差を認める必要性があることから、7SX030は2基以上の窯の灰原が重なりあって形成された可能性を考えておきたい。

⑤墳墓群について

墳墓の造営時期について

以下、各墳墓の造営時期について述べる。年代観は山本(1990)による。

7ST002

12号墳東側裾部で確認した木棺墓である。棺内の供献土器よりⅦ期と考える。また、この供献土器には須恵器の長頸壺が含まれ、その器形および底部処理から篠窯産と考える¹⁷⁾。

7ST003

南尾根丘陵部に位置する木棺墓もしくは木囲土壙墓である。棺上の供献土器よりⅦ期と考える。この供献土器には黒色土器碗の他、完形の白磁碗が含まれる。

7ST015

12号墳西側裾部で確認した木棺墓である。供献遺物は八稜鏡1面、黒色土器鉢1点である。この鉢は類例が乏しく時期の確定は難しいが、9世紀後半を前後する時期に考えておきたい。

7ST035

南尾根南斜面下位で確認した木棺墓である。棺上の供献土器よりⅦ期と考える。供献土器はすべて土師器坏aで構成される。

7ST040

南尾根南斜面下位で確認した木棺墓である。棺上の供献土器よりⅧ期と考える。供献土器はすべて土師器で構成されるが、碗cも含まれる。

7ST050

南尾根南斜面下位で確認した木棺墓である。棺上の供献土器よりⅧ～Ⅸ期と考える。この供献土器には黒色土器碗が含まれる。土師器坏aの法量はⅧ期の特徴を示しているが、口縁端部が外反する点でⅨ期の新しい特徴をも併せもっているといえる。したがってⅧ期からⅨ期にかけての転換期に造営された墳墓と考えておきたい。

7ST075

北尾根南斜面中位で確認した木蓋土壙墓である。蓋上の供献土器よりⅧ期と考える。供献土器は土師器坏aで構成される。

7ST085

北尾根南斜面中位で確認した木蓋土壙墓である。蓋上の供献土器よりⅦ期と考える。供献土器は土師器で構成されるが、碗cも含まれる。

7ST090

北尾根南斜面中位で確認した木蓋土壙墓である。蓋上の供献土器よりⅧ期と考える。この供献土器には黒色土器碗が含まれる。

山本(1990)によると、Ⅶ期は9世紀中頃～後半、Ⅷ期は9世紀後半～10世紀初頭、Ⅸ期は10世紀前半～中頃と考えられている。

宮ノ本丘陵における選地と墓制について

以上のことから今回、宮ノ本丘陵で確認した墳墓群はⅦ・Ⅷ期と近接した時期に集中して営まれたということが分かる。しかし、ほぼ同時期に営まれた墳墓群でありながら、南尾根につくられた墳墓はすべて木棺墓、北尾根につくられた墳墓はすべて木蓋土壙墓と尾根を境に異なる墓制を呈している。さらに、南尾根においても丘陵頂部につくられた墳墓と南斜面下位につくられた墳墓とでは、その供献遺物に差異が認められる。狭川(1990)・中島(1992)によると、古代においては墳墓への供献形態の差異により埋葬された人物の階層差を認めることができるという。

このことから南尾根丘陵部、南斜面下位、北尾根中位という集団の差異を認めることができ、これはそのまま階級差につながる可能性をもつと考える。さらに北尾根南斜面中位で確認した7ST075は、蓋上に刀子の切先部を供献する。整理の結果、この刀子片は南尾根南斜面下位で確認した7SX030出土の刀子片と接合したのである。7SX030はその上面から墳墓が切り込んでおり、調査の段階で墳墓の資料が7SX030に遺物が混入してしまった事実が認められた。このことから出土した刀子片は南斜面下位の墳墓(未知のものを含む)に伴う遺物であったとみられ、北尾根の集団と南尾根の集団との関わりを示唆する遺物と考えることも可能である。刀子

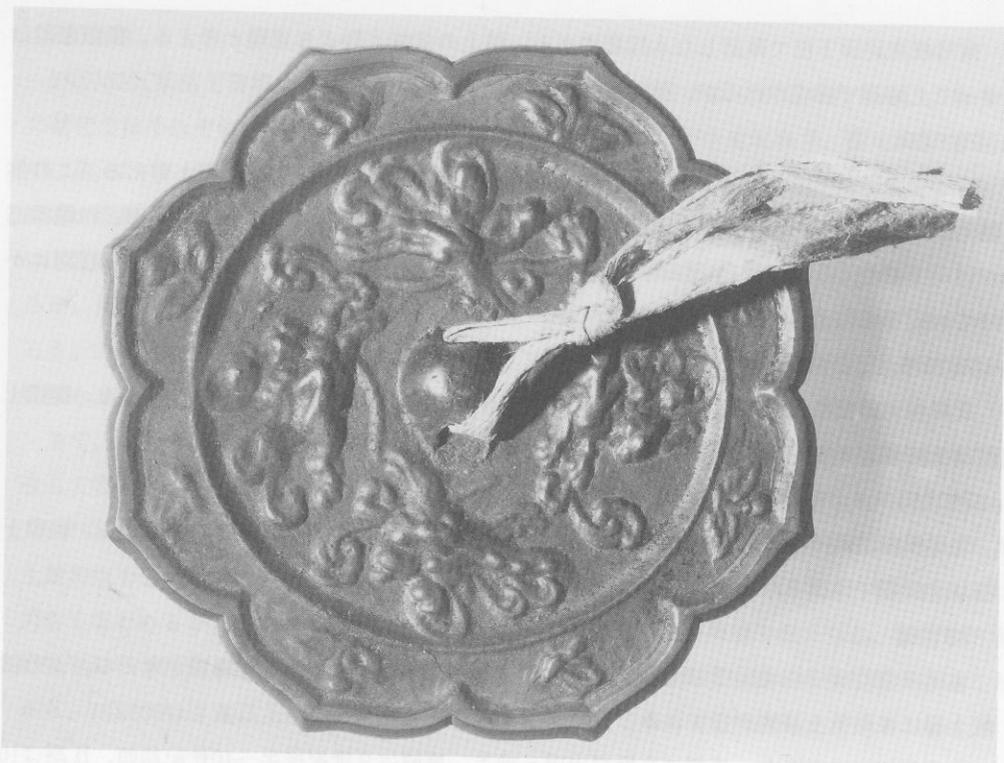


Fig. 73 正倉院宝物第34号鏡 宮内正発第71号により掲載許可済



Fig. 74 正倉院宝物第35号鏡 宮内正発第71号により掲載許可済

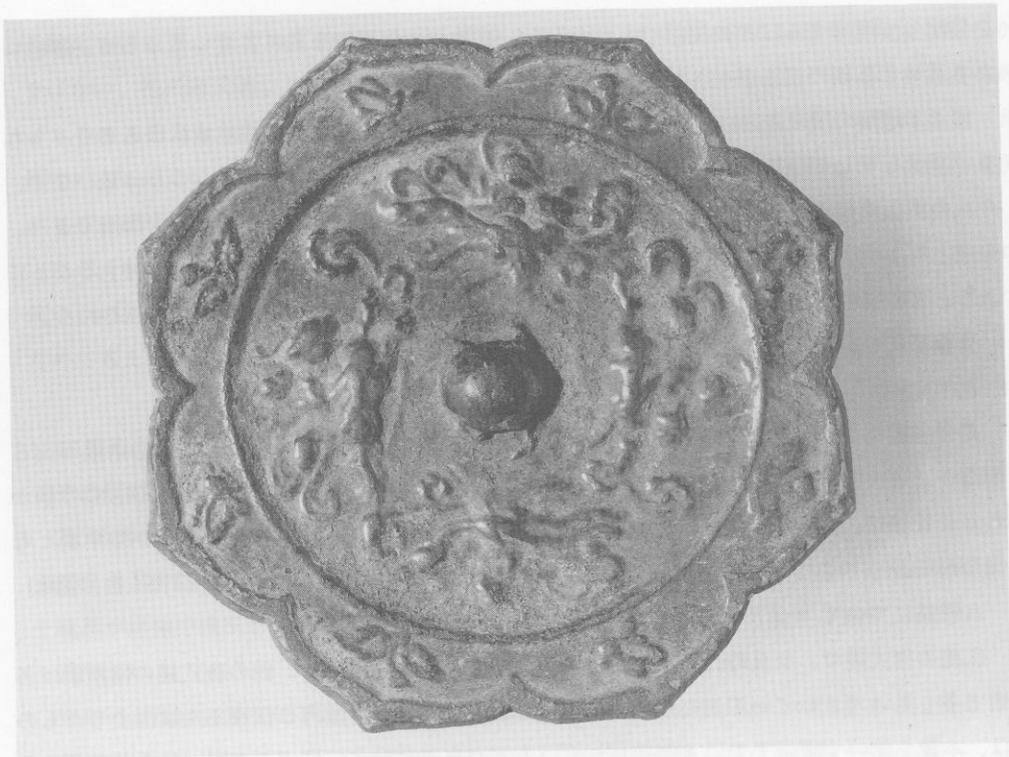


Fig. 75 正倉院宝物第36号鏡 宮内正発第71号により掲載許可済



Fig. 76 長岡京出土鏡 第0210092号により掲載許可済

を分配して埋葬するほどの関係でありながら、墓地および墓制を異にしていることは、階級による選地と墓制の規制がなされた可能性があると考えられる。

宮ノ本遺跡の墳墓群は、その出土遺物に陶磁器や金属器を含むなど他地域にはあまりみられない状況を呈している。立地の点から大宰府に関係した官人の奥津城であることは疑いなく、今次の調査ではその中でも選地や埋葬方法によって階層の差異を認める可能性を指摘できた。今後、第1次調査以来の宮ノ本遺跡全体や近接する前田遺跡の墳墓群等を併せて検討することにより、大宰府都市周辺に営まれた当時の墳墓から様々な事象が解明できるものと思われる。

火葬墓について

7ST025

蔵骨容器に使用された須恵器壺は、岐阜県老洞古窯跡2号窯出土遺物¹⁸⁾、愛知県稲田山古窯跡1・4・12・13号窯出土遺物¹⁹⁾、法隆寺東院出土遺物²⁰⁾などに類例を認める。このことから本蔵骨器は、美濃産の須恵器であることが知られると共に、年代は8世紀前半から中頃と考えられる。

(以上 塩地)

八稜鏡について

広義の唐式鏡で、奈良時代以降国内で再范铸造されることが多く、他の唐式鏡の同型鏡は各地で多く見いだされている。これと同じ文様を配する同型鏡で国内に伝世または出土したものは、本鏡を除いて現在までに4例知られている。奈良正倉院に伝世する3面(仙人花虫背八角鏡と呼称される)と京都長岡京跡から出土した1面である。この4面に東京国立博物館蔵の中国出土品と天津市蔵品を含めて、文様や铸造の詳細な分析が戸原和人氏によってなされてお²¹⁾り、ここで再論する必要性はほとんどない。よってここでは、今回出土した鏡と上記6面の鏡を比較して気付いたことを簡単に列記するにとどめたい。

本鏡を含めた7面は、再范铸造された同型鏡で今回の出土品が最も文様が不鮮明である。また、法量も最も小さく、また重量も軽い(Tab.2)。法量は天津市のものを100とした場合に本鏡は90.9%、これまでの最小の法量であった正倉院鏡第36号と比較しても97.8%という小ささである。文様の不鮮明さと併せてかなりの回数の踏み返しが実施された結果の産物であることが理解される。

さて、分析の結果では国内生産品であるうえに、官営の工房で製作されたものではないとい

Tab.2 八 稜 鏡 の 法 量

	1.宮ノ本出土	2.長岡京出土	正 倉 院 所 蔵			中 国 出 土	
			3.第36号	4.第35号	5.第34号	6.東博蔵	7.天津市蔵
長 径	11.0cm	11.5cm	11.25cm	11.4cm	11.45cm	11.95cm	12.1cm
重 量	172.2 g	291.5 g	201.5 g	234.6 g	257.2 g	361 g	—

う結果を得た²²⁾。私営の工房での生産と理解されるが、その具体的な位置や組織像は明らかではない。他の唐式鏡における同型鏡分布の研究では、私設の工房は全国で核となる地点があってその主体者との関係で分有関係が成立している可能性の指摘がある²³⁾。本鏡の場合、九州内のある地点にそうした工房を想定することになるが、平安期以降中世にかけての鑄造遺構がしばしば検出される大宰府もそうした工房を想定できる一つの地域である。

ただ、中央から官人の出入りが頻繁な大宰府であるだけに、平城京、平安京といった都から何らかの要因で持ち込まれた可能性も捨てきれない。今後の資料増加による検討を待つてあらためて考えてみたい。

(以上 狭川)

その他の遺構について

7SX005

龍泉窯系青磁碗から13世紀中頃以降の所産とみられる。丘陵部においてこの時期に木棺墓や土壙墓が単体で検出されることが稀にあり、これもその一つである可能性が強い。

7SX007

堆積の年代は近世まで下るものと考えられる。古墳の北裾が削られこの位置まで山道としてつながっていたところから、道を造成した際に古墳の周溝は失われた可能性が強い。

7SX008

土師器は11世紀後半のもので、今回の調査ではこれと同一時期のものは他になく、丘陵頂部で何等かの祭祀行為でも行ったものであろうか。具体的な性格は明らかにできていない。

7SX011

造成の時期を具体的に解明することはできていないが、出土遺物は近世のものまで含まれており、またこの段の西側延長部分に地籍が墓地となっている部分があることから、近世に構築された可能性が有力である。ただ7ST003の位置が段造成の直上であることから、遡ってもこの時期（9世紀中頃から後半）以上には考えられない。

7SX045

窯に付帯する焼土壙の可能性を考えておきたい。9号窯跡の調査では同様に灰原の下層から検出されており、10号窯では焼けていないが7SK009とした土壙が灰原下位に存在している。9号窯跡報告に際して疑問点の提示もなされており²⁴⁾、即断は避けなければならない。

7SX080

土師器から9世紀中頃から後半と考えられる。北尾根一連の墳墓群の一つとしても矛盾のない時期である。

(参考文献)

- 柳田康雄 1991 「土師器の編年 九州」『古墳時代の研究』6
山本信夫 1990 「統計上の土器—歴史時代土師器の編年研究によせて—」『乙益重隆先生古希記念 九州上代文化論集』
狭川真一 1990 「古代都市・大宰府の検討—墳墓からのアプローチ—」『古文化談叢』23
中島恒次郎 1992 「大宰府における椀形態の変遷」『中近世土器の基礎研究』Ⅷ 日本中世土器研究会

(註)

- 1) 岡村秀典氏の御教示による
- 2) 岡村秀典 「浮彫式獣帯鏡と古墳出現期の社会」『出雲における古墳を探る』1992 出雲考古学研究会
- 3) 吉留秀敏 「北部九州の前期古墳と埋葬主体」『考古学研究』144 1990 考古学研究会
- 4) 沢田康夫 『観音山古墳』1982 那珂川町教育委員会
吉留秀敏 『堤ヶ浦古墳群』1987 福岡市教育委員会
丸山康晴 『日拝塚古墳』1981 春日市教育委員会
佐田茂・伊崎俊秋 『立山山古墳群』1983 八女市教育委員会
平ノ内幸二 『宇美観音浦』1981 宇美町教育委員会
- 5) 吉留秀敏 『堤ヶ浦古墳群』1987 福岡市教育委員会
- 6) 小田和利 『鬼の枕古墳』1987 甘木市教育委員会
- 7) 田中新史 「市原市神門4号墳の出現とその系譜」『古代』63号 1977
- 8) 高木正文 「古墳時代の再葬」『森貞次郎博士古希記念 古文化論集』下巻 1982
- 9) 白石太一郎ほか 『葛城・石光山古墳群』(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第31冊) 1976 奈良県立橿原考古学研究所
- 10) 白石太一郎氏の御教示による
- 11) 類例として大分市賀来中学校遺跡5号壺棺があげられる。
坪根伸也 『賀来中学校遺跡』1992 大分市教育委員会
- 12) 川述昭人 『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXV 1978 福岡県教育委員会
- 13) 柳田康雄 「三・四世紀の土器と鏡」『森貞次郎博士古希記念 古文化論集』下巻 1982
橋口達也 「甕棺の編年の研究」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXXI 中巻 1979 福岡県教育委員会
- 14) 児玉真一 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』5 1984 福岡県教育委員会
- 15) 小田和利氏の御教示による
- 16) 池崎讓二ほか 『福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告』Ⅱ 1982 福岡市教育委員会
- 17) 伊野近富氏の御教示による。
- 18) 『老洞古窯跡発掘調査報告書』1981 岐阜市教育委員会
- 19) 『稲田山古窯跡群発掘調査報告書』1982 各務原市教育委員会
- 20) 巽淳一郎 「陶磁(原始古代編)」『日本の美術』12 1985
- 21) 戸原和人 「長岡京出土の八稜鏡」『長岡京古文化論叢』1986
- 22) 第Ⅵ章参照
- 23) 杉山洋 「唐式鏡の生産と流通」『生産と流通の考古学』(横山浩一先生退官記念論文集Ⅰ) 1989
- 24) 中島恒次郎 『大宰府・佐野地区遺跡群Ⅱ』1991 大宰府市教育委員会

別表1 土師器・須恵器計測表

底のナデ有○無× B: 板状圧痕の有○無×

7ST002

器種	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土師器 坏a(ヘラ)	1	12.3	3.6	7.0	○	○
	2	12.2	3.6	7.6	○	○
	3	12.4	2.4	8.7	○	○
須恵質土器 坏(糸)	4	9.0	20.1	6.7		

7ST003

器種	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土師器 坏a(ヘラ)	5	11.0	2.4	7.4	○	○
	6	11.1	2.5	7.2	○	○
	7	11.4	2.7	7.3	○	○
	8	12.6	3.4	7.5	○	○
白磁 椀	9	12.2	4.1	5.1	×	×
黒色土器A 椀c	10	15.2	5.8	8.0	×	○

7ST015

器種	図版番号	口径	器高	底径	A	B
黒色土器A 椀a	11	11.5	6.2	7.4	×	○

7ST035

器種	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土師器 坏a(ヘラ)	1	10.9	2.8	6.0	?	?
	2	10.9	2.9	6.2	?	○
	3	11.2	2.5	6.7	○	?
	4	11.2	2.8	6.8	○	○
	5	11.4	2.5	6.5	?	○

7ST040

器種	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土師器 坏a(ヘラ)	6	11.1	2.4	6.8	○	○
	7	11.3	2.7	8.1	○	×
土師器 中椀c(ヘラ)	8	12.1	4.1	7.0	○	×
	9	12.8	4.3	7.4	○	×

7ST050

器種	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土師器 坏a(ヘラ)	10	11.4	2.6	8.2	?	○
	11	11.6	2.6	7.6	?	○
	12	11.6	2.6	7.9	○	×
	13	11.6	2.8	8.3	?	?
	14	11.6	2.9	8.3	○	?
	15	11.7	2.5	8.4	○	○
	16	12.0	2.5	8.1	?	×
黒色土器A 椀a	17	15.7	6.6	8.8	×	?

7ST075

器種	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土師器 坏a(ヘラ)	1	11.4	2.5	7.8	?	○
	2	11.5	3.0	7.9	○	×
	3	11.9	2.4	8.3	○	○
	4	12.2	2.9	8.7	○	○
	5	12.5	2.5	7.4	○	○
土師器 坏c(ヘラ)	6	12.4	4.6	7.2	○	○
	7	13.1	4.6	7.4	?	?

7ST085

器種	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土師器 坏a(ヘラ)	8	11.9	3.3	6.6	○	×
土師器 中椀c(ヘラ)	9	12.2	4.4	7.0	○	×

7ST090

器種	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土師器 坏a(ヘラ)	10	10.7	2.5	7.7	?	○
	11	11.4	2.5	6.9	?	○
黒色土器A 椀a(?)	12	14.7	6.7	8.9	×	?

7SX008

器種	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土師器 小皿a(ヘラ)	2	10.4	1.3	7.5	○	×
	3	11.0	0.7	9.0	○	×
	4	11.0	1.2	8.7	○	○
土師器 丸坏a(ヘラ)	5	14.6	3.5	6.9	○	×

7SX011

器種	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土師器 椀c(ヘラ)	6	—	—	8.5	?	×

7SX080

器種	図版番号	口径	器高	底径	A	B
土師器 坏a(ヘラ)	9	12.4	3.6	6.6	○	×

別表2 鉄製品計測表

A: 木質変化点・上部からの計測値

B: 木質変化点・下部からの計測値

() は欠損試料

> は釘本体の残存長がサビ等で不明なもの

7ST002

遺物番号	種別	長さ	幅1	幅2	A	B
Fig. 45-12	釘	4.5+	0.75	0.45	-	-
13	釘	5.8+	0.3	0.3	(3.8)	(1.7)
14	釘	6.2>	0.6	0.25	(1.6)	4.7
15	釘	4.7+	0.3	0.3	2.7	(1.8)
16	釘	5.25+	0.5	0.4	-	-
17	釘	4.7+	0.45	0.4	(2.2)	(2.5)
18	釘	7.3+	0.4	0.3	-	-
19	釘	7.4>	0.4	0.4	(1.8)	5.6
20	釘	5.5>	0.5	0.65	(2.5)	3.0
21	釘	5.0+	0.6	0.35	-	-
22	釘	5.4>	0.3	0.3	-	-
23	釘	4.1>	0.25	0.2	-	-
24	釘	3.9>	0.45	0.4	-	-
25	釘	2.2+	0.3	0.25	-	-
26	釘	3.2+	0.3	0.3	-	-
27	釘	3.4+	0.3	0.25	-	-
28	釘	3.1+	0.4	0.4	(2.0)	(1.2)
29	釘	1.45>	0.4	0.25	-	-
30	釘	2.1+	0.25	0.25	-	-
31	釘	2.7+	0.4	0.4	-	-
32	釘	3.3+	0.5	0.5	(2.0)	(1.1)
33	釘	2.3+	0.4	0.6	-	-
34	釘	2.4+	0.8	0.5	-	-
35	釘	3.5+	0.3	0.25	(2.7)	(1.0)
36	釘	4.2+	0.6	0.3	-	-
37	釘	4.8+	0.3	0.3	(3.0)	(1.75)
38	釘	3.5+	0.3	0.4	(0.9)	(2.4)
39	釘	3.7+	0.8	0.5	-	-

7ST003

遺物番号	種別	長さ	幅1	幅2	A	B
Fig. 45-40	釘	5.0+	0.4	0.35	-	-
41	釘	1.5+	0.5	0.3	-	-

7ST015

遺物番号	種別	長さ	幅1	幅2	A	B
Fig. 45-42	釘	3.55+	0.4	0.4	-	-
43	釘	3.1+	0.5	0.4	-	-
44	釘	1.8+	0.45	0.4	-	-
45	釘	1.8+	0.35	0.3	-	-
46	釘	2.85+	0.4	0.5	-	-
47	釘	5.2+	0.4	0.3	-	-

7ST035

遺物番号	種別	長さ	幅1	幅2	A	B
Fig. 52-18	釘	2.0+	0.4	0.4	-	-
19	釘	2.3+	0.4	0.35	(1.2)	0.85
20	釘	2.4+	0.3	0.35	-	-
21	釘	3.1+	0.35	0.3	-	-
22	釘	3.0+	5.5	5.0	-	-
23	釘	2.7+	0.45	0.4	-	-
24	釘	2.2+	0.3	0.35	-	-
25	釘	2.8+	0.5	0.5	-	-
26	釘	2.5+	0.3	0.4	-	-
27	釘	0.7+	0.4	0.4	-	-
28	釘	1.0+	0.35	0.35	-	-
29	釘	1.6+	0.3	0.2	-	-
30	釘	1.1+	0.5	0.4	-	-
31	釘	5.2>	0.3	0.3	-	-
32	釘	2.9+	0.7	0.5	-	-
33	釘	3.0+	0.45	0.45	-	-
34	釘	2.8+	0.4	0.4	-	-
35	釘	3.1+	0.4	0.4	-	-
36	釘	4.0+	0.4	0.4	-	-
37	釘	3.6+	0.4	0.4	0.2	(3.6)
38	釘	3.55+	0.3	0.3	-	-
39	釘	3.4+	0.4	0.5	-	-
40	釘	3.75+	0.4	0.4	-	-
41	釘	5.0+	0.5	0.4	2.2	(2.7)
42	釘	3.1+	0.5	0.4	1.65	(1.2)
43	釘	2.15+	0.3	0.4	-	-

7ST040

遺物番号	種別	長さ	幅1	幅2	A	B
Fig. 52-44	釘	1.4+	0.3	0.4	-	-
45	釘	1.6+	0.3	0.4	-	-
46	釘	1.8+	0.4	0.4	-	-
47	釘	1.3+	0.4	0.4	-	-
48	釘	0.8+	0.3	0.3	-	-
49	釘	1.3+	0.35	0.3	-	-
50	釘	1.4+	0.35	0.35	-	-
51	釘	1.0+	0.3	0.3	-	-
52	釘	2.8+	0.4	0.35	-	-
53	釘	2.9+	0.25	0.15	-	-
54	釘	2.9+	0.4	0.3	-	-
55	釘	1.85+	0.4	0.45	-	-

7ST040

遺物番号	種別	長さ	幅1	幅2	A	B
56	釘	4.3+	0.45	0.45	—	—
57	釘	4.0+	0.35	0.5	2.5	(1.3)
58	釘	3.9+	0.4	0.35	(1.3)	2.25
59	釘	3.4+	0.3	0.35	—	—
60	釘	3.2+	0.5	0.5	—	—
61	釘	4.6+	0.5	0.4	(1.5)	(3.0)
62	釘	4.9+	0.4	0.4	—	—
63	釘	6.2+	0.4	0.4	—	—
64	釘	2.7+	0.35	0.35	—	—
65	釘	3.2+	0.6	0.3	—	—
66	釘	3.6+	0.4	0.35	1.9	(0.8)
67	釘	4.1+	0.3	0.3	—	—
68	釘	3.6+	0.35	0.25	—	—
69	釘	3.7+	0.4	0.35	—	—
70	釘	1.4+	0.4	0.4	—	—
71	釘	3.6+	0.3	0.25	—	—

7ST050

遺物番号	種別	長さ	幅1	幅2	A	B
Fig. 53-72	釘	1.3+	0.45	0.4	—	—
73	釘	1.2+	0.35	0.5	—	—
74	釘	0.85+	0.4	0.4	—	—
75	釘	1.2+	0.5	0.4	—	—
76	釘	1.5+	0.4	0.25	—	—
77	釘	2.7+	0.3	0.3	—	—
78	釘	2.45+	0.45	0.3	—	—
79	釘	2.5+	0.3	0.25	—	—
80	釘	2.5+	0.3	0.25	—	—
81	釘	1.9+	0.4	0.25	—	—
82	釘	5.1+	0.35	0.55	—	—
83	釘	6.8>	0.25	0.35	1.6	5.0
84	釘	6.8>	0.75	0.75	2.15	4.4
85	釘	3.7+	0.25	0.3	—	—
86	釘	3.5+	2.5	3.5	2.2	(1.0)
87	釘	2.8+	0.6	0.4	—	—
88	釘	1.6+	0.4	0.35	—	—
89	釘	4.8+	0.3	0.35	2.2	(2.4)
90	釘	5.1+	0.25	0.3	—	—
91	釘	5.5+	0.6	0.7	—	—
92	釘	6.3+	0.4	0.4	—	—
93	釘	7.5>	0.9	0.8	2.3	5.2
94	釘	2.9+	0.3	0.3	0.8	(1.6)
95	釘	1.3+	0.5	0.5	—	—

7ST075

遺物番号	種別	長さ	幅1	幅2	A	B
Fig. 57-13	刀子	4.7+	0.7	2.2	—	—
14	刀子	9.2+	1.1	0.4	—	—
15	刀子	14.7+	1.6	0.4	—	—

7ST085

遺物番号	種別	長さ	幅1	幅2	A	B
Fig. 57-16	釘	6.65+	0.6	0.55	—	—
17	刀子	3.0+	0.75	0.35	—	—

7SX005

遺物番号	種別	長さ	幅1	幅2	A	B
Fig. 60-1	釘	4.2+	0.3	0.3	—	—
2	釘	4.95+	0.4	0.4	—	—

太宰府・佐野地区遺跡群Ⅳ

—— 宮ノ本遺跡第7-1次調査 ——

— 太宰府市の文化財 第21集 —

平成5年3月25日

発行 太宰府市教育委員会

太宰府市観世音寺86

本文印刷 福岡印刷株式会社

福岡市博多区東那珂1丁目10-15

図 版
(plate)



南尾根調査区全景



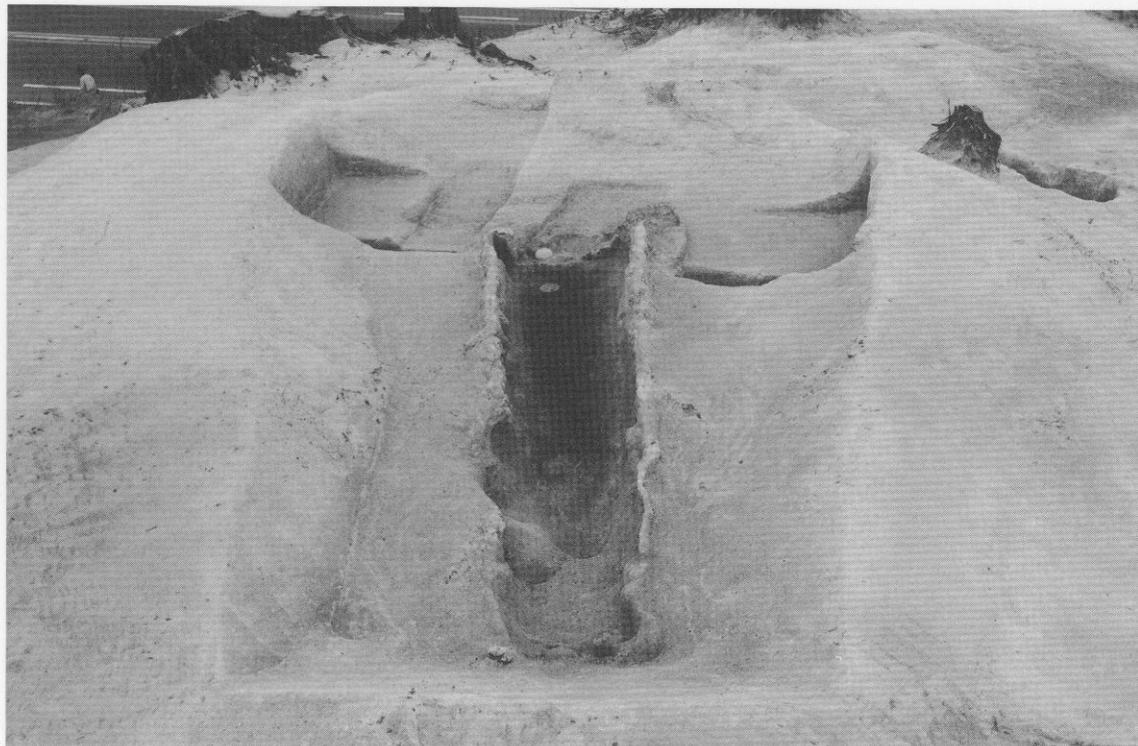
12号墳調査前状況（南から）



同上（西から）



12号墳全景（航空写真）



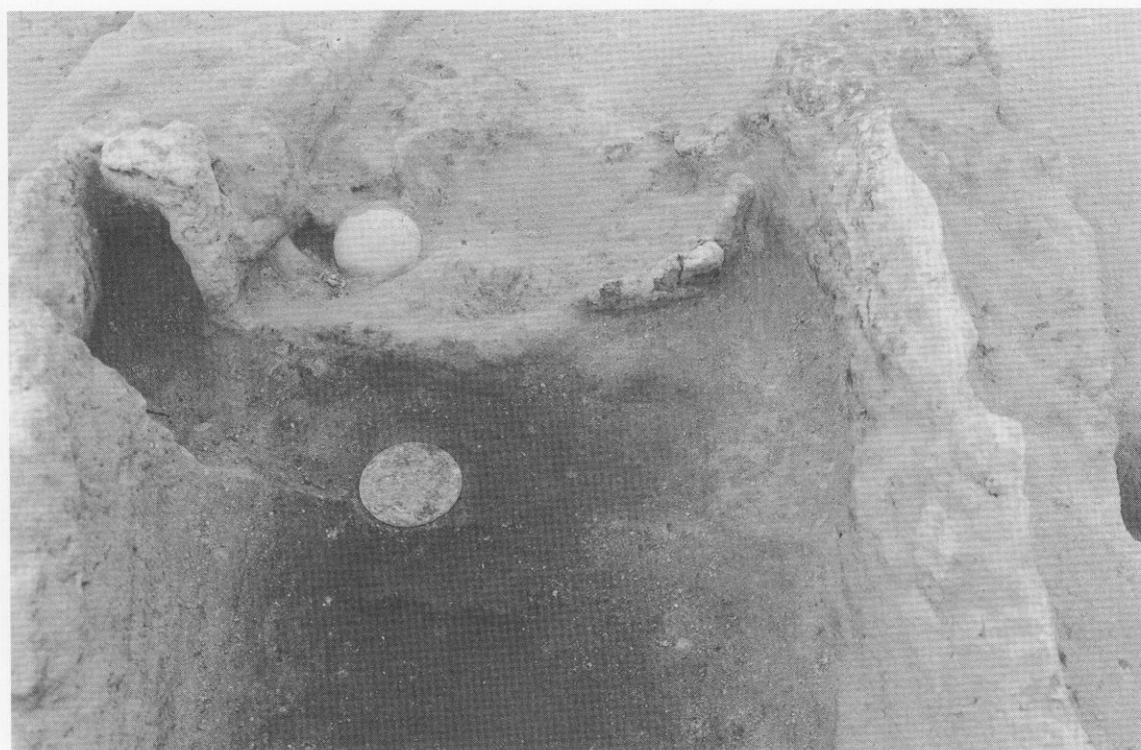
12号墳主体部全景（西から）



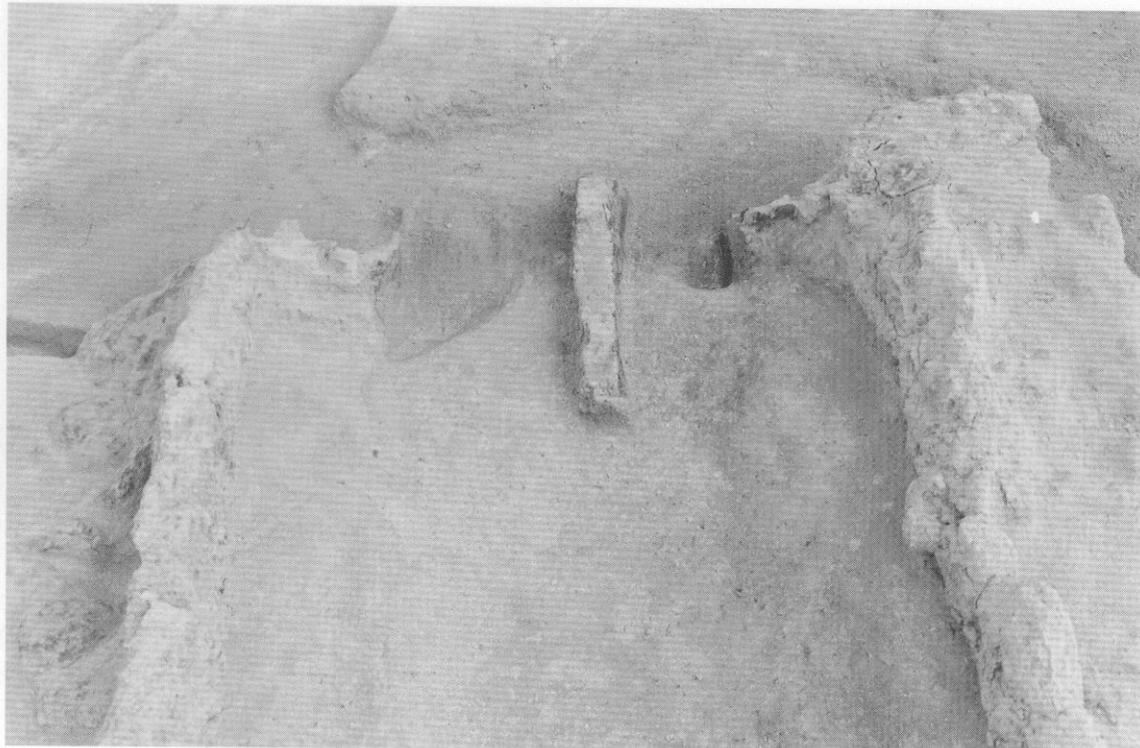
12号墳主体部完掘状況（西から）



主体部鏡検出状況（東から）



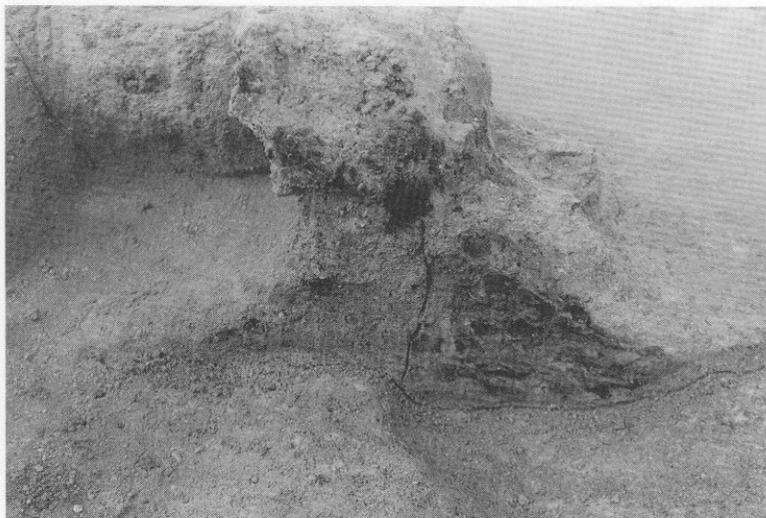
主体部鏡・土器検出状況（西から）



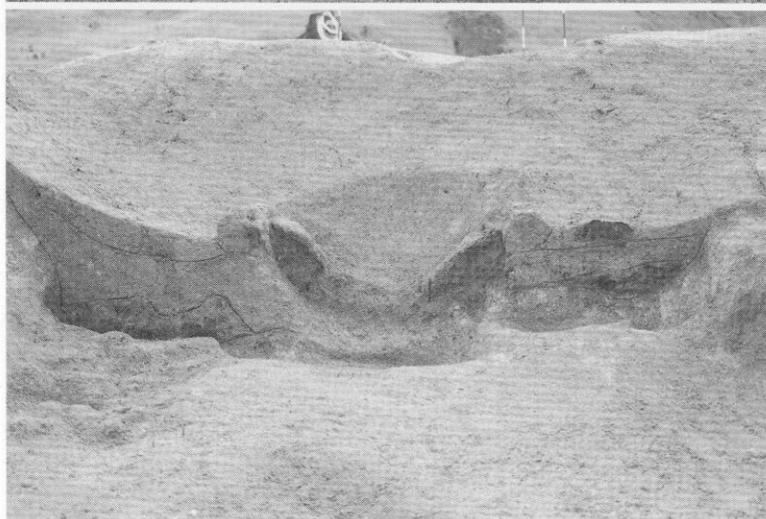
主体部東小口部と棺下の小ビット（西から）



主体部西小口部検出状況（東から）



東小口部粘土断ち割り状況（南から）



西小口部断ち割り状況（東から）



東小口部にたおれ込んだ小口粘土
（断ち割り時の写真・北から）



主体部隅に設けられた階段状遺構（南から）



主体部内の土壌（北から）



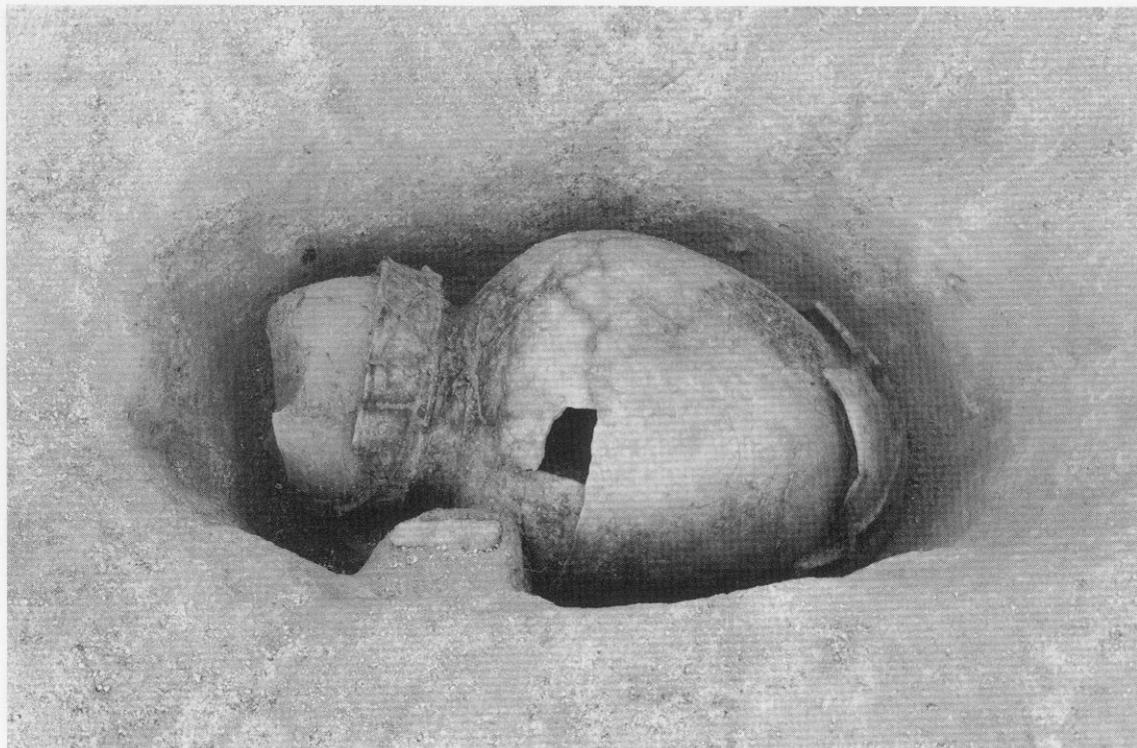
墳丘除去後の土層観察（東から）



同上



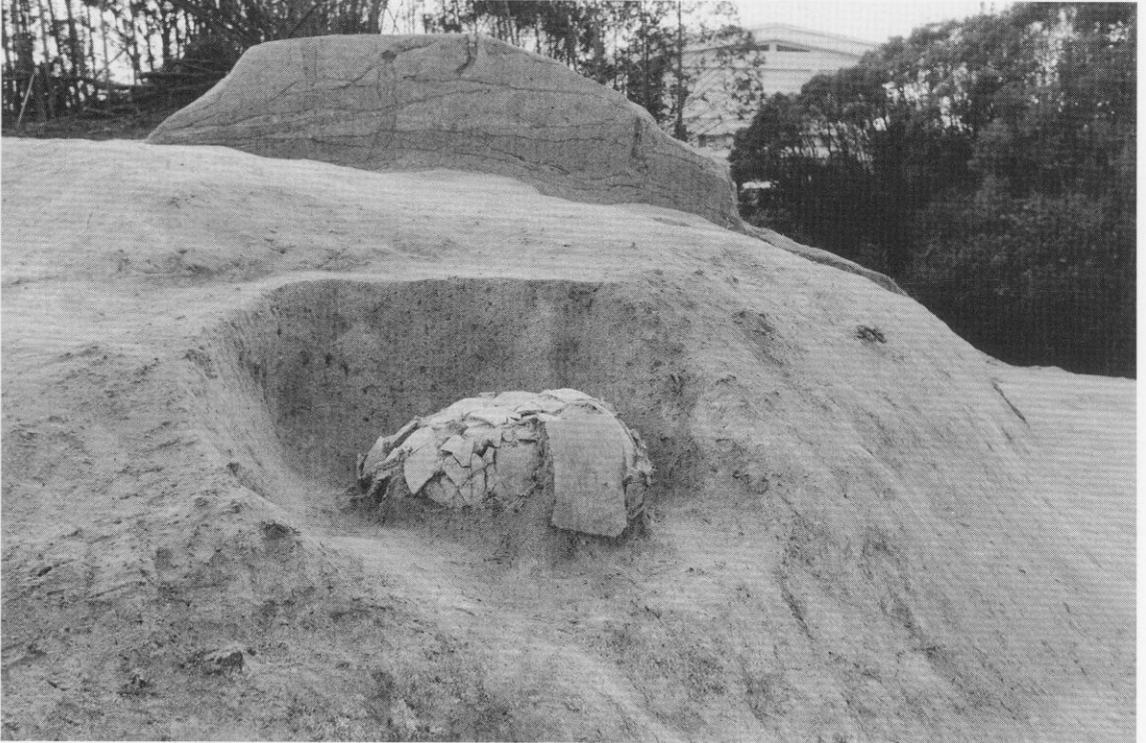
12号墳墳丘除去状況（航空写真、下層の土壙が並ぶ）



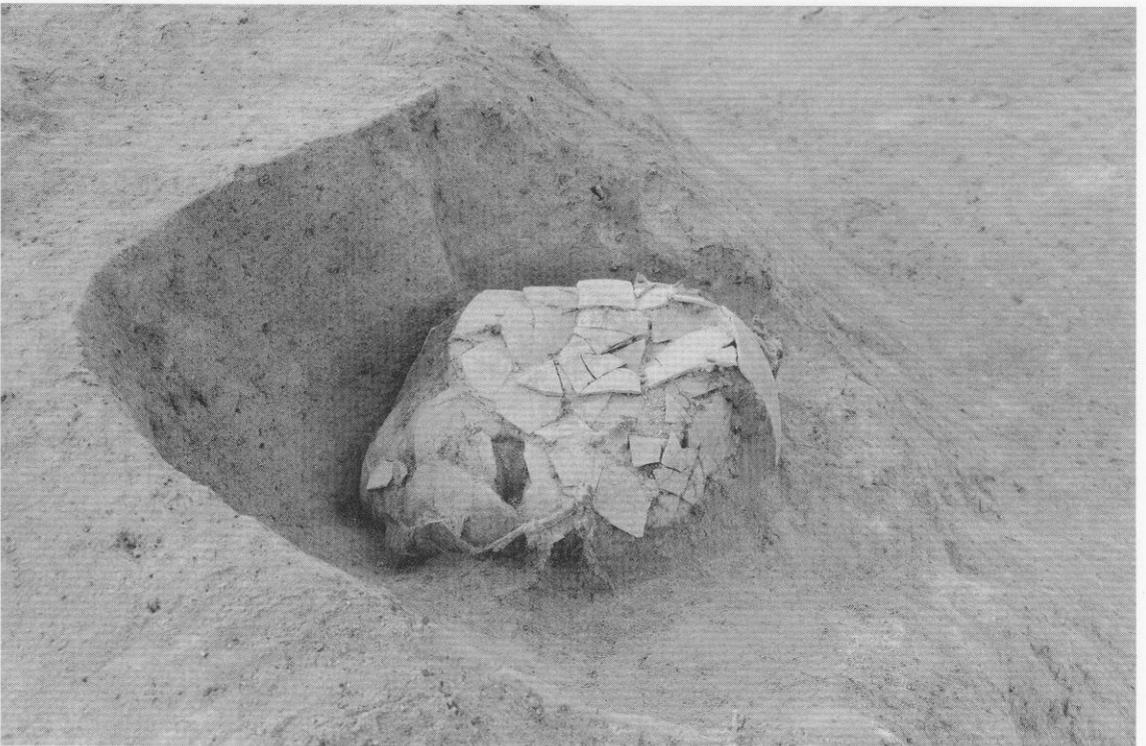
甕棺7ST010 (西から)



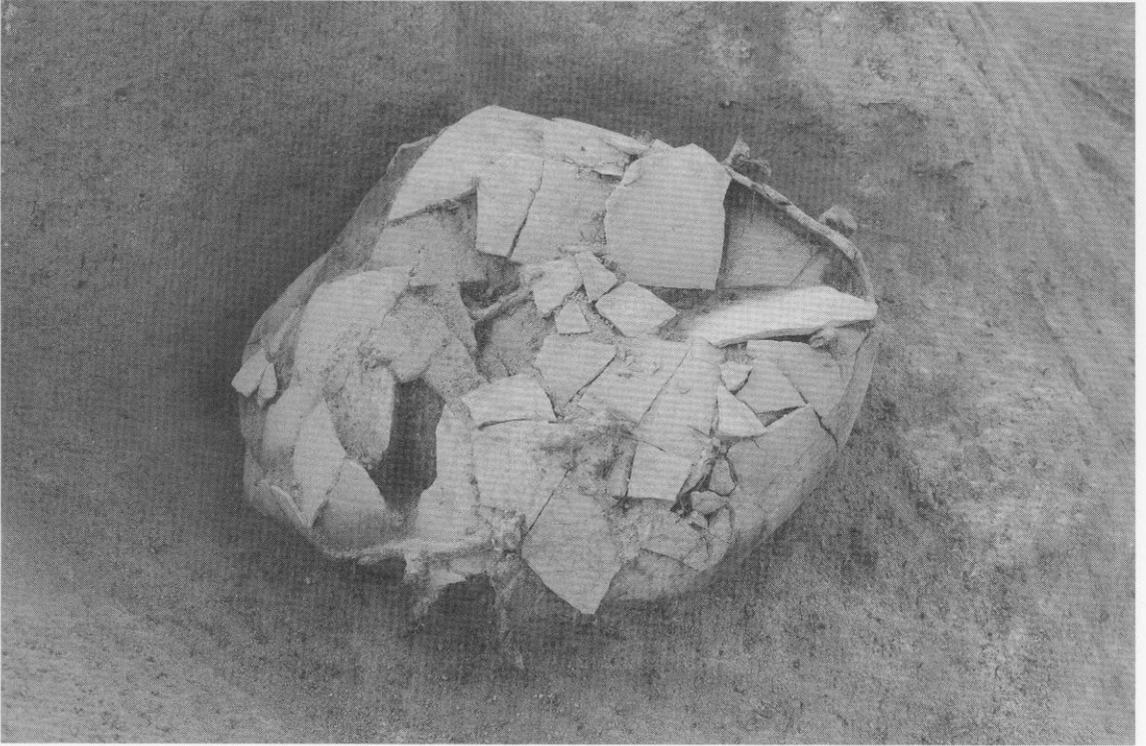
同上 棺除去後 (西から)



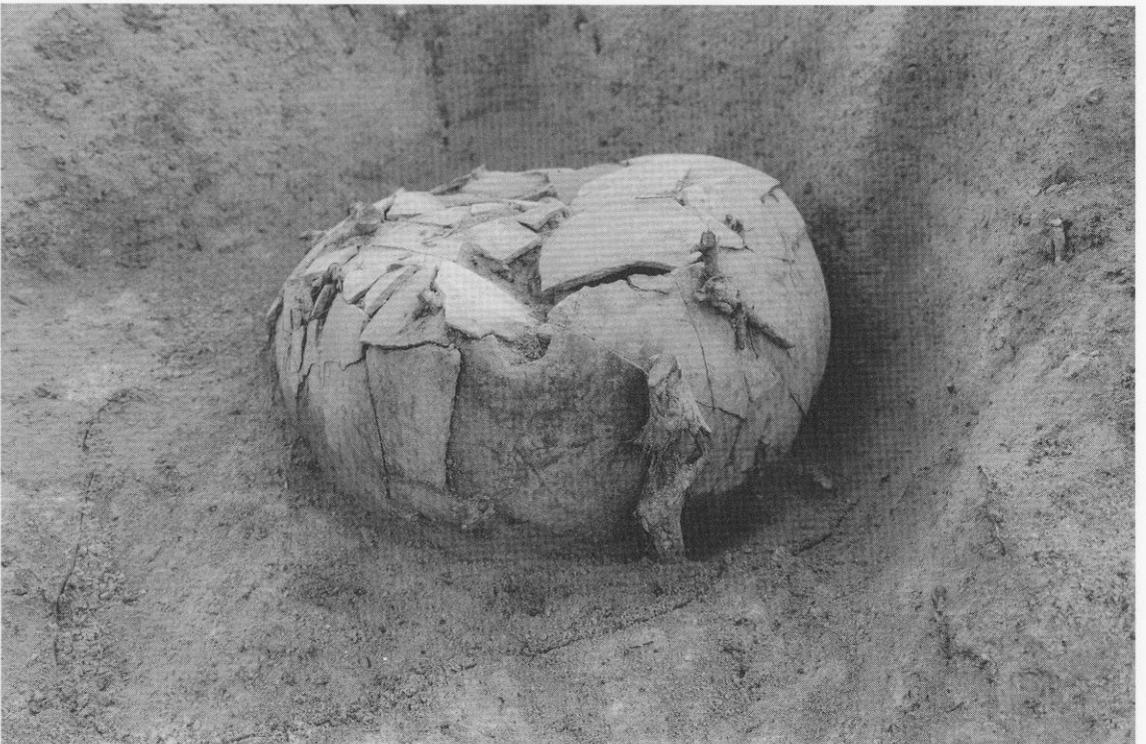
甕棺7ST100検出状況（北から）



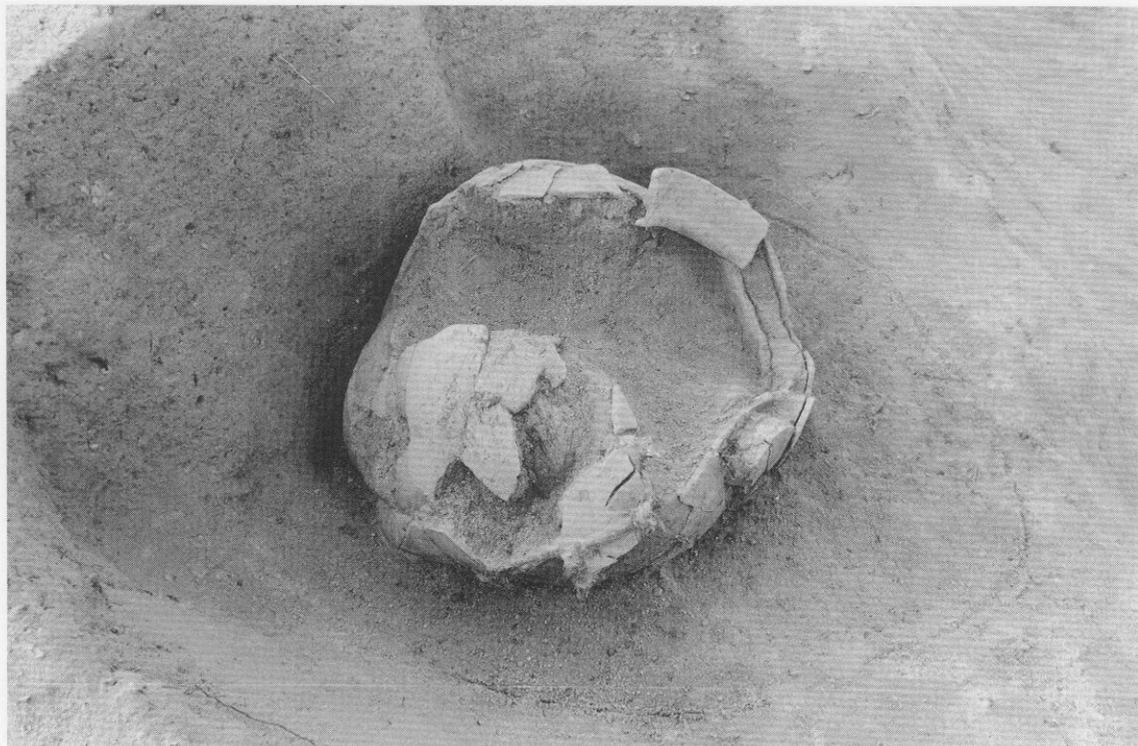
同上（東から）



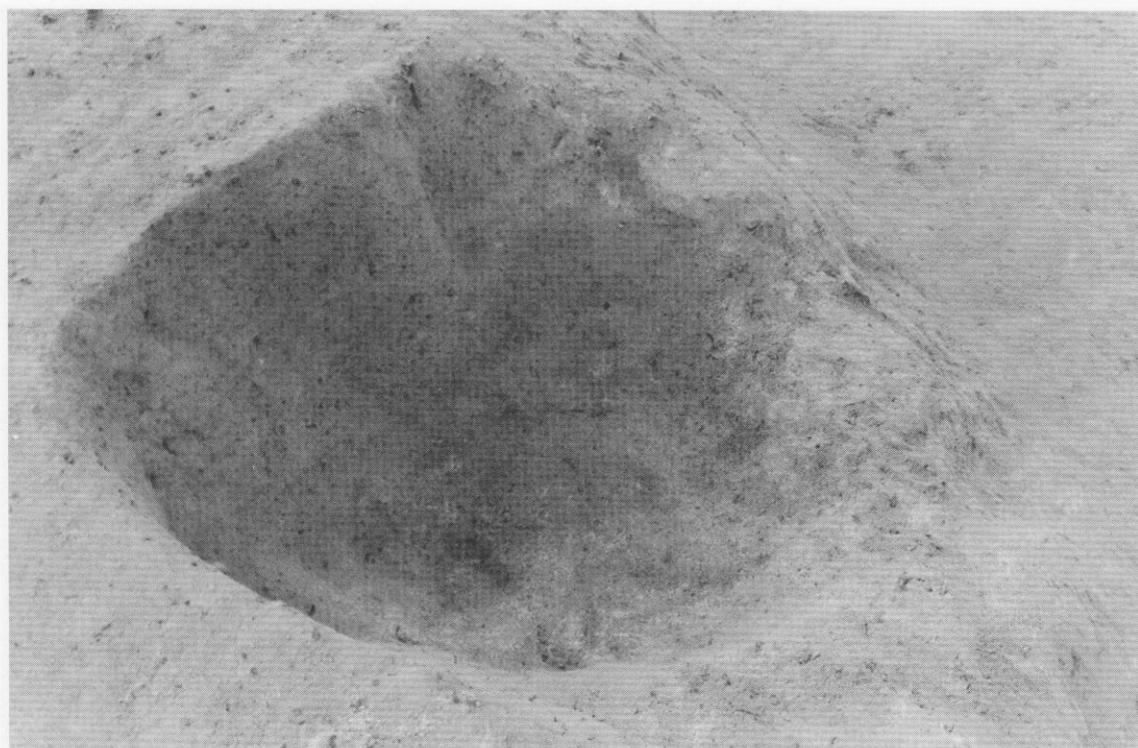
7ST100被蓋甕片除去状況（東から）



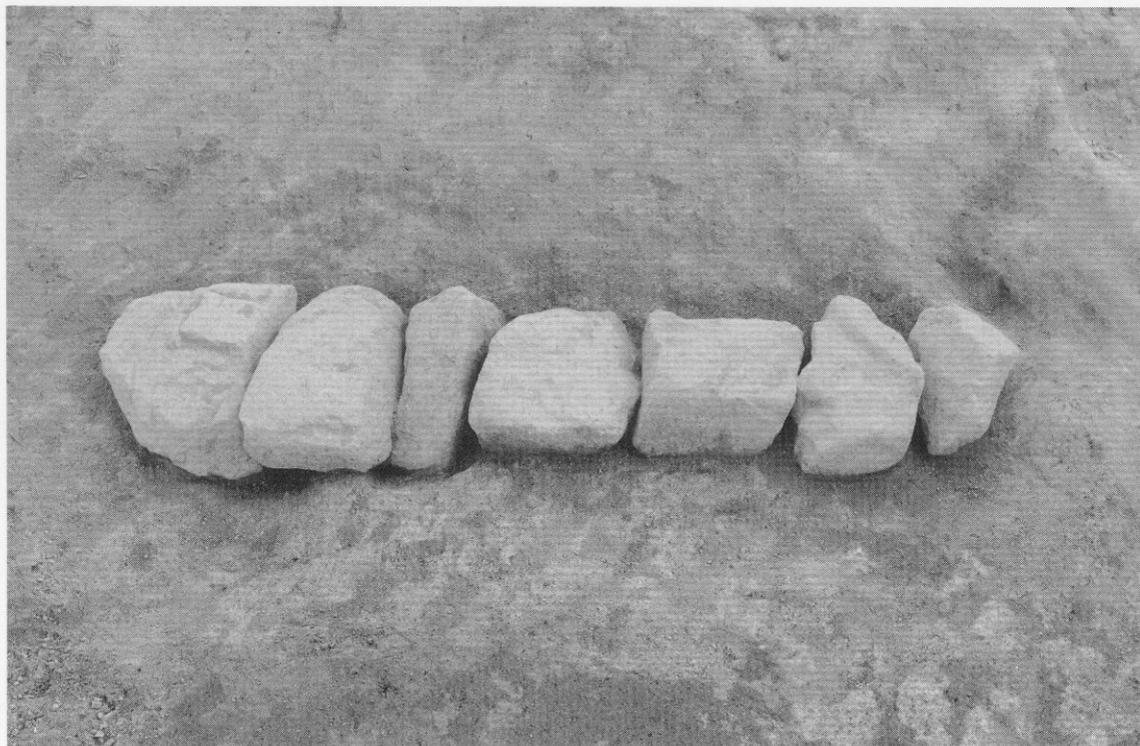
7ST100被蓋底部穿孔状況（北から）



7ST100被蓋甕除去状況（東から）



7ST100墓壙完掘状況（東から）



石蓋土壙7ST020検出状況（東から）



同上 完掘状況



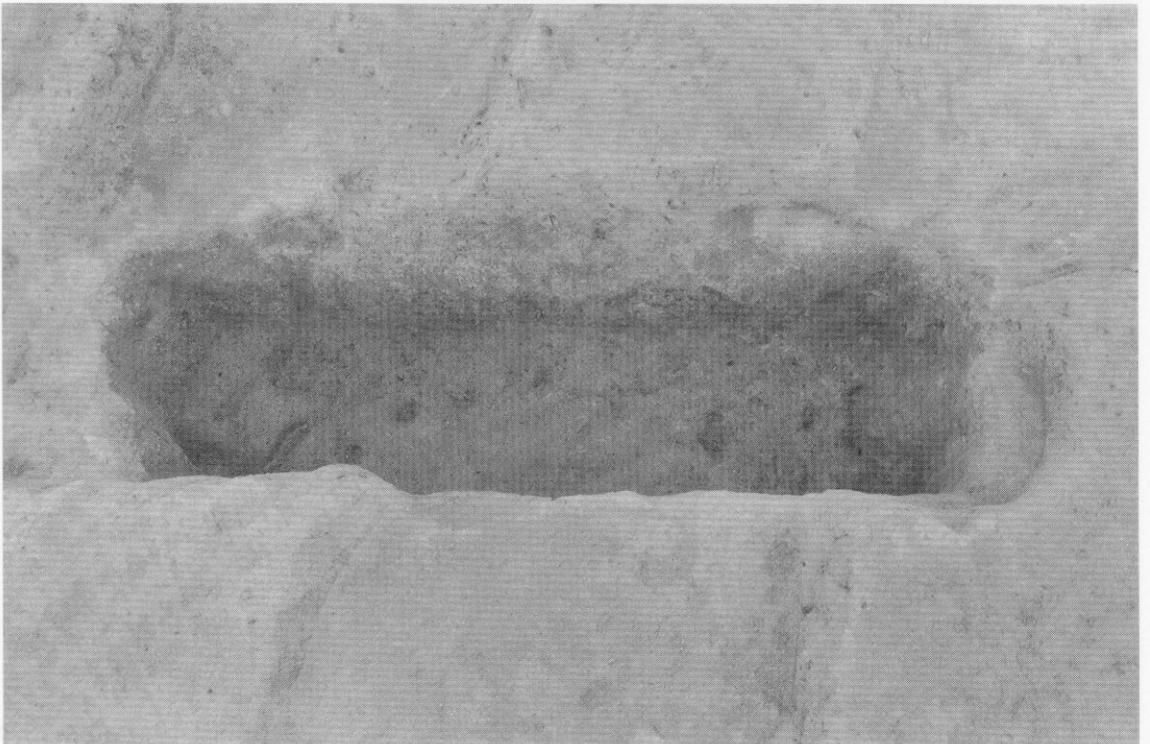
10号窯遠景



10号窯近景



7ST002遺物検出状況



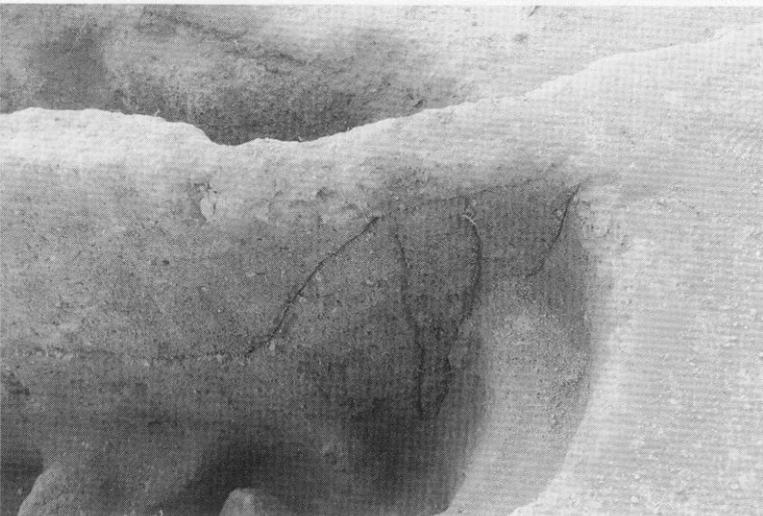
7ST002完掘状況



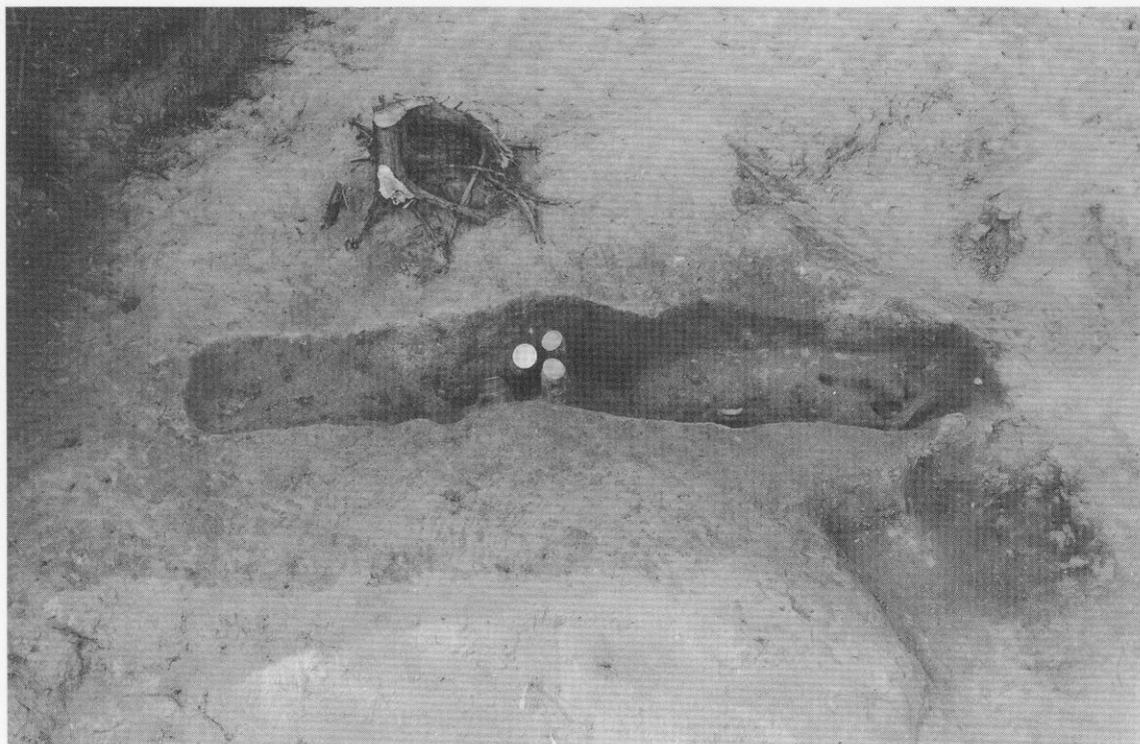
7ST002土器検出状況



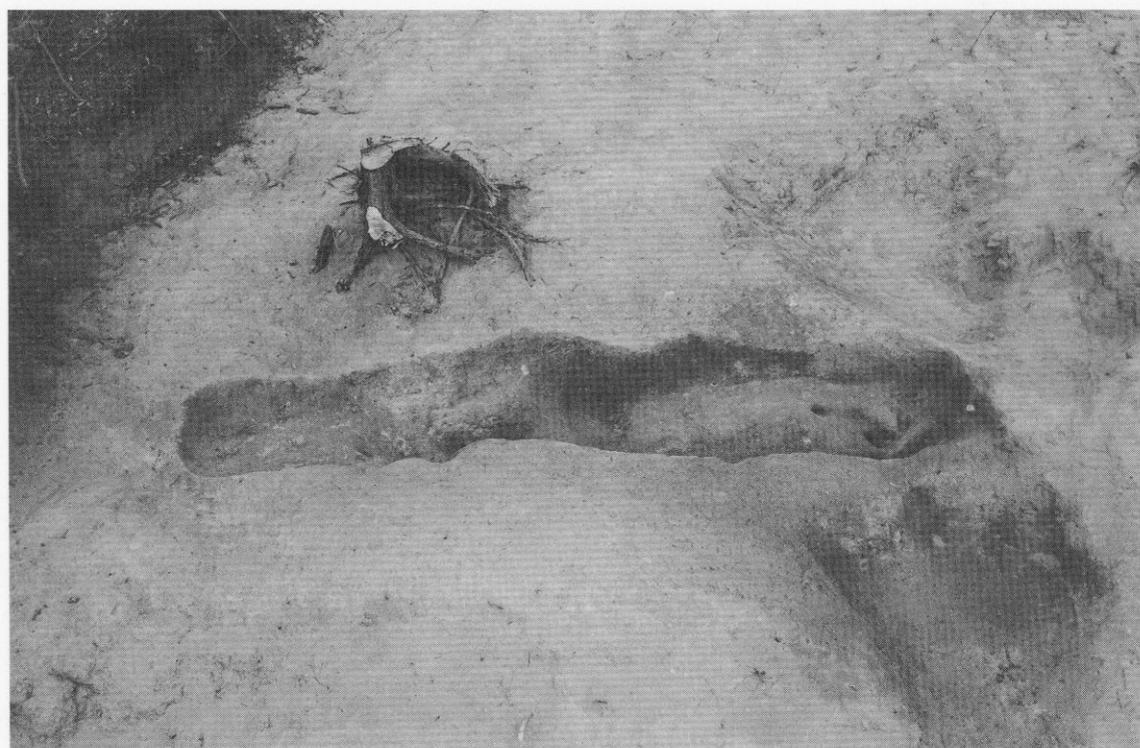
7ST002墓壙堆積土と土器の検出



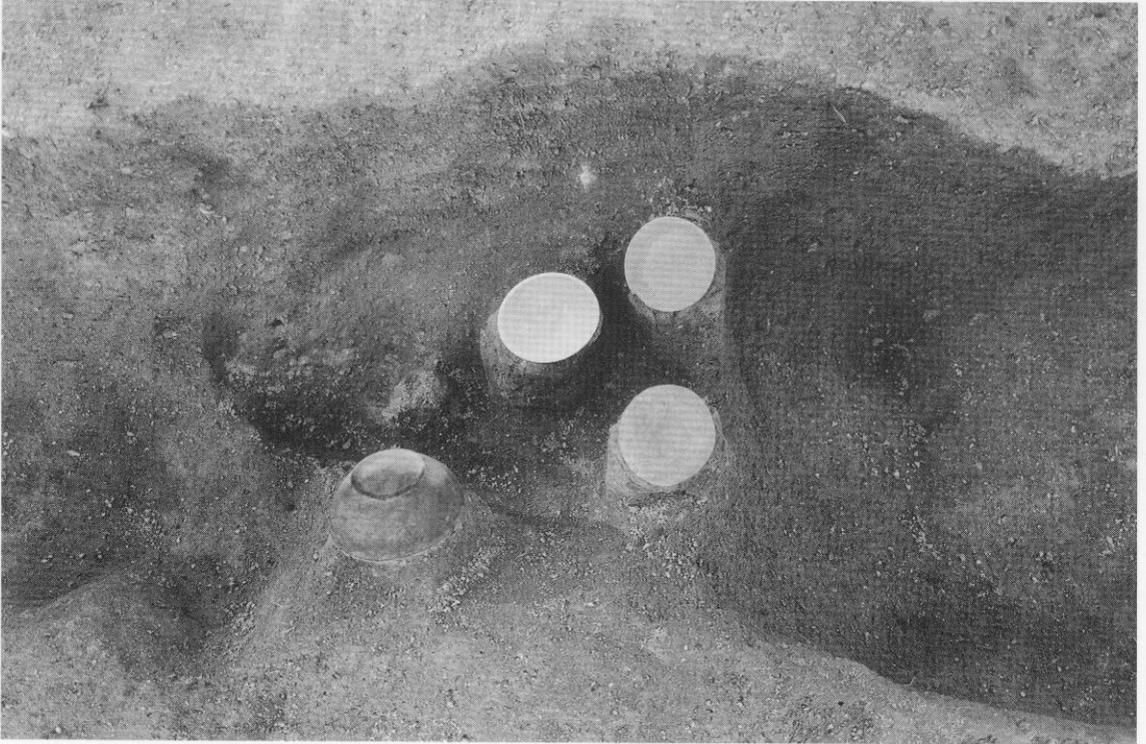
7ST002木棺痕跡とみられる土層



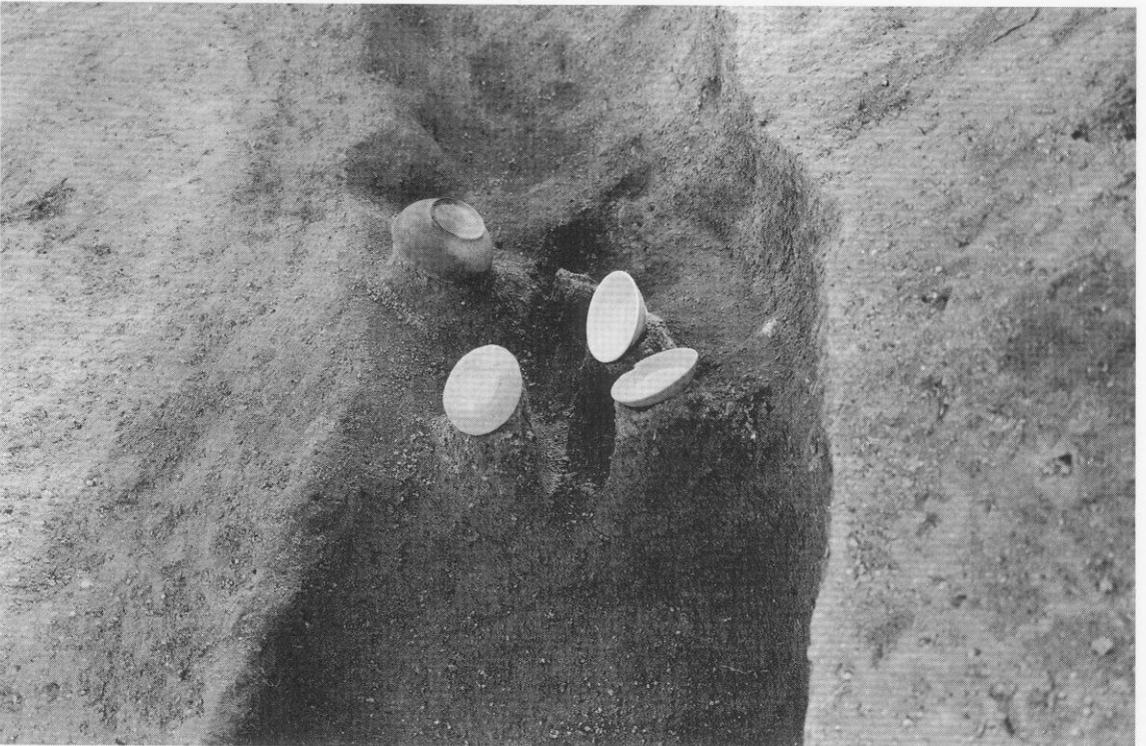
7ST003遺物検出状況



7ST003完掘状況



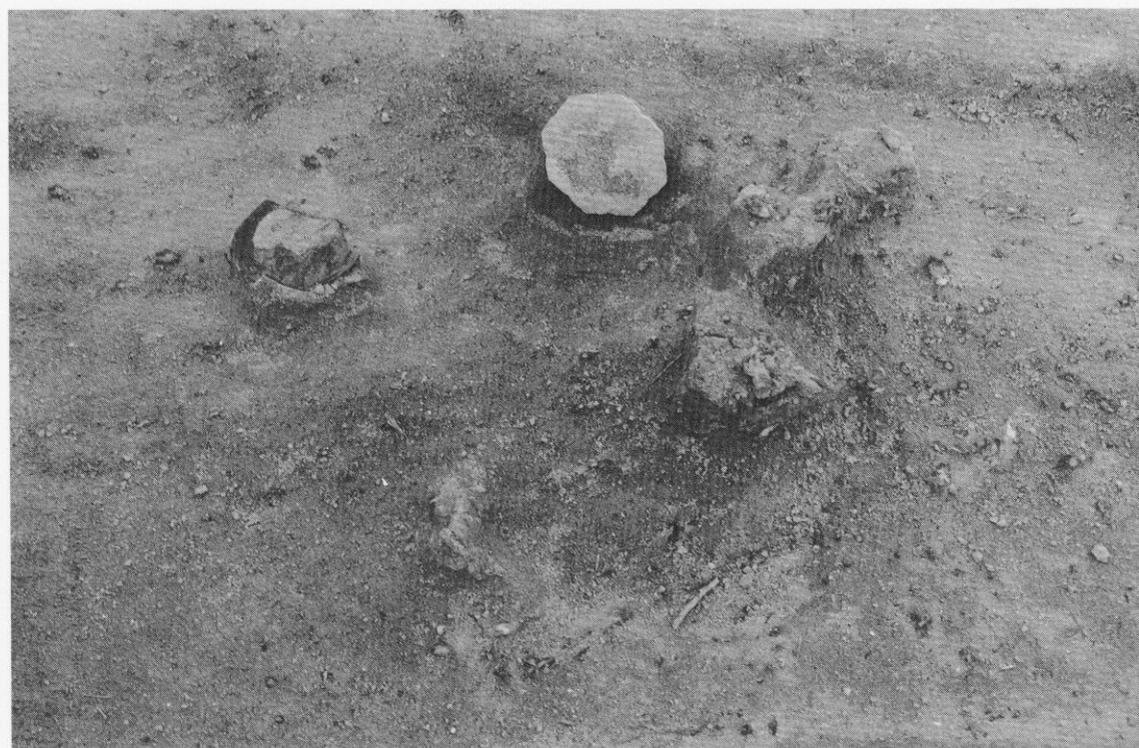
7ST003土器出土状況（南から）



同上（東から）



7ST015全景（南から）



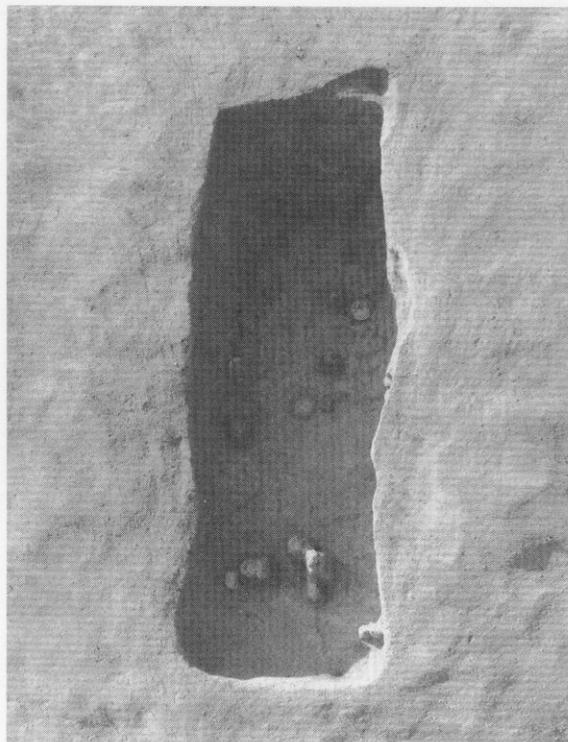
7ST015遺物出土状況（南から）



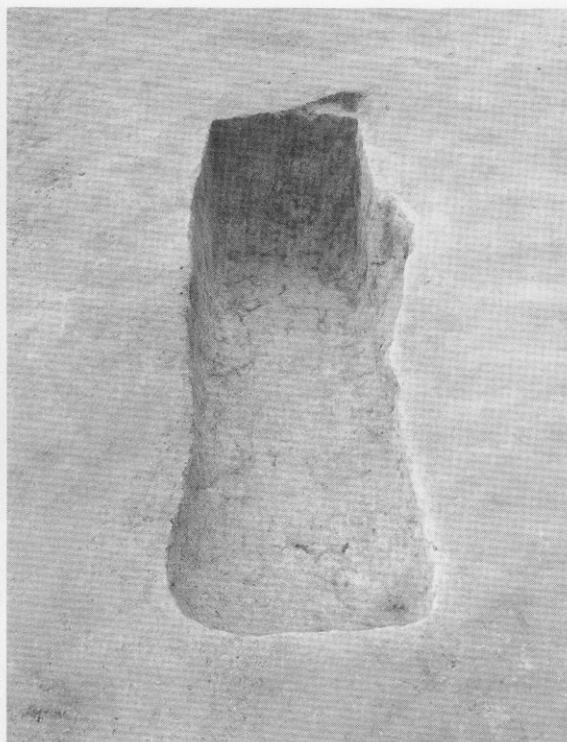
南尾根南裾部検出の墳墓群



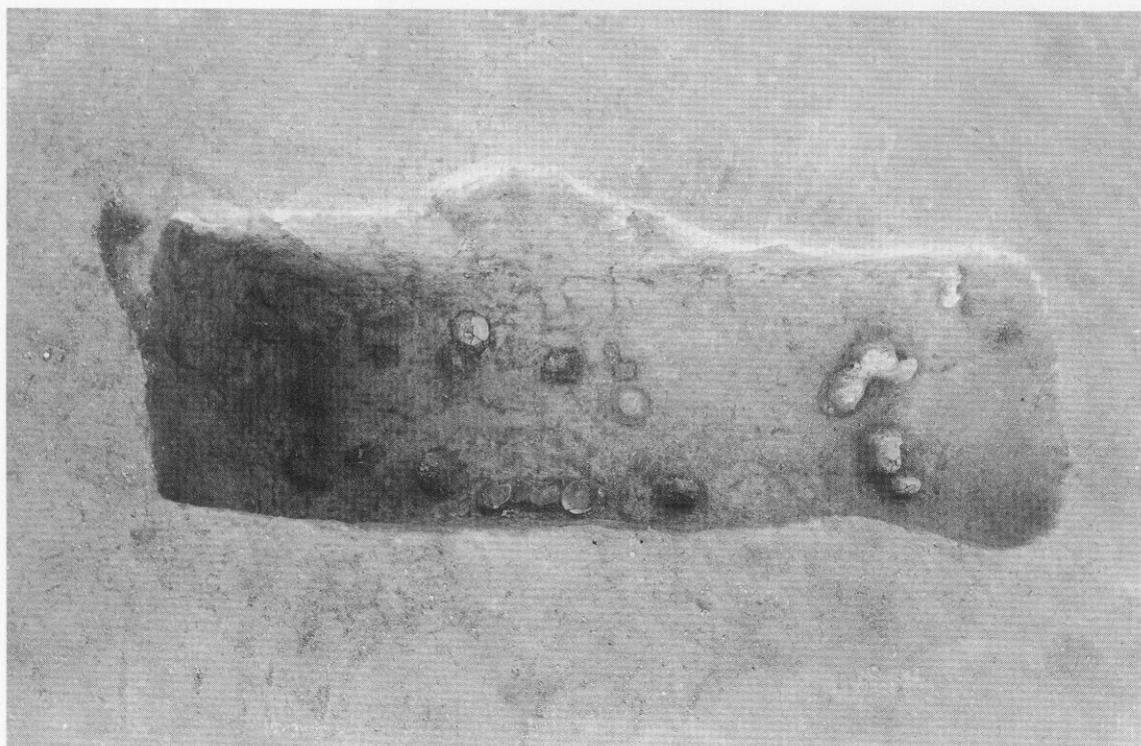
同上



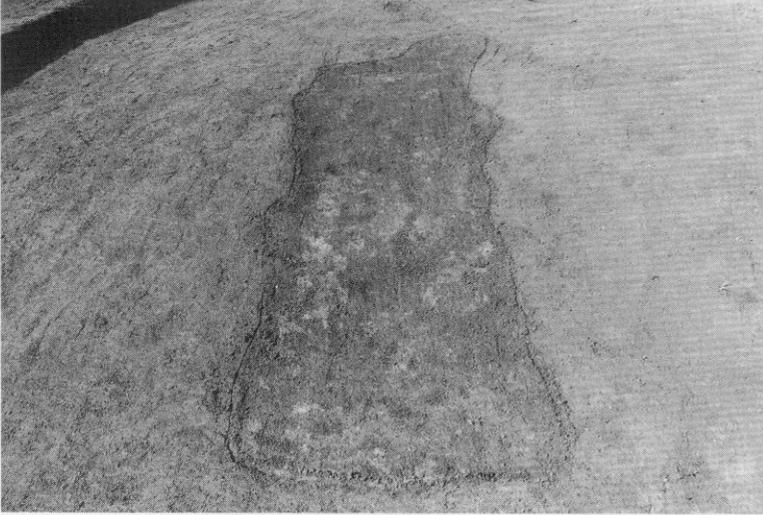
7ST035遺物出土状況



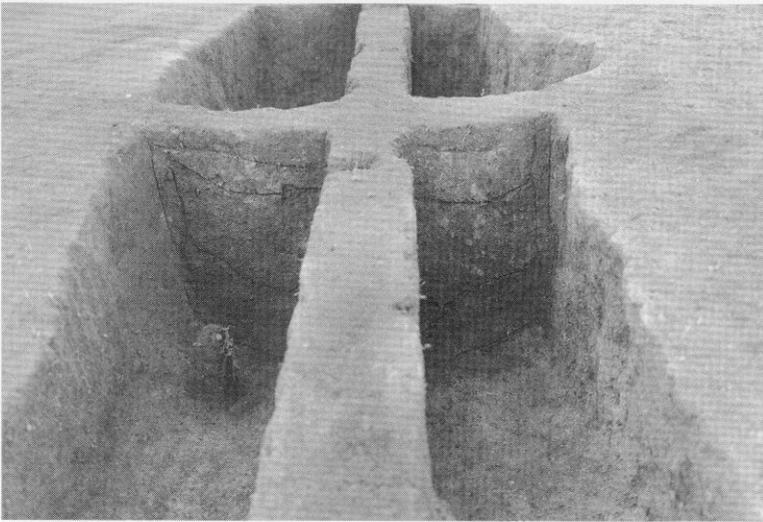
7ST035完掘状況



7ST035遺物出土状況



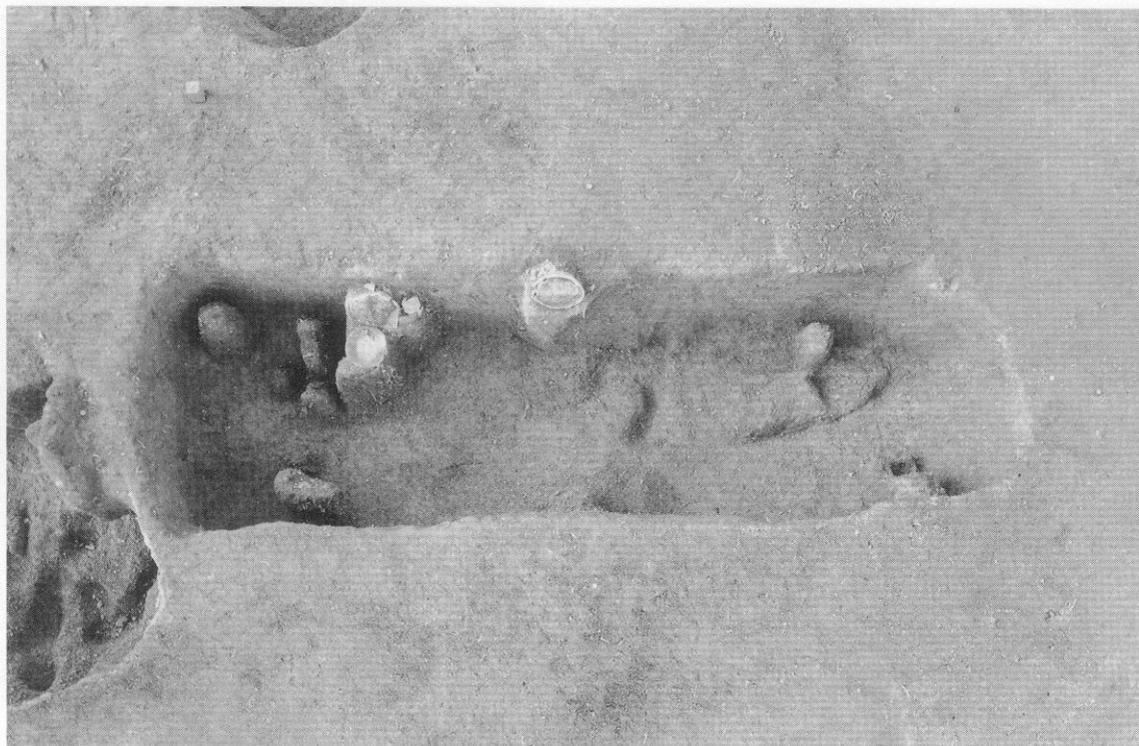
7ST035掘り方プラン検出状況



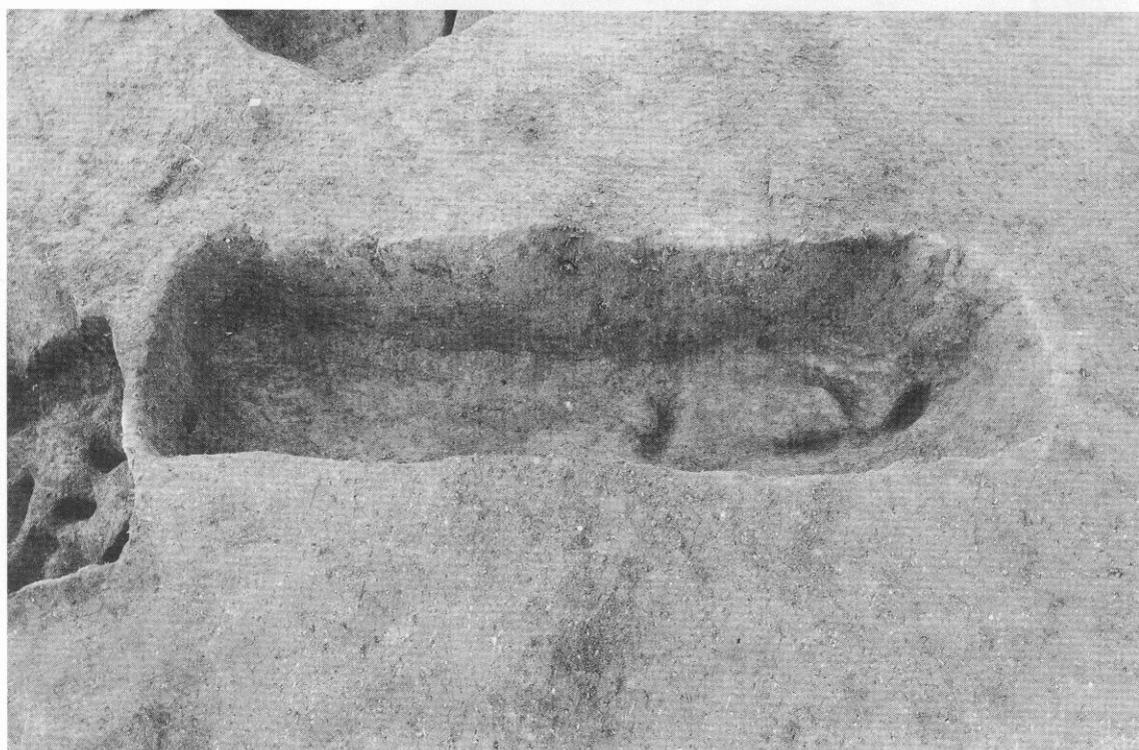
7ST035木棺痕跡検出状況



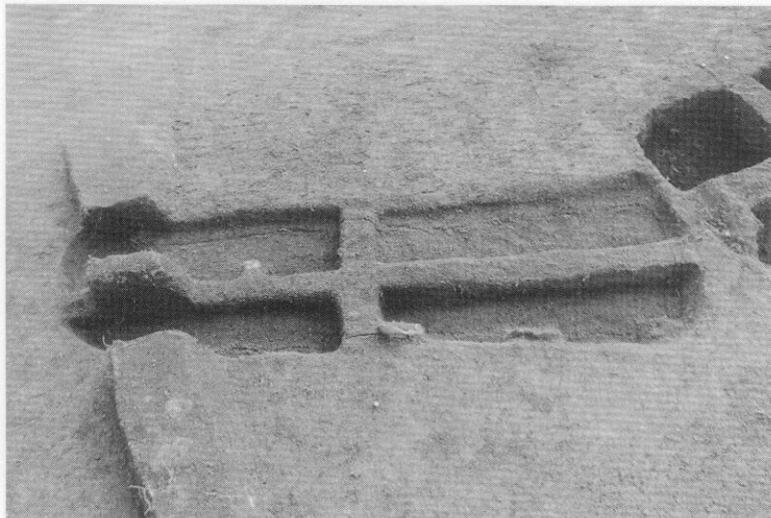
7ST035同上



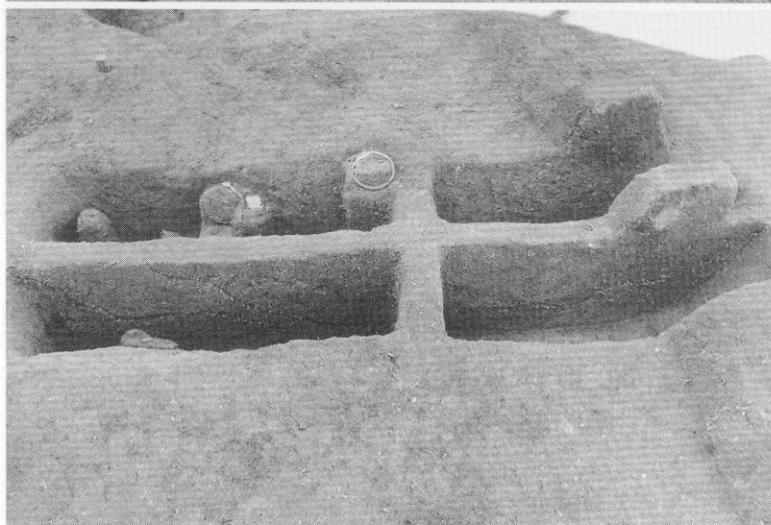
7ST040遺物出土状況



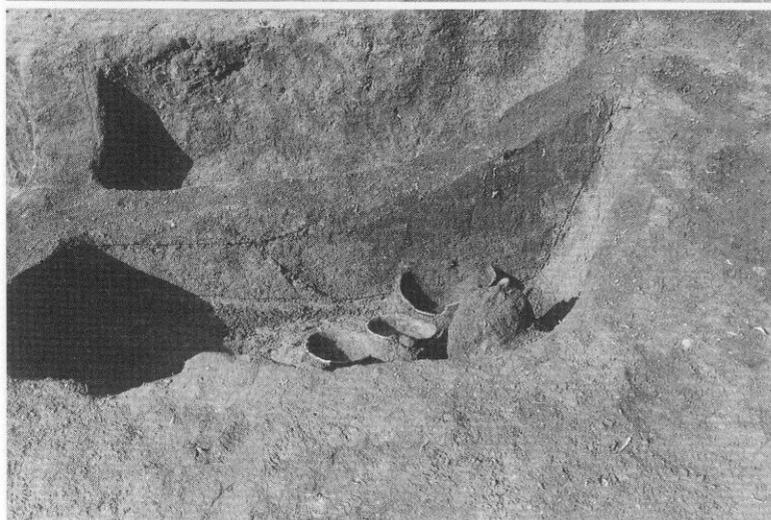
7ST040完掘状況



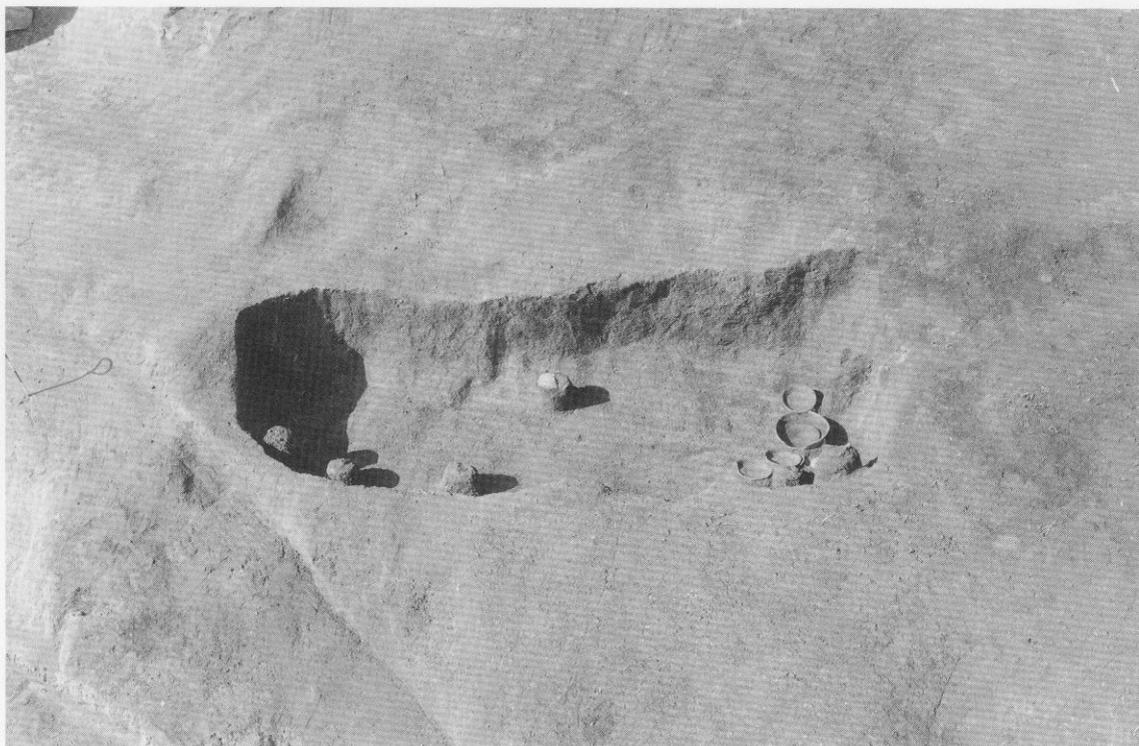
7ST040土層観察状況



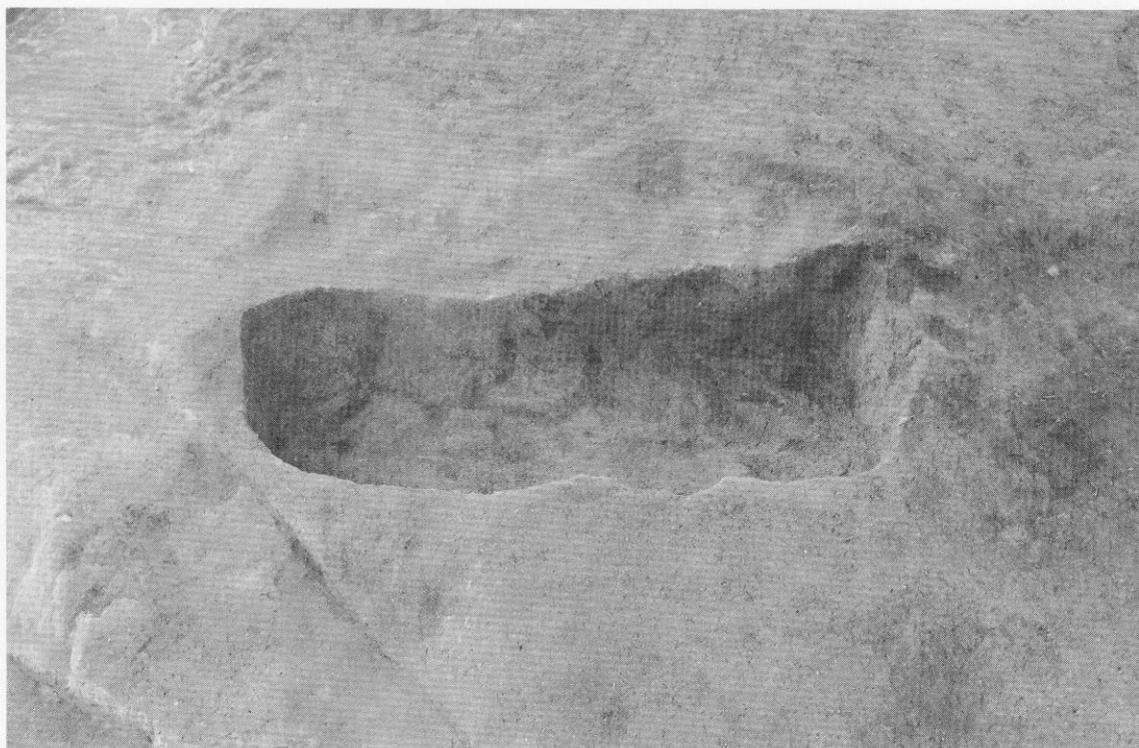
7ST040土層観察と土器の検出



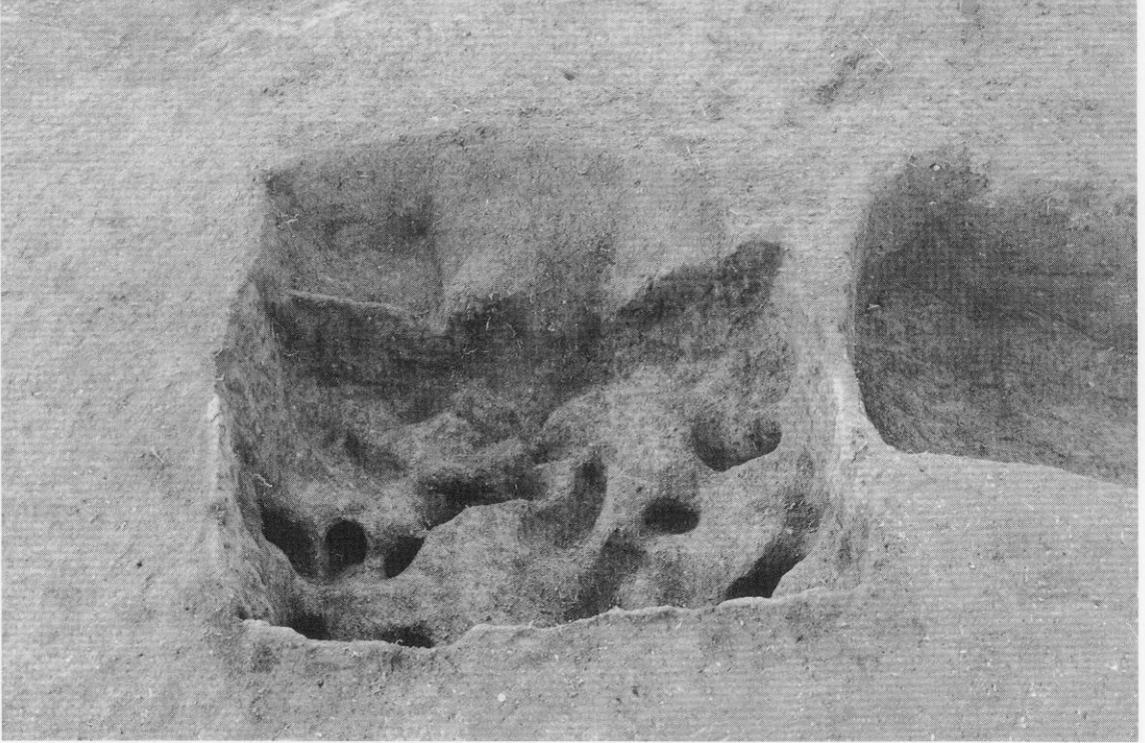
7ST050土層観察と土器の検出



7ST050遺物検出状況



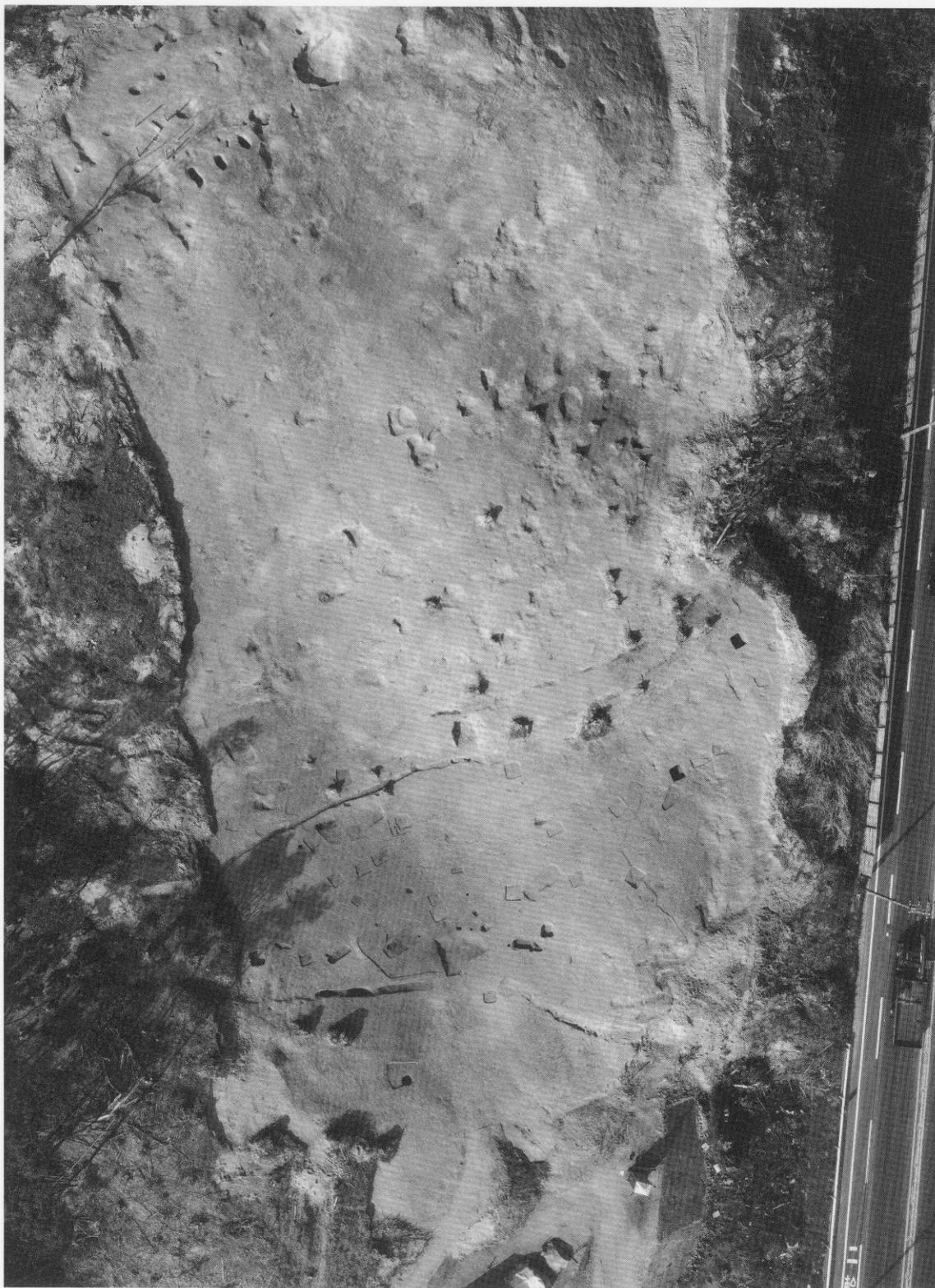
7ST050完掘状況



7SX045 (南から)



7SX045土層観察状況 (西から)



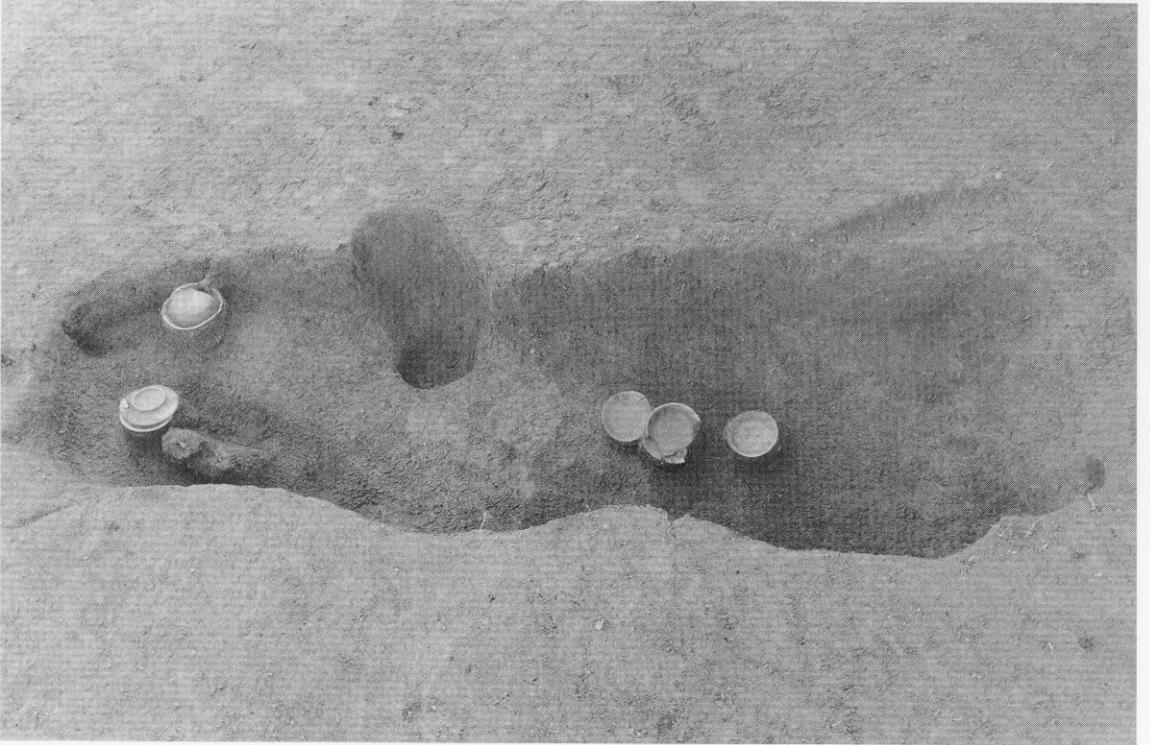
北尾根調査区全景（航空写真）



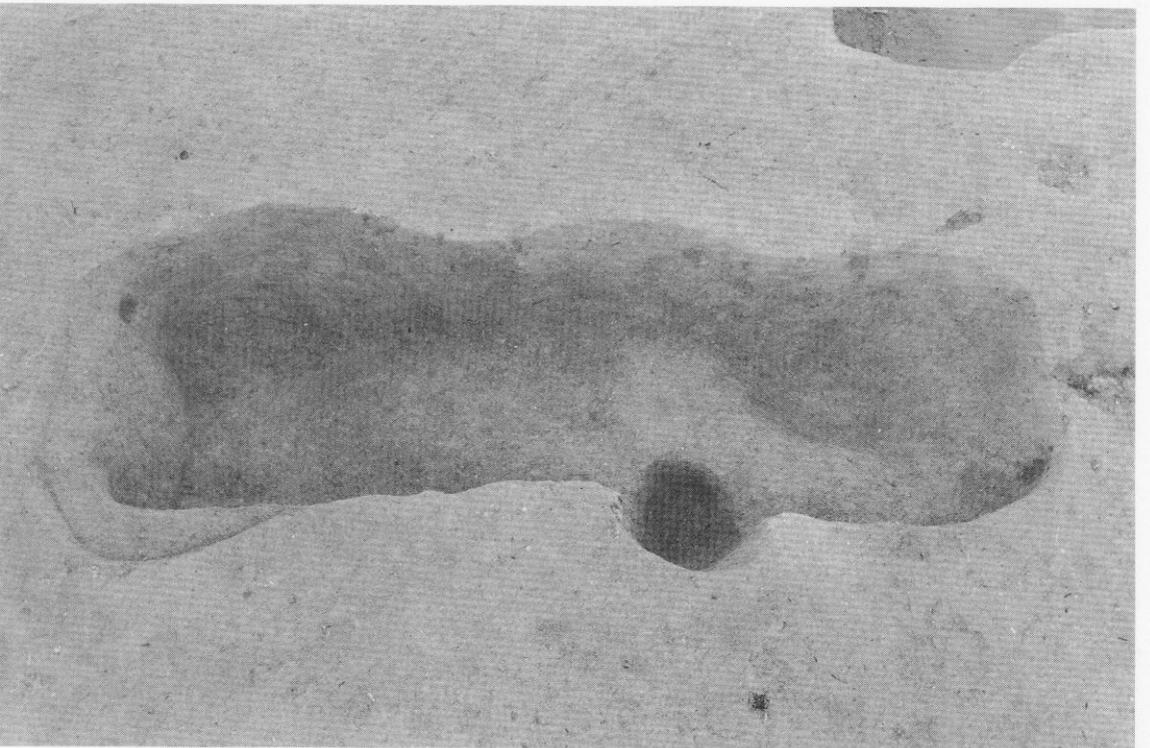
北尾根墳墓群検出状況（航空写真）



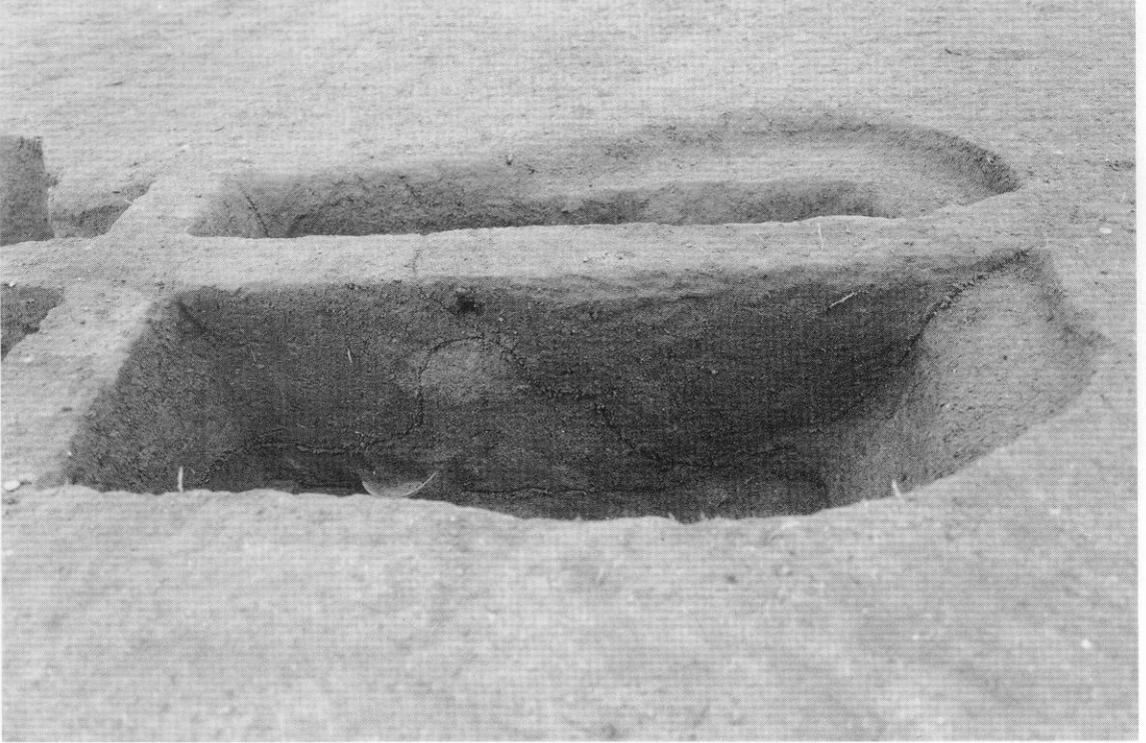
北尾根発掘調査風景（南尾根から）



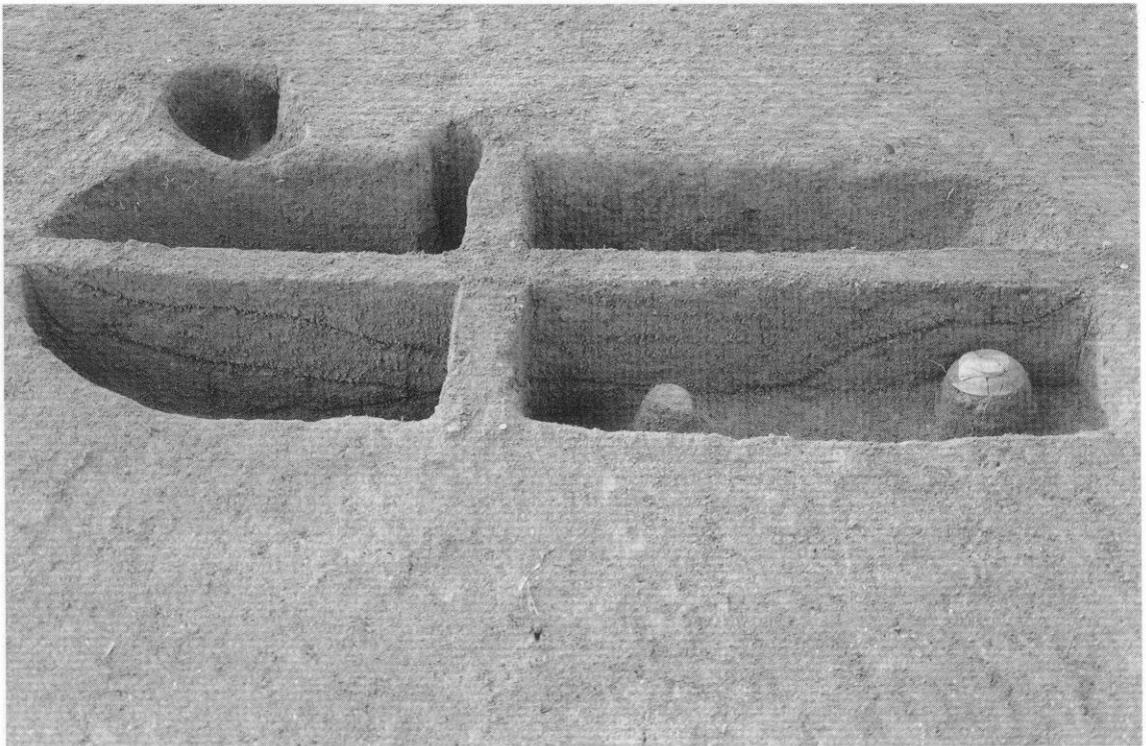
7ST075遺物検出状況



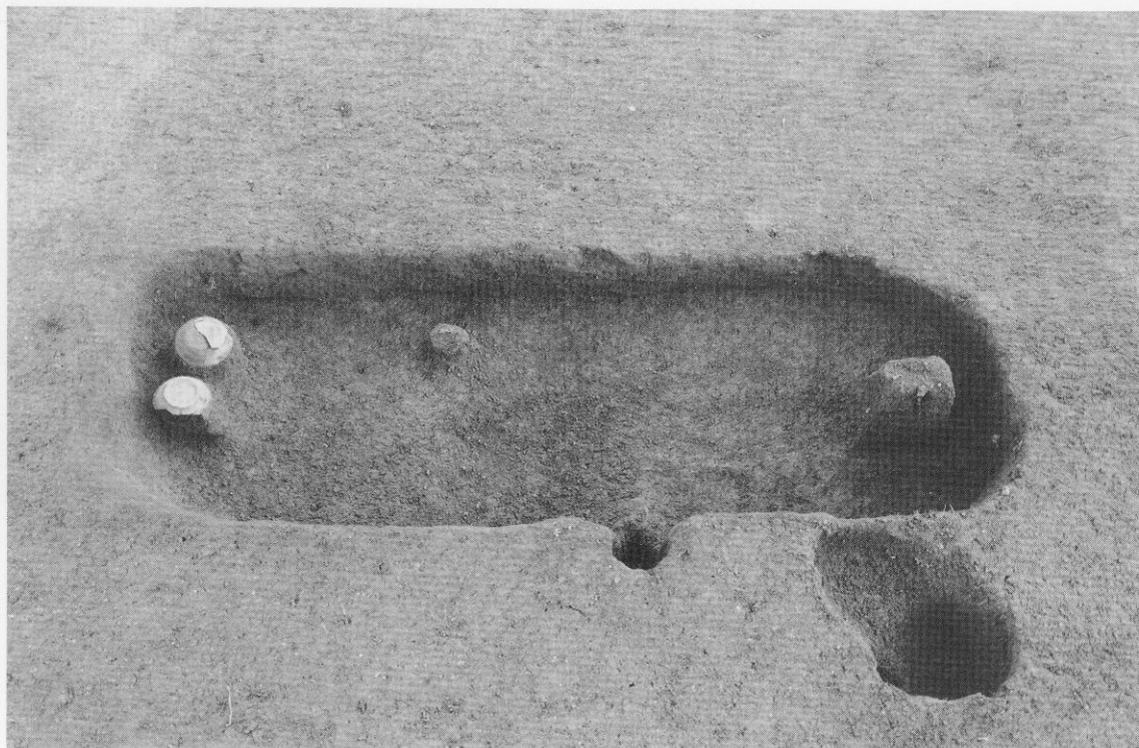
7ST075完掘状況



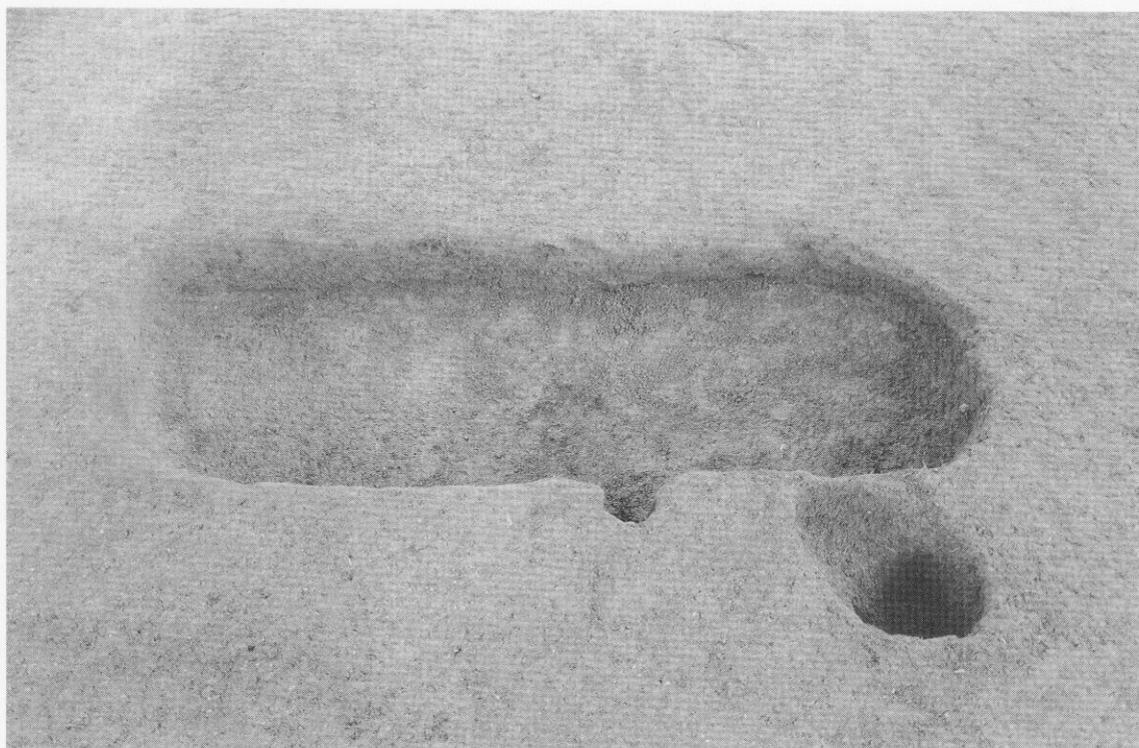
7ST075土層觀察狀況



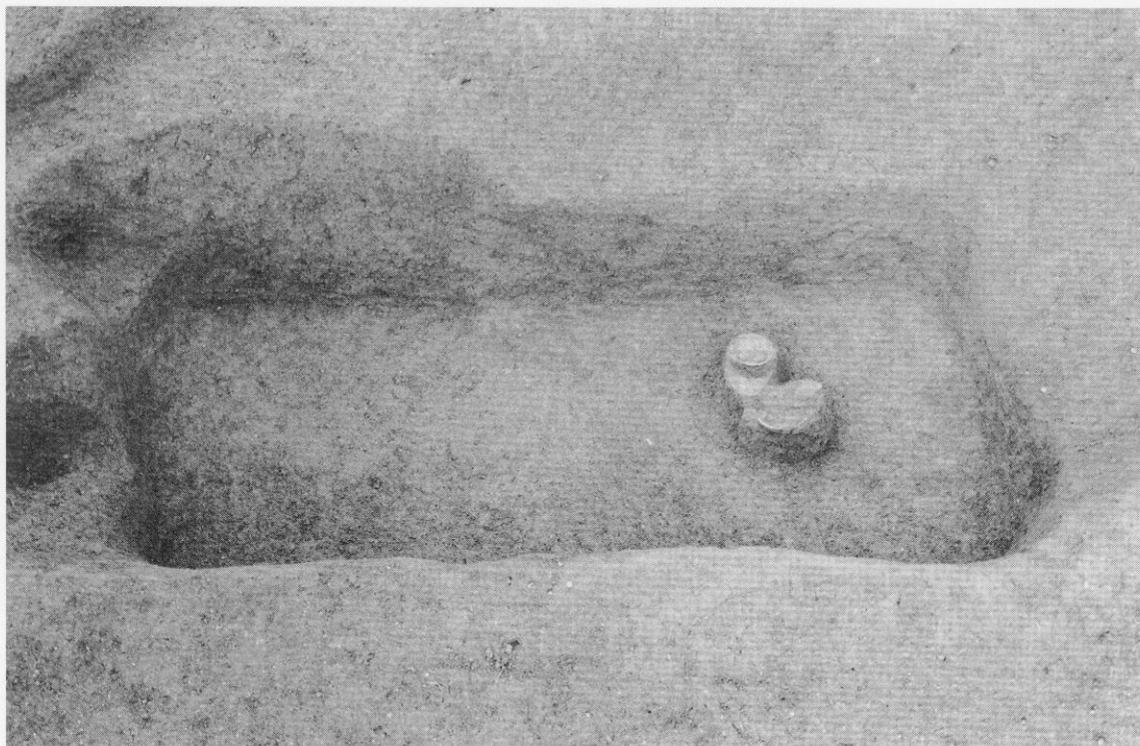
7ST085土層觀察狀況



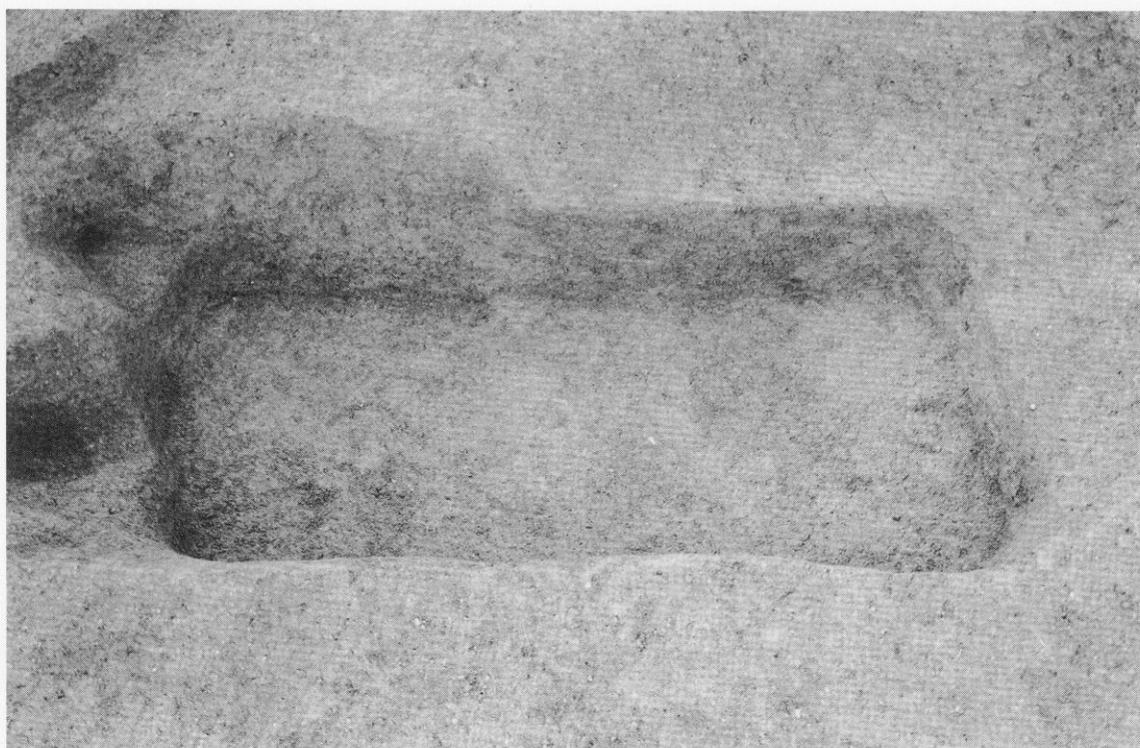
7ST085遺物検出状況



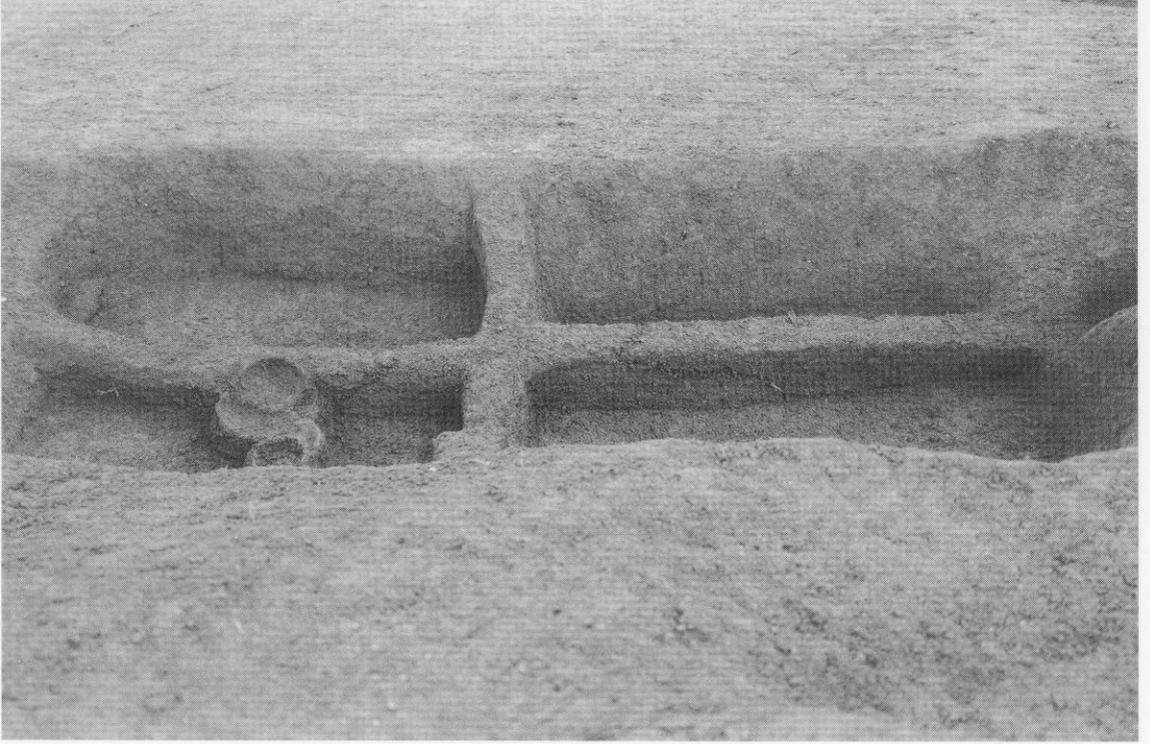
7ST085完掘状況



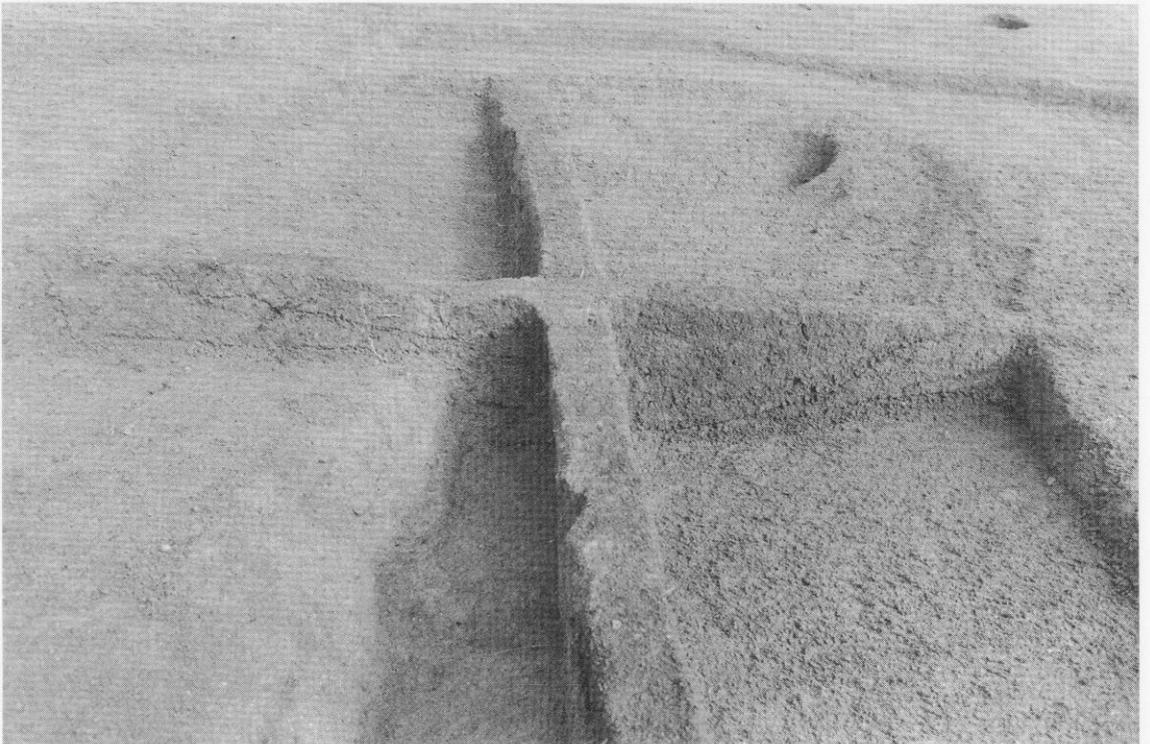
7ST090遺物出土状況



7ST090完掘状況



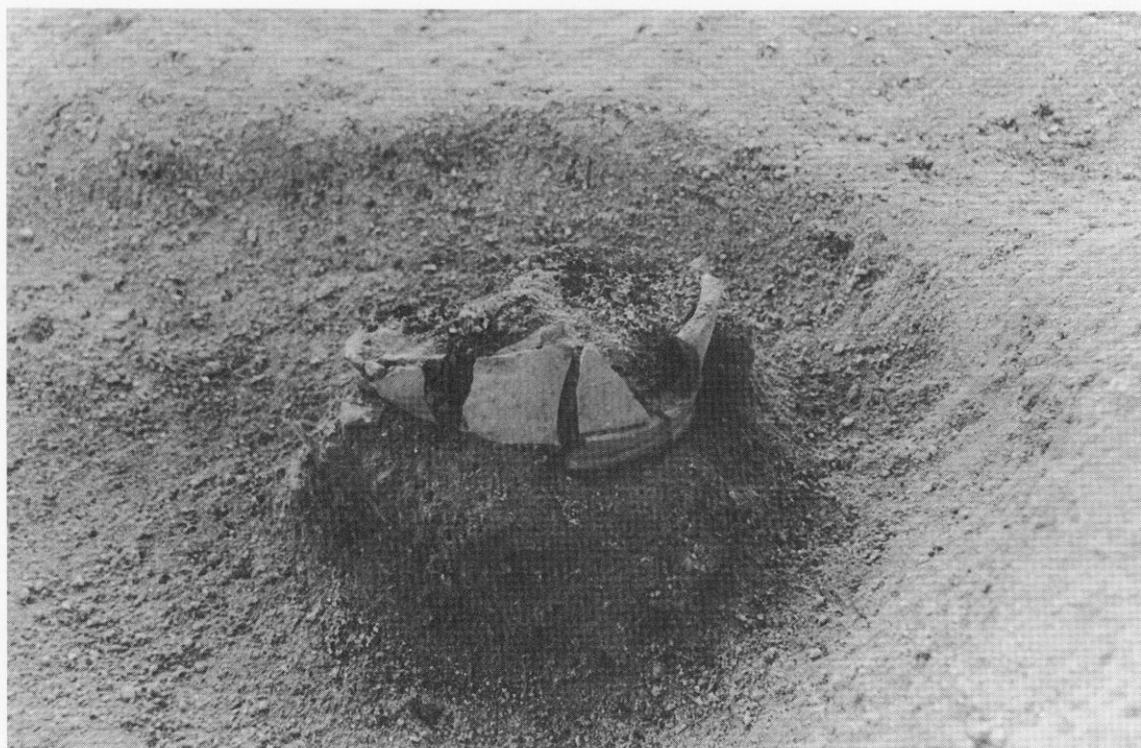
7ST090土層観察状況



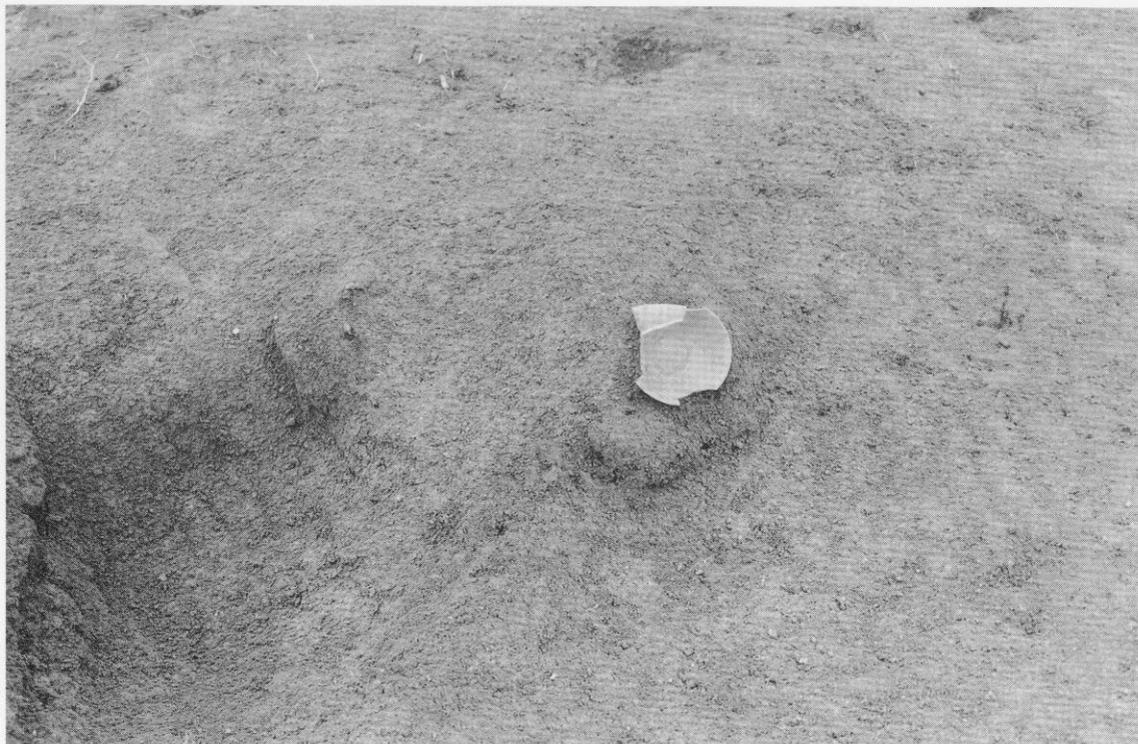
7ST090上層凹みの土層観察



7ST025検出状況



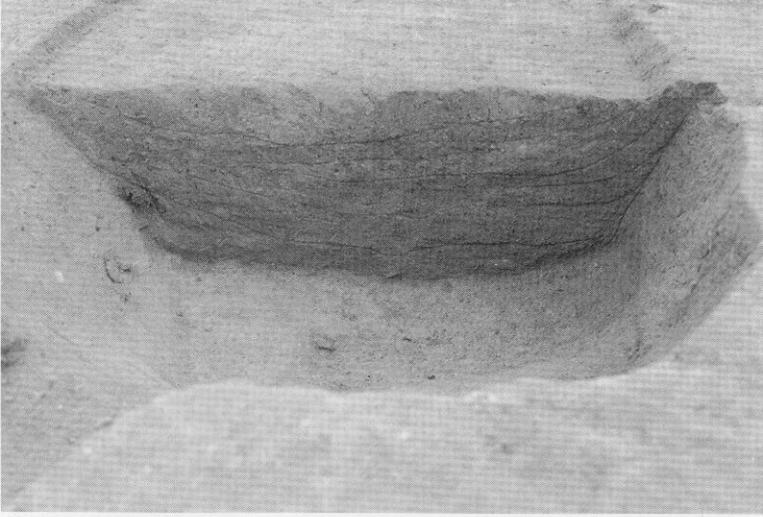
7ST025検出状況



7SX005

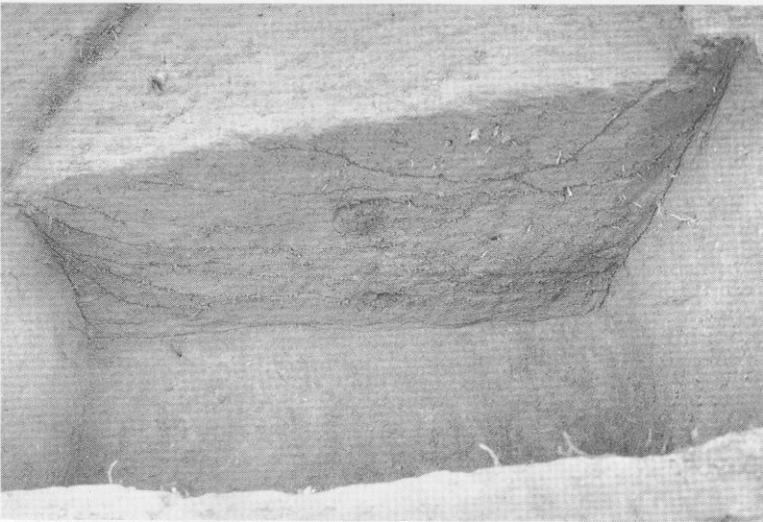


7SX080

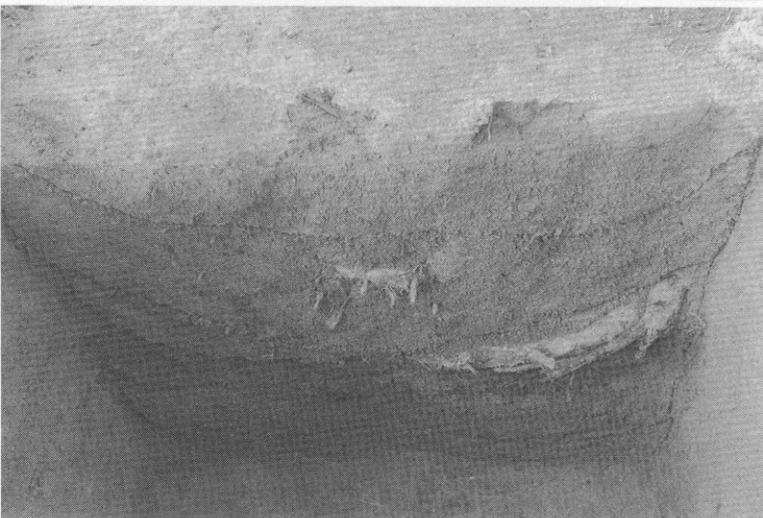


近世墓

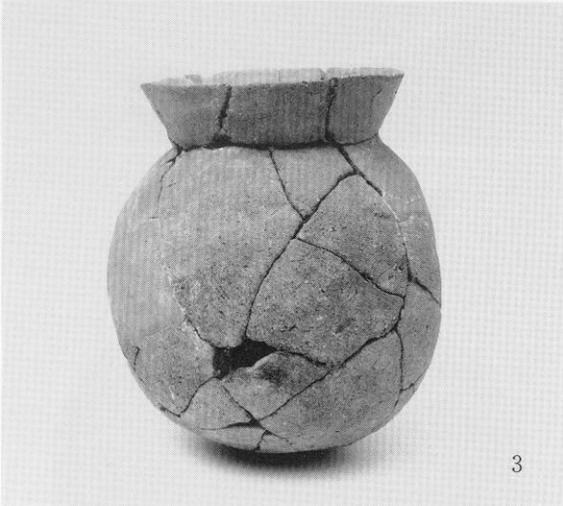
7ST016土層觀察狀況



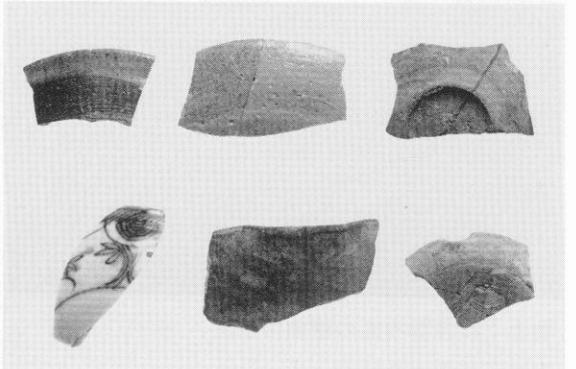
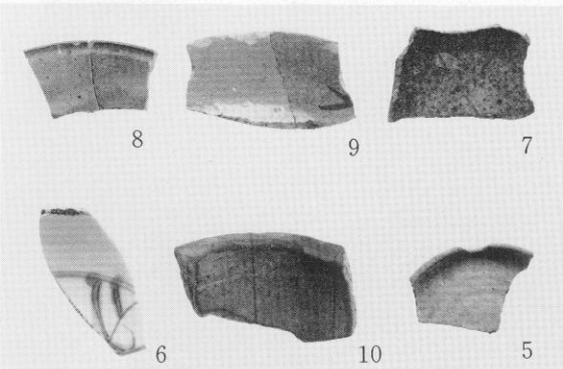
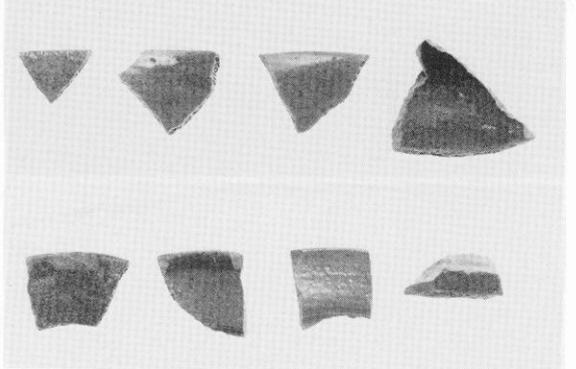
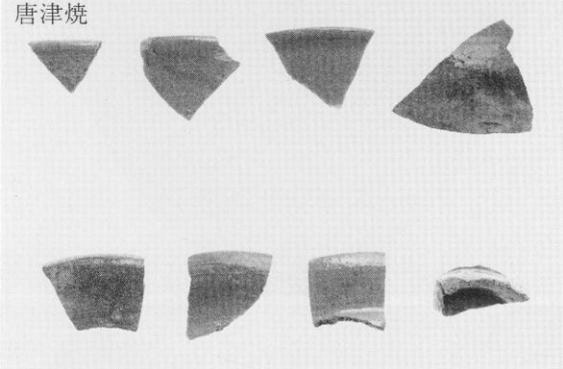
7ST017土層觀察狀況



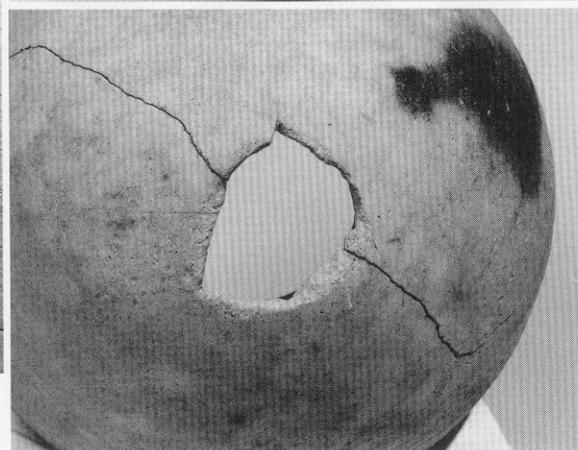
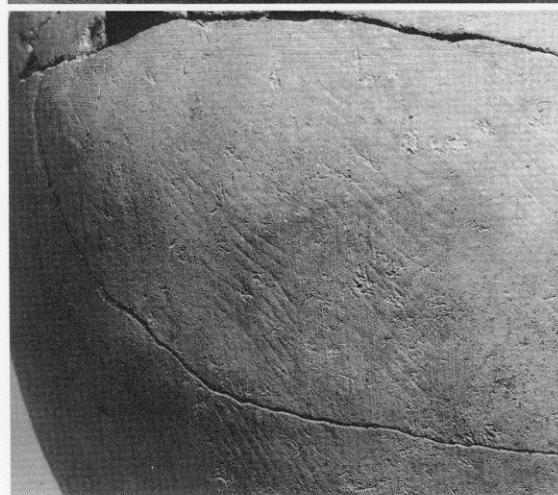
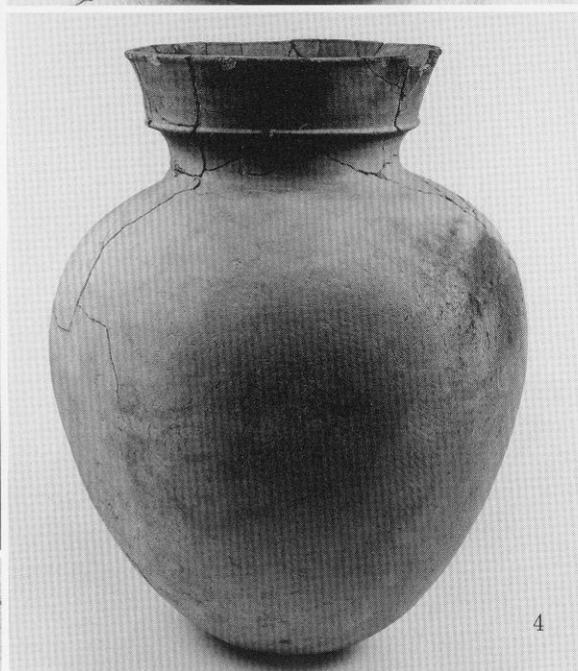
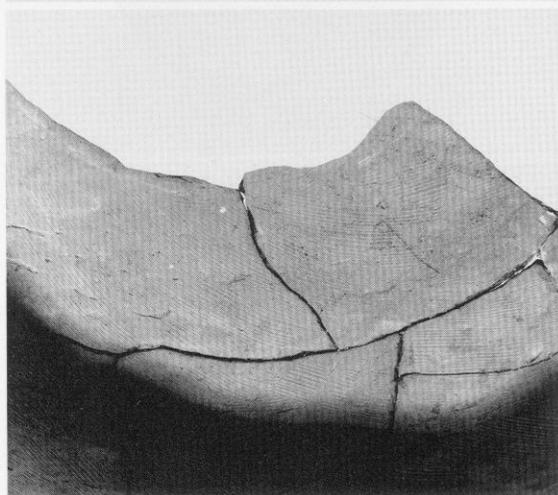
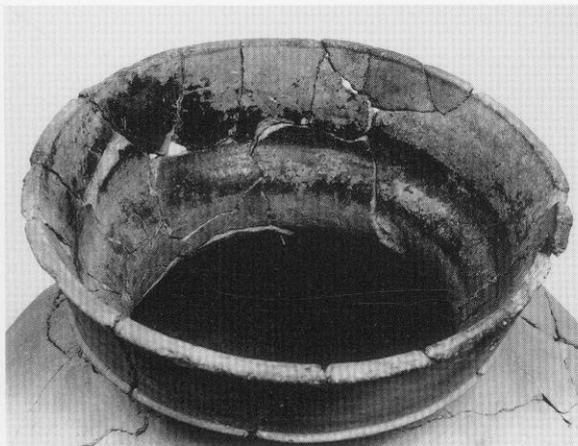
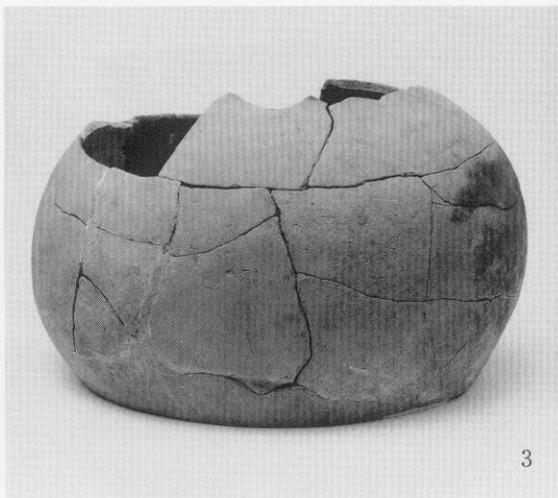
7ST022土層觀察狀況



唐津焼



12号墳及びその関連出土遺物



右上：口縁部内面の漆塗付状況

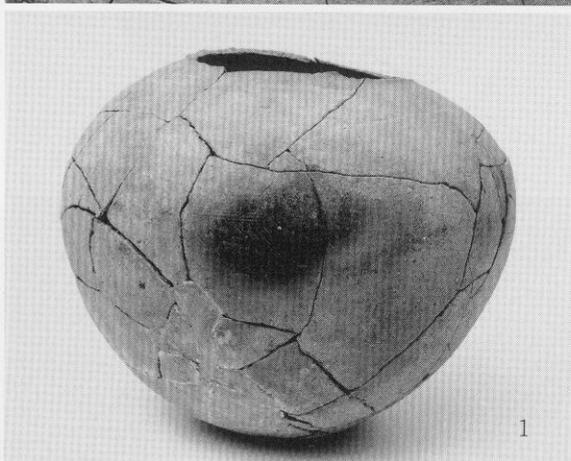
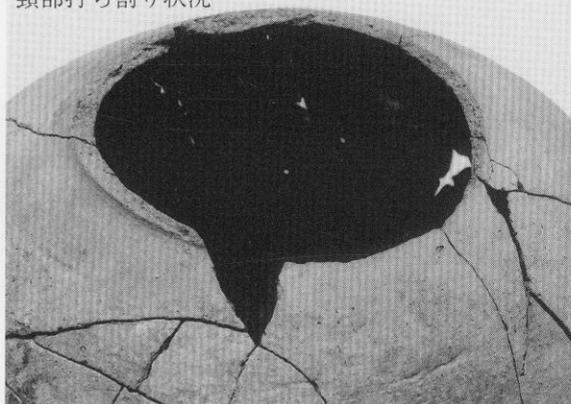
右下：底部穿孔状況

左中：肩部内面のハケ目と粘土紐の痕跡

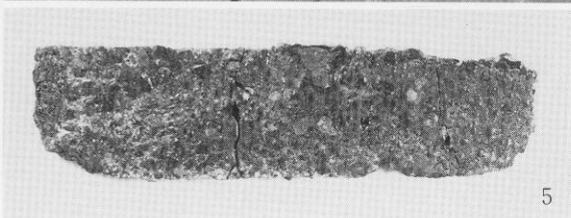
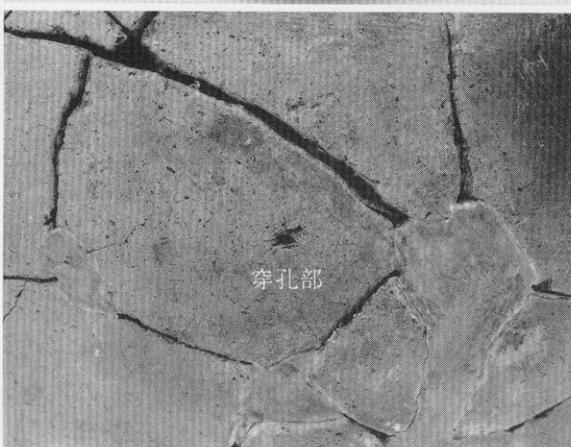
左下：胴部外面の叩き痕



頸部打ち割り状況

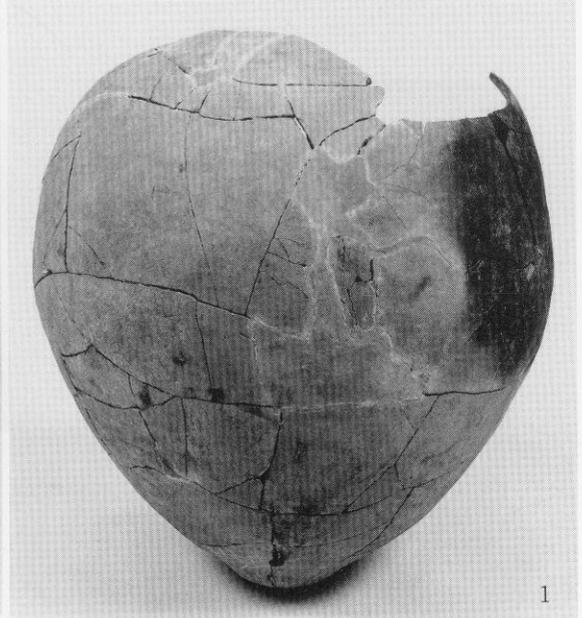


表土出土破片接合状況



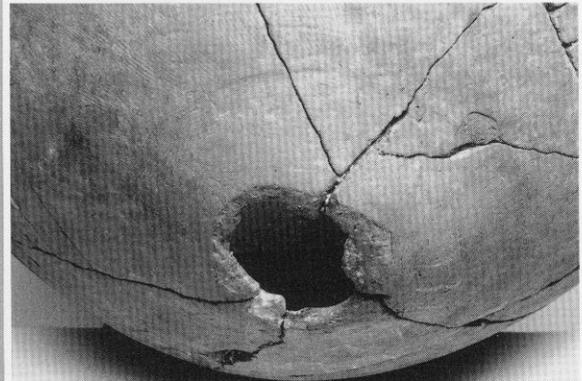
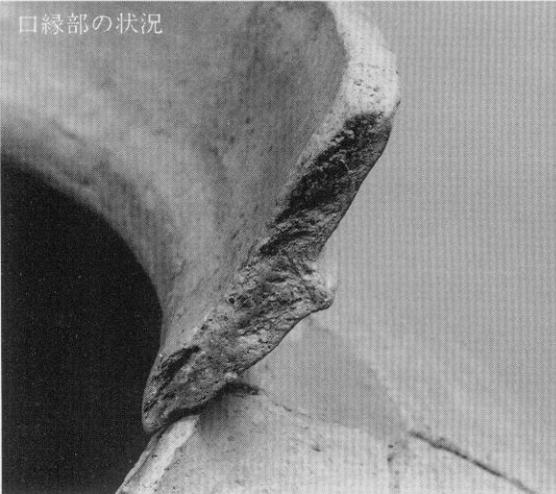


2

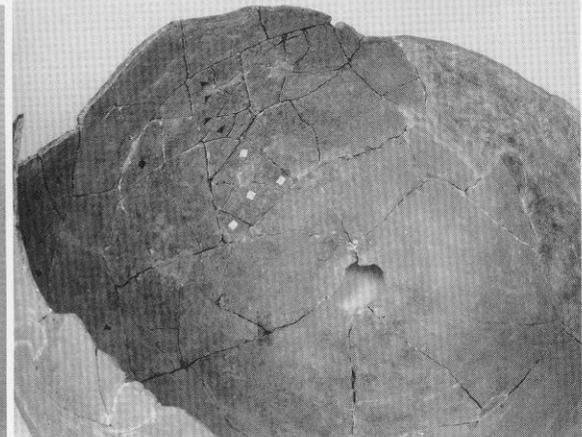
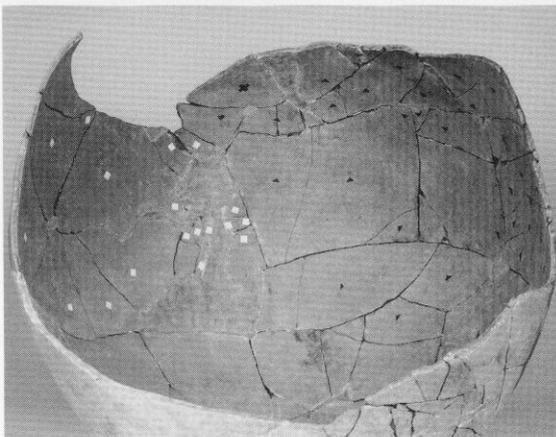


1

口縁部の状況

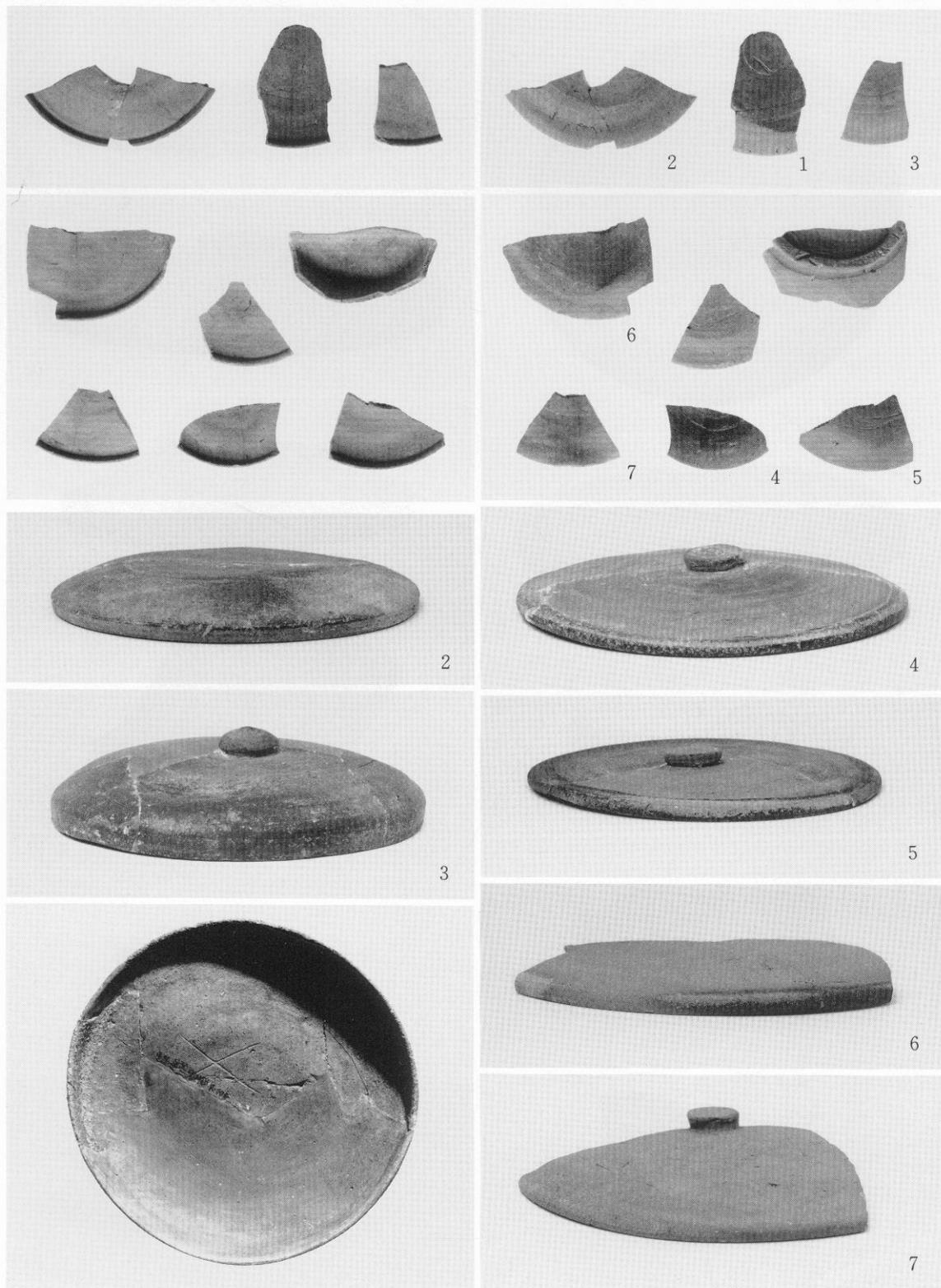


底部穿孔状況

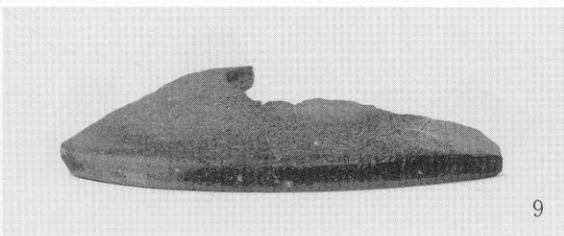


下左, 右: □は上棺穿孔部の覆い △は上棺下面 無印は上棺上面

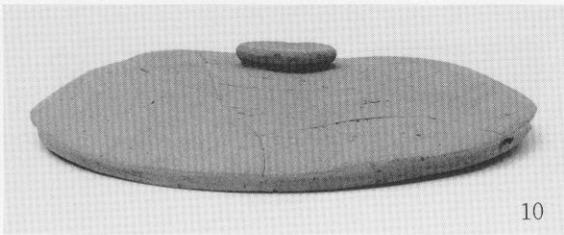
7ST100出土遺物



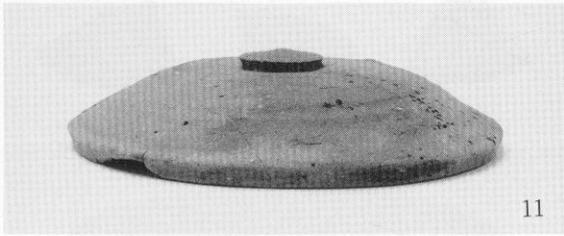
10号窯跡及び7SX030出土遺物



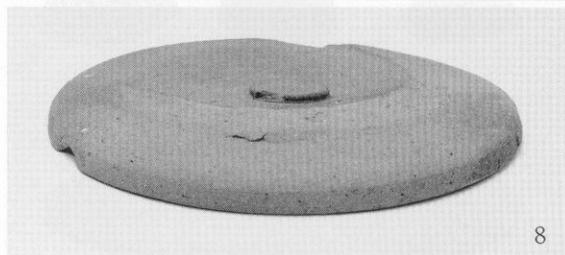
9



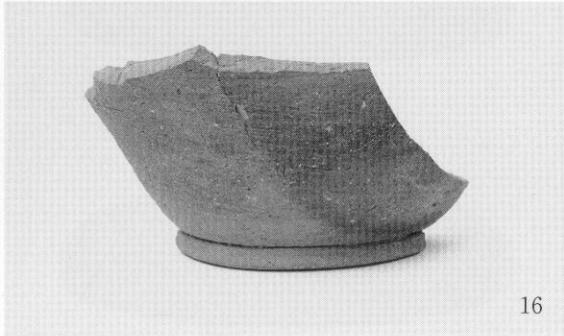
10



11



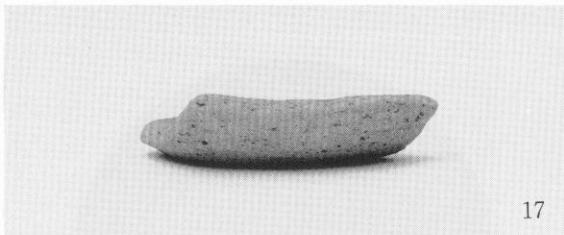
8



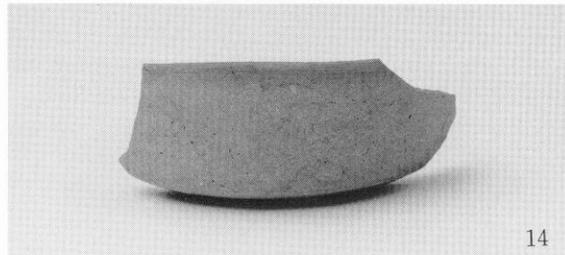
16



13



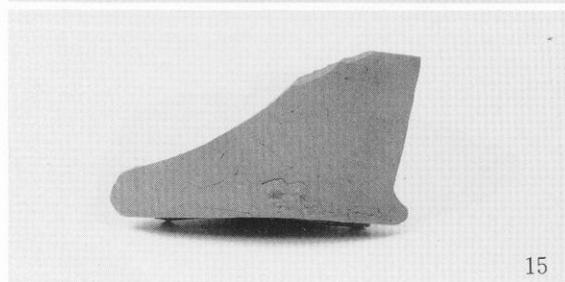
17



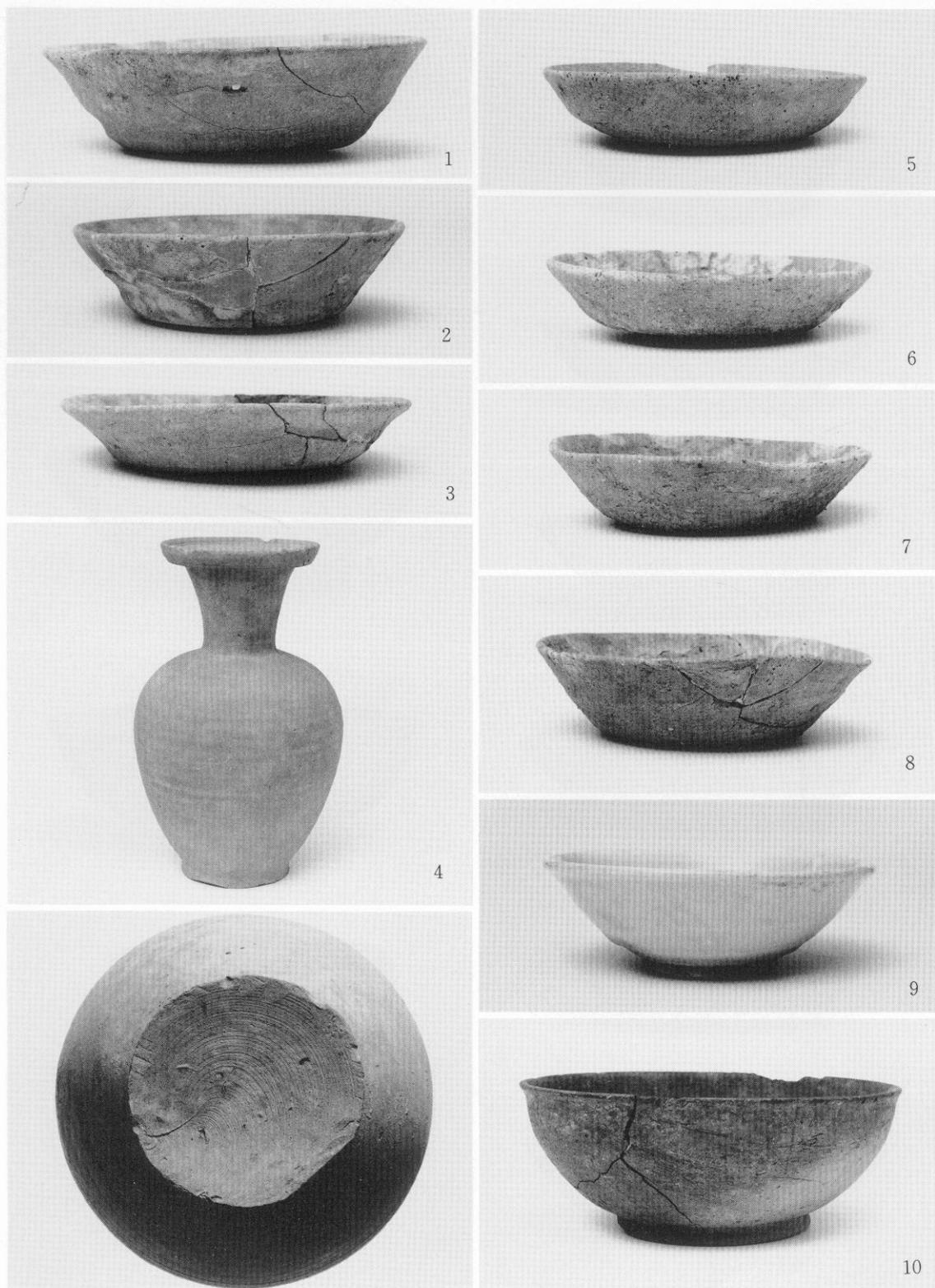
14



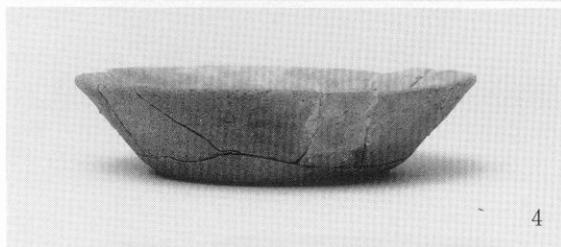
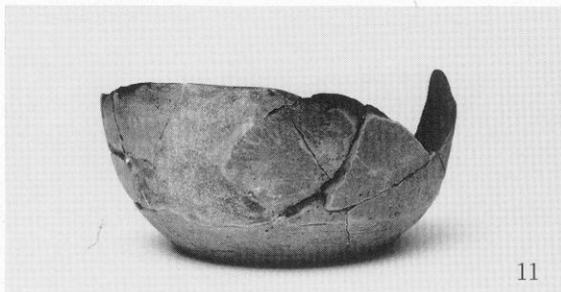
20



15



7ST002 (左列)、003出土遺物





10



11



12



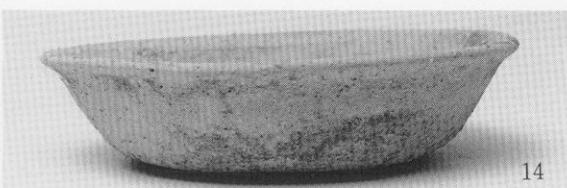
13



8



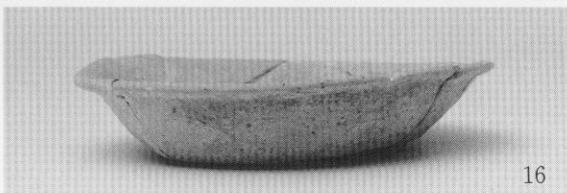
9



14



15



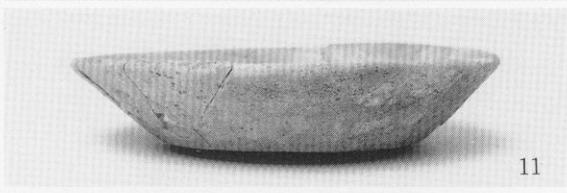
16



17



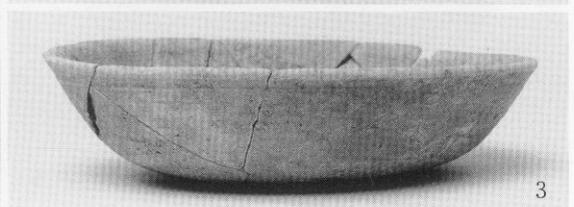
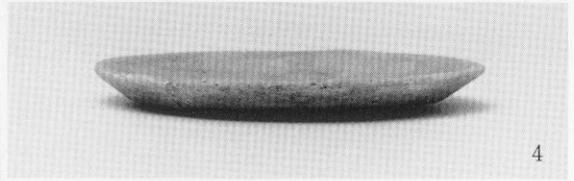
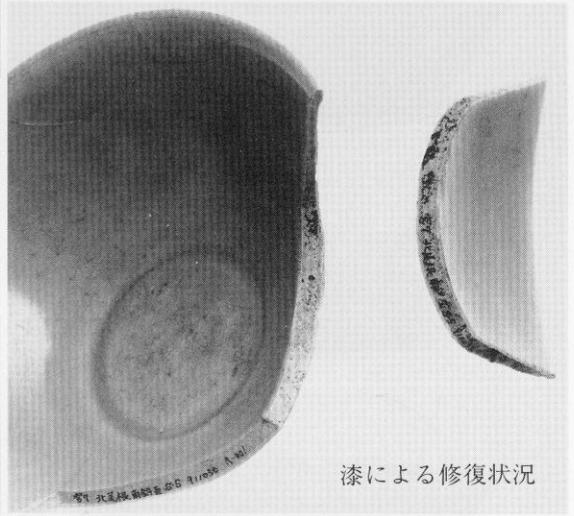
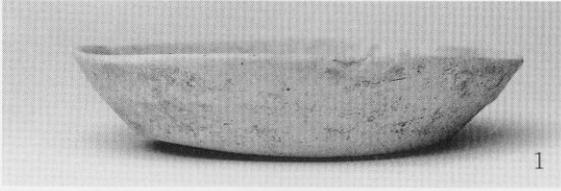
10

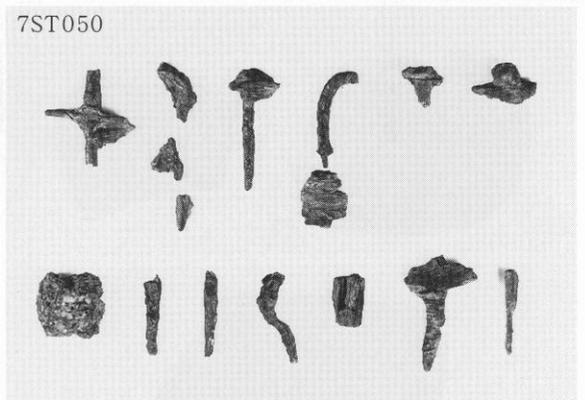
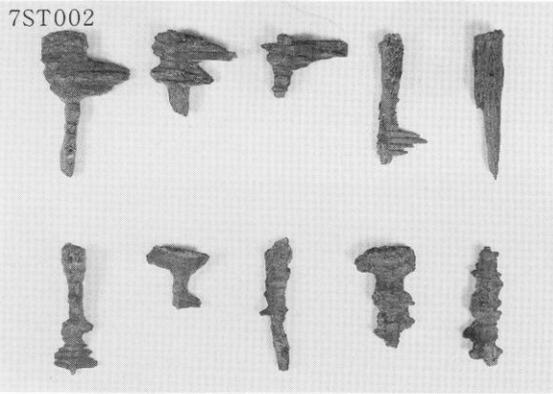
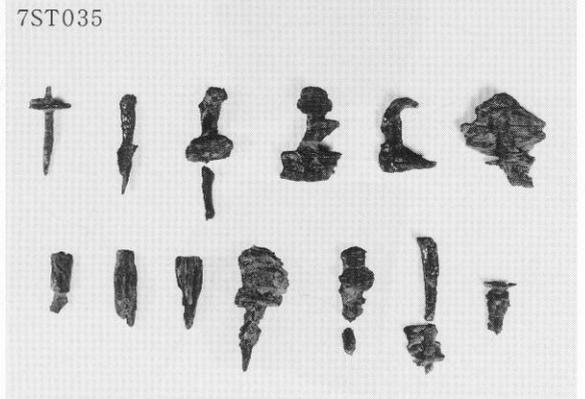
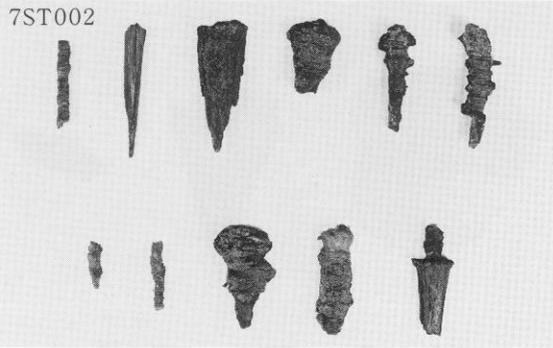
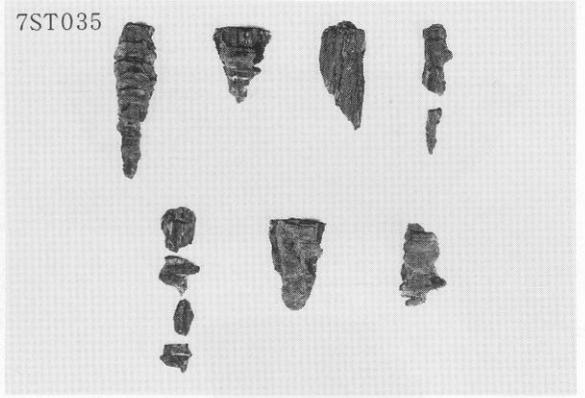


11

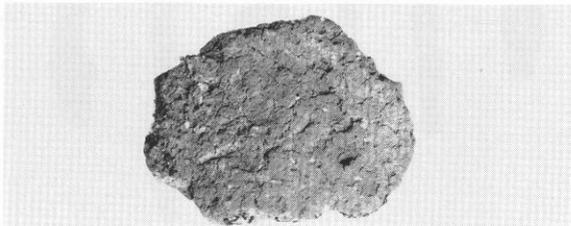
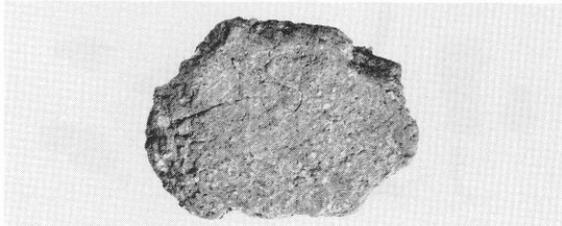
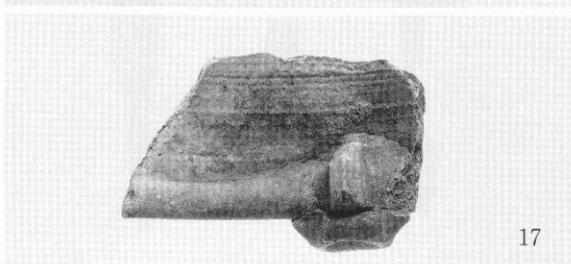
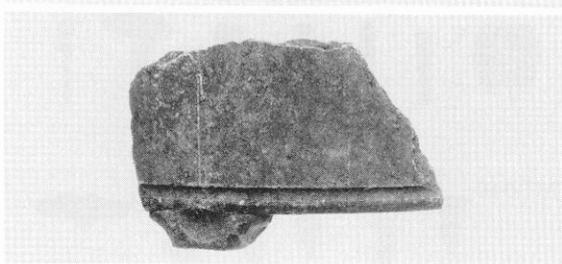
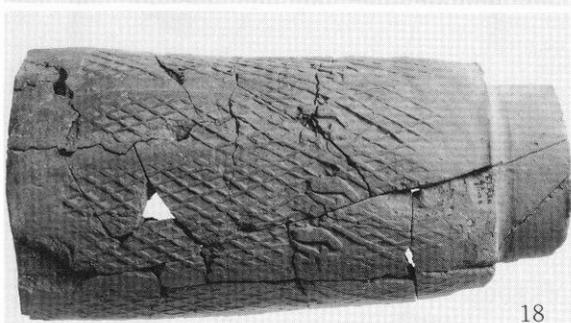
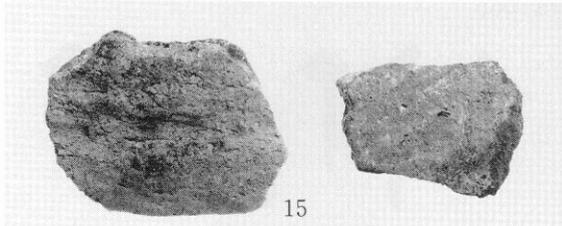
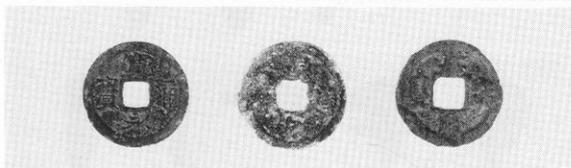
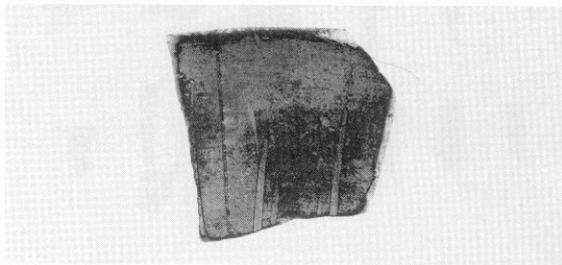
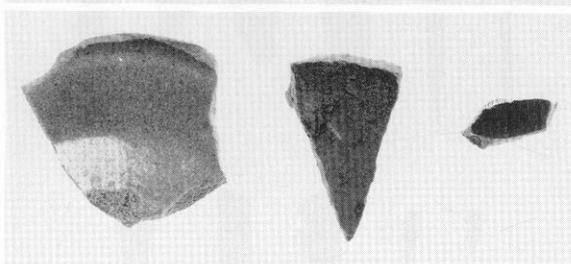
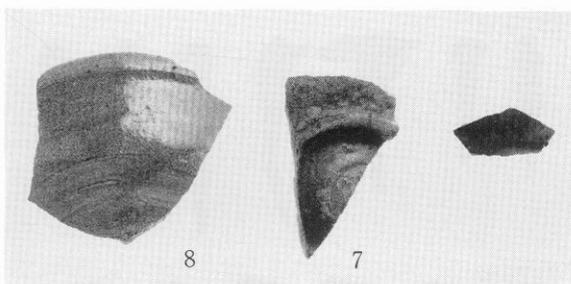


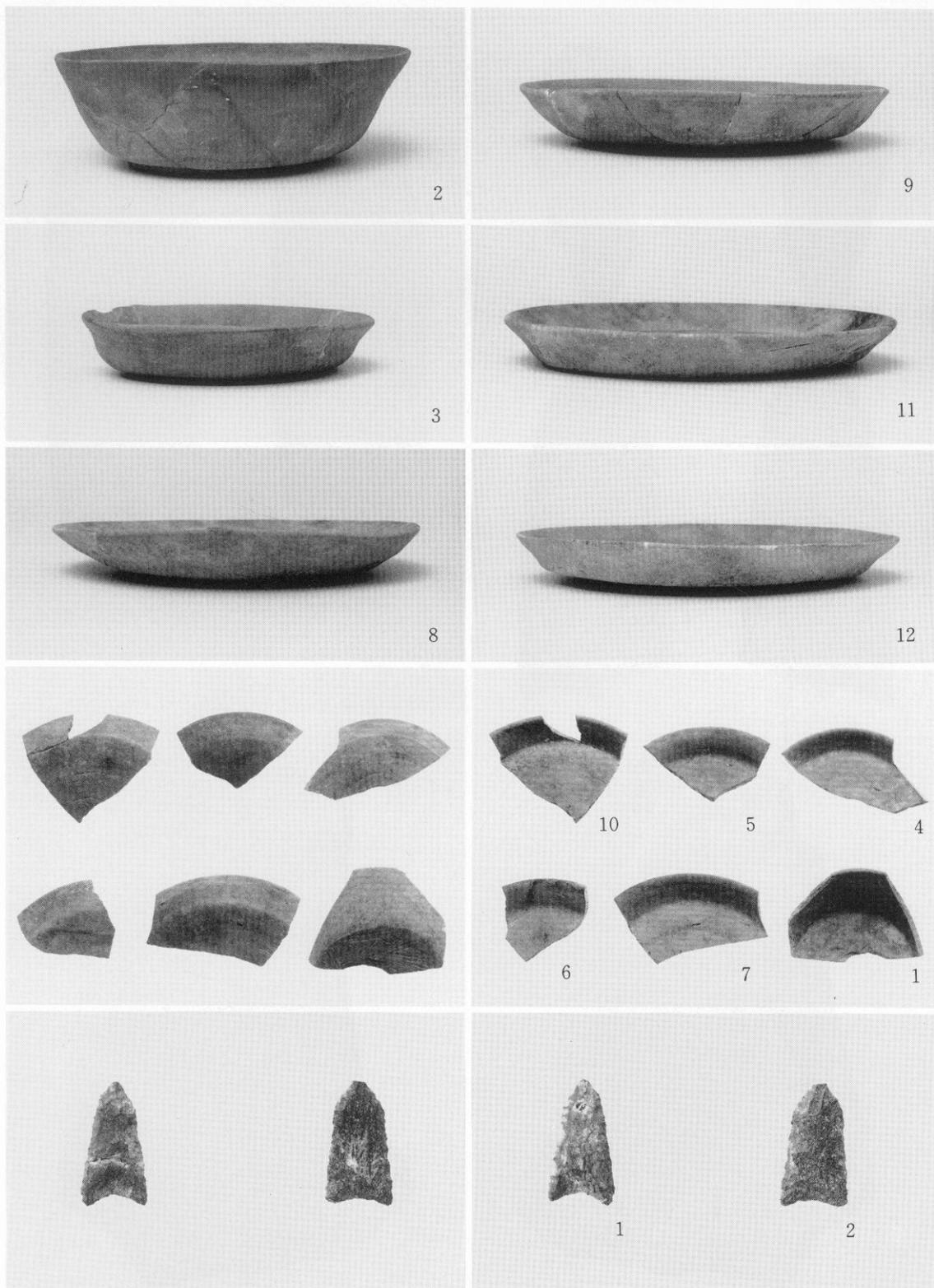
12



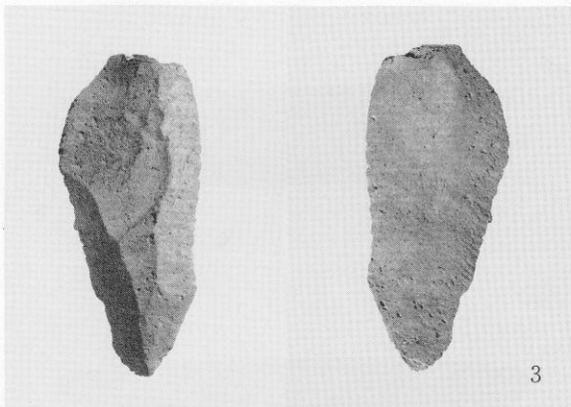


7ST002・003・015・035・040・050出土鉄器





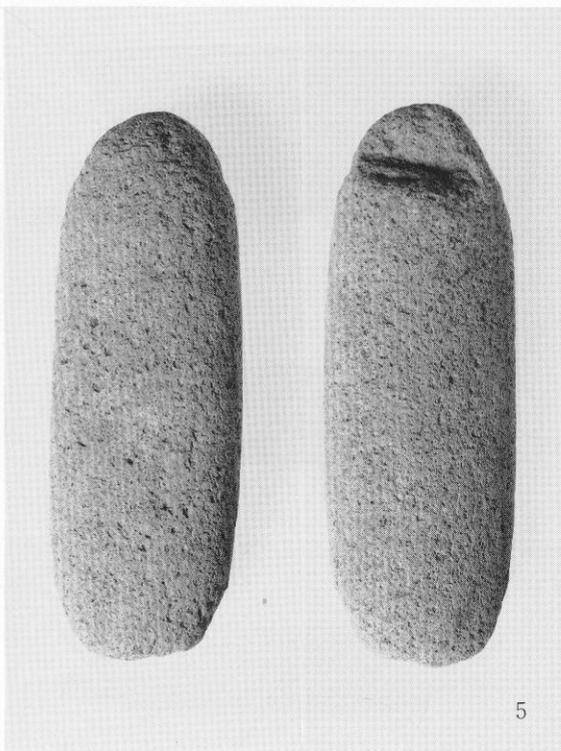
表土出土遺物及び石器



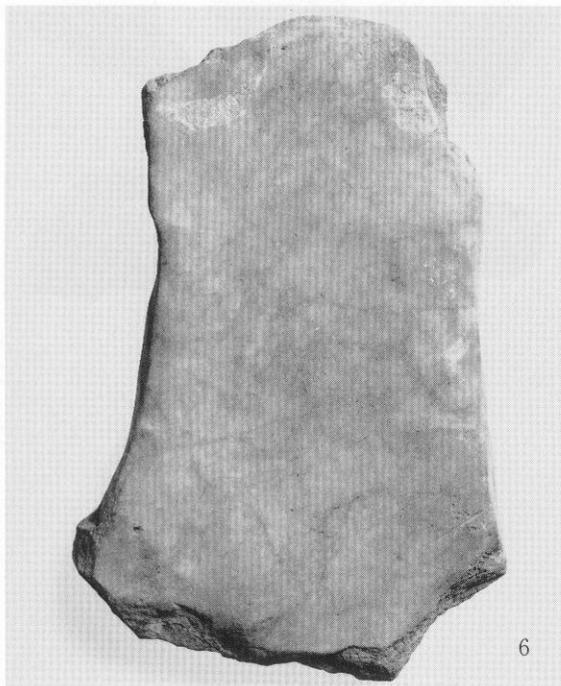
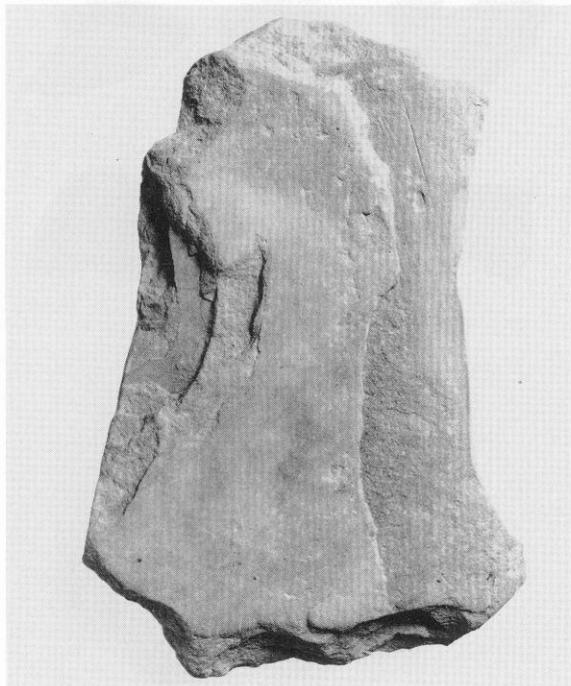
3



4



5



6

太宰府・佐野地区遺跡群Ⅳ

—宮ノ本遺跡第7-1次調査—

1993年6月14日

編集 財団法人 古都太宰府を守る会
発行 太宰府市大字観世音寺544-3
(太宰府展示館内)

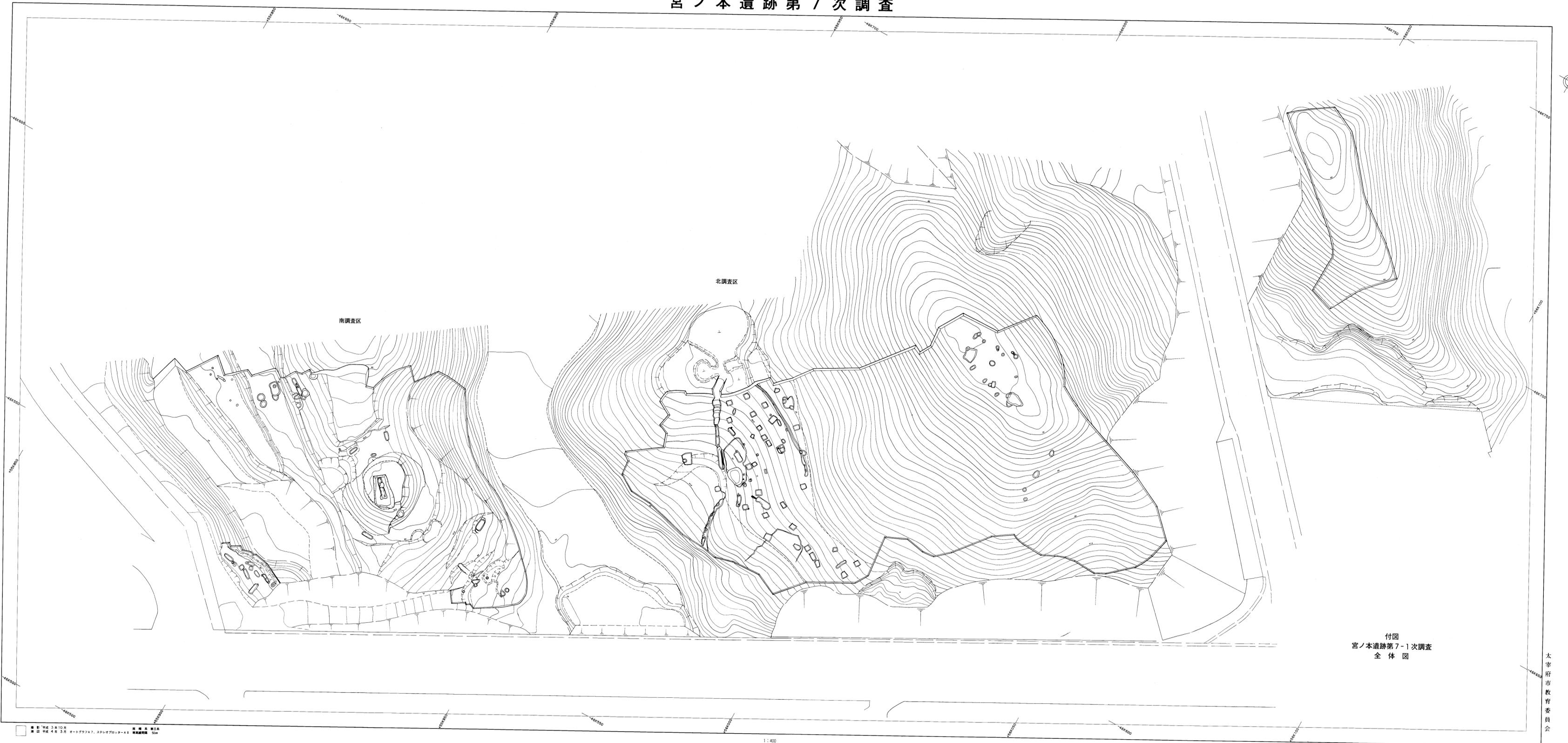
写真図版 瞬報社写真印刷株式会社
印刷 福岡市中央区天神5丁目4番16号

太宰府教育委員会の了解を得て財団法人 古都太宰府を守る会が増刷、頒布するものである。

付 図

宮ノ本遺跡第7-1次調査全体図
(1 : 400)

宮ノ本遺跡第7次調査



付図
宮ノ本遺跡第7-1次調査
全体図

アジテック
株式会社
調査
平成28年10月
平成29年3月
オートグラフA7、ステレオプロッターA8
縮尺 1:400
製図 50m

大宰府市
教育委員会